
これは恋なんだけど

空谷陸夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

これは恋なんだけど

【Nコード】

N7507W

【作者名】

空谷陸夢

【あらすじ】

経済的理由で目標であった留学を断念せざるを得ない中、彼氏は簡単に留学へ。地球の反対側にいる彼氏とは遠距離恋愛中の大学生、宮瀬春希。

落ち込み、愚痴を漏らす春希に一番近いのは、春希の友人の古賀博己。大学生で、同じバイト先。

古賀さんとの仲を非難される春希を偶然見かけた、永井証也。春希の通う大学の外部講師で、既婚者。

友達×友達……×既婚者のじれじれな三角関係。

近付いたり、離れたり。近付きたいのか、近付きたくないのか。安定を保っていたバランスが、簡単に崩れた。
(お話ごとに視点が変わります)

「洋くん、いつてらっしゃーい」

「事故んなよー」

「うっさい」

ダウンコートをしっかりと着こんだ谷原をちやかしながら、俺と宮瀬はこたつから手を振って谷原を見送る。玄関のドアの閉まる音がして、俺はやりかけだった英語のプレゼン原稿に目を戻し、宮瀬は「やったー」と両手を上にして喜んだ。

「食費が浮いた」

「よかったな。洋くんがパチンコで勝って」

「ほんと、それ」

ラッキー、ラッキーなんて笑って言いながら、宮瀬は後ろにあった壁にこつんと頭をつけて俺と反対側のテレビに顔を向けた。

こいつって女は……、とそれを見て心の中で思う。ここは谷原が一人暮らししてるマンションだけど、仮にも今は男と二人っきりなのに、宮瀬には何の緊張感も見られない。まあ、それは今に限ったことではないけども。

大学の夏休み後半から、俺と谷原、宮瀬の三人で遊ぶことが多くなった。その中で何度か谷原の遅刻とかで二人になることはあっても、宮瀬はまったくそれを気にする様子もなかった。元は、俺と谷原の

二人でどっか行ってくつてパターンが多かったのに、そこに宮瀬が加わったのは、宮瀬の彼氏が後期から一年の留学に行くことになったからだ。

宮瀬の彼氏が留学することになって、二人は遠恋になったわけだけど、ここがまたややこしい。本来ならば、宮瀬も大学2回の後期から留学に行く予定だったのだ。それがだめになったのは、「経済的理由」ってやつだが、学力的には何の問題もなく留学できたはずの宮瀬とは別に、やや問題のあった彼氏は学校側の尽力によって行けることになったらしい。これが夏休み前に起きた出来事らしいが、宮瀬的には納得できない部分が多々あって、その愚痴を聞かされ続けたのが俺だ。今やバイト仲間全員が知っている宮瀬の不運だが、初めに全部聞かされたのは俺だった。

もともと、宮瀬と俺たちとは大学が違うが、バイトしている塾が同じで今こうやって仲良くしている。帰り道が途中まで同じ方向だったことから、いろいろ相談……、愚痴を聞かされて、その度に慰めてやってた。慰めるっていつても、宮瀬の話を黙って聞いて、最後に「お前ががんばってるのは知ってるよ」くらいしか言っていない。そのとき、宮瀬がぼろつと、「一人はいやだ」って言ったのを境に、遊ぶことが多くなった気がする。けど、遊ぶは遊ぶが、遊ぶときは三人か他のバイトのやつも呼んでだ。二人で遊ぶことはまずない。……二人で遊んでしまったら、今の関係を壊してしまいそうだった。

「古賀さん？ プレゼンのやつ、ぜんっぜん進んでないですよー」
「あ？」

宮瀬の声に顔を上げれば、テレビを見ていたはずの宮瀬がへらへらした顔で俺を見ていた。

「テレビなんて見てる場合じゃないだろ。手伝えー」
「やだよ」

考え事をしていたのを悟られないように、テーブルをばんばん叩いていつもの調子で宮瀬と話す。

「やだじゃないだろ。このプレゼン終わらすことが今日の目標だろ」
「違うし。てか、それ私のプレゼンじゃないし」
「そんなこと言ってないで早く手伝えー」
「ちゃんとイントロダクション考えてあげたでしょ」
「じゃあ、ついでにコンクルージョンも考えて」
「いや」

笑って宮瀬が言う。こんな軽いやりとりがいつもだった。宮瀬との会話はこんなのばかりだけど、それが楽しくて、くだらない話が始まっては終わって、終わってはまた始まっての繰り返しだ。

「んー、眠い」

壁に頭をもたせたまま、宮瀬がつぶやいた。顔を向ければ、宮瀬は頭を少し傾けて目をつむっているようだった。

「今日はよく寝たんじゃないの？」

「寝たけど、眠い」

「なんだ、それ。どうせ谷原のやつ、あと30分はかかるだろうから寝といたら？ 谷原が飯買ってきたら起こしてやるよ」

「んー」

宮瀬はそのままの体勢で返事をしてきて、本当に寝る体勢に入った。本当に無防備なやつだ。人の気も知らないで。

数分もしないで、宮瀬の安定した呼吸は聞こえてきた。横を見れば、壁に寄り掛かって眠る宮瀬。テレビの音だけが、やたらうるさく聞こえる。

いつからか、俺の中で宮瀬の存在が大きくなっていた。それと同時に宮瀬の中で、俺の存在が大きくなっていてほしいとも思った。彼氏のことなんか忘れて、俺を見てほしい。

この気持ちを伝えたら、宮瀬はどんな顔をするだろう。きっと、困った顔をするだろう。宮瀬の中での彼氏の存在が、今は曖昧すぎて宮瀬自身もよく分かっていない。会えば好きだけど、会わなかったらべつにいい。宮瀬からしてみたら留学に関して不満な部分もあるし、自分で留学しといて「さみしい」とか言う彼氏に腹をたててもいる。

俺は俺で、はつきりしない宮瀬に腹をたてるときもある。いつそのこと、彼氏から宮瀬を振ってくれたらいいのに。自分から行動できない俺は、こんな卑怯なことを考える。

もう一度、眠っている宮瀬に目をやった。何も知らないで、よく眠ってやがる。

「……少しは俺をみてよ」

呟いても、宮瀬は返事しない。

こたつから出て、立て膝で宮瀬に近づく。眠ってる宮瀬の夢に、俺が出てくればいいのに。そんな馬鹿な願いを持って、ゆっくりと宮瀬の唇に自分のそれを重ねた。自分の行為に罪悪感はない。けど、触れるだけのそれは、余計に俺を悲しくさせて、でも放したくはなくて。

「……ばーか」

気づかない宮瀬はばかだ。少しも警戒しない宮瀬はばかだ。伝えもせず、今のままを維持する、俺はばかだ。

「ばーか」

もう一度呟いて、宮瀬に自分のコートをかけてやって、再びプレゼンの準備に向き合った。

いったい、この変な関係はいつまで続くのだろう。

私と谷原さん、古賀さんの三人で遊ぶのが定例となってきた週末の土曜日。私たちはいつものように夕方の4時くらいから谷原さんちに集まって、ぐだぐだとしたり、課題をこなしたりしていた。

「宮瀬はテスト何個くらいありそうなの？」

ベッドを背にしてこたつに座り、谷原さんの授業の教科書を読んでいたとき、こたつの右隣に座っていた谷原さんがふと聞いてきた。私は教科書から目を離し、谷原さんの方を向いてしばし頭の中でテストの数を数える。

「えーと、テスト期間中だけだったら5個かな」

「期間中だけなら？」

「うん。期間外のも入れたら10近くあるんじゃない？」

「それは期間中？」

『それ』と言いながら谷原さんは私が読んでいた自分の教科書を指差す。

さつきからなぜ私が谷原さんのものであるこの教科書を必死に読んでいるかというと、この教科書の内容が私のとっている授業とかぶっているからだ。

私は教科書を表紙が谷原さんに見えるように立てる。

「この期末は期間中。この間の中間、まじやばかったから頑張らないと」

「もう諦めたらいいんじゃない？」

へらへらと笑いながら谷原さんが言う。私はテーブルの上にあった消しゴムを手に取り、すぐ近くの谷原さんに投げつけた。

「縁起でもないこと言わない！ 洋くんこそ単位落とせばいいのに」
「俺はもう後がないから落とせない」

胸に当たった消しゴムを拾って、前期に単位を落としまくった谷原さんはわざとらしく真面目な顔を作り首を横に振る。のわりには授業も出てないし、業者が中心になって作る授業ノートも買う気満々なくせに。

「まあ、とりあえず5個ならバイトいっぱい入れるね」
「勉強しないといけないからちよつと無理だわ」

あっはっはー、と軽く笑いながらその言葉を断ち切る。

私のバイト先は、私の大学圏内から駅が一つ隣の塾なのだけど、その隣の駅圏内にも別の大学があつて、そこが谷原さんや古賀さん、その他私と同じバイトの人が通う学校だ。つまり、私がバイトする塾にはその大学生が多い。しかも、その大学っていうのが理系キヤンパスで、文系学部は経済・経営しかないときた。ということは、必然的にテストの多い理系学部の人にはバイトにあまり入れなくなる。その代わりとなるのが私や谷原さんといった文系学部の人間だ。テストの時期になると理系学部の人間からやたらと圧力が掛かる。まったく、いい迷惑だ。

「てかさ、文系は勉強しなくてもテストいけるっていうのやめようよ。今回はまじで勉強しないとやばいんだって」

「いや、俺もだよ」

「洋くんはどうせ落とすから勉強しなくていいよ」

「いや、落とさないから！」

必死に私の言葉を否定する谷原さん。まあ、その必死さが余計に今期の授業に出てない不安を表してもいるんだけど。残念ながら、バイト先のほとんどの人間が谷原さんのテスト失敗を予想している。谷原さんが必死になればなるほど、周りは谷原さんが大部分の単位を落とすだろうと思っている。そういう、ある意味残念な人なのだ。谷原さんは。

いい加減それに気づいてもいいだろうに、と思いながら再び教科書を読もうとすると、谷原さんが反論する代わりに別の作戦に出た。

「バイト入らないと、君の後ろにいる人にまた文句言われるよ」

谷原さんが掛けていた黒ぶちの眼鏡を外して、私の『後ろにいる人』を指差す。私はその『後ろにいる人』を振りかえって「ああ」とだけ言っておく。

「ある意味一番文系を軽く見てる人だからねえ……」

眼鏡のレンズを拭きながら、しみじみとした口調で谷原さんは言った。

私の『後ろにいる人』——古賀さんは、谷原さんの発言にもまったく気づかず爆睡している。谷原さんのベッドに入って、布団にくるまりながら。

「まあ、別に何か言われても古賀さんよりは入ってるし、大丈夫でしょ。てか、確実にヒマである谷原さんがそんなに最近入ってないことの方が問題アリだと思うよ」

「俺は、ほら、忙しいから」

「それ、古賀さんの前で言ってみたら」

「無理。俺、この間そいつに携帯貸してって言われて貸したら、そいつ俺のことフルコマで登録しようとしたんだよ」

古賀さんは、たぶんバイトの中で1、2位を争うくらいの腹黒さだ。そして、その1、2位にいつも狙われるのが谷原さん。ほんと、谷原さんって残念だ。

「てかさ、何でこいつ今日こんなに寝てんの？ 人んちのベッドで」

谷原さんは拭いた眼鏡を掛けずにテーブルに置いて不満を漏らす。谷原さんの不満はもつともだけど、古賀さんの傍若無人ぶりにはもう二人とも慣れてしまっていて、最近ではあまり文句を言わない。まあ、それは私だけだけど。谷原さんは未だに文句を言い続けて、それが原因での谷原さんと古賀さんの小競り合いはしょっちゅうだ。私はぐうぐうと眠る古賀さんにちらつとだけ目を向けて首を少し傾げる。

「なんか、昨日の英語のプレゼンを木曜の夜にずっと書いてて、寝たのが4時くらいだったらしいよ。それで1時間目行つて、バイト行つてつてして……。んで、昨日はご飯食べてから中山さんち行つたんじゃないの？」

「そういえばそうだったなあ。なんだかんだ言つて、古賀もゲームずつとしてたし」

中山さんとは、私たちのバイト仲間で、古賀さんと腹黒さ1、2位を争う人だ。この人も一人暮らしをしていて、中山さんの部屋は一人暮らし生の中では一番の広く、また大抵の男が喜んで遊ぶもの（マンガ、ゲームなど）がたくさんある。

バイト終わりには私を含めたバイト仲間数人でご飯を食べに行くのだが、私と古賀さんだけは月曜から木曜は『お家でご飯』という体制をとっている。私は節約と勉強のため。古賀さんは実家生だから、勉強のためと主に次の日に学校に行けるようにするため。だから金曜日だけがほとんどのメンバーがそろつてのご飯となる。その帰りに中山さんちに行くというのも、たまにあるパターンだ。昨日は観

たい海外ドラマをネットで先観するため、私は中山さんちには寄らずに家に帰っていた。

「でも、今日は寝れたんじゃないの？」

テレビのリモコンを取って、番組表を確認しながら谷原さんが尋ねてくる。

「今日は午後から教習でしょ。……あ、それ観たい」
「ん？ ああ、これ？」

テレビの番組表に私の好きな洋画のタイトルを見つけて、谷原さんにチャンネルを合わせてもらう。

パッと、チャンネルが変わって、アメリカ人の俳優がテレビに映し出される。ちょうどCM開けだったのか、画面の下にテロップで『番組終了後、レムス・ウェインが最新作【街角の恋】をPR！ お楽しみに！』と流れている。

「古賀の教習っていつ終わるんだろうね」
「さあ」

若干の呆れを含んだ声で谷原さんがベッドの古賀さんを見やる。エアコンも効いて、それほどは寒くないのに、古賀さんは布団の中で丸まっている。

どうせ谷原さんの部屋だし、と関係のない私はさっさとテレビに視線を戻す。

「この『ニューヨークの騎士』ナイト』ってやつ面白いの？」

「んー、まあ私は好きだけどね。っていうか、レムス・ウェインが好き。まあ、ラブストーリーが好きじゃなかったら、あんまり好きじゃないかもね」

「ふーん。じゃあ、下に書いてあった新しいのも観に行くの？」

その質問に答えるより早く、テーブルの上にあった携帯が振動して着信を知らせた。谷原さんの携帯だ。

谷原さんは目の前にあった携帯を取るなり「うわ……」と嫌な顔をして、通話ボタンを押した。

「もしもし？ ああ、なに？」

そっけない谷原さんの応答から察するに、相手はよっぽど嫌いな人だったんだろう。私は、電話を気にすることもなくテレビに目を戻して映画を楽しむことにする。

谷原さんの電話は聞いているだけでも相当面白く、時々にはやしやしてしまう。

「はあ？ めんどくせーよ。お前が来い。知るか。……あー、もう。分かったよ。んじゃあ、中間地点のコンビニでいいだろ」

結局は谷原さんが折れる形で電話は終了し、谷原さんはいらついたまま電話を切った。

「だれ？」

「田川」

むすつとした顔で谷原さんは答える。電話を聞いて『もしかして』と思っただけ、大当たりの人物で思わず笑ってしまった。

田川、とは谷原さんと同じゼミで谷原さん曰く『他のゼミ生にも嫌われてる』と噂の人だ。彼の奇行、悪行は谷原さんを通してバイト仲間のほとんどが知っている。

私が大笑いする横で谷原さんはテーブルに置いた眼鏡を掛けて立ち上がり、財布もキーケースや携帯、音楽プレイヤーと一緒に手に取った。

「なんか田川が月曜のゼミ発表の原稿渡したいと言ってるから、ちよつと行ってくる。ついでに飯買ってくるよ」

『飯』という言葉に時計を見る。なんだ、もう9時過ぎてる。振り向いて、ダウンコートを着る谷原さんを見上げる。

「おごり？」

「古賀のね。今日はおごるって言ってたから、後で金貰う」

「やったね」

食費が浮いて喜ぶ私を置いて、谷原さんは玄関へと向かう。イヤホンをつけながら玄関を出ようとする谷原さんに私は一声掛ける。

「なんか飲み物もよろしくー。いつてらっしゃーい」

『了解』というように谷原さんが右手を上げて、玄関のドアを開けて出て行った。

さて、映画を観なおそうとテレビに向き直ったけど、テレビよりもぐうぐう眠る古賀さんに目がいつて、ベッドに腕について古賀さんをじーっと見てみる。起きる気配はない。

最近、よく思うことがある。この変な関係はいつまで続くんだろう。谷原さん、古賀さん、私の三人で遊ぶこの関係は。彼氏が留学から帰ってくるまでだろうか。

べつに三人で遊ぶことが嫌なわけではない。むしろこの3人、というよりバイトの人と遊ぶのは楽しいから好きだ。ただ、この関係を学校の友達に話すと、ほとんどが奇異な目で私を見てくる。『彼氏がいるのに他の男の人と？』はつきりとは言われなかったけど、友達の間はそう言っているようだった。

幸か不幸か、私が今の塾にバイトとして入ったところは、ベテランの女の講師が二人と私より数か月早く入った女の講師が二人いるだけで、全体的に男の講師が多かったのだ。しかし、ベテランが卒業するより早く、二人の女講師はバイトを辞めてしまい、残ったベテランも大学卒業と同時に辞めてしまった。

今でこそ、何人か女の講師も増え、飲み会を通しての交流も出来たけど、それまでは私しか女の講師がいなかった。必然、私は男の講師との交流しかできず、また二人の兄を持っているだけにその中で溶け込みも早かった。

彼氏が留学に行く前は、バイト帰りにたまにご飯と一緒に食べるだけの関係だったのが、いつの間にか一緒に遊んだりするようになっていた。一緒に遊ぶようになったのは、彼氏が留学に行った夏休み終了目前に、古賀さんが誘ってくれたのが始まりだ。

それまでも、古賀さんにはバイトからの帰り道で、はたまたメールで、それはもうたくさんの愚痴を聞いてもらっていたのだが、あ

の誘いを境に一段とバイト仲間との繋がりが多くなった。特にこの二人、もしくは古賀さんとの繋がりが。

一度、バイトの人と遊ぶことを理由に留学中の彼氏からの電話を断ったら、彼氏がひどく不機嫌になった。それより前の、バイト帰りのご飯も彼氏的にはあり得ないことらしく、一緒に遊ぶなんてひどいとまで言われた。何だつてそこまで言われなきゃいけないのか。じゃあ、勝手に留学して勝手に『さみしい』とか言うのはひどくないのか。そんなことも古賀さんに愚痴っていた。

何で古賀さんにはばかり愚痴を言うのか、と仲の良い、そして奇異な目で私を見ない友達に一度聞かれたことがある。そのときは曖昧に『何でかなあ。やっぱり年上だからじゃない』と言っておいたけど、本当はちゃんと分かっている。

古賀さんなら、私の欲しい言葉をくれるからだ。留学のことで彼氏や学校側と揉めたときも『がんばってるのは知ってる』と言ってくれた。同じような愚痴を繰り返す私に『留学するって決めたのはあつちなんだから、彼氏が何か言ったり決めたりする権利はないんじゃない』とも言ってくれた。『一人はいやだ』と言った私に誘いをくれた。ただの甘えだとは分かっていたけど、誰かにそう言うてほしかった。私しか知らない古賀さんに愚痴を言うことで、全面的に私に味方をしてくれる誰かが欲しかった。私はひきょう者だ。

私の中の彼氏が存在が曖昧すぎて、どうしたらいいか分からない。別れたほうがいいのか、続けたほうがいいのか。分かっていることは、私がバイトの人たちに、古賀さんに、依存しているということだ。

「君って女性は、なんて勝手なんだ！」

後ろからそんな言葉が聞こえて、身体がぎくりと反応する。振り返れば、テレビの中のレムスが主役の女優に向かって文句を言っているところだった。女優も、負けじと言い返している。なんだ、テレビだ。しかも、私の好きなシーンの一つじゃないか。

ほっとすると同時に、古賀さんはテレビに反応したのか何かうめきながら身体を少し動かした。顔を古賀さんに戻してみろけれど、古賀さんは起きる様子もなく、布団を手放すこともない。動いた拍子に、本人が少し伸びてきたと文句を言っていた前髪が目にかかった。私自身がそうになると気になって眠れないので、前髪をどかしてあげようと身体を動かして手を伸ばした。

そっと、気づかれることなく、前髪をどかすことができた。

ただ、そうしたことで古賀さんとの距離がぐっと縮まった。すぐ隣に肘をついて見下ろしてるのに、まったく気がつかない。ある意味すごいと思う。元の位置に身体を戻して、ベッドに腕を置いて、その上に顎を乗せて古賀さんを見る。

「じめんね」

いろんな意味を込めて、謝った。

なんとなくだけど、古賀さんが私のことを心配してくれてるのは分かる。それで、私のことを気にかけてくれることも。二人とも、どこことなく似ている部分があるのを、最近になって思うようになった。どこが、と聞かれても分からないけど、なんとなくそう思う。

「じめん」

愚痴ばかり聞かせて。甘えて。味方にしかなれない状況作って。依存して。

『ごめん』と、もう一度声に出そうとして、止めた。古賀さんがまた何かうめいて、今度はゆっくりと目を開きだした。

「……………みやせ？」

寝起きだからか、目を細めて、少しかすれた声で名前を呼ぶ古賀さん。

「おはよう」

「……………ん……………ああ」

ゆっくりと、緩慢な動きで身体を起こしてベッドに肘をついて、右手で髪がはねてないか頭を触る。私は動くことはせずに同じ体勢のまま、古賀さんを見上げる。

「……………あれ、谷原は？」

たぶんまだ頭がはつきりと回らないのか、古賀さんは谷原さんがないことに気づくのの数秒かった。

「洋くんは例の田川くんに呼び出されてコンビニまで。ついでにこ

飯買ってくるって。お金は後で請求するらしいよ」

簡潔にさっきの状況を報告すると、古賀さんは少しの間考えるように私から視線を外し、そして「あっ」と声を漏らした。

「そうだ。あいつにおごるって言ったんだ」

自分で言ったことを既に関悔する古賀さん。着ていたシャツの第一ボタンを開けて、寝ている間にずれたカーディガンを正す。

「ま、いいか。知らんぷりしとこ」

「さすがに気づくでしょ」

「俺が気づいてなかったらオッケー」

「意味わかんない」

ジャイアンのような発言に思わず笑ってしまう。古賀さんもおかしそうに私と一緒に笑って笑う。この感じが好きだ。これが私をさらに依存させる。

「これ、何観てんの？」

テレビを指差して古賀さんが尋ねてきた。確かに、これは古賀さんの射程圏外な映画だろう。古賀さんにべったべたのラブストーリー

は想像できない。

「『ニューヨークの騎士』ナイト』。めっちゃラブコメ。でも変えちゃだめだからね」

「えー」

案の定文句を垂れる古賀さんだったけど、テレビを観て、また「あつ」と声を上げた。

「この男の方知ってる」

「そりゃあ、まあ、有名だし」

「前にテレビで見た。今度新しいのに出るだろ」

「うん。あ、下にまたテロップ出るよ」

片腕はまだベッドの上に置いたまま、私は画面下に流れ出るテロップを指差した。古賀さんは肘をついた姿勢のまま、少し前のめりになってテロップを読もうとした。

「彼とあなた、なんだかんだ言っただけで似てると思うわ」

映画のセリフに、またしても身体が反応してしまった。今度は、主演女優の友人役の女優のセリフだ。彼女は主役の女性とは違い、結婚して子供もいる設定だ。

「どこがって言われてもはつきりとは分からないけど……。そうね。不器用で、周りに合わせる気がなくて、相手のことだけでは何となく分かってる」

古賀さんも、私も動かなかった。古賀さんは、まだテロップを読んでいるからだろうけど。

私はさきほどのように映画のセリフと分かって、気が抜けるような感じがした。この映画って、こんなに緊張するようなものだったわけ。

テレビでは主役の女優が友人の言葉に『ないない』と首を振っている。

「行くか」

「……は？」

テロップを読んでいた古賀さんが出し抜けに言いだした。何のことか分からず、顔を古賀さんに戻す。古賀さんはいつの間にかテレビから目を放し、肘をついたまま私の方を見ていた。

「新しいの」

「映画？」

「うん」

「べったべたのラブストーリーだよ、たぶん」

「まあ、べつにいいんじゃないね。お前は、そついうの好きだろ」

肩をすくめ、なんでもない風にして古賀さんが言った。
いつもこうやって、古賀さんは助けてくれる。古賀さん自身が、私を古賀さんに依存させるんだ。

「まあ、うん」

「ん」

私のよく分からない返事を了解と取って、古賀さんはテレビに視線を戻した。私もそれ以上何も言わず、ベッドに置いた片腕に頭を乗せて、テレビを観ることにした。

「谷原、飯なに買ってくるって言ってた？」

「何も言ってなかった」

「また餃子は嫌だよ、俺」

「普通に買ってきそうだけどね」

「また餃子だったら、金出さないでおこう」

「勝手」

笑って言えば、古賀さんもこっちを見て笑っていた。

古賀さんとは、こんな雰囲気がいいつも作り出される。作ろうとしなくても、自然にこうなっている。こんな風に話すが、やっぱり好きだ。

友達に何と言われても、この感じは壊したくない。勝手だと言われるても、味方になってくれる人を、私は手放すことが出来ない。きっと、いつまでも依存してしまうだろう。

この変な関係に、終わりが来なければいいのに。

そう思うのはきっと、古賀さんが優しすぎるからだ。

見当違いも良いところだ。

本当に、そう思う。

あいつにとって、相談相手とか愚痴を聞かされる相手とかになるのは、俺だけだと思っていた。

今日もいつものように、谷原と宮瀬の三人で遊ぶ約束をしていた。免許取得のために夏休み明けから教習所に通ってる俺は、基本土曜日の夕方からヒマになるので、夕方から谷原の家に転がり込み、宮瀬も呼びだして三人でぐだるっていうのが夏休み後半から定例化している。

今日もそのパターンで、俺は教習所から少し離れた谷原の家に向かって自転車を漕いでいた。いつもは普通に宮瀬もいて、それが何となく楽しくて、嬉しいような気にもなっていたんだが、今日は何となく宮瀬を誘ったのは失敗だったと思っている。それは、きつと、昨日あいつを見たからだと思う。ていうか、それしかない。

金曜日の昨日、幸か不幸か、男と一緒にいる宮瀬を見かけてしまった。その日は予想外の当日休講があつて、これ幸いとばかりにふら

ふらと買い物に出かけて、宮瀬を見つけたんだ。

あいつは自分のお気に入りだというカフェで男と楽しそうにしていた。その男が誰かは知らない。でも、彼氏ではないだろう。あいつの彼氏は、まだ地球の反対側にいる。それでも、俺の知らない奴と楽しそうにしていた宮瀬を見て、何となくシヨックだった。男と一緒にいるのが、じゃなくて、知らない男と楽しそうにしていたのが、だ。

しよせん俺と宮瀬の繋がりなんて、バイトからで、あいつの大学関係のことなんて俺はぜんぜん知らない。きっと俺は、宮瀬のことを半分も知らないんだろう。

わかっていたはずのことを、昨日のあいつを見て、さらに思い知らされた感じた。

そんなのを見たのに、なんで俺は今日宮瀬にメールしたんだよ。俺のばか。

「お前、来るの早くない？」

俺の言葉で、座椅子に座っていた宮瀬はそれをくるっと回転させて、今来たばかりの俺の方を振り向いた。

「そう？　べつに何か用事あるわけでもなかったし、いいかなあと
思っ」

「って言っても、来たの十分前くらいだけどね」

宮瀬の言葉に付け足すようにして谷原が言った。宮瀬もそれに頷い

て「まあね」とか言って、また座椅子を回転させて元の向きに戻る。いや、正確な時間が問題なんじゃなくて、宮瀬が先にいたことが予定外なんだけど。谷原んちに着いてからメールでもして『今日は中止』とでも送ろうかと思ってたのに。いつもは俺よりも来るのが遅いくせに、今日に限って俺より早く谷原んちに来やがって。

「何してんの？」

未だに突っ立ったままにいる俺を首だけで振り返った宮瀬が聞いてきた。それにつられて谷原も俺を見る。

「……べつに。外寒かったから、あつたかいのが身にしみる」
「年だねえ」

本心なんて言えるはずもなく、適当な嘘をついておく。宮瀬はそれを聞いて、ちやかすようにへらへらと笑った。谷原も声を出して笑う。

どうせ俺はお前らより二つも年上だよ。悪かったな、二年も浪人して。なんて、今日の俺は変に卑屈なことを思ってしまう。

「お前ら、分かってんなら年上の俺を敬え」
「いやだ」

言いながら、マフラーを外して谷原のいるベッドに移動する。予想

通り、宮瀬は即答してきた。それに続こうと口を開きかけた谷原を、外したマフラーでべしべしと叩く。寝転がっていた谷原はそれを牽制しようと慌てて手をかざす。

「なになに、いきなり!」

「どけ。俺の場所だろ」

「えっ、違うし!」

「違うない。どけーっ」

しばし弱い抵抗を続けた谷原だったが、俺がばしばしとマフラーで叩き続けていると、諦めたようにベッドから降りて向かいの席へと移動した。その様子を見ていた宮瀬は携帯片手に声を出して笑っている。俺も満足したように笑って、ベッドへとダイブした。今のでちょっとストレス解消。

こうやってぐだぐだ過ごすのが、最近の恒例で、何となく楽しみでもある。けど、今日に限っては完ぺきに楽しめてはいなかった。頭の中では、いつ宮瀬に昨日のことを聞こうか考えてる。宮瀬に限って浮気ってことはないだろうし、ただ話していただけかもしれない。そうやって良い方向に考えても、『でももしかして』なんていうやあな考えが出てきてしまう。だいたい、俺が宮瀬の浮気心配したところで何の意味もないし、俺が心配する必要も筋合いもないんだけど。

そうやって悶々としながら、宮瀬たちと適当にしゃべって、ぐだつて、勉強して、とだらだらとした時間を過ごす。いつもと何ら変わらないようにはして、笑ったりもしたけど、やっぱりあのいやあな考えがどうしても消えてくれない。

宮瀬とあの男との関係を知ったところで、俺自身が何の行動もしな

いは、自分でも分かりきっているのに。

「あーあ、洋くんがパチンコでも麻雀でも勝たないからお金が……」
「ほんと、それ」

いつものように夜飯を三人で食べる際になって、宮瀬が恨みがまし
そうにぽつりと漏らした。今日の夜飯はピザに決定したが、谷原が
おごってくれる様子を見せなかったので、今日の夜飯代は三人で割
り勘になっていた。

谷原におごらせるつもりだった俺も宮瀬と同じ思いだったし、宮瀬
に同調しておく。すると、谷原は『何言ってるんだ』とでも言うよう
に俺たちを見てきやがった。

「何で俺がいつも君たちに夕飯おごらないといけないの」

汚いキッチンから持ってきた皿を俺たち三人の前に並べて文句を言
う谷原。宮瀬は皿が配られる前に既に今日の夜飯であるピザに手を
伸ばしていた。

「え、洋くんが副業で儲かったら私らにおごるっていうルールじゃ
なかったっけ？」

「そうそう」

「そんなルールない！」

ピザを両手で持った宮瀬がへらへらと笑いながら言った。

「幸運をばらまかないとお前が不幸になるんだって。また事故りたくないだろ」

「……もう事故らないから大丈夫だし」

谷原の弱い反論に俺と宮瀬は二人して笑ってやる。

谷原には、何か良いことがあるとその次に必ず不幸がやってくるというジンクスがある。主にパチンコや麻雀で大勝ちしたときは、大抵それから近い日に事故る。この前なんて大勝ちした次の日に車と事故ったことがあって、バイト仲間で大分ネタになっていた時期があったほどだ。被害者だったり、加害者だったり立場はその時によってばらばらだが、今までのところ被害者、加害者、被害者の順番できてるから、次は加害者だろうというのが俺たちの見解だ。

「次事故るんだったら加害者だね」

「うるさい」

宮瀬が嫌味な笑いをつけて言い、面白がって谷原の神経を逆なでする。谷原はぶすつとそれに答えて、ピザに手を伸ばした。俺もそれに続く形で箱の並べてあるピザを手取る。これがいいと宮瀬がねだったピザは季節限定のもので、トマトベースのソースに生ハムや

ら何やらがのっついていて、食欲をそそる。見れば、宮瀬の手にあるピザはもう半分ほどなくなっていた。

「うまうま」

顔をほころばせて宮瀬が嬉しそうにピザを頬張っている。正直、その姿はとも大学生には見えない。こいつは真面目にしてるときはそれなりに大学生っぽく見えるんだが、気抜いてるときは高校生と思われても仕方ない顔立ちだ。本人はそのことを言われすぎてもう何とも思わないらしいけど。

宮瀬につられて俺もピザを一口頬張る。

「ん。うまいな、これ」

「ねー。おいしい、おいしい。チーズがいっぱいのっついて好き、これ」

そう言つて、宮瀬は箱から新しいピザを取り出す。

食うのはえーな、と思っていると、テーブルの上にある携帯がブーと振動した。

「宮瀬のじゃない？」

誰のだ、と言うより早く、谷原が顎で携帯を指して言った。

「ほんとだ」

宮瀬も携帯の振動に気がついて、一旦ピザを皿に置き、ピザに付いてきたおしぼりで手を拭いてから携帯を手を取った。

「彼氏から？ 今日来てからよく鳴ってるよね」

谷原の問いに宮瀬の顔が一瞬だけ陰るのが見えた。けど、すぐにそれを打ち消すようにへらつとした笑いを浮かべる。

「違うよー。あっちとは最近ぜんぜんメールも電話もしてないし」

宮瀬はさらつとひどいことを言って、携帯の画面に目を戻した。谷原はその言葉に苦笑を浮かべる。

あまり気付かれないようにしているけど、宮瀬は彼氏や留学関係の話題が出るのをひどく嫌がっている。今現在彼氏との関係が良好とは言えない状況でそれについて話したくないというのもあるし、その話題で自分の駄目になった留学のことも思い出すだろう。基本的に宮瀬がその話題を嫌がるっていうこともその理由も、知っているのはバイト仲間と宮瀬の学校の友達一人だけぐらいだ。さっきの谷原のようなぽつと出の質問は、あいつも仕方ないと思ってるみたいで何も言わないけど、学校で彼氏の友達に普通に質問されるとどうしようもなく腹が立つらしい。そういう時は面倒だから、適当に返事してさっさとその人から離れる、と前に宮瀬は言っていたけど。

「そんなメールしてんの？」

その手の話をしないようにして宮瀬に問いかける。そういえば、俺が来てからもよくメールしてたな。人と連絡をあまり取り合わない宮瀬にしたら珍しいことだ。

「うん。昨日からのお友達」

「昨日からなんだ。珍しいね」

谷原が可笑しそうにつっこんだ。谷原も宮瀬の人見知り具合を知っているから、珍しさ半分面白さ半分ってところなんだろう。

「そうそう。昨日たまたましゃべってさ、何か仲良くなった」

「へえ。学校の子？」

谷原がテンポよく質問していく。こういうところが俺や宮瀬との違いだと常々思う。人見知りの俺たちは会話を続けようとは思わないし、できない。だから、基本的に『へえ』だけで会話が終わってしまふこともよくある。

俺の方は『昨日』というワードが少し気になっていた。昨日、といえば宮瀬が男と仲良くしゃべっていたときだ。このまま話を聞いておけば、昨日の話題が出るかもしれない。そう思って、目線だけは宮瀬の方を向けておいて、ピザで口をいっぱいにしておくことにし

た。

「んー、『子』っていう感じじゃないな」

「どういふこと、それ」

宮瀬の答えに谷原笑って言った。宮瀬は一度携帯から目を放し、首を傾げて少しの間迷っているような素振りを見せた。

「だってさ、相手、たぶん三十くらいいってるもん」

「え？」

今度は混乱する谷原。いや、谷原だけじゃなくて俺も混乱してるけど。

「そんな年上とメールしてんの？」

俺は食いかけのピザを皿に置いて、口をナプキンで拭きながら言う。

「んー、まあね。ま、見た目三十いってるようには見えないんだけど」

「へえ」

さすがの谷原も驚いて次の言葉が出てこないようだった。
それを見て宮瀬は『ははっ』と笑って、再び携帯に目を戻す。

「それってさ、昨日カフェに一緒にいた人？」

俺は残ったピザの端っこを口に入れて、昨日のことを口にした。
宮瀬が驚いたように顔を上げる。内心臓ばくばくの俺だけど、こ
こは何でもない風を装って肩を少しすくめた。

「何で知ってんの？」

「昨日、たまたまあの辺うろついてたら見た」

「あ、そうなんだ」

少し呆気にとられていた宮瀬だったが、俺の返事を聞いて納得した
ように数回頷いて、携帯をテーブルの上まで持ってきてメールを打
ち出した。

「若く見えた？」

向かいから谷原が聞いてくる。俺はあの時のことを思い出そうと視
線を上に向けた。正直、あの時は一瞬思考が停止してた感じだから、
男の顔まではつきりと覚えていない。

「まあ、若くは見えたな。正直、遠目、俺らと同年代かと思ったし」

あの時思ったことをそのまま宮瀬と谷原に伝えれば、宮瀬は可笑しそうに笑いだした。

「まじで？　じゃあ、そう言っとくわ。喜ぶんじゃない？」
「でもさ、そんな人どこで知り合ったの？」

嬉々としてメールを打つ宮瀬を見て、谷原が不思議そうに聞いた。

「ん？　学校。てか、一応学校の先生だし」
「え？」
「は？」

メールを一区切りつけて、宮瀬が顔を上げてそう言った。この言葉には、俺も谷原も目が点になる。谷原の声なんか濁点混じりだったし。

俺たちの反応を見た宮瀬はまた可笑しそうに笑う。

「変なこと想像しなくていいよ。うちの学校の先生じゃなくて、外部の先生だし」

「ああ……」
「いや、べつそこは問題じゃないだろ」

納得しかける谷原を横目に俺がつっこむ。

「いや、まじでただの友達みたいな感じだし、何もないよ」

「何もないのは分かってるし、何かあっても困るけどさ」

俺の反応に宮瀬は少し慌てたようにそう口にした。

俺としても、別に何も疑ってはないけど、心配にはなる。ていうか、これ聞くまで変なこと疑ってたし。それよりも、今はあの時楽しそうにしていた理由が気になる。宮瀬は、友達にだったらみんなあんな感じなんだろうか。

「先生とそんな話すことあったの？」

混乱から少し立ち直った様子の谷原がナイスな質問を宮瀬に聞いた。宮瀬の答えに少しどぎまぎしながらも、平静を装おうと俺は新しいピザに手を伸ばす。

「まあ……。何かね、実は昨日さ、教務課っていうかその隣の留学関係スペースみたいなのところでキレちゃって。それ見てた先生が、私のこと授業で覚えてたらしくて、帰るときにたまたま会って話してた。仲良くなっちゃった。で、学校で話すのも何だし、っていうのであそこのカフェ行って、喋ってたの」

「要は愚痴聞いてもらってたんだ」

「まあ、そういうこと」

少し言うのを迷ったような宮瀬だったが、別に言っても支障はないと思ったのか、一気にそうまくしたてた。谷原がなるほどね、というように宮瀬を見て、宮瀬もそれに頷いていた。

仲良くなった理由は分かったけど、今度はその理由っていうのが俺は気になってきていた。留学関係の場所でキレるってことは、何か言われたんだろうなっていうことは想像つくけど、何を言われたんだろう。それで、何で俺に言ってくれなかったんだろうか。

何となく、宮瀬の愚痴を聞くのが俺の役目みたいに思ってた、俺もそれを良しとしていたんだけど、宮瀬はそこまで考えてなかったんだろうか。愚痴を言うのなんて、その人の気まぐれだとは思っけど、何となく、宮瀬には俺を頼ってほしかったって今思った。

「キレたって、何にキレたの？」

さすがに内容が穏やかじゃないと思ったのか、谷原が幾分優しくめに宮瀬に尋ねた。

宮瀬は少しの間迷ったようだったが、諦めたように肩をすくめて、話し出す。

「何かさ、私がそのスペースに英語の教材借りに行ったら、何か知らないけど、その人に『何とかくん、元気でやってる？』って聞かれた。そこでもいらってたけど適当に流して、本借りようと思ったら、『あ！ 宮瀬さんもやっぱり英語好きなんだね。やっぱり付き合っていると好きな勉強も似るんだね。分からないところは、何とかくんに聞いたらいいし、宮瀬さんはラッキーだね』だって」

とどころで職員の、たぶん女の人の、声を真似て言う宮瀬は
分腹が立っているようだった。

「あのさ、『何とかくん』って、もしかなくても彼氏のこと？」
「他に誰がいんの？」

若干キレ気味の宮瀬。昨日のことを思い出してきたに違いない。宮
瀬の剣幕に谷原が身体を引いた。

「てか、職員がお前と彼氏付き合ってたんの知ってるんだ？」
「それよ！」

俺の質問に宮瀬がさらに怒りだした。やばい、新しい方の導火線に
火をつけてしまった。

「いや、たぶん留学試験の面接のときに二人で行ったから、あつち
のキャンパスの人がうちのところの人に言っただんじやない？」

宮瀬の大学も俺たちと同じで、キャンパスが二つに分かれている。
俺たちのキャンパスも宮瀬のキャンパスも分家みたいな感じだ。大
学全体に関係する試験なんかは本家でやるんだろう。

「てかさ、何なの？ あのおっちが基準、みたいな言い方！ 基本

的にあつちが私のしてることを真似てきた感じなんだけど。めつちや腹立つたから、言いたいこと全部言ってきた」

「なんて？」

谷原が聞き返す。谷原が初めに手に取ったピザもなくなっていたけど、谷原は新しいのを取ることもせず、宮瀬の方を向いている。たぶん谷原もここで聞いとかなないと、あとで宮瀬が爆発すること分かってんだろつな。

俺の方は、気にせずにピザをもう一口かじって、話を聞く体勢になる。

「『どっちを基準にして聞いているのか分からないですけど、私は自分が勉強したいから勉強してて、自分のしたいことしか勉強しません。他の人がどうか、この年で考えることでもないでしょう。それに、あつちのことが聞きたいんだったら直接連絡でもとったらどうです？ いちいち私とあつちをリンクして考えないでください』」

「って言ったの？ 教務課の人に？」

「教務課じゃなくて留学スペースの人に」

宮瀬の言葉に谷原が固まる。宮瀬は宮瀬で谷原の些細な間違いをいちいち指摘して、むっとしたように眉を寄せた。そして、携帯を置いたまま皿にのせてあるピザを手に取り、一口かじる。

俺も俺で、宮瀬の言い様にちょっと驚いたけど、まあ、宮瀬ならやりかねないなっていう気がしないでもない。こいつは、一度キレたら怖いやつだと思っし。

「で、それ見てたその先生と帰り際に会って、話して、カフェにいた、って?」

ピザを皿に置いて、一緒に注文したコーラを飲みながら尋ねる。
宮瀬も俺と同じようにコーラを飲みながら頷いた。

「そうそう。ま、カフェではほとんど愚痴聞いてもらってた感じだけどね」

宮瀬はそう言っで、コップに入っていたコーラをごくごく飲む。
じゃあ、何であんな楽しそうにしてたんだよ。なんて思っではいるけど、口には出さない。そんなことしたら、嫉妬してるみたいだ。
いや、実際、それに近い感じのものがぐるぐると心のなかで回っていることは自覚している。

けっこう楽しそうにしてたな、とか、愚痴なら俺が聞いたのに、とか。でも、そういうのはすぐくばかみたいに思えるのも事実で、口には出さないでいる。っていうか、出せない。

「よく聞いてくれたねえ」

俺の気持ちなんて知らない谷原がのんびりとそう言っで。
この野郎、殴っでなろうか。人の気も知らないで。

「ねー。最後の方は愚痴じゃなかったけど、一応帰るときに『愚痴

ばっかでごめんなさい』って謝ったよ。そしたら、『べついいよ。楽しかったし、言って楽になるんだっいたらいつでも聞くよ』って言われて、アドレス交換した」

へらつと笑って、宮瀬が一連の話を締めくくった。
くそ、こいつも何も考えないでもの言いやがって。

「もうこういう友達ばかり増える。誰か私に良い人紹介してー」

宮瀬が両手で顔を覆って、泣きまねをしながら言った。

「紹介してほしいんなら周り整理してからにしろ、あほ」

残りのピザを口に放り込んで、ナプキンで手を拭きながら言っている。それを聞いた谷原が声を上げて笑い、「確かに」と言うのに対して、宮瀬は顔を上げて「うっさーい」とナプキンを投げてきた。

「おわ、きつたねーな！」

ふわふわと飛んでくるナプキンを手でぺしっと払い落とす。そのままナプキンはこたつ布団の上に乗っかる形になって、俺はそれをつまみ上げながら、宮瀬に見せる。当の宮瀬は気にする様子もなく、俺の方を向いて「いーっ」とか言ってる。

子供か、お前は。

「けど、あれだね」

俺が宮瀬に呆れながらナプキンをテーブルの上に置いてると、向かいの谷原がピザを手にとりながら口を開いた。宮瀬もあほみたいな顔を止めて、谷原の方を向く。

「宮瀬って、女の子よりも男の方が仲良くなりやすいよね」

谷原の笑いながらの言葉を聞いて、俺が宮瀬の方を向くと、宮瀬は首を傾げていた。

「そうかなあ。まあ、友達自体が少ないから何とも言えない気がするけど」

「その言い方、めっちゃ悲しいからやめて」

宮瀬の返事に谷原は笑いながらつつこむ。笑いすぎて口にしようとしていたピザが口の手前で止まっていて、上に乗ったチーズが落ちてきてることに気付いてない。俺の方も、宮瀬の言葉がおかしすぎて飲んだコーラを吹き出しそうになって、あわてて飲み干す。そのせいで、コーラが気管に入ってしまったって、思いつきむせてしまった。

笑いながらむせるって、すげー苦しい。

「そんな面白いこと言った？」

言った本人は何とも思ってたらずく、自分の言葉よりも笑い転げる俺たちを見て笑っていた。それが余計に俺たちにとってはおかしくて、笑いが一向に収まらない。

「あー、おもしろかった。つか、苦しい」

やつのことで笑いを収めて、再びコーラに手を伸ばす。谷原は谷原で、布団の上にチーズが落ちたことに気づき、「あーっ」と奇声をあげている。

「けど、お前、ほんとに女友達っていの？」

コーラを一口飲んで、宮瀬に尋ねる。

「んー。友達っていえるのは一人か二人くらいじゃない？ あとは、何人かアドレス知ってる人もいるけど、ぜんぜん連絡取り合わないし、喋れないし」

宮瀬は少し首をひねって考えるしぐさをした後、そう言った。その

言葉に谷原がまた笑う。

まあ、友達の少なさにはびびるけど、こいつはけっこうな人見知りだから、そんなもんかとも思う。というか、最近是人見知りというよりも人嫌いなんじゃないかと疑うこともある。

「それに、小さい頃から周りが男ばかりだったから男の人でもぜんぜん大丈夫だし。むしろ男の人のが楽な時があるよね」

そんな風に、何てことないようにして宮瀬は言い、ピザの箱に手を伸ばす。

「そういえば、上二人ともお兄ちゃんだったっけ？」

二度目の笑いが収まったらしい谷原が、布団の上のチーズと格闘しながら聞く。

「うん。しかも、一番上とは八歳で二番目とは七歳離れてる」

だからしょうがないよねー、なんて言いながら宮瀬はピザを旨そうに頬張る。何が『だから』なんなのかはよく分からないが。

確かに、俺の知る限りでも宮瀬の友達は、女よりも男の方が多い気がする。まあ、男の友達なんていうのはバイト仲間のことを言うんだが。もともと、俺たちのバイト先は女よりも男の方が多かったし、それはそれでしょうがないかなとも思ってる。今はその中に例のカフェでの『お友達』も仲間入りしてるみたいだけど。

女の友達も、宮瀬からは、ほんとに一人二人しか名前が出てこない。その中でも特に一人の友達と仲が良かったらしく、よく俺たちのことも話してるって前に言っていた。俺たちも、その子のことはよく聞いていて、何だか会ったこともないのに、既に友達のような感覚になってるくらいだ。

「ほら、友達少なくて、代わりに仲良くなったらすごい仲良くなるから」

宮瀬はそう言っ、へらへらと笑う。

それこそ、俺が困ってる要因だ。

宮瀬は、たぶん、一度相手を信頼して仲良くなると、ほんとに仲良くなる。大学二回になるまでそんなに喋る方でもなかった俺に、仲良くなってからは、一番先に彼氏との愚痴や相談までしてきたくらいだ。たぶん、今じゃ宮瀬の大学の友達の誰よりも、バイト仲間の誰よりも、俺は宮瀬に近い。

宮瀬の愚痴を聞くんというだけが理由じゃなくて、俺と宮瀬は似てるからだ。考え方や人との接し方なんかが、驚くほど似ている。正

真、こんなに似てるやつがいるんだってびびったことがある。それは、宮瀬も同じらしい。

だから、嫌なんだ。俺も人見知りだけど、仲良くなったやつとはとことん仲良くなるし、そいつを信頼する。宮瀬の場合、今その位置にいるのは俺だろうけど、そこに例の『お友達』がくるところと、なんかすごくモヤモヤする。自分勝手だとは分かっているけど。他のバイト仲間と宮瀬が喋ってても大丈夫なのに、『お友達』はなんか嫌だ。

何の気なしに部屋の隅にあるテレビを見る振りをしながら、そんなことを考える。ほら、やっぱり宮瀬はいない方がよかった。

「古賀さん？」

宮瀬の言葉にはっとして、平静を装ってそっちを向く。

「なに？」

顔を向けた俺に宮瀬が何か言おうと口を開いたとき、また、メールを告げるバイブがなった。

「コーラとって」

テーブルの上にあった携帯をさっと手にとり、宮瀬は俺の隣にある

コーラのペットボトルを指差した。

「ん」

手渡しでペットボトルを宮瀬に渡すと、宮瀬の手の中で未だに携帯が震えているのが目に入った。

「メールじゃねーの？」

「ん？ ああ、うん、違う」

ペットボトルを受け取りながら、宮瀬は口の端を上げて笑った。
ああ、そういうこと。

「彼氏から？」

俺の代わりに、谷原が質問する。

「うん」

俺と谷原の考えはどんぴしゃだったらしく、宮瀬はぽいつと携帯を床に放って、コップにコーラを注ぎ入れる。

「出ないの？」

「出ないよ。あとで『遊んでる』ってメールする」

谷原の質問に宮瀬は即答して、コーラをコップに並々と注いだ。谷原はその答えに苦笑して、ピザを口にした。

俺は注ぎ終わった宮瀬からペットボトルを受け取り、自分のコップに入れながら考える。彼氏の方も、もうそろそろ学んだいいのに。宮瀬は彼氏からの電話やメールを嫌がっている。『あつちでの生活なんて聞かされても面白いわけない』って、前に宮瀬が言っていた。そりゃそうだ。本来だったら、宮瀬も今頃日本にはいなかったんだから。それくらい、分かってもよさそうなのに。

しばらくして、電話は止まり、その後すぐにメールが来た。俺も谷原も、彼氏からだと思って無視してたけど、メールを開いた宮瀬が小さく「違った」と漏らしたことで、二人して宮瀬の方を向いた。

「先生？」

「うん。っていうか、その先生って呼ぶのやめて。笑えるから」

谷原の問いにすんなり頷いた宮瀬が少し笑ってそう口にする。いや、俺らからしたら先生は先生なんだけど。

宮瀬は、さっきの電話とは違い、さっさと返信画面を開いてメールを打っている。

こんな宮瀬を見て、俺はまた不安に思ってしまう。宮瀬の頼る相手が、俺だけだといいのにと、自分勝手な考えが生まれてしまう。俺はただの宮瀬の友達で、彼氏でもなんでもなくて、それでも、今はたぶん彼氏よりも宮瀬に近い存在だと思っている。

「お前、そんな早くメール返してたら、彼氏泣くぞ」

自分の考えなんてけっして言わずに、宮瀬にそう言っただけ。そうしたら、宮瀬は、少し困った顔で笑った。

「もう2時かあ。そろそろ帰るか」
「うん」

ピザを食ったあともいつもと同じようにぐだぐだと過ごし、気付けば日付も変わって俗に言う丑三つ時とやらになってしまっていた。いつからか、丑三つ時も怖くなくなってしまったけど。

宮瀬の『お友達』は12時頃に『お休み』というメールが来て、さらには『あんまり夜更かししちゃだめだよ』という文まで付いていた。

俺と宮瀬は立ち上がり、着てきたコートやマフラーを着る。谷原は座って大きく伸びをする。今日半日ほとんど壁とテーブルの間の狭い位置にいたからな、谷原のやつ。

「じゃあね、洋くん。お休みー」
「はい、お休み」

宮瀬が谷原に手を振って部屋を出ていき、俺も軽く谷原に手を上げてからその後が続く。

「明日も教習？」

エレベーターで一階に降りながら、宮瀬が聞いてくる。

「おう。午後からな」

「そうなんだ」

チン、と音が鳴って、エレベーターが一階に到着する。二人してエレベーターを降り、マンションのエントランスを通って、目の前の駐輪場に向かう。外に出た瞬間、冷たい空気に思わず身体が震えた。

「さむっ」

二人の声を代弁した宮瀬がぶるつと肩を震わせる。二人して「寒い」と言いながら、各々の自転車と原付に向かった。俺は自転車で、宮瀬は今年の夏から原付を使っている。『お母さんにねだって買ってもらった』と、夏休みに嬉しそうにしていた。

宮瀬の原付は俺の自転車から二つの自転車を挟んだところに止めてある。

俺は、今日のことや金曜日のことで、あんまり宮瀬とは二人つきりになりたくなくて、さっさと自転車に乗ろうとする。俺が自転車の鍵を差しこんだところで、横から「古賀さん」という宮瀬の声が聞こえた。

「ん？」

とりあえず鍵は指しこんでおいてから、宮瀬の方を向く。宮瀬は原付に座って、俺の方を見ていた。

「やっぱりさ、私って彼氏のこと待ってないとだめなのかな」

困ったように言う宮瀬に、俺の方はもつと困ってしまった。そんなこと聞かれても、俺は何とも言えない。本心を言えば、別れてしまえと言いたいところだが、今宮瀬が聞きたいことはそんなことじゃない気がした。

「なんかあつたか？」

宮瀬がこんなことを本気で聞くときは、たぶん誰かに何かを言われたときだろう。

俺が聞くと、宮瀬は少し迷った様子を見せ、ぱつと俺の方を向いた。

「金曜日に、留学スペース行く前に、知り合いと会って、たまに古賀さんたちと遊んでること言ったら、彼氏が可愛そうって言われた」

宮瀬の目は、ほとんど泣きそうになっていた。

宮瀬は、そんな風に言われるのも嫌だから、彼氏や留学の話題を振られるのが嫌なのだ。どうしたって、周りから見れば、宮瀬だけが悪いように見えてしまう。本当は、宮瀬も留学に行くはずだったことや、それだけの学力を宮瀬は十分に備えてることは、あまり仲が良くない人は知らない。そして、宮瀬自身も、そのことを言うのを嫌がっている。いちいち初めから説明するのも面倒だし、言ったところで自分がみじめになるだけだと、前に言っていた。

「お前の好きにしたらいいよ。留学に行くって決めたのは、彼氏の方なんだから、あっちに何かを決める権利はない。待ってるのも待ってないのも、こっちでどんな風に過ごすかも、お前が決めたらしい。周りが何か言っても、それを決めるのはお前の自由だよ」

だから、こう言ってやる。何度もこの言葉を言っていて、俺自身が覚えてるくらいだから、宮瀬もきつと覚えてるだろう。宮瀬が欲しいのは、こういう言葉じゃなくて、これを言ってくれる人なんだと思う。絶対的に、自分の味方になってくれる人。もちろん、俺は味方にみせるためにこれを言ってるわけではなく、本当にそう思ってるから言っている。

俺は、いつだって宮瀬の味方になるだろうし、なりたいと思っている。だから、宮瀬が頼ってくれなくて、何かがモヤモヤしたんだ。宮瀬は、俺の言葉を聞いて、少し泣きそうな、それでも笑顔になった。

「うん、そうする」

宮瀬が笑ったことに安心して、俺も頬が緩む。

「金曜に言われたんなら、金曜にメールしろよ」

それでも、すぐに報告がなかったことには若干ショックだ。

俺の小言のようなセリフを聞いて、宮瀬はまた困ったように笑った。

「だって、金曜って古賀さんバイトでしょ」

「メールならいつでも返せるだろ」

「ま、そうだけど」

そこで、宮瀬は一旦言葉を区切って、俺から視線を外した。
え、なんだよ。

宮瀬が視線を外したのは少しの間で、すぐに俺の方を見たけど、今度は困ったように上目で見てきた。

「あんまり、愚痴ばかり言うのもあれかな、と思って」

だから、やめておいた、と言って笑う宮瀬。

それを聞いて一気に力が抜ける俺。なんだよ、ただの遠慮かよ。

「別にいいよ。愚痴くらいならいつでも聞くんじ。今更変な気使っな。」

「まったく、こつちが変な氣使った」

「は？」

「あ？」

最後の言葉は無意識のうちに出来てしまつて、宮瀬の方は意味が分からないという顔をする。対して俺は、一瞬は宮瀬の顔の意味が分からなかったが、すぐに自分のせいだと氣付いて首を横に振る。

「何でもない。とりあえず、へこむくらいだったら連絡しろ。話くらいは聞くから」

「話くらいいつて。その話が聞いてほしいから、いつも古賀さんに言うんだよ」

おかしそつに笑つて言う宮瀬。

だから、それなら『お友達』に頼るなつて。

そう思いながらも『いつも』の部分が妙に嬉しくて、顔がにやけなように唇をぎゅつと結ぶ。

「ありがとう」

そつ言つて、宮瀬は原付を降りる。

宮瀬がヘルメットや手袋をするのを待つて、俺も自転車の鍵を開けてまたがる。

「じゃあね。また月曜日」

「おう、じゃあな」

二人して手を振って、お互い反対方向に原付と自転車を進める。

自転車を漕ぎながら目を前に向けると、微妙に雲が掛かったきれいな月が目に入った。俺の気持ちとおんなじだ。今の言葉を聞いて、少しモヤモヤは晴れた。けど、いつまでも残るモヤモヤと新しく入ってきた『お友達』のモヤモヤはまだ俺の中にある。

それでも、今日のこと、また宮瀬に近づけた気がして、それはそれで良かったとも思えたから、良しとしよう。

いつだって宮瀬の味方になるけど、このモヤモヤが晴れないことも、晴らす気がないことも、自分が一番よく分かっている。

「えー?! じゃあ他の男の人と遊んでるの? それじゃあ彼氏が
かわいそうだよ」

そんな言葉が、学部の掲示板の前で響く。

響くといっても、そこまで大きな声ではないけど、近くを通った人間には確実に聞こえるくらいの大きさだ。現に、俺の他にもこの無粋な発言が耳に入って、声の主の方を向く学生が何人かいる。声の発信源は、三人ほどの女子学生たちで、その中の一人(たぶん言われた人)は完璧に今の発言にいらっとした様子だ。

ふいっと、何の気なしに、好奇心程度で、通り過ぎる際にそちらの方を見る。その学生たちを見た途端、思わず足を止めそうになった。その中の一人は、俺の受け持っているクラスにいる学生で、今は女子学生から悪者扱いになっている。言われた彼女の方は、一瞬だけでも、いらだたしげに顔をしかめた。

一介の外部講師がこの小学生のような言い合いに入っていくのもな、と考えて、そのまま通り過ぎて掲示板を過ぎてすぐの棟の入り口に入った。

棟に入っすぐのところにある教務課のドアを押し開き、中に入る。中は程よく暖房が効いていて、外の寒さに耐えていた身体がじーんと温まっていく。教務課には、職員はもちろん、何人かの学生もいた。

すぐの目の前のカウンターに来週の休講を伝えようと一歩踏み出したところで、後ろからばんつと大きくドアが開く音がした。思わず後ろを振り向くも、入ってきた人間は俺の方には目もくれず、ずんずんと教務課の部屋の左側にある留学スペースに歩いていく。しかも、歩いてくときに肩が少し俺にぶつかった。若干、いらつとしてその歩いてく人間の後ろ姿を見やると、その背中にしょっている赤色のリュックサックに目がいった。それが目に入った途端、少しいらつきも収まっていく。

俺の肩にぶつかりつつ身体全体でいらだたしさを表して歩いているのは、先ほどの彼女だ。いろいろな原因は、さっきのあれだろうな、と思いながら自分のいらいらは収めて、もう一度カウンターに向かって進んだ。

「すみません、来週の授業を休講にしたいんですけど」

「あ、はい。この紙に記入お願いします」

肩にかけていた鞆を下に置いて、職員の人が渡してくれた用紙に必要事項を記入していく。

まったく、金曜日に学会だなんて面倒くさい。金曜日に学会があると、次の日が休みなので、たいてい飲みに誘われてしまうのだ。飲みに行くこと自体は嫌いじゃないが、一週間の最後の日という一番疲れているときに行くことがあまり好きじゃない。

今日は帰ったら資料をまとめようと考えて、記入し終わった用紙を職員の人に渡す。

「はい。それじゃあ掲示しておきますね」

「お願いします」

鞆をまた掛けなおして、教務課を出ようと後ろを振り向く。
何歩か歩いて入口のドアに手を掛けようとしたときに、彼女の声が聞こえた。

「どっちを基準にして聞いているのか分かりませんが、私は自分が勉強したいから勉強してて、自分のしたいことしか勉強しません。他の人がどうか、この年で考えることでもないでしょう。それに、あっちのことが聞きたいんだったら直接連絡でもとったらどうです？ いちいち私とあっちをリンクして考えないでください」

その冷たい声に、たぶん、教務課内にいた全員が彼女の方を見たと思う。もちろん、俺も含めて。ドアに触れようとした手は宙ぶらりんのまま止まってしまった。

彼女の方は、周りの視線を気にすることなく、すらすらと何かを所定の用紙に書いていき、「じゃあ、これお借りします」と言っ、くるりと職員の女の人の背を向け、自分の後ろにあるもう一つの入り口から出て行ってしまった。

女性職員は彼女の発言に少し恥いったような顔をした後、自分も用紙に何かを書いてそそくさと自分のデスクに戻っていく。

教務課の中にいる人間が不審がりながらも自分たちの行動に戻りはじめて、俺はがっとな勢いよくドアを引き、外に出た。

廊下に出て、右を向くと、ちょうど彼女が俺の方の入り口に歩いてきたところだった。彼女の方は俺のことに目がついていないらしく、いらだたしげに視線を前に向けているだけだ。

「大丈夫？」

数歩前に出て、彼女の左腕を掴みながら尋ねる。

彼女は、今まさに俺の事に気付いたようで、腕を掴まれてはっとして俺を見上げてくる。

「……………永井先生？」

どうやら彼女はちゃんと俺のことを覚えてくれているらしい。が、彼女の顔にははつきりと『先生ここで何してんの？』と書かれています、俺が彼女のあまりよろしくない出来事に遭遇していたことに気付いていないようだ。

「いろいろ見聞きたもんで」

俺が彼女の腕を放しながら今のことや先ほどのことを遠回しに告げると、彼女の方は「ああ……………」と苦い笑みを漏らした。

「ちょっといろいろあつて」

彼女はそう言って、肩をすくめた。

あんまり言いたいことではないことは分かるけど、俺だって理不尽に悪者扱いされたであろう人を放っておく人間ではない。

「いろいろあった時は、人に話した方が楽になると思うよ。宮瀬さん？」

彼女の名前を出すと、彼女はぎょっとしたように俺の方を見た。

「え、私のこと知ってんの？」

「そりゃあ、ね。自分のクラスにいるんだから」

俺の言葉を聞いて、彼女は余計に怪訝に思ったようだ。

そりゃそうだ。俺の受け持つクラスには、たぶん学生が7、80人はいる。その中で特定の学生を覚えてるなんて、何かの繋がりが無い限り、普通はありえない。そして、俺はこの大学に教授として籍をおいてないし、よって学生と何かの繋がりがあることもない。

俺が彼女を覚えているのは、ほんの偶然からだ。偶然といっても、彼女の方には思い当たる節もないだろう。ただ単に、彼女が書く授業内のミニレポートの内容がずば抜けて優れていたというだけ。そんなでもって、それをものの五分ほど書いてしまつて、一番に俺に渡してきたんだから、覚えてないはずがない。そして彼女はいつも前から三番目ほどの席に友達と座っている。今も担いでいる赤いリュックサックを横に置いて。

彼女にその気があるうとなかろうと、俺にはそれだけで十分彼女を覚える理由になったのだ。

彼女を見ると、未だに怪訝な表情をしていて、今度は俺が肩をすく

めてみせた。

「まあ、立ち話もなんだから、どこかに行こうか」

授業が始まりのチャイムは鳴っていたが、学生各々の時間割がある大学では、授業中でも教務課に足を運ぶ学生がいる。さっきも一人男子学生が俺の後ろの入り口から教務課に入っていた。こんな人の多いところで、話したくはない内容だろうし。

彼女は少し迷った様子を見せたが、小さく数回頷いて、俺の誘いを了承した。

「ふーん。それはまあ、いろいろあるねえ」

彼女の学校から二駅先にあるカフェで彼女のこれまでの経緯を大まかに聞かせてもらって出た言葉がこれだ。

事のきっかけとなったのは、学校で行われている交換留学だという。彼女は長い間夢にみていた留学を叶えようと、試験を受験した。そして、彼女を追いかけるように彼氏も時を同じく試験を受験。結果、彼女は合格ラインを超えることができ、留学試験に合格。彼氏の方はぎりぎりラインには届いてないものの、一応面接の段階まで進んだらしい。そこまでなら良かった。

彼女は面接も合格し、さあいよいよ準備だ、というところで、経済面での問題が浮上。どうにもこうにもいかないお金の問題により、彼女は留学を辞退。その一方で、学力的にいまいちだった彼氏の方は学校側の助力で留学。そして、元から友達の少ない彼女は、そのごたごたの事情を知る人間も少なく、遠慮なしに彼氏との進行具合を聞かれている。彼女のバイトの仲間は彼女の境遇を知って、何かと気を使ってくれているが、かえってそれが事情を知らない知り合いたちから非難されるらしい。

それでもって、彼女が目標にしていた留学を、さも自分の目標にしていたかのように話す彼氏に彼女は腹をたてていて。しかし、残念

ながらこの事情を知る人間も少なく、周りの人間からは彼女が彼氏を追いかけていると思われている。

この彼女をいらだたせる原因の二つが、今日はいっぺんに起こってしまつて、いらだたしさを抑えきれなかったのだと、今日の前に座っている彼女は言つた。

「いろいろあるんですよ」

俺の言葉を聞いた彼女は、そう返してきて、テーブルに置いてある紅茶のカップに手を伸ばした。

『このカフェの紅茶は最高だ』と、彼女に言われ、普段はコーヒー派な俺も紅茶を頼んだ。確かに、この紅茶は他のどの紅茶よりも美味しい気がする。まあ、今まで飲んだことのあるものがティーパックだけだというのもあるんだろうが。

どこかに行こうと提案したものの、授業のために毎週一時間半かけて車でここに来ている俺には、話をするための適当な場所が思い当たらず、代わりに彼女がここを提案した。最近のお気に入りらしい彼女の大学圏からは二駅分離れているが、彼女はよく一人でもここまで原付で来ているようだ。

原付で学校まで通う彼女とは、大学の近くの商業施設で待ち合わせた。教えてくれれば家まで迎えに行くと言つたのに、彼女は『説明するのが面倒』と言つて、そこでの合流を指定した。

「うーん。まあ、他人の俺にはあんまり突っ込んだこと言えないけど、君はずいぶん我慢してるね」

「ん？」

彼女は飲んでいた紅茶のカップから口を離さず、視線を俺の方に向ける。

「だって、俺だったらあんな無遠慮なと言われて、愛想笑いして交わすなんて無理だし。普通にキレちゃいそう」

そう言うと、彼女はおかしそうにははっと、声をあげて笑った。そしてカップを一旦テーブルに置き、学校のように肩をすくめる。

「いちいちキレてたら面倒でしょ？ 何回も言われてたらさ」

そうやって、何でもない風にして、彼女は言った。そんな言い方こそ、彼女が毎回キレそうになってるのを示してると思うんだけど。

「そんなにストレス溜まることあるんだったら、誰かに言わないと。そのうち頭の血管切れるよ」

俺の冗談を聞いて、彼女はますますおかしそうに笑った。

「大丈夫だよ。ちゃんと相談相手はいるから」

ひとしきり笑った後に、両手をぶらんと伸ばした足の上に乘せて言う彼女。

「そう？　ならいいけど」
「うん」

彼女の答えを聞いて、少し安心する。あんなことがしょっちゅう起きていたら、ストレスなんて溜まる一方だろう。

まあ、はけ口があるなら良かった、と思って、俺も目の前に置かれている紅茶に口をつける。コーヒーとは違った柔らかい苦味がのどを通っていつて、紅茶もいいな、なんて思う。そしたら、前から「ほんとにね」という声が聞こえて、ふいっと顔を上げる。

「何がほんとに？」
「え？」

彼女はまさか俺に聞こえているとは思ってなかったようで、驚いた顔をして俺の方を見返した。俺はカップをソーサーに置いて、彼女を見る。

「今『ほんとにね』って言ったでしょ？」
「え？　ああ、うん」

聞かれるなんて思ってなかったのか、彼女は歯切れの悪い返事をす

る。別に責めてるわけじゃなくて、単にどういう意味か聞きたかっただけなんだけど。

彼女が落ち着きなく目を泳がせてるのを見ながら、俺はテーブルに肘をつけて顎を手に乗せる。

午後の三時過ぎだけど、平日だからか、客足はまばらだ。近くの席には人もいないし、俺が彼女をじっと見ていたって不審に思う人もいないだろう。彼女が口を開くまでずっと見ていようと勝手に決めて、手持ちぶさたな左手で紅茶を一口飲む。

「……たぶん聞いても面白くないよ」

少しして、彼女も俺が視線を外さないことに気がついたのか、俺を見て困ったようにそう言った。

「別にいいよ。聞きたいと思ったのはこっちなんだから」

今度は俺が肩をすくめて答える。

彼女は俺の答えを聞いて諦めた様子を見せ、話す前に自分も一口紅茶を飲む。

「相談相手ってというのが、すごく良い人なんだ。私が何回も同じような愚痴言ってるのに、いつだってちゃんと聞いてくれるし。あっちとの電話でむかついて、いらいらしたの全部吐き出しても、ちゃんと聞いてくれる。……いつも、味方になってくれるんだよ」

彼女はそこで言葉を切って、もう一度紅茶を飲んだ。

最後の言葉には、少しだけ罪悪感があるように聞こえた。その相談相手を味方につけてしまつて申し訳ないと思つてゐるんだろうか。というか、『味方にしかできない状況にして』かな。

彼女と話していて、いくつか気付いたことがある。

彼女は彼氏のことを『彼氏』とはあまり言わない。『あっち』とか『あの人』という言葉を使う。それは、彼女が彼氏を遠ざけていることを示しているんだろうと思う。

彼女は、たぶん、今現在では彼氏と連絡を取り合いたとは思つていない。できるなら、なるだけ遠ざけときたいつて感じた。けど、それを彼氏が分かつてくれることもないだろうなあ、とも思う。勝手に留学しといて『さみしい』とか言うくらいだからな。

そして、彼女は、その相談相手のことをかなり信賴している。じゃないと、罪悪感なんて出てこない。

俺は、一旦テーブルから肘を離し、彼女と同じように手を足の上に放りだす。

「もし、その相談相手に話すのがはばかられるんなら、いつでも聞くよ」

「……え？」

「さっきのこと以外にも、あるんじゃないの？ キレそうになったこと」

そう言つと、彼女は気まずそうに視線をそらした。

「別に最近のことじゃないし」

「うん、いいよ」

「ていうか、もう相談相手に話した」

「うん、いいよ。まだ収まってないんでしょ？」

彼女は視線を俺に戻し、少しむっとした様子で俺を見てきた。

「君があれくらいのことですれ違ってことは、元から溜まっていたものがあつたんじゃないの。それくらいは、何となく分かるよ。君の名前覚えてたくらいなんだから」

そう言えば、彼女は拗ねたように下唇をほんの少し突き出した。

厄介なことに、大勢の学生の中で特定の学生を覚えると、自然とその学生を目で追ってしまう。そうして、何となくその学生の様子をうかがってしまう。『今日はまだ来てないな』とか『ああ、今日はいつにもまして眠そうだ』とか『今日はいらついているな』とか。

だから、普段なら皮肉の一つか二つでやり過ごせる場面を、あんな風にキレたってことは、そうとう何かが溜まってたんだろうなとは想像がついた。

彼女はまだ拗ねた表情で俺を見ている。そういえば、授業でもたまにこんな顔してたな。友達がかまってくれなくて暇な時に。

「先生は変だよ」

「そう？」

「うん」

拗ねた顔を止めて、一つ溜め息をついて彼女が言った。それから紅茶を飲む。

「君を覚えてたのはたまたまだよ。それに学者なんて変な人ばかりだ」

「ふーん」

「ほら、言いたいことあるならどうぞ」

『変』の意味が本当はどういう意味なのかは分からなかったが、とりあえずの話を繕う。彼女に先を促せば、少し物足りなそうな顔をされたものの、彼女はそれまでの『溜まりもの』について話した。た。

どうやら、それを話すまでには信頼してくれてるらしい。

あれから彼女の『溜まりもの』について聞きだし、彼女の鬱憤も、全部聞いた。嬉しそうに留学生活について電話してくる彼氏や、バイト仲間と遊ぶのを理由に電話を断れば不機嫌になるという彼氏。それはもうたくさんのことを。やっぱり、さっき気付いたことは間違いないようで、彼女は彼氏と連絡を取り合いたいとは思っていないようだった。そして、この電話の件にはすべて相談相手が絡んでいて、それを言うのは悪い気がしてあまり言えてないらしいということも、見当がついた。

その様々な鬱憤を聞いてもらって、彼女の方もだいぶすっきりしたのか、今では『溜まりもの』についてよりも普段の生活について話している。主にバイト関係のことが多いのだけど、その中でも『洋くん』という彼女の友達の話が面白い。

「あー、笑った。けど、よくそんなにタイミングよくいったねえ」
「ねー。ほんとにあれば洋くんから聞いて爆笑した」

そう言いながら、彼女はその時のことを思い出しているかのようにおかしそうに笑う。

彼女が爆笑したという話は、洋くんが彼の地元の友達と飲み会を催したときのことだ。そこには彼の高校時代の友人がいて、その中には洋くんの元彼女もいたという。付き合っていた時から元彼女の束縛は激しかったらしいが、別れて数年経つ今もそれは変わっていない。

彼女は洋くんの飲み会当日、それもちょうど飲み会が始まる時間に、『気を付けて飲み会行ってきてね』という洋くんの彼女を装ったメルをしたらしい。それも文末にハートの絵文字付きで。それが今まさに乾杯が始まるという時に洋くんの携帯に届き、それを束縛の激しい元彼女が携帯を見たらしく、『ふーん。彼女いるんだあ』という元彼女の言葉と共に、彼の周りの空気は一気に氷点下まで下がったのだそうだ。

その時の『洋くん』とやらの冷や汗ものの場面を思い浮かべただけで笑いが込み上げてくる。俺は口を手で覆って、彼女につられて笑う。

「あれから洋くん、元カノからよくメール来るらしいよ」

「それはまた災難な」

洋くんの災難について彼女は面白そうにへらへらと笑う。自分がその原因となっていることも分かっているようで、それがより一層面白みたいだ。

そんな彼女を見ているだけで、こっちも笑みが漏れてくる。笑って乾いた喉を潤そうと、カップに手を伸ばすと、中にあったはずの紅茶がなくなっていた。それを見て、今度は窓の外に目を向ける。なんだ、外もだいぶ暗くなってきたな。時計に目を移せば、針が五時を示している。ここに来てから二時間は経ってるみたいだ。そりゃあ、紅茶もなくなるよな。店内を見渡せば、お客もまばらだ。彼女もそれに気付いたのか、時計に目をやっている。

「もう五時かあ。外もけっこう暗くなってる」

そう言つて、右肘をテーブルにつき、顎を手に乗せて外を見る。外には帰宅へと向かっている車や人がそこそこいた。歩いている人はみんな寒そうに背中を丸めている。

「どうする？ どこかでご飯でも食べていく？」

「ん？」

紅茶の代わりに水の入ったグラスを手にとって、彼女に聞いてみる。今から帰つても、十分夕飯には間に合うけど、なんとなく誘つてみたくなつた。

彼女は俺の言葉を聞いて、呆れたように口の端を上げて笑つた。

「ご飯つていつでもねえ」

そう言いながら、彼女の視線がテーブルに置かれている俺の左手に注がれた。彼女の視線の先には、間違いなく俺の左薬指にはめられたシルバーの指輪がある。

「ああ。連絡さえすれば大丈夫だよ」

俺はそう言つて、左手をテーブルから離し、彼女と同じように肘をついて顎を手に乗せた。二人して鏡に映つたように左右反対の体勢になつたことで、二人の距離が俄然近くなる。

彼女はそんな俺を見て、呆れたというように笑って息をついた。そして、肘をつくのを止めて、最初の時のように足をぶらんとさせて、その上に手を放りだすようにして置いた。

「一般的なお嫁さんや彼女さんは、自分のパートナーが他の女の人と出掛けるのを好まないんだよ」

「君は別に気にしないでしょ？」

「自分が世間一般の定義から少しずれてることくらい認識してます」

彼女のその言い方が子供じみて見えて、俺は思わず笑ってしまう。

「なに」

「別に。何でもないよ」

いきなり笑われたことに不快感を隠さず、眉をひそめて彼女は聞いてくる。俺は右手を横に振って、何でもないと示す。顔はまだ笑ったままだけど。彼女は何なんだという顔をしながら、水を一口飲んだ。

「だいたいただご飯食べに行くだけなんだから、何ともないよ。普段だって、外でご飯食べてくることもあるんだし」

笑いを引っ込めてそう言えば、彼女は白い目で俺を見る。そうして、

また溜め息をついた。

「そんなもん分かってるよ。そうじゃなくて、永井さん、ご飯食べに行くこと何て伝えるつもり？」

ここで数時間話すうちに、彼女の俺の呼び方が『永井先生』から『永井さん』へと変わっていった。たぶん、普段友達同士で俺のことや授業のことを話すときにはそう呼んでるんだろう。

彼女の問いに俺はしばし考えをめぐらす。そうして思い浮かんだ答えを口にした。

「今日は学生とご飯食べに行くから、夕飯はいらないよ」

答えを聞くと、彼女は『そらみる』という顔をした。

俺は訳が分からず、眉を少し寄せて答えを求める。

「一番上手な嘘は、必要最低限の情報しか言わないことと、本当のことの中に少し嘘を紛れ込ますことなんだよ」

知ってた？というように彼女は首を少し傾げて俺を見てくる。
今度は俺が呆れたように笑う。

「そんな大げさな」

「だって、その言い方だったら、永井さんが悪者にならないじゃん」

その言葉に俺は首をひねる。言ってる意味がよく分からない。
そんな俺を見て、彼女はしたり顔で笑った。

「『学生と』って言われたら確かめる方法もないし、もし相手が私だつてばれても『ただの学生だよ。何を心配してるの』って言えるでしょ」

「ああ」

思わずなるほど、と言いたくなつた。別に意図したことではないけど、確かにそうかもしれない。それでも、大学で教鞭をとつて人間としては、一学生にここまで言われて反論しないわけにはいかない。

「けどさ、本当のことは本当のことなんだから、それが一番クリアな伝え方だと思うけど」

彼女は水を飲みながら、視線だけは俺を見ていて、俺の言い分を聞いている。グラスをテーブルに置いて、彼女は肩をすくめた。

「まあ、それはそうだけど。でも、それだつたら考える必要ないじゃん。伝えるだけであんだだけ考えたつてことは、永井さんもあんまり私のことストレートには言いたくなかつたし、それを知られるの

も嫌だったんでしょ。というか、詮索されなくなかったとか？」

彼女の答えを聞いて、思わず身体が固まってしまった。それを見ていた彼女がにんまりと笑う。俺は息をついて肘をテーブルから降ろし、そのまま今度は腕を椅子の背もたれに乗つけた。

まったく、してやられた気分だ。正直な話、後半は彼女の言う通りだ。自分を悪者扱いしないようにっていうのは意図してなかったが、相手が女一人だってことを知られないような言い方を考えたのは事実。それが学生だろうが同年代だろうが。

結婚した当初に、学会の帰りなんか飲みに行くことを告げると、『どこで誰と、いつまで』というのを聞かれたことがあった。その時はまだ可愛げがあると思って答えていたけど、それが毎回になると、少し頭が痛くなってくる。それに、同席している女性に悪い。だから、いつからか、自分から相手が質問する余地のないような必要最低限のことだけを伝えるようになった。別に隠し事があるわけじゃないから、本当のことを言えばいいんだけど、それをするとし面倒なことになると自分で分かっているからか、自然とそんな伝え方をするようになっていった。

彼女の方を見れば『どうだ』と言わんばかりの視線を俺に送っている。溜め息しか出てこない。

「永井さんも大変なんだねえ」

「……君ほどじゃないよ」

そう言っても、何の説得力もないのか、彼女はおかしそうに笑うだけだった。

ほんとに、溜め息しか出てこない。こんなこと、誰にも気付かれた

ことないのに。というか、今では自分でも意識しないでやってるから、改めて指摘されてびっくりしたって感じた。

水の入ったグラスを口にしながら彼女の方を見ると、彼女はにやにやとした顔でこちらを見ている。彼女のことは笑うに任せておいて、俺はグラスをテーブルに置くと、横の椅子に置いている鞆から手帳を取り出して一番最後の白紙のページを破って、ペンを手にとった。

「何してんの？」

「んー？」

彼女が覗き込むようにして、俺の手元を見ているのが気配で分かる。書き終わって、メモを彼女に渡す。

「また何か話したくなったら、連絡してよ」

「……今の時代、赤外線っていうものがあるのに何でわざわざメモ？」

彼女が俺のアドレスと電話番号の書かれたメモを手にながら呆れた笑みを浮かべて聞いてくる。

俺はそれに自分の携帯を見せて、答えを示した。

「ああ、なるほどね。じゃあ、私の方が最新だ」

俺の持っているものは、白い犬がCMキャラクターとして宣伝して

いる会社のスマートフォンで、これには赤外線機能がついていない。これを見た彼女は、嬉しそうにして自分の携帯を携帯を取り出す。

「じゃーん」

それは個性的なファッション等で注目を集める海外女性シンガーをキャラクターとして起用している会社のスマートフォンだった。それには赤外線機能の他にも、様々な機能があり、その会社がこれを機に変革すると謳っているだけはあると思う。

彼女は携帯を取り出すと、さっそく俺が渡したメモを見ながら何かを操作しだした。そして、すぐに俺の携帯にメールを知らせるバイブが鳴った。メール画面を開けば、知らないアドレス。

「お、届いた」

彼女がその音を聞いて、嬉しそうに反応した。

メールは彼女からで、本文にはアドレスと電話番号、そして『宮瀬春希』と書いてあった。それをそのまま登録する。その時に、だいぶ前に教授から着信があったことを知らせる履歴に目がいったものの、後で掛けなおせばいいと思い無視する。

彼女はそれを見届けてから、満足そうに携帯とメモを鞆の中に仕舞い、今度は財布を取り出した。

「はい。これ、私の分ね」

女の子にしては珍しく、表面が黒色の財布から紅茶の代金を出し、俺の方に滑らせてくる。

別に紅茶くらいおごったって良かったけど、彼女がそうしたいなら、それで構わないと思って、素直に受け取る。

「ほんとに、何かあったら連絡するんだよ。血管切られても困るから」

「だから大丈夫だって」

そんな風にふざけて念押しすれば、彼女はまたおかしそうに笑う。

彼女からお金を受け取ったのを合図に、二人ともコートやらを着て、席を立った。

「ありがとーございました」

大学の最寄りの商業施設に着いてから、彼女が車を降りる前にそう言った。

「どういたしまして」

「今日は、愚痴ばかりでごめんなさい」

そう言って、本当に申し訳なさそうな顔をする彼女。そんな顔しなくても、面倒だなんてまったく思っていないのに。

「別にいいよ。楽しかったし、言って楽になるんだったらいつでも聞くよ」

そう言えば、彼女はほっとしたような笑みを見せ、車を降りた。助手席側の窓を開けると、彼女が手を振った。

「じゃあ、来週に」

「あー、来週は休講だよ。ちょっと学会が入ったから」

「あ、そうなんだ」

今日教務課に申請した情報を伝えると、彼女は少し残念そうな顔をした。

「金曜日は永井さんの授業が楽しみなのに、残念」

「それはどーも」

そんなにストレートに『残念』と言われるとは思っていなくて、思わず口調が憮然としてしまう。それを聞いても、彼女はははっと楽しそうに笑う。「じゃあ、また再来週」と言い、また手を振って自分の原付が置いてある場所に向かいかけたところで、「あっ」と言っただけで立ち止った。何かと思い、彼女を見やる。

「永井さんさ。何で私のこと覚えてたの？」

窓からこちらを覗き込みながら、さも不思議そうにして聞いてくる。

「ああ。君のリュックは目立つからね」

そう言つて彼女がしょっている赤いリュックサックを指差せば、彼女は「ふーん」と声をあげた。なんだか、あんまり納得のいつていない声音だ。彼女には、上手な嘘の付き方が通用しないらしい。なら、少しだけ本当のことを教えよう。

「他にも一応あるけど、それはまた今度つていうことで」

「なにそれ」

「一度に教えちゃったら、面白くないでしょ？」

そう言つと、彼女は少し不満そうな顔をしたが、仕方ないと諦めたのか、ふうつと息をついた。

「ま、いつか。それじゃあ、再来週に」

そう言つて、彼女は今度こそ、原付の止まっている場所へと歩いていった。

しばらくその場で止まってままでいて、彼女が原付に乗って発進したのを見届けてから、携帯を取り出す。履歴から先ほどの教授の番号を選び、掛けなおすと、2、3コールの後に教授が出た。

「三神教授ですか？ 永井です。先ほどは失礼しました」

『ああ、構わんよ。来週の発表用の資料にどうかと思って、文献をいくつか君のパソコンに送っておいたことを知らせておこうと思っ
てね』

「ああ、そうでしたか。ありがとうございます」

右手に携帯を持ちながら、空いた手でとんとんとハンドルを指でたたく。

資料が送られてるなら、少しは楽になりそうだ。そう思っていると、教授から『まだ家じゃないのか？』と尋ねられた。

「ええ。少し用事があったので」

彼女が言った、上手な嘘の付き方の一つを実行する。本当の事の中に、少しの嘘を紛れ込めます。用事が『できた』のは事実。初めから『あった』のではないけど。

『そうか。家にも連絡したら、君はまだ帰っていないと奥さんが言っていたからね』

「そう、でしたか。お手数をお掛けしました」

『いやいや。それじゃあ、気をつけて帰るんだよ』

「はい」

そう言って、携帯を切る。と同時に、溜め息が漏れてしまった。家に連絡したのか。

教授は、基本的にはとても良い人だ。さっきみたく、俺の発表用に

と資料を探して手助けしてくれたりする。自分の研究にも、下の准教授や助教を参加させてくれる。その反対に、准教授らが自分の研究に勤しんでいるときは、無理に引きこんだりはしない。本当に、とても良い人なのだ。良すぎるくらいに。

教授とは、家族ぐるみとまではいかないが、それなりに仲良くさせてもらっている。だから、さっきの家への電話も、俺のことを思っ
てしてくれたのは容易に想像がつく。ただ、それが常に俺にプラスに働くとは限らない。今回は、確実にマイナスに働くだらう。帰ればきつと、妻からの質問にあうに決まっている。
俺は溜め息をつきつつ、車を発進させた。

家に着いたのは、七時半近くだった。運悪く、帰宅ラッシュにはま
ってしまつて、いつもよりも時間が掛かってしまった。

マンションの地下に車を止めて、エレベーターで五階まで向かう。
廊下の中間に位置する自宅のドアを開けると、中から笑い声が聞こ
えた。

「ただいま」

言いながら車や家の鍵がいつしよくたになっているキーを玄関の靴
箱の上に置く。靴を脱いでいると、リビングの方からぱたとス
リッパの音が聞こえてきた。少しして、妻——万里子が姿を現した。

「お帰りなさい、マサくん。さっき、三神教授から電話があったけど、今日何かあったの？」

普段の金曜日なら七時には家に帰っているのが、今日は遅れるだけでなく、教授から携帯に繋がらないと電話をもらえば不思議に思うものなのだろうか。そんなことを思いながら、靴を脱いで、万里子に笑みを向ける。

「ああ。帰り際に学生たちに捕まってさ。ずっと話してたんだよ。連絡しなくてごめんな」

「うっん。何かあったのかと思って心配しちゃった」

そう言って笑うと、万里子は「ご飯の用意出来てるよ」と言っ、リビングの方へと向かっていった。

知らず知らずのうちに、溜め息が出る。彼女の言う上手な嘘の付き方の効果は本当のようだ。

スリッパに足を通し、すぐ近くにある書斎のドアを開け、靴を放り込む。そのまま、廊下を進んでいき、リビングのドアを開いた。

夕飯も食べ終わり、俺は風呂へと、万里子は食器の洗いものにキッチンへと向かった。その途中で、あることを思い出し、万里子を振り返る。

「来週の土曜は、夕飯いらないよ」

「どうして？」

「村瀬がこっちで公演するから、一緒に食べようって言われてるんだ」

「そっか。分かったよ」

万里子も知っている友人の名前を出せば、万里子は安心したような笑みを見せ、キッチンへと戻っていった。俺は気付かれないように、また小さく溜め息をついてバスルームに向かった。

湯船につかりながら、今日のことを思い返す。あんなこと言われたからか、今日は一段と万里子の質問が煩わしく思える。

三つ年下の万里子とは、俺が28歳の時に結婚した。もう、四年目だ。会ったのは、大学時にお世話になった教授の勧めで出席した見合いだった。良家の娘さんだと言われ、仕方なく出席したも同然だった。万里子は、同年代の人に比べたら、可愛い部類に入るのだと思う。俺だって、それなりに付き合いっていうものがあつたのだから、それくらいの判断はつく。実際、初めて見た時に可愛いなと思つたことは事実だ。

その見合いから、流れで付き合いが始まり、三年付き合い合つて結婚した。

別に万里子が嫌いなわけじゃない。家事もしっかりとこなしてくれている。もちろん、本人が働きたいと言えば、それだって構わない。ただ、何か。何かが、足りないという実感はある。それが何なのか、まったく見当もついていないんだけど。

そんな事を湯船の中で、ぼけっと考えていると、バスルームのドアがこんこんと叩かれた。万里子だ。

「なに？」

「あのさ……。お願い、してもいい？」

「んー？」

「今日……。だめ？」

思わず溜め息をつきそうになるのを、ぐっとこらえる。

「今日は疲れてるんだ。ごめんな。来週に学会もあるから、ちょっと根詰めないとだめなんだ」

「またー？」

「しょうがないだろ」

「……マサくん、万里との子供欲しくないの？」

また、そのことか。そう思うけど、口には出さないでおく。

結婚して二年目になると、万里子は子供を欲しがった。俺も、特に子供嫌いというわけでもないのに、出来たらいいなくらいには思っていた。けれど、万里子は自然に任せるということに我慢が出来ないらしく、こうしてよくせっつかれている。結婚も四年目になると、周りにも子持ちが増えていき、その中での孤独感もあるのだろうとは思っけど、無理強いにはしてほしくない。

「欲しい欲しくなくて出来る問題じゃないだろ」

「でも、しようもしないじゃない」

それを聞いて、ばしゃっとお湯を顔にかける。ドアの向こうで、万里子が固まったのが何となく分かった。けど、こうでもしないと大げさに溜め息をついてしまいそうだったのだ。

「万里、ほんとに疲れてるんだ。ごめんな」

「……分かった」

万里子はそれだけ言うと、ぱたぱたとリビングの方へと戻っていった。

俺は、溜めていたものを吐き出すように大きく息をついた。

風呂を上がったからは、書斎にこもり、来週の資料作りに没頭した。教授から送られてきた文献はどれも参考になるものばかりで、自分が思っていたものよりも良いものができそうだ。

だいぶ集中した後に、一息つこうと思い切り背を伸ばした。ぎつと、椅子の背もたれが音をたてる。視線をデスクの下に向けると、鞆が目に入って、おもむろに携帯を取り出した。着信も受信もなし。彼女からの連絡は入っていないかった。まあ、昼間にあれだけ話したんだから、今日中に来るとは思っていないけど。でも、何となく、明日になっても彼女からの連絡はないんじゃないかと思えた。明日だけじゃなく、それ以降も。きっと、彼女は自分から連絡をしないたちだ。本当の本当に、ぎりぎりのところまでこないと、自分からは助けを求めないだろう。彼女の相談相手ほど信頼されていない俺には。

「マサくん？」

ドアの方から、遠慮がちな万里子の声が聞こえた。携帯を手にしたまま、万里子の方を見やる。

「私、先に寝るけど大丈夫？」

そう言われて、携帯の時間を見れば、12時近くになっていた。もう一度、万里子の方を見て、笑みを見せる。

「うん、いいよ。お休み」

「うん」

万里子はそう言っても、そこから動こうとはしなかった。視線だけで『どうした？』と尋ねる。

「……マサくん。怒ってない？」

先ほどの風呂場でのことを言っているんだろう。万里子は不安そうに俺を見ていた。

「怒ってないよ。本当に疲れてるだけだから」

安心させるように笑みを浮かべて言うと、万里子は安心したように「良かった」と言って寝室へと歩いていった。

万里子が出ていった後、俺は何回目かも分からない溜め息をついて、もう一度携帯を見下ろした。やっぱり、連絡はない。

俺は携帯をばいっと鞆に放り込んで、またパソコンに向き合った。

翌朝、歯を磨いて、朝食を食べて、昨日のように書斎にこもって初めにやったことは、彼女に『おはよう』とメールを打ったことだった。

彼女には、上手な嘘の付き方が通用しない。なら、正攻法にいくしかない。

彼女に対して特別な感情を抱いていたわけではないけど、昨日繋がった縁をここで切る気にはなれなかった。

昼頃に、万里子がい買い物に行こうと書斎を開けたとき、ちょうどジーンズのポケットに入れておいた携帯のバイブが鳴った。それを感じて、思わず口元がほころんでしまう。そのまま立ち上がって、万里子に近づく。

「ああ、行こうか」

どうやら、繋がった縁は切れることなく、続いてるようだ。

こんなに近くにいるのに、触れられない。

自分には、触れる勇気も、ないのだけど。

「お疲れ様です」

「お疲れ様です」

そう言つて、宮瀬と二人、エレベーターに乗り込む。エレベーターの扉が閉まる寸前に、教室長からも「お疲れ様です」という声が返ってきた。

扉が閉まると、横の宮瀬が壁に寄りかかりながら「あー」と奇声をあげた。声には出さないけど、俺もおんなじ気持ちだ。

「話長いよ、あの人」

顔を存分にしかめながら、宮瀬がこぼす。

「あー。もう１１時だし。最悪」

「『何とかしていかなきゃいけないんです！』って言うくらいなら、自分で何とかしろっつーの」

俺が腕時計を見ながら壁に寄りかかった横で、宮瀬が教室長の口真似をしてぐちる。その真似が妙に甲高い声で、おかしくなって笑ってしまった。そんな俺を見て、宮瀬もにやつと笑う。

エレベーターが一階について、ビルの小さいエントラスの裏口から駐輪場へと向かう。外に出ると、やっぱり寒かった。俺も宮瀬も、寒さに背中を丸めてしまう。

今日は月曜日で、週初めのバイトの日だった。現在事実上の主力としてシフトに入っている俺や宮瀬は、二人が揃う月曜日に必ずといっているほど、教室長の長い話に付き合わされていた。今日も、その例に漏れず、１０時には帰れるはずが１１時まで伸びてしまった。いい加減、残業代請求するぞ。

夜の空気は昼とは比べ物にならないくらい冷たく、コートを着ていても寒いくらいだ。まして、下はスーツのスラックスなのだから、もつと寒い。

二人して首をすぼめながら、自転車と原付が止まっているところまで来ると、俺は膝くらいの高さまであるコンクリートブロックに、宮瀬は自分の原付に座る。

「つかれたよー」

宮瀬はそう言つて、自分の鞆を原付のストラップ部分に引っかけて、ぐーっと手足を伸ばす。俺は鞆の中からこそそとお茶の入ったペットボトルを探した。鞆の下の方に入っていたペットボトルをやつと発見して取り出すも、中身はほとんど空っぽ状態だった。

「あれ。俺、そんなに飲んでたっけ？」

「教室の中暑いって言つて、けっこう飲んでたよ」

ペットボトルをかざして見せる俺に、宮瀬は頷きながら言った。

「しょうがない。何か買うか」

どう考えても、これだけの量じゃ喉の渴きは潤せないと思つて、駐輪場から道路を挟んですぐ目の前にある自販機で何かを買うことにした。

「私もー」

財布を持つて立ち上がった俺を見て、宮瀬が原付に座つたまま手を上げる。

「おこれってか？」

「ジューズ一本くらいいいじゃん。お金持ちなんだから」

立ったまま宮瀬を見下ろせば、へらへらと笑ってそう言った。
普段から貯金残高を自慢しまくっていた手前、その言葉に否定はできない。

「……あつたかいミルクティー？」
「うん」

俺の言葉に、宮瀬は元気よく頷いた。

宮瀬とよく遊ぶようになってから、宮瀬の好みがだいたい頭にインプットされてきた。甘いものが好きで、苦いものがだめ。夏はだいたい炭酸飲料で、冬はあつたかいミルクティー。たまにココアの日もあるけど。買い物も好きで、レディースものも買うが、気に入ったものであればメンズのものも買う。

こんな風に情報がどんどん蓄積されていて、知れば知るほど、俺と宮瀬は似ているのだと感じさせる。

今日みたく、何にも言わないでも、二人お決まりの場所に座って、話し込むんだ。月曜日はだいたい俺たち二人が一番最後まで残るから、いつもここで話してる。別に『こうしよう』と約束してるわけじゃないけど、何となくそれが習慣化してきてるんだ。

俺の分のあつたかいコーヒーと宮瀬のミルクティーを買って、さっきの場所に戻る。

「ほら」

近くまで来てミルクティーの缶を宮瀬に向かって放ると、宮瀬は上手いこと片手でキャッチした。俺は缶コーヒーを振りながら元の位置に座って、財布を鞆の中に戻す。少しの間、両手で缶を包んで手をあつためる。だいぶ暖まった頃に蓋を開けてコーヒーを口にしていると、横で宮瀬がミルクティーを飲みながら携帯を操作していた。

「何してんの？」

「んー？ メール来てた」

その言葉に、一瞬また彼氏から来てたのかと思っただが、嬉々としてメールを打っている宮瀬を見ると、どうやらそれは違っらしい。

「先生からか？」

「うん。ってか、だから『先生』っていうのやめてって」

他に思い当たる節もなくてそう言えば、宮瀬は即答する。そして、またおかしそうに笑いながら『先生』の訂正を求めてくる。

その先生の名前が『永井』という名前だということは教えてもらったが、別に俺は知り合いでもないのに、宮瀬みたく『永井さん』と呼ぶよりも『先生』と言ったほうがしっくりくる。

宮瀬がメールを打っているのを、所在なげに缶を持っている右手の薬指をなでる。今、その薬指には包帯がぐるぐる巻きにされていた。昨日の日曜日に、谷原や他のバイト仲間数人とテニスをしていて、足をもつらせてアスファルトのコートに思いつきり滑りこけたのだ。その拍子にグリップを握っていた右手の薬指がひどい状態ですりむけた。すりむけたっというか、えぐれた。診療所で治療してもらっ

た時に、何かにぶつかったら痛いだろうからということで、保護テープの上から包帯を巻いてくれたのだ。

「痛い？」

ぼけつと薬指をなでていると、横から宮瀬の心配そうな声が聞こえた。横を向くと、携帯は手に持ったまま、こちらを心配げな目で見ている。

「少しな」

「利き手だと面倒だね」

「うん」

昨日ほどではないが、今も傷口はじんじんと痛いときがある。しかも、ちよつど第二関節あたりをやってしまったって、ものを書くときがとても煩わしい。

「けつこうメールしてんのか？」

「ん？」

「永井さんと」

なでることを止めて、未だに心配そうにこちらを見ている宮瀬の携帯を顎で指して聞いてみる。宮瀬は一瞬何の事を言っているのか分かっていないようだったが、永井という名前を出すと、思い出した

よつに「ああ」と言つて携帯を見下ろした。

「そうだねえ。けっこうしてるかな」

そう言いながら、宮瀬は携帯を少し操作してコートのポケットに仕舞った。それから空いた手でも缶を包むようにして持って、両手を温めている。

俺は宮瀬の言葉に「ふーん」とだけ返して、またコーヒーを口につけた。

普段は、自分から人と連絡を取り合わない宮瀬にしたら、その『けっこつ』という頻度は珍しいことだ。ましてや、知り合いになってまだ三日ほどしか経っていないならなおさら。

「珍しいな。お前がそんなに人と連絡取り合うなんて」

思ったことをそのまま口にした風を装って、宮瀬から連絡を取り合っているのかを探る。

宮瀬はミルクティーの缶を両手で持ったまま、少し考える素振りを見せて、「うーん」とうなった。

「まあ、自分からメールとかしてるわけじゃないけど。向こうからけっこつ来てて、私から切っちゃったときは、次の日とかにメールするけど」

「……大学の教授って、けっこつ暇なんだな」

宮瀬からではなく、向こうから連絡を入れていることに若干の不満を覚えつつ、少し意地の悪いことを言う。それを聞いた宮瀬は声をあげて笑いだし、落ち着くためにミルクティーを飲んだ。

「暇かどうかは知らないけど、今は忙しいみたいだよ。金曜に学会もあるって言ってたし。今頑張って資料作りしてるんだって」

「へえ。その人の専攻って何なの？」

「ん？ 演劇学」

『演劇学』。理系の俺からしたら、どんなことを研究してるのか皆目見当もつかない分野だ。演劇なんていう分野は、理系の入る余地がまったくないとも思えてしまう。

「何勉強してるんだろとか思ってるでしょ」

知らずのうちに眉を寄せていて、宮瀬の声にはつとめる。宮瀬を見れば、俺の考えなど分かっているというように、にやにやとした笑みを浮かべていた。

「しょうがないだろ。完全に俺からしたら専門外なんだから」

「まあねー。でも、けっこう面白いよ」

そう言いながら、宮瀬はまたコートのポケットから携帯を取り出す。どうやら、早くも返信が来たらしい。

宮瀬はメールを見て、返信を打ち出す。しばしの沈黙が流れるが、別に俺はこの沈黙を苦とは思わないし、たぶん宮瀬もそんな風には感じてないだろう。

この沈黙よりも、宮瀬と永井っていう人が頻繁に連絡を取り合ってるっていうことの方が俺は嫌だ。今宮瀬の一番近くにいるのは、た

ぶん俺だと思う。けど、宮瀬が永井って人と連絡を取り合っているということを知っていて、何だか俺という場所が浸食されてくんじゃないかって思ってしまう。

宮瀬と永井って人には、俺にはない共通点がある。俺は理系だし、宮瀬は文系だ。それも、お互いの分野にひとかけらも触れることすらない、正反対のことを学んでいる。だけど、その永井って人には、宮瀬の勉強していることが分かる。宮瀬がどういうことを欲していて、どんなことを学びたいかが、きつと手にとるように分かるんだろ。

そして、一番嫌なのが、その永井って人が、宮瀬がどういう人間かを理解しているかもしれないということだ。宮瀬からではなく、向こうから連絡を入れてるのは、宮瀬が自分から連絡を取らないということを知っているからだと思う。自分から連絡することで、宮瀬との関係が続かせているような気がする。

そのの行きつくところが、俺の今の居場所な気がして、仕方がない別に、永井って教授が宮瀬とどうこうなるうなんて考えてると思わないけど。ただ単に、俺の居場所を持ってかれそうで、怖いだけだ。

「ねえ、やっぱり痛いのか？」

コーヒーの缶を持ったままぼーっとして、無意識のうちにまた薬指の包帯のところをなでていたらしい。宮瀬が心配そうに聞いてきたっていうか、すぐ近くにいます。いつの間にか、原付を下りて、俺の隣まで来ていた。それでもって、俺のことを覗き込んでいる。あまりにもいきなりで、驚いて身体を少し後ろに引いてしまう。

「ちょっと、危ないよ」

身体を引いた拍子に後ろにこけそうになって、宮瀬に腕を掴まれた。

「何やってんの」

「おお、悪い」

呆れたように言う宮瀬に、俺は謝るしかない。宮瀬はそのまま俺の隣に腰を下ろした。見れば、携帯も既に仕舞っている。

「寒いねえ」

宮瀬はそう言いながら、はーっと息を吐き出して、白い息を出しては楽しんでいる。

俺と宮瀬の間には、ほんの少しの距離ができている。距離、というよりも、もはや隙間と言った方がいいかもしれない。それでも、このほんの少しの隙間が、俺たちの関係みたいだ。近いようで、近くない。触れられそうで、触れられない。

「ああ、さみいな」

俺も同じようにして、白い息を吐き出す。

二人してコンクリートブロックに座って、何を話すわけでもなく、

ぼーっとする。俺と宮瀬には、こんな沈黙もよくあることで、お互いそれが気まずいなんて思ったことはない。他の誰かだと気まずいものもあるが、宮瀬とだと別に気負って何かを話す必要もないかなと思えてしまうのだ。

そうやって二人でしばらくの間黙っていると、かすかに携帯のバイブが鳴る音がした。俺は宮瀬を、宮瀬は自分のコートのポケットを見る。宮瀬は再びポケットから携帯を取り出して、メールを読んだが、今度は返信せずに、また携帯をポケットに戻した。

「永井さんじゃないの？ 返さないのか？」

「うん。家帰ってから返す」

宮瀬はそう言うと、ぐびっとミルクティーを一口飲んだ。

「そっいえば」

永井って人の演劇学であることを思い出し、宮瀬に尋ねようと口を開く。

「前に行きたいって言ってた舞台のチケット、取れたのか？」

その話を持ち出すと、宮瀬は顔をぱつと輝かせた。

「うん。取れた。C席もB席も空きがなかったからA席にしちやっただけ、取れたよ」

そう言うと、宮瀬はふんふんと鼻歌を歌いだす。そしてもう一度携帯を取り出すと、何度か操作してから俺に入金完了画面を見せてきた。

「よかったな」

「うん」

満面の笑みのまま宮瀬は携帯をいじり、鼻歌は続けて身体を少し揺らします。どんだけ楽しみなんだ。

宮瀬が行きたいと言っていた舞台には、何でも宮瀬の好きな俳優が出てるらしい。俺も谷原も、その俳優のことはあんまり知らなくて『どっかで見たことあるな』くらいにしか思ってたが、宮瀬は違った。その公演のCMを谷原の家で見たときに「行きたい！」といきなり言いだしたくらいだ。聞けば、もともと舞台俳優らしく、最近になってテレビなんかに出始めたということだ。宮瀬にその俳優の良さを弾丸のような勢いで聞かされたから間違いない。

公演はこの県ではなく二つ隣の県でやるんだが、ここからだと快速電車に乗れば一時間も掛からない。それを知った宮瀬は俄然燃えて「絶対にチケット取る」と言っていたのを覚えている。

「今週の土曜日なんだ。村瀬健吾だよ、村瀬健吾」

まだ身体の揺れている宮瀬が、心底楽しみなようにその俳優の名前を口にする。

「俺、この間そいつのドラマ見たけど、そんなにかっこいいか？」
「単体で見たらそこまでだけど、演技してる時はかっこいいからいいの」

「……お前、それ褒めてないぞ」

俺の言葉は無視して、宮瀬は携帯をいじり続ける。そして、目当てのものを発見したのか、「ほら」と言っただけで俺にその画面を見せてきた。

「この時はかっこいいでしょ？」

「ああ、確かに」

宮瀬が見せてきた画面は動画で、俺が見たドラマのものだった。村瀬健吾が走って逃げる女の人を追いかけて腕を掴んでいるシーン。

『逃げないでください！』

必死でそう言っている村瀬健吾のシーンで動画が止まる。あれ、まだ続いてんだけど。

「ここ、めっちゃかつこよくない？」

動画を止めた張本人の宮瀬が言う。「ここ」と言っで、俺にちゃんと見えるように携帯をこつちに寄せてくる。それにつられて、宮瀬の身体も俺に寄りかかった。

「はいはい、かつこいいね」

「ちょ、ほんとにかつこいいんだって」

適当に流す俺を不満げに見て、宮瀬は体勢を戻した。もちろん、宮瀬の身体も離れる。先ほどの隙間が、また俺たちの間に出来た。宮瀬はそんなこと気にする様子もなく、携帯をポケットに仕舞っている。

こんな風に何かしらのアクシデントがないと、俺と宮瀬が触れるなんてことはありえない。どれだけ近くにいても、意図して触れ合うことなんて皆無なのだ。それが、俺たちをこんな風にちょうど良い関係に繋げているのかもしれないけど。

「さむつ。そろそろ帰るか」

今の自分の考えなんて気付かなかった振りをして、コーヒを一気に飲み干し、立ち上がる。宮瀬も残りのミルクティーを飲んで立ち上がった。

「今から原付とか寒いな」

「じゃあ、俺と代われ」

「やだ」

軽口をたたき合いながら、二人して道路の向こうにある自動販売機のところまで歩く。缶をゴミ箱に放り込んで、また駐輪場に戻った。

「次来るの水曜日だっけ？」

「おう」

俺の答えを聞いて、宮瀬は「そつかそつか」と頷きながら、ヘルメットと手袋を装着した。俺も自転車の鍵を開け、それにまたがる。

「じゃあ、カゼ引くなよ」

「そっちなねー」

それだけ言つて、「じゃあ」と手を振り、先に自転車を漕ぎ始める。大通りに出たところで、横の道路から宮瀬が俺を抜かしていった。自転車を漕ぎながら、次に会うのは水曜日だなと考える。そして、予定が空けば、たいがいは週末と一緒に過ごす。今週は無理だけど、だからといって、宮瀬と俺の関係が崩れることはない。

それどころか、遊ぶたびに、一緒に過ごすたびに、縮めることのできない距離が出来上がっていく。その距離がどれだけ近くても、触れ合うことはないんだ。

偶然で近づくことはあっても、それを必然に変えるつもりは、今の俺にはない。

だから、宮瀬の世界入ってきた永井って教授が、俺が起こすつもりのないことを、平然とやってしまいそうで、余計に怖いんだ。

『土曜日に村瀬健吾の舞台観に行くんだー』

彼女からそんなメールが届いたのは、木曜日だった。手帳を確認するまでもなく、土曜には俺もまったく同じ予定が入っている。その旨を伝えて座席を聞けば『昼公演のXの14』だと返ってきた。村瀬から送られてきたチケットに書かれている俺の座席番号は、同じく昼公演の『Xの15』。

『残念だね。席は離れてた』
『そうなんだ。残念だねー』

その日はそれでメールを終わらせて、携帯を閉じた。

『終わったら楽屋！』

開演30分前に送られてきた村瀬からのメールを読んで、携帯をさつさと仕舞う。

俺の座席は、舞台から遠からず近からずの位置で、なんだかんだ言っても村瀬は俺の好みを分かってくれているのだと感じた。右隣には若い女の人が二人組で来ていて、さつきから村瀬のかつこよさを飽きることなく語り合っている。左の席は、未だ空席だった。

劇場は満員御礼だ。元からの舞台好きの人もいれば、最近になってテレビに出始めた村瀬目的の女性客も多くいることだろう。

俺は脚を組んで、肘かけに肘を置き、まだ暗幕が下りている舞台の方を見た。その時になって、左側から「すみません」という声が聞こえてきて、その声の主は既に座っている観客の前を通って自分の席までやってくる。そして、席に着くと小さな声で「間に合った」と息をついていた。俺は気付かれないように顔を右側に寄せ、左からは見えないようにする。

俺の左に座った彼女――宮瀬春希は、鞆からメガネケースを取り出して、眼鏡を掛けている。そういえば、普段は掛けていないけど、授業中なんかは掛けてたな。そう思いながら、彼女がケースを鞆に戻し、脱いだコートを手を膝にかけて、鞆を床に置くのを盗み見る。やっと一息ついて椅子に深く腰掛けたところで、俺はそっと彼女の方に身体を寄せた。

「この距離だともう見えないの？」

横からいきなり尋ねられた声に、彼女はぎょつとしたように俺の方を向いた。俺と目が合うと、更にぎょつとなったように眼鏡の向こうの目を丸くなる。俺はそれを見て、思わず笑ってしまった。

「え、え？ な、んで？」

事態を把握しきれていない彼女は、言葉も繋げられないくらい混乱している。

「俺も行くって言ったでしょ？」

「え、え？ でも、」

彼女は未だに混乱したままだ。彼女の混乱っぷりに笑いながら、床に置いてある鞆から財布を取り出してチケットを見せる。

「ほら、Xの15。驚かそうと思って嘘ついたんだよ」

そうやって笑いながらチケットを彼女の手元に落とす。彼女は混乱したまま自分のコートに落ちたチケットを手にとり、その表面に視線を落とした。

少しして、彼女がはあっと息をついてチケットを俺に返してきた。

「本気でびびるからやめて」

「あそこまで驚くなんて思ってたなくて」

混乱が落ち着くと、今度は呆れたような目で俺を見てくる。俺はまだ笑みを浮かべたまま、肩をすくめてみせた。

「君も村瀬健吾のファンなの？」

チケットを受け取って体勢を直しながら、聞いてみる。横の若い子たちは未だに村瀬の話で盛り上がっていた。

彼女は俺と同じように椅子に深く座りなおして、「うーん」と考える素振りを見せた。

「まあ、めっちゃファンっていうほどでもないけど。好きなほうかな」

「ふーん」

「村瀬健吾が出てるっていうのもあつたし、授業でもやったやつだから、一回舞台見ときたかったんだよね」

その言葉に、俺は視線を彼女に向ける。彼女も気付いたのか、俺の方を見上げた。

「ちゃんと授業聞いてるでしょ？」

にやっと、したり顔でこちらを見て言う彼女。

「そりゃあねえ。二時間分の授業使ったんだから、覚えといってもらわないと」

そう言つて、俺はまた顔を前に向けた。

彼女がこの戯曲を覚えてることに大して驚きはなかった。授業でこの戯曲を取り上げた時に、彼女が一番に非の打ちどころのないようなミニレポートを提出したんだから。彼女が授業をしつかりと聞いていることは明らかだ。それよりも感心が向いたのは、彼女がこの戯曲を生で観たいと思ったことだった。

俺のやっていることは、正直、一般の人からは理解されにくい学問だ。大してためになるわけでもなく、これを学んだとしても、研究者以外には道はない。『授業』というくりでは、それなりに人気のある分野だとは思ふ。それでも、それを専門としようとする学生は少ないだろうし、授業を受けても実際に生の舞台を見に来る学生なんて、ほとんどいないだろう。だから、俺の授業が彼女に何らかの影響を与えたらしいということが、何だか嬉しかった。

彼女の方を横目で見れば、少し嬉しそうな顔をして幕が上がるのを待っている彼女が目に入る。少し考えたあと、俺は彼女の方に身体を寄せて声を掛けた。

「村瀬に会いたいなら、後で会わせてあげようか？」

「……え？」

彼女が顔をぱつとこちらに向けてきた。が、俺の顔を見て、むっとした顔になる。

「もう冗談はいいって」

呆れたように言って、俺の席の側の肘かけに肘を乗せる。先に置いていた俺の腕と彼女の腕が触れた。彼女は別段それを気にするでもなく、自分の肘を少し前に動かして空いたスペースに落ち着く。

「劇団関係者に知り合いがいるから、会おうと思えば会えるよ」

「……ほんとに？」

さすがに周りの人間に聞かれるのはまずいので、彼女の方に身体を寄せたまま小さな声で告げる。すると彼女は真意を確かめるように疑わしげな視線を送ってきた。俺はそれに小さく数回頷き、「どうする？」と尋ねる。

「……行く」

自分の願望には逆らえないのか、彼女は視線を俺から外して小さい声で言った。

「嘘だったら、何かおごってよね」

じろつと横目で俺を見てきて、釘をさすようにして彼女は付け足した。

「嘘だつたらね。ほら、始まるよ」

そう言ってからすぐに開幕を告げるブザーが劇場内に響いた。ライトが段々と落ちていく中で目だけを横に向けると、彼女が前を向きながらも不満そうに唇を少し突き出しているのが見えた。その様子が大学生らしくなくて、心の中で笑ってしまう。きっと、あれは俺の言葉を疑ってるからだろう。

彼女からしたら、村瀬健吾という人間は明らかに芸能人で、そんなに簡単に会える人間でもないのかもしれない。けれど、俺の中ではあいつはいつまでも大学時代の友人で、ただの演劇馬鹿にしか思えない。二人とも学生の中から演劇好きで、卒業後はあいつは表現する側に、俺は研究する側に進んだにすぎない。最近になってテレビにも出るようになったが、この関係はまったく変わらなかった。

暗幕がすべて上がり切り、舞台が始まった。今日公演する戯曲は、『オイディプス王』だ。

ライトに照らされた舞台には宮殿のセットが組まれており、今はそこに小さな子供が老神官と共に小枝を手に宮殿の前にひざまずいている。そこに、中央奥の宮殿の扉から村瀬扮するオイディプスが登場し、中央に組まれている短い階段から下りてくる。これが、オイディプス王の第一幕の幕開けだ。

横の若い女の子たちが、村瀬の登場に小さな声で「きゃあ」と興奮して手を握り合っていた。

「これはどうした、子供たちよ」

村瀬の声が劇場内に響く。舞台用に訓練された、重く、しっかりと

響く声だ。

村瀬の声を聞いて、横でまた女の子たちが興奮する。うるさいな。

「いったいこれは何事なのか？」

村瀬のセリフが、今現在の俺の気持ちと重なる。

よくよく見れば、斜め前に座っている中年の女の人も、熱い視線で村瀬を見ていた。

いつの間にあいつはファン層を広げたんだ。村瀬とは、年に何回か会っし、飲みにも行く。ただ、あいつがこっちで公演することはあまりなく、こうやってあいつの舞台を生で観るのはかなり久しぶりだった。テレビに出たのは知ってたが、正直ここまで人気があるなんて知らなかった。だって、ついこの間公共放送の企画連続ドラマに準主演で出たくらいじゃないか。それまでは、連続ドラマといっても、ゲスト出演くらいだ。

「この地の支配者オイディプス殿」

老神官が村瀬のセリフを引き継ぐ。

舞台に集中しようと、体勢を整える。その拍子に、隣に座る彼女の髪に手が触れた。彼女も気付いたようで、ふと俺の方を見上げたが、すぐに何もなかったかのように舞台に視線を戻した。見れば、彼女は肘を肘かけに置いて顎を手の上に置いている。俺もさっきまで同じような体勢になっていたので、自然と二人の距離が近くなっていた。別にこれくらいは気にしないし、彼女も気にしていないようなので、体勢を整えてからも同じ姿勢でいることにした。

それにしても、右隣の女の子たちの興奮具合がうつとうしい。ちらつと彼女の方を見ると、彼女は女の子たちとは正反対にほとんど無表情とっていいくらいの表情で舞台を見ていた。これは、授業中に気付いたことだけど、彼女がこういう顔をしているときは完璧に集中しているときだ。

俺も彼女に倣って、女の子たちのことは気にせず、舞台に集中することにした。

「生涯の終りの日を幸福のうちに迎えるまでは、誰であろうと幸せ者と呼んではいけない」

テーバイの長老の言葉で、舞台が締めくくられた。そうして、舞台が暗転し、客席からは大きな拍手が送られた。もちろん、俺もその中に混じって拍手を送る。横の彼女も同じように手を叩いていた。

しばらくその拍手が続いた中、舞台にもう一度ライトが照らされ、次々と出演者たちが姿を現し始めた。クレオン役の俳優が礼を済ませたところで、大げさに両手を中央奥の宮殿に向かせ、観客の注意を引きつける。宮殿の扉から、イオカステ役の女優と、オイディプスを演じた村瀬が登場した。客席の拍手は、先ほどよりも一層大きくなる。

二人の役者は互いに手を取り、反対の手で客席に向かって手を上げながら階段を下りてくる。二人が他の役者と同じ中央に來ると、手を取り合ったまま二人は客席に向かってお辞儀をし、顔を上げたところで互いに抱き合った。

横の女の子たちが、「やだ」と声をあげる。

他の客はそんな女の子たちを無視して、抱き合った二人の役者を見て更に大きな拍手を送った。

「やっぱり、後味の悪い話だねえ」

盛大なカーテンコールも終わって観客が次々と席を立つ中、彼女が言った。少し疲れたのか、両手両足をぐーっと前に伸ばしている。俺もついていた肘を離して、少し腕を伸ばす。

「そう?」

「うん。話的には面白いけど、何かねえ。『ああ、終わっちゃったな』って感じ」

彼女はそう言いながら首を左右に動かす。

彼女の言ったことは、何となく分かった。確かに『終わっちゃったな』という感じはする。王国の危機からオイディプス自身の出生に関する混乱を経て、テーバイに再び秩序がもたらされた。けれど、その秩序は喪失を伴ったの秩序だ。観終わった後の、この『終わっちゃったな』という感覚は、この喪失によりもたらされた秩序を目の当たりにしたからかもしれない。横に座っていた女の子たちのように、「かわいそうだったねー」などでは済まない感覚だ。

周りの客も席を立ち始めたことで、彼女も立ち上がろうと腰を浮かせた。それを見て、肘かけに置かれていた彼女の手に自分の手を重ねて彼女を引きとめる。

「なに?」

彼女が『なんだ』というようにこちらを見てきた。

「もう少し待ってて。今行っても、スタッフ通用口に入れないから」
「え？」

意味が分からないという顔をする彼女。どうやら、舞台が始まる前にした約束のことをもう忘れているようだ。

「会うんでしょ？ 村瀬に」

「あ、ああ。そういえば、そんなこと言ってたね」

そう言つて、彼女はもう一度座席に腰を落ち着ける。彼女が座つたのを見て、重ねていた手を離れた。

「けどさ、ほんとに関係者と知り合いなの？」

「ほんとだよ。君に嘘つく必要ないでしょ」

「既に一回つかれてる人に言われても何の説得力もないけどね」

じろつとこちらを睨むようにして彼女が言った。

「まあまあ、それはいいじゃない」

彼女の視線は笑って受け流すことにして、俺は椅子に深く座って人の流れが落ち着くのを待つことにした。

人の流れがだいぶ収まって、もうほとんど俺たちで最後じゃないかというくらいになって、俺は立ちあがった。

「さ、行こうか」

コートを羽織りながら彼女を振り返れば、彼女は眼鏡をケースに入れて鞆の中に放り込み、自分も立ち上がった。

「ほんとに嘘だったら何かおごってもらうからね」

歩きながらコートを着て、彼女がこちらを見て言う。未だに俺の言葉信じてないみたいだ。

「分かった分かった」

彼女の後ろに続きながら適当に相槌を打つ。

前を歩く彼女を見ていて、ふといつもと違うようなことに気がついた。何だろうと考えながら彼女の格好をじっと見てみると、その原因が思いつく。彼女の着ている服が、いつもとは違うんだ。いつもの彼女にはジーンズとかの長いズボンを履いているイメージがあったんだが、今日はそうじゃなかった。コートの裾から出ているボト

ムは、ふんわりとした丈の短いものだ。万里子の読む雑誌にもこんなものがあつたような気がするけど、名前までは覚えていない。でも、それを着ているだけで、彼女のイメージががらりと変わった。

「そつちじゃないよ」

人の波について会場から出たところの廊下を左に曲がろうとする彼女の腕を掴んで引きとめる。掴んだ拍子に彼女の身体がいきなりストップしてしまい、後ろからの客に迷惑そうに押されてしまった。人の圧迫から遮ろうと、彼女の腕を引いて自分の胸元に引き寄せた。いくら人が少なくなつたといえども、900人近くが入る劇場だ。今いる人の数だけでもそうとうな数だろう。

人の流れに逆らうようにして廊下を右に進む。邪魔にならないように端の方を歩くが、やはり何人かの客には迷惑そうにされた。やつとスタッフ通用口の前までたどり着き、彼女を見下ろす。腕の中にいた彼女は、あの人の多さに少々疲れた様子だった。

「お疲れ」

そう言つて彼女の抱いていた腕を離す。彼女はようやく着いた曲がり角の位置で疲れたように溜め息をついた。

「疲れた……」

心底疲れたという顔をする彼女に少し笑って、目の前に立つガードマンの方を向いた。中年の男性ガードマンは何事かと先ほどから俺たちの方を怪訝な様子で見っていた。

「永井といいますけど、お話はうかがってますか？」

「ああ、永井さんですか。はい、うかがっています。どうぞ」

ガードマンの男性は俺の名前を聞くと納得した顔で、俺たちに道を開けてくれる。彼女は驚いた表情をしながら俺の後についてきた。

「知り合いがいるって本当だったんだ」

「だから本当だって言ってたでしょ」

きよろきよると、物珍しそうに辺りを見回しながら彼女は言った。俺はそんな彼女を視界の端で捉えながら村瀬に教えてもらった楽屋に向かう。

先ほどガードマンのことも、村瀬が前もって俺のことを伝えておいてくれたものだ。あいつの公演のときは、いつもそうして楽屋まで出向いている。

先ほどの出演者やスタッフの間を縫って歩き、『村瀬健吾』と書いた紙が貼ってあるドアの前まで来た。そのドアを数回ノックする。すると、中から「はいー」という間延びした声が聞こえてきた。

「俺だ。入るぞ」

村瀬の声を聞いて、返事を待たずにドアを開ける。後ろから彼女の戸惑ったような声が聞こえたが、あえて無視する。

ドアを開けると、中には鏡の前にある椅子に座った村瀬がいた。メイクの人が首の方に滴り落ちた血のりを一生懸命落とそうとしている。村瀬が着ている白いオイディプスの衣装も、胸から上はほとんど血のりでべっとりだ。

「あー、やっと来たな。今日の舞台どうだった？」

俺の姿を鏡越しに見つけて、村瀬が嬉しそうな声を出す。俺は楽屋の中に足を踏み入れて、入り口で驚いて目を丸くしている彼女も中に引き入れてドアを閉める。

「良かったよ。正直、お前のファン層の広がりにはびっくりしたけどな」

「さすがテレビだろ」

そう言って村瀬は嬉しそうに顔を緩める。そして、鏡の中に俺の隣にもう一人の人間がいることに気付いてきょとんとした表情になった。

「その子、誰？」

その言葉を聞いても、俺の隣にいる彼女はまだ混乱から抜け出せないでいる。

「俺の学生だよ。たまたま席が隣だったんで、連れてきたんだ。一応お前のファンらしいぞ」

そう言えば、村瀬は「ほんとに？」と言って、また嬉しそうな顔を浮かべた。

俺は彼女の背を押して、楽屋の中央にある革張りの応接ソファに座った。彼女もそこに座るが、未だにこの状況を理解していないように見える。

「大丈夫？」

目が点の状態になっている彼女の顔を覗き込んで、一応聞いてみる。彼女は数回瞬きをした後、ぱっと俺の方を向いた。

「な、何で、村瀬健吾？」

「会わせてあげるって言ったでしょ？」

「でも、関係者がいるって」

「あいつは関係者じゃないの？」

『あいつ』と言って、俺たちの目の前にいる村瀬を指差した。村瀬は自分のことだと気付いて、鏡越しにこやかに彼女に向かって手

を振っている。

「本人なんて聞いてない！」

「驚かそうと思って」

彼女は村瀬が手を振っても返す余裕もないらしく、代わりに俺の方を向いてそう言った。彼女の言葉に肩をすくめてそう言えば、彼女は信じられないというような視線を送ってきた。

「まあ、いいじゃない。村瀬に会えたんだから」

「そうだけど……」

彼女はまだ少し不満げな顔をしたが、少しして落ち着いたように息をはきだした。

「変なやつでしょ、永井って」

その様子を見ていた村瀬が、鏡越しに笑いながら彼女に話しかけた。彼女も鏡越しに村瀬の方を見返して、ちらっと俺のことを見たかと思うと、村瀬に同意するように頷いた。

「変な人です」

「だよー」

彼女の同意を得ると村瀬はへらへらと笑った。彼女も村瀬と同じ意見を持って嬉しそうに口元に笑みを浮かべた。

メイクの人は、やっと血のりが取れたのか、ぱぱと後片付けをして村瀬と俺たちに会釈しながら楽屋を出ていく。

村瀬はメイクの人が離れたと同時に座っていた椅子をくるっと回転させて俺たちの方を向いた。

「今日は来てくれてありがとうね」

この言葉は、俺ではなく横の彼女に言ってるんだろう。彼女もそれに気付いたようで、「いいえ」と首を横に振っている。

「こっちこそ、こっちで公演やってくれてありがとうございますっ
て感じです」

「そうだねえ。あんまりこっち側で公演やらないもんね」

「その分テレビで見る回数は増えたんじゃない？」

俺がそう聞くと、彼女は「まあね」と言って笑った。

「それはそうとさ、夜公演が5時からなんだ。8時には出れると思うから、飯、一緒に食うよな？」

「ああ。ちゃんとやってあるから大丈夫だよ」

俺の答えを聞くと、村瀬は満足そうな顔をして、ぱっと彼女の方に顔を向けた。

「君も一緒に行かない？」

「え？」

突然の村瀬からの誘いに、彼女は驚いて目を丸くさせる。

「そんな、いいですよ。二人、久しぶりに会ったんじゃないんですか？」

「別に気になくていいよ。どうせ俺も誘うつもりだったから」

そう言つてソファの肘かけに肘を置いて彼女を見ると、彼女は呆れたような目でこちらを見ていた。

「今日はもともと村瀬と約束してたし、特に嘘もついてないよ」

以前に話していたことを思い出すようにして彼女に告げる。それでも、彼女はまだ白い目でこちらを見ている。

「まあ、いいじゃない。俺も君と話してみたいし」

村瀬にそう言われて、気持ちがぐらついているみたいだ。少し視線をさまよわせた後、彼女は俺の方を見てきた。俺が『いいんじゃない』というように首を傾けると、彼女も数回頷いて村瀬に了承の返事をした。

「よかった。じゃあ、それまでどつかで待っててよ」

「ああ。お前も、次のやつまでにちゃんと休んどけよ」
「分かってるよ」

その言葉を合図に、俺がソファから立ち上がると、彼女も続くようにして立ち上がる。

「あ。名前、何て言うの？」

彼女がお辞儀をして俺についてこようとしたところで、村瀬が彼女に声を掛ける。彼女は立ち止って、村瀬の方を向いた。

「宮瀬です。今日は、ありがとうございます」

そう言つて、もう一度村瀬に頭を下げる彼女。村瀬も「いいえ」と言いながら、椅子に座ったまま頭を下げる。

「じゃあ、後でね」
「はい」

二人のやり取りが終わったのを見て、俺は村瀬に手を上げ、彼女を連れて楽屋を後にした。

柔らかなソファに座りながらも、彼女は未だに俺に信じられないと
というような視線を送ってきている。

村瀬の楽屋を後にした俺たちは、駅前に立ち並ぶ商業施設の一つに
入り、いくつか自分たちの欲しいものを買ったあと、その一階に
入っていた大型コーヒーチェーン店に腰を下ろしていた。俺は彼女
に教えてもらった本を、彼女は俺が教えた本を一冊ずつ購入した。
今はこのコーヒーチェーン店の一番奥にあるソファ席に向かい合っ
て座っている。

「何でそんなに不満そうなの」

頼んだコーヒーを飲みながら、彼女に尋ねてみた。

「まず一個目が、席を嘘ついてたこと。二個目が村瀬健吾と知り合
いとか言わなかったこと。ご飯行くとか聞いてなかったことが、三
個目」

どうだ、と言わんばかりの視線で俺を見ながら、彼女も自分の頼んだものを口につけた。彼女のオーダーしたものはラテをベースにしたものだが、そこに彼女は色々と自分でカスタマイズの注文もして、結局俺にはそれがどんな味になっているのか分からない。

「一個目と二個目のことは、君を驚かそうと思ってしたんだよ。まあ、予想以上に驚いてくれて面白かったけど」

そうやって平然と答えると、彼女はぎろっとした目をこちらに向けてきた。それに構うことなく肩をすくめる。

「三個目は、まあ、誘おうと思ってただけで、あの時はまだ口にしていなかったでしょ？」

三つめのことに關しては、やっぱり自分でも齒切れが悪くなるのが分かる。村瀬が俺より先に言ってくれただけで、あれがなかったら、たぶん彼女は俺の誘いには乗らなかっただろう。

「いいんじゃない？ 村瀬と食事ができるんだし。それに、さっきも言ったけど嘘もついてないよ」

そう言えば、彼女は持っていたカップをテーブルに置いて、椅子に深く座りなおした。

「村瀬健吾と行くって言っただけで、私がいることってないだけでしょ」

「ま、そうだけどさ。どっちにしても、村瀬と一緒に夕飯食べるって言ったときは、君が来るなんて知らなかったし」

それでも、彼女はあまり釈然としない顔をする。

「考えすぎだつて。君と二人だけで食事するわけじゃないんだから」「そうなんだけど、ね。結婚した人と友達になったことないから、よく分かんないんだよ。しかも永井さん、まだ若いしね」

そう言つて、彼女は手を伸ばしてカップを手にとつた。

『友達』。彼女と知り合つて一週間ほどしか経っていないけど、俺が大半の彼女の大学での友達よりも近くなっていることは、間違いないと思う。それを彼女も分かつてるから、ところどころで俺との距離を測りかねてるんだろう。

ちらつと目線を下げれば、左の薬指にはめられたシルバーの指輪が目に入る。これ一つで、彼女が距離を測りかねるんだな。

「まあ、深く考えない方がいいよ。俺だつて、学生とここまで仲良くなつたことないから」

「そうする」

そう言つて、彼女はまたカップに入つたラテに口をつけた。

村瀬から連絡が入ったのは、8時を少し過ぎた辺りだった。駅前の居酒屋に既に席をとつてあるという。俺たちがそこに着くと、村瀬がもう席に着いていて、飲み物だけを注文していた。

「宮瀬さんもビールでいい？」

「あ、ソフトドリンクでお願いします」

テーブルに近づくなり、村瀬が彼女にそう尋ねて、彼女は慌てたように村瀬の向かいに座ってメニュー表を見た。そして少し悩んでから「りんごジュースで」と店員に伝え、そのままその席に落ち着く。俺もコートを脱ぎながら彼女の隣に腰を下ろした。店員が座席のすだれを下げて、厨房へと戻っていく。

「アルコール飲めないの？」

向かいに座った村瀬が首を傾げて彼女に聞いている。彼女はそれに少し困ったように笑って、コートを脱ぎ始めた。

「飲めないことはないんですけど、苦いのが嫌いなんです」
「えー。じゃあ、強い？」

「どうだろう。本格的に飲んだことないんで」

ははっと、彼女は笑う。村瀬はそんな彼女を見て「珍しいね」と言う。

「それより、お前、そんな堂々として周りにばれないのか？」

「大丈夫だよ。そこまでまだ認知されてないから」

オイディプスの衣装を脱いだ村瀬は普段の格好に直っていて、眼鏡なんかもしていない。それを心配してやるも、村瀬は何ともないようにして笑う。

「宮瀬さんも、この間のドラマくらいじゃない？俺のこと知ったのって」

テーブルに肘をついて村瀬は彼女に尋ねる。彼女はその質問に首をひねって少しの間考えてから、口を開いた。

「どうかな。完全に名前覚えたのはそのドラマですけど、村瀬さんのこと知ったのは去年くらいのドラマですよ。そのドラマの最終回で『あ、この人かっこいいなあ』って思ったの覚えてますもん」「ほんとに？」

彼女の答えを聞いて、村瀬は嬉しそうに反応した。彼女は特にそれを何とも思っていないようで、村瀬の興奮とは反対に普通に「はい」と答えていた。

「そのドラマ、たぶん俺が初めてテレビに出たやつだよ」
「あ、そうなんですか？」

村瀬の言葉に、彼女は少し驚いた様子で返事する。

確かに、自分が初めて出たドラマを知ってて、しかもそれを見て自分のこと覚えてくれたってなったら嬉しいだろうな。村瀬はずっと舞台俳優としてやってきて、村瀬も出演したある舞台の脚本を担当した人にそのドラマに推薦された。この間放送された公共放送のドラマも、その脚本家が書いたものだ。

村瀬と彼女がドラマの話で盛り上がっていると、「失礼します」という声とともにすだれが上がって、店員が二つのビールとりんごジュースを一つ運んできた。俺と村瀬の前にビールを置き、彼女の前にジュースを置く。俺はそれらを受け取りながら、適当に料理を注文していった。

「あと、ウーロン茶も一つお願いします」

注文の最後にそれを付け足して、店員が下がっていく。

「何でウーロン茶頼んだの？」

横に座っている彼女が不思議そうに尋ねてきた。

「君を送つてくために決まってるでしょ」

そう言いながら、俺の前にあつたビールを村瀬の前に滑らせる。

「えー、お前飲まないの？」

村瀬から非難めいた声があがる。

「私電車で帰るから、飲んでいいよ」

「そつもないかないよ。夜遅いんだから」

既に8時を過ぎてる。この食事が終わった頃に彼女が帰るとなると、確実に終電近くなってしまう。

「どっちにしたって最寄りの駅前から原付なんだから、送ってもらつてもあんまり意味ないよ」

だから飲んで、と彼女は俺の意見を無視して、村瀬の前に滑らせたビールを俺の前に戻してきた。

少し非難の混じった視線を彼女に向けるが、彼女は気にしていないようで、ぐいっと俺の前にビールジョッキを突き出してくる。もうこれ以上何を言っても無理だと思い、そのジョッキを受け取った。村瀬が「やった」と嬉しそうな声を出す。

「じゃあ、かんぱーい！」

村瀬が言葉とともにジョッキを軽く上げ、俺と彼女もそれにならって三人で乾杯をした。

「そういえばさ、宮瀬さんの下の名前って何ていうの？」

三人してジョッキの中のものを一口飲んだところで、村瀬が尋ねてきた。

「ああ。春希です。春に希望の希で、春希」

「へえ。じゃあ、春生まれ？」

「はい。4月生まれです」

「おおー。なんか、それっぽい名前だね」

そう言って、村瀬はビールをごくごくと飲む。今の二口目で既にビールがジョッキの半分まで減っている。

「4月生まれなんだ」

俺も軽くビールを飲みながら、横の彼女に聞く。

「うん。だからさ、入学した時とか新学期とか、友達からぜったいに祝われないんだよね」

「なんで？」

村瀬が聞いたところで、またすだれが上がり、俺が注文したものが運び込まれてくる。その時に、先ほど注文したウーロン茶も運ばれてきて、どうしようかと思っていると、彼女が何も言わずそのジョッキを自分の手元に置いた。サラダや揚げ物類がテーブルに並ぶと、村瀬は早くも二杯目のビールを注文する。

「で、なんで祝ってもらえないの？」

村瀬の再びの質問に、彼女はジュースを飲んでから口を開く。

「新学期とかって、まだあんまり誰とも仲良くないじゃないですか。それで、だいぶ日経って、友達の誕生日とかに『おめでとう』って何かあげると、『ありがとう。お返しするよ。いつ誕生日？』みたいなになって、『ごめん、もう過ぎてる』みたいになるんです」

それを聞いた村瀬は少しの間黙っていたが、すぐに大笑いをしだす。俺も彼女の隣で手で口元を押さえながら笑っていた。

「それはまた、残念だね」

「残念っていうか、あの友達との間の微妙な空気がいや」

それを聞いて、村瀬が更に笑う。彼女の方は、大笑いをする村瀬を見て笑った。

「ああ、面白かった」

村瀬はそう言いなが、料理に箸をつける。俺は彼女から遠いところにある揚げ物類を小皿に入れて渡した。彼女もそれを受け取って、「ありがと」と普通にする。すると、それを見ていた村瀬が不思議そうな顔をする。

「春希ちゃんってさ、永井の学校の学生なの？」

いつの間にか、村瀬が彼女を名前で呼ぶ。彼女もそれに慣れていなかったのか、反応するまでに少しの間があった。

「いえ。明法大です」

「え？ 明法って、隣の県のこと？」

「ああ。本キャンパスはそっちですけど、私の学部のキャンパスはもう一つ隣の県です」

村瀬はその答えに彼女ではなく、俺の方を見てくる。俺はその視線の意味が分からず、「なに？」と聞いた。

「いや、じゃあ、どうやって……」

「永井さんは週一で私のキャンパスに来てるんですよ。外部講師として」

「あ、そうなんだ」

求めていた答えを俺ではなく彼女の方から聞かされて、村瀬は気の抜けたような返事をする。

彼女はそれから料理に手を出し始めたが、村瀬はまだ何かを聞いたそうな顔をしている。俺はそれを目で制して、今日の舞台の話題を口にした。

村瀬はそれに違和感を残すような顔をしたものの、彼女の方は気付いてなく、話はそのまま舞台やドラマの話へと流れていった。

あれから話題もつきることなく、気がつけば、彼女の終電が迫る時間となっていた。

「じゃあ、私、帰ります。今、いくらくらいですか？」

彼女はそう言って、テーブルに引っかけてある伝票を指差した。

「いいよ、別に。ほとんど俺と村瀬が飲んでるんだから」

彼女の手を引っ込めてそう言うが、彼女は「そういうわけにはいかない」と首を横に振った。

「それでも、料理は食べたんだから払うよ」

「じゃあ、二千元でいいよ」

「じゃあってなに」

「料理だけだったならそんなもんだよ。君はほとんど飲んでないんだ

から」

そう言っただけで彼女の言葉を封じる。適当な料金でも言っとかないと、彼女は料金をしつかりと三等分しそうだ。別に彼女はそこまで飲んだわけじゃないし、だいたい大人二人がいるのに学生にしつかり払わすのも気持ちが良いものではない。ましてや、俺は大学教授をしてるし、村瀬は俳優だ。お金がないわけではないのだ。

彼女が準備したのを見て、俺もコートを羽織る。彼女も村瀬も『なに？』という顔をした。

「駅まで送ってくるよ。家まで送らないんだから、せめてそれくらいはさせて」

そう言えば、彼女は渋々だが頷いてくれた。村瀬に鞆を頼んで、俺は一旦彼女と店の外に出る。

店の外は、駅前ということもあってか、夜遅いというのにまだだいぶ人が多かった。みんな飲んだ後なのか、これからまだ行くのか、気分の高揚している人が多い気がする。

「別に送らなくてもいいのに」

マフラーを直しながら、彼女が言った。

「駅前なんて危ないんだから、守られるところは守られときな」

そう言つて、彼女の腕を引く。彼女の斜め前を歩いてた酔っ払いの中年の男が、ふらついて先ほどの彼女の場所に思いつきよってきた。一緒に歩いてた中年の連中は、それを見ておかしそうに笑っている。

「なるほど」

後ろで起きた出来事を見ながら、彼女が納得したように頷いた。彼女の身体は引つ張られた勢いで俺の胸に預ける形になっていた。俺が腕を放しても、彼女は俺の近くから離れない。彼女の視線の先には、酔っぱらって大声を出しているどこかの大学のサークル団体がいた。とりあえず、あれが俺の大学でないことを祈る。

「教務課の人とは、もう何もないの？」

俺がそう聞くと、彼女は俺に目を戻して「ん？」と聞き返した。そして、俺の言うことが分かったのか、「ああ」と数回頷く。

「うん。特に何もないよ。今週にまた教務課行ったら、課長みたいな人に謝られた」

「そっか。良かったね、でいいのかな？」

「うん」

彼女はそう言って、少しすっきりしたような顔つきになった。それから、自然と俺との距離をあけていく。

「あれからさ、友達にも永井さんに話したのと同じこと話したんだ。留学スペースのこととか、その前のこととか。そしたら、私の好きにしたらいいよって言うてくれた。こっちで何をするかも、どんな風に過ごすかも、自分の好きにしたらいいって」
「そうなんだ」

彼女はそのことを話しながら、自然な笑みを顔に浮かべている。きつと、その友達っていうのは、この間言っていた相談相手のことなんでしょう。たぶん、今のところ、彼女が一番に信頼している人。そして、彼女に一番近い人間。

「良い人だね、その人」

「うん。あれで彼女がいないんだから、不思議なくらいだよ」

「……彼女？」

その言葉に思わず彼女を見下ろす。

「うん。すごい優しいのにさ、今は彼女いないんだよ」
「へえ」

彼女は俺の視線に気付くことなく話を続ける。

俺は相槌を打ちながら、その相談相手のことを考えた。てつきり、相談相手というのは女の子だと思っていた。だから、彼女が一番に信頼しているのも頷けるし、その相談相手と張り合っている自分が馬鹿みたいに思えるときもあった。けれど、それが男となると自分の考えを裏返さなければならぬような気がしてきた。

「永井さん？」

「ん？」

彼女の声ではつとなる。視線は下を向いていたけど、どうやらぼーっとしていたみたいだ。彼女が怪訝な表情でこちらを見上げてきている。見れば、もう駅の正面ホームに来ていた。

「ああ。気をつけてね」

「うん」

そう言つて、彼女は人ごみの中に歩いていこうとする。彼女が完全に駅の中に入ってしまう前に声を掛けて呼び止めた。彼女が振りかえる。

「何かあったら、また言うんだよ」

そう言っと、彼女は少し呆れたように笑って、数回頷いた。

「じゃあ、家に着いたら連絡して」

「そんな心配しなくていいって」

「はいはい。文句言わないで、連絡するんだよ」

そうやって言えば、彼女はしょうがないというように笑って俺の言葉を了承した。

手を振って駅の中に入っていく彼女を見送って、俺は駅に背を向けて先ほどの店に引き返した。

「お前と彼女って、どういう関係なの？」

店に戻ってきた俺に、村瀬はそう尋ねた。

俺はコートを脱ぎながら、ちょうど来ていた店員にビールの追加を頼んで向かいの席に座る。

「別に。友達だよ」

店員がすだれを下げるのを横目に、そう答えた。それを聞いた村瀬

は、不満げな顔をする。

「彼女とは何もないよ。先週たまたま相談にのって、仲良くなったんだ」

「ただの、週一で通う大学の学生とか？」

「ああ」

村瀬の質問に嘘偽りなく答えていく。帰ってから、村瀬が彼女とのかを聞いてくることは想像していた。だから、特に慌てることもない。

「お前、気付いてないのかもしれないけど、彼女のこと相当気に掛けるぞ」

「ああ、知ってる」

そうやって答えれば、村瀬は呆然としたように口を開けて俺を見てきた。

「ちょ、え？ お前、」

「何想像してるんだよ」

馬鹿みたいに混乱している村瀬を、眉をひそめて見る。

店員がビールと村瀬が注文したらしい料理を運んできた。俺はジョッキを手にとり、ビールを飲む。

「最初に言ったように、彼女とは何もない。今日も、たまたま席が隣だっただけだ。だいたい、チケットはお前が送ってきたんだろ」
「……でも、気に掛けてるんだろ？」

その質問には、肩をすくめて答えの代わりにした。村瀬はそれを見て更に混乱したようだ。

「何なんだ。お前、どうしたいんだよ」

「さあ。彼女と知り合ってまだ一週間しか経ってないんだ。どうしたいのかもまだ分からないよ」

「……そもそも、ほんとに一週間前に知り合ったのか？」

村瀬の言葉に、少し驚く。村瀬はそんな俺の表情を見て、険しい顔つきになった。

「知り合ったのは本当に一週間前だ。ただ、俺はその前から彼女のこと知ってたけど」

「知ってたっていうのは、顔を覚えてる程度のことか？」

「いや、顔も名前も知ってた。授業の度に彼女のこと見てたから、何となくどんな子かも知ってた」

「おまえ……」

正直に今までのことを告げたことで、村瀬のショックの度合いが大

きくなったようだ。

「何やってんの」

「ほんとにな」

なぜか村瀬が情けない声を出して、視線を俺の左手に向けた。俺はそれに気付いて左手をひらひらと振ってみせる。

「万里子は何も知らないよ。それに、彼女もこのことは知ってる」
「もういい。もう何も言うな。もう聞きたくない。言うな」

子供のように両耳を両手でふさぐ村瀬。俺はそれに呆れて、ビールをまた一口飲んだ。村瀬の防御が解かれたところで、俺はまた口を開いた。

「今のところは何かしでかすつもりもないから安心しろ」
「はいはい」

村瀬もそう言って、ビールに口をつけた。

約一時間後、彼女から家に着いたとのメールが入った。
彼女は俺との距離を測りかねているものの、俺を信用してきてはいるようだ。

何かをしでかすつもりはない。俺の左手にあるもののおかげで、彼女は俺との距離を測りかねている。けれど、この左手にあるものが、彼女のメーターを計測不能にすることも可能なんじゃないかと思う。

『お帰り。また今度食事できたらいいね』

そうメールを打って、また村瀬との会話に戻った。
視界の端に、シルバーの指輪を捉えながら。

何だか、妙な感じになってきたな。

電車に揺られながら、最近の出来事を思ってそう考える。

留学スペースでキレてしまった日から、なぜか永井さんと友達と呼べる関係になつてしまった。『知り合いの先生』という程度では済まされないくらい、そこら辺の友達や学生よりも付き合いがあると思う。これが普通の先生ならまだしも、厄介なことに、永井さんは結婚している。まだまだ若手と呼べるくらいのあの人は、授業のときでさえもいつも左の薬指にシルバーの指輪をしていた。一緒に授業を受けている友達がそれを見て、「あんな人が旦那さんだったらいいよね」と言っていたのを覚えている。私も、指輪の存在を隠すことなく普通にしている永井さんを見て、『いい生活送つてるんだろうな』と思つたことがある。

けど、永井さんと仲良くなつた今は、その指輪があるからか、いまいちあの人との距離がつかめない。結婚しているということ以上に厄介なのが、永井さんが過保護ともいえるくらい私のことを気遣つてくれていることだ。こつちが気を使つて線引きしているラインを、あの人はわざと気付かない振りして簡単に超えてくる。私が考えすぎなだけかもしれないけど、永井さんは距離を測りかねている私をよそに、いとも簡単に私に近づいてきている気がする。

「考えすぎ、か」

電車の窓の外を眺めながら、ぼつりと呟いた。

それでも、よく交わすメールやたまに掛かってくる電話のことを考えると、どうしても永井さんの指に光るシルバーの指輪を考えてしまう。今日だって、授業が終わってすぐ『暇だから会おう』とメールが来て、私のお気に入りのカフェで話をしていたのだ。同じ舞台を見た次の週も、今日も。こんな風に、永井さんがうちの学校に来る金曜日は、いつも会っている。

一つ息をはいて、永井さんのことを頭から追い払った。彼氏のことや古賀さんたちとの曖昧な関係のこともあるのに、それに加えて永井さんのことまで考えたくない。

そう思ったところで、電車が駅に到着するアナウンスが車内に流れた。私は斜めにかけて鞆の紐を握って、扉の方に向かう。

今日は、バイト仲間との飲み会だ。特に何かあったわけでもないが、就職活動で忙しくなる三回生を激励するためと冬季講習に向けての力溜め等を理由に、金曜日のバイトが終わった後開かれることになっていた。金曜日にシフトを入れていない私は飲み会からみんなに合流する。バイト先も私の家から隣駅なら、飲み会場所も隣駅ということで、今日は電車を使って一駅隣まで来たのだ。

駅前の居酒屋前に行くと既に何人かがいて、私に気付いた女の先生が手を振ってくる。私も手を振り返して彼女たちの輪に加わった。

「あと何人くらい来てないの？」

「あとは中山と古賀くらいかな。二人してドンキーに捕まってる」

今日の幹事でもあるスーツ姿の男友達に聞くと、彼はにやにや笑って最後の言葉を付け足した。私もそれに笑って「災難だねえ」と返

す。

『ドンキー』というのは、私たちの塾の教室長のことだ。女の教室長なんだけど、身長に見合った体重ではなく、一度混乱を起こしてヒステリック気味に教室のカウンターを叩いていたことからこの名前がついた。たぶん、今も二人して彼女の話に付き合われているんだろう。

私は時計を見て、間に合うかなと考える。今日の開始は一応10時半ということになっているけど、今で既に10時20分を過ぎてる。基本的に私たちが飲み会を行うのは、週末のバイト終わりだ。一番最後の授業が9時半に終わって、後片付けをして、と考えるとどうしてもこの時間になる。

けど、私の心配は杞憂だったようで、それから数分しないうちに中山さんと古賀さんの二人が現れた。私は二人に手を振り、それに気付いた古賀さんが手を上げて応えてくれる。中山さんは私に簡単に「よっ」と言うと、輪の端っこで煙草を吸っていた洋くんに向かつて手加減なしにボディーブローをくらわせた。ぎりぎりで気付いた洋くんが咄嗟に身体を引くも、ほとんどが脇腹に入ったらしく、苦しそうに悶えている。

「なにになに!」

「うるさい! こっちはドンキーの相手してきて疲れてんだよ」

洋くんの反論は無視して中山さんは「早く入ろう」とみんなに先だつて店に入っていく。みんなもそろそろとそれに続いた。苦しそうにお腹をさすりながら、洋くんも店に入ってしまった。

「相変わらずだねえ、洋くんは」

「谷原サンドバッグなんだろう？」

洋くんの後ろ姿を見ながら言うと、横に立っていた古賀さんがにやっと笑いながら言った。私はそれに笑って、みんなに続いて店に入る。古賀さんもおかしそうに笑っていた。

うちの塾で一番背が高い洋くんは、講師のみんなからサンドバッグとして扱われるときがある。中山さん曰く、「腹の位置がちょうどよくて殴りやすい」とのことだ。

店に入ると、週末ということで、どこもかしこも席が埋まっていた。あちこちから笑い声やら色々な話し声が聞こえてくる。私たちは、店の一番奥に通された。

みんなが席について飲み物のオーダーをとる。

「お前、今日何で来たの？」

隣に座った古賀さんがコートを脱ぎながら尋ねてきた。

「今日は電車だよ。帰りなくなったら歩いて帰ろうかと思って」「ふーん」

私もコートを脱ぎながら答える。

私の家から塾のあるここまでは、歩いて帰っても一時間くらいだ。終電がなくなっても、いざとなれば歩いて帰ればいい。それに、もう何度かここから自分の家まで歩いて帰ったことがある。

メンバーのほとんどがビールを、ビールの苦手な私を含めた残りの数人が酎ハイやら梅酒をオーダーして飲み会が始まった。

飲み会が始まって二時間くらい経ったところ、一人の女の先生が私を見て「宮瀬っちー」と手を向かいから差し出してきた。彼女は私と同学年で同じ学校に通っている。なんだ、と思いながらもその手の上に自分の手を置いた。

「なに？」

空いた左手で何杯目かの酎ハイを飲んでいると、彼女の口からとてもない言葉が飛び出た。

「宮瀬っちさ、この間学校の駐輪場で何か男の人と仲良さそうにしてたじゃん。あれってさ、演劇学の先生でしょー？」

酔っているからか、えらく間延びした喋り方をしていたけど、その言葉は私と彼女の周りの人間にはばっちり聞こえていたようだ。

「え？ お前、ついに浮気か？」

「先生ってどういうこと？」

彼女の言葉に、思わず口の中に含んでいた酎ハイを吹き出しそうになる。『演劇学の先生』が誰かを知っている古賀さんが、隣で私の代わりのようにむせていた。

周りで勝手に盛り上がる友達に手を振って意義を唱える。

「違うよ。たまたま駐輪場で会って、喋ってただけだって」

「えー。それにしてもめっちゃ仲良さそうだったじゃない」

『じゃーん』じゃないよ。思わずそんな気持ちを込めて彼女を見てしまった。彼女は邪気のないような顔ですっとにこにこ笑っている。私の周りの人間は、面白そうににやにやと笑っている。

彼女の言っていることは、たぶん先週のことだ。メールで連絡が来たすぐ後に駐輪場で永井さんと会って、二人して笑っていたのだ。にやにやと笑う人間の顔ぶれを見ると、その中に洋くんの顔もあった。洋くんは『演劇学の先生』が永井さんとまでは知らないけど、私のメールしている学校の先生がその『演劇学の先生』であることは何となく感づいたのだろう。横を見れば、古賀さんが我関せずといった顔でビールをちびちびと飲んでいた。

「ほんとに何でもなくて。この間たまたま外で会って、そのこと話してただけだから」

「外で会ったのか?！」

周りの人間が更にヒートアップする。

ああ、もう。余計なこと言わなきゃよかった。バイトの仲間がここまで私のこういう話に突っ込んでくるのは、私と彼氏との現在のこ

たごたを知っているからだ。

永井さんと外で会ったこと——舞台のときに会ったことは古賀さんにも言っていないくて、古賀さんもみんなと同じように隣で『そうなの？』という顔をしていた。

「ほんとに何にもないですー。みんなが考えるようなロマンチックなことは何にもありません。残念でしたー」

そうやって両手を交差してこの話を終わらせる。周りにいた全員が「えー」と不満の声を漏らした。そんな不満の声は無視して、耐八イを一口飲む。

男の方は何も言う気のない私を見てこの話に興味を無くしたけど、女の先生たちはそうじゃなかった。私と同学年の先生二人と一つ下の先生一人が、私と永井さんを見たと言った先生に話を聞きに行っている。というか、その女の先生が私の目の前だから、自然と他の先生も私と彼女の周りに集まってきた。

「その先生ってどんな人？」

「えー。何か普段は普通な感じだけど、笑った顔がかわいいかもー」

その言葉で周りにいた女の先生たちが「きゃあ」と声をあげた。言った本人が「ねー」と私に同意を求めてくる。私はそれに曖昧に首を傾げて答えた。

「それでー。授業で演劇のDVD見るんだけど、その時にあの教授

が座る端っこの教壇で頼杖しながら見てるのがかつこいいの」
「えー！」

今度は言った本人も周りの女の先生と同じに興奮している。私を除く女の先生たちだけが、高校生のような雰囲気になっている。

私の方は、そこまでよく見てる彼女の方にびっくりだ。私はもう輪には入らずにただ黙々と酎ハイを飲む。

「あ！ でもね、先生って結婚してるんだよー。薬指に指輪してたもん」

「えー！ じゃあ、不倫？」

女の先生の悲鳴と共に、私は思いつきりむせてしまった。隣を見れば、古賀さんも同じようにむせている。そういえば、古賀さんに永井さんが結婚してるってこと、言ってなかったな。

「宮瀬先生、不倫してるんですか？」

「してないから！」

一つ下の先生が本気で心配したように聞いてくる。私はそれに手をかざして否定した。だいたい、何にもないって言ってるのに、どうして付き合ってることになる。

私が否定すると、みんな「なんだー」と言っただけが残念だった。そして、話は永井さんのことから付き合うなら年上がいいか年下がいいかはたまた既婚者の人はやっぱり何割か増しかつこよく見えるとい

う話へと流れていった。

『不倫』と言われて変に緊張してしまった私は、落ち着くために今度は黙々と料理を食べ始めた。むせていたのが落ち着いた古賀さんは「ちよつとトイレ」と言つて、席を立った。

少しして私もトイレがしたくなって立ちあがつてトイレへと向かう。

座敷の席を出て、いくつかのテーブル席の間を歩いていくと、入口付近にトイレのマークがあるのが見えた。せわしく動いている店員を避けながらそこへと向かう。少し頭の中が回ってる気がするから、これは飲み会が終わる頃にはだいぶ酔ってるかもしれない。そんなこと考えながらホールを抜けて、あとは短い廊下を進むだけだというところで、向かいから歩いてくる人と思いつきり肩がぶつかってしまった。

「すみません」

「あ、すみません」

ぶつかった人から一歩下がって謝る。向こうからも謝罪の言葉が聞こえて顔を上げると、私は驚きで目を点にしてしまった。私の目の前に立つ人も同じように驚いている。

目の前に立つ人を見て、酔いが一気に醒めていく感じがする。

「な、なにやってんの？　ここで」

「君こそ、何やってるの？」

珍しく私の目の前に立つ人も——永井さんも、私と同じように混乱している。

「今日、飲み会だって言っただじゃん」

「え、ここで？」

「うん」

夕方に会ったときに飲み会のことを話していたので、永井さんも今日のことは知っている。ただ、場所がことは知らなかったのだけだ。

「ていうか、永井さんがここで何してんの？」

私は、たぶん、この場で最もな質問をした。永井さんとは、いつも

の大学の近くの商業施設で別れたし、永井さんの家は二つ隣の県だ。私には、今永井さんがここにいる理由がまったく見当もつかない。

「いや。君と別れたあと、あそこで知り合いの教授に会って、一緒に飲まないかって誘われたんだ。他にも何人か来るからって言われて」

「あ、そうなんだ」

永井さんの言葉に納得して何回か頷く。納得したものの、こんなところで会うとは思ってなかったから、未だに混乱が抜けきらない。さっきまで永井さんが話題に挙がっていたんだから余計にだ。

永井さんの方はだいぶ気持ちが落ち着いたらしく、今はいつも通りの表情になっている。代わりに、今度は少し眉をひそめて私を見下ろしてきた。そして、手の甲を私の頬にそっと当てる。

「だいぶ飲んだでしょ？」

「え？ あ、そう、かも」

「かもじゃなくて、飲んでるよ。顔が熱い」

言われて、触れられていない方の頬に自分の手を当てる。確かに、少し熱いかもしれない。

永井さんは私の頬から手を離して呆れたように息をついた。

「自覚してないなら少しペース落としなよ？」

「うん」

また、だ。永井さんはこんな風に、私との距離を詰めてくる。過保護にも思えるこの気遣いが、物理的にも精神的にも、永井さんとの距離を狭めている気がした。

永井さんの言葉に頷きながら、気付かれないように視線を永井さんから外す。

「宮瀬？ 何やってんだ？」

そろそろこの場から離れようと思ったとき、永井さんの後ろから古賀さんの声が聞こえた。永井さんが少し脇にどいて、私から古賀さんを見えるようにしてくれる。

「え？ 別に？ トイレ行こうと思って」

「ふーん」

古賀さんは私の言葉に相槌を打って、私の近くまで来る。永井さんの隣まで来て、ちらつと永井さんのことを見たけど、特に何をするでもなく「どうも」とだけ言ってホールの方へと戻っていった。

「バイトの人？」

「うん」

永井さんの言葉に頷くと、永井さんは「そつか」と言つて古賀さんが歩いていったホールの方を見ていた。けれど、それも少しの間だけで、すぐに私の方に向き直る。

「じゃあね。ちゃんと気をつけて飲むんだよ」
「分かった」

そう言つて、永井さんは自分の席へと戻つていった。せつかく、今日はもう何も考えないでいようと思つていたのに、早い段階でその思いも壊されてしまった。それでも、これ以上はもう何もないだろうと考えなおして、当初の目的のトイレに向かうことにした。

トイレから戻つてくると、既に酔いの回っているメンバーが何人かいた。永井さんのことで騒いでいた女の先生のうち一人が、耐ハイのジョッキを片手に他の先生と彼氏との愚痴を言っている。男の方を見れば、唯一彼女がいる男の先生に向かってぎゃあぎゃああと何やら文句を言っていた。

自分の席に戻り、残っていた酎ハイを一気に飲む。ちょうど来ていた店員さんに今と同じものを頼んで、後ろの壁に寄りかかった。

「さっきの人、永井さん？」

壁に寄りかかつて携帯をチェックしていると、隣から古賀さんが尋ねてくる。

「うん、そうだよ。何か、学校帰りに知り合いに会ったらしくて、連れて来られたんだって」

「へえ」

古賀さんは適当に相槌を打ちながら、料理を口に運ぶ。私も何か食べようと携帯を置いて、箸を手にとった。目の前にあった揚げ物類に箸をつけた時、テーブルに置いたばかりの携帯のバイブが振動した。テーブルの振動に気付いた周りの何人かが私の携帯を見るも、ほとんどがすぐに自分たちの会話に戻った。携帯は私と古賀さんの間に置かれていて、私は手にとった揚げ物を小皿に移してから携帯の画面を覗き込んだ。古賀さんも同じように、ちらっと私の携帯を見ている。画面に表示されている番号を見た瞬間、反射的にぱんつと手で画面を覆ってしまった。その行動に驚いた何人かが、どうしたというようにこちらを見てくる。

「何でもない」

周りの人にそう言いながら、携帯を手にしち上がろうとした。が、酔いが回ったのか、立ち上がる途中で思いつきよろけてしまい、古賀さんの方に倒れ込んでしまう。古賀さんが慌てたように私を受け止めてくれた。

「おい、大丈夫か？」

「うん。ちょっと、電話してくる」

周りの、特に女の先生たちが心配そうに私を見てきたが、私は何ともないというように笑ってその場を立った。

酔いの回る頭でホールをなるだけ急いで突っ切る。さっき永井さんと話した場所も通り過ぎて、その先にある透明のドアを開いた。その先は階段になっていて、上に行けば別の店へと、下に行く和外に出れるようになっていて。私はその踊り場に出て未だに鳴り続けている携帯の通話ボタンを押した。

「もしもし？」

『あ、春希？ 俺だけど……』

その声を聞いて、思わず溜め息が出そうになるのをぐっところえた。電話の相手は、地球の向こう側にいる彼氏からだ。今日は飲み会があるから電話できないとあらかじめ言っておいたのに。

「なに？」

元から電話は好きじゃない。彼氏の今の近況を聞いたって、楽しいわけでもないんだから、電話も楽しく続くわけがない。それに、今日できない理由も伝えてある。それなのに、それくらいの約束も守ってくれない電話の向こうの彼氏に苛立って、それが口調にも表れてしまう。

『いや、今大丈夫かなと思って……』

「今日は飲み会だからできないって言った」
『そうだけど……』

そうだけでも何もない。できないものはできないし、それ以上に電話なんかしたくない。

入り口のドアの横にある壁に寄りかかって、電話を持っていない方の手で額を押さえた。急いで来たからか、頭の中がぐるぐるする。

『最近、ぜんぜん電話してくれないじゃん』

「……前にしたくないって言ったし、その理由も言ったよね」

『でも、俺はしたいし。春希の声が聞けなくてさみしいよ』

『じゃあ、留学なんか行かなければよかった』。そんな言葉が出そうになるのを頑張ってこらえる。何がさみしいだ。人が頑張っていたものを『残念だったね』とだけ言い、自分はちゃっかり私の夢を自分のもののようにして言って勝手に行ってしまい、拳句の果てに『さみしい』だなんて。意味が分からない。

いらいらを抑えようと、こめかみを指でぐーっと押す。

「とにかく、今は無理」

『まだ飲み会なの？』

彼氏の非難めいた言葉に、更にいらっとする。

「まだ始まったばかりだよ。誰かがバーに行ったりするのと同じで、私も飲み会ぐらいあるの」

『俺はみんなが連れてってくれたから……』

「私も、みんなが気を使って誘ってくれる。いちいち私がどこに行くかで文句言わないで」

自分では最大限に苛立ちを抑えたつもりだった。それでも、言葉の節々に苛立ちが混じっていることが、自分でも分かる。おそらく、彼氏にも分かっただろう。彼氏はしばらく黙ったあと、『分かった』と言って電話を終わらせた。

私も携帯のボタンを押して、通話を断ち切る。そのまま、携帯を両手で持ってゆっくりとその場にしゃがんだ。顔を両腕の間に伏せる。もう嫌だ。何でもこんな時に限って電話なんて来るんだろ。楽しい時間のはずが、一気に冷めた気分になる。何で分かってくれないんだろ。今は電話も、メールもしたくない。連絡なんて取り合いたくない。黙って何もないようにこの期間が過ぎてほしい。連絡があるたびに、行けたはずの自分の夢を思い出す。そして、やっぱり行けなかったんだという今の自分を見て、どうしようもない気分になるんだ。

ずっと顔を伏せてそんなことを考える。もう少ししたら、さっきのように戻る。そう自分に言い聞かせた。

けど、そんな考えを壊すかのようにドアが勢いよく開かれる音がした。

「大丈夫？」

私が顔を上げるより早く、永井さんの声が聞こえてきた。ゆっくり

顔を上げると、そこには心配したような顔の永井さんが立っていた。

「うん、大丈夫」

私は大きく息をついて立ち上がり、そう答える。永井さんが近付いてきて、ぎゅっと眉を寄せて私を見下ろす。

「大丈夫じゃないでしょ。そんな泣きそうな顔して」

「まあ、うん。そうだけど、大丈夫だよ」

曖昧に笑って答えると、永井さんの顔が更に険しくなった。そして、私の手に握られた携帯に目をやった。

「電話？」

「うん。ちょっとね」

だめだ。今は会話する余裕なんてない。酔いが回ってるし、さっきの電話でいらいらしてるし、早く席に戻ってしまいたい。けど、永井さんはそれを分かっているかのように、私とドアの間に立って行く手を阻んでいる。そして、私の方をじっと見ろしている。止めてほしい。今はこれ以上混乱したくない。

「宮瀬？　大丈夫か？」

私が永井さんの視線に目を彷徨わせていると、永井さんの後ろのドアから古賀さんが顔を出してきた。

「古賀さん、」

古賀さんの顔を見た瞬間、自分でも分かるくらい身体の力が抜けた。永井さんも振りかえっていて、古賀さんの方を向いている。古賀さんは永井さんの顔を見たあと、私の方を見て、それから私の携帯に視線を移した。

「ごめん、古賀さん。ちょっと、下行ってくるから、みんなに言っ
といて」

そう言って肩をすくめると、古賀さんは一瞬だけ眉をひそめた。

「すぐに行くから、下のベンチで待ってろ」
「……うん」

私が頷くのを見て、古賀さんはすぐに店の中に引き返した。永井さんを見上げると、永井さんも私の方に視線を戻していて、じつとこちらを見ている。私はそれに曖昧に笑って「ごめん」とだけ言い、階段を下りていった。

今日飲み会をやった居酒屋はビルの二階に入っていて、一階には不動産屋がある。そして、そのビルの前には駅のバスターミナルがあって、歩道にはバス停前とビルの近くにベンチがいくつもあった。このビルにも、不動産屋の目の前にベンチがある。私はそのうちの一つに両手を伸ばした足の上に放りだすようにして座った。手に持っていた携帯を見ると、既に日付が変わっている。

「ほら」

横から古賀さんの声が聞こえて、コートを差し出される。古賀さんもコートを着ていて、私の隣に座った。私は自分のコートを受け取るとそれに袖を通す。携帯はコートのポケットに入れた。

古賀さんは隣に座ったけど、特に何かを言うわけでもなく、ただ黙っている。特にそれが嫌だとは思わない。こんな風に古賀さんとの間に沈黙が流れることは珍しいことでもないし、何も言わないでもそばにいてくれるということがありがたかった。

「電話、できないって言ったんだけどね。今日は」

「もともとそんなこと守ってくれるような奴だったわけ？」

古賀さんの言葉に乾いた笑いが漏れる。ほんとに、古賀さんの言う

通りだ。しっかりと理由を言っても、それを納得してくれることなど、あつちはほとんどしてくれない。古賀さんはよく分かつてる。

「……意味分かんないよね。勝手に行ったのはあつちなのにさ、さみしいとか」

「ごめん。俺の中でお前の彼氏は既に意味の分からない人間になつてゐるから、むしろその言動に納得しちゃうんだけど」

その言葉に笑ってしまう。古賀さんも自分の言葉に笑いながら、私の方を見た。

こうやって古賀さんに話して笑っていると、自分の中の苦しい部分が少しずつ楽になっていく。さっきまで固くなっていた身体の力が、どんどんと抜けていく気がする。

「お前、明日も電話掛かってくるんじゃない？」

「そーだよー。やだなあ」

「明日遅刻したら映画代お前持ちだからな」

「え、何それ」

古賀さんの方を向くと、古賀さんはにやにやとした笑みを浮かべて私の方を見ていた。

「今度はちゃんと切るから大丈夫」

「いや、絶対無理だって」

古賀さんのにやにや笑いは消えることなく、私の方を見ていた。

明日は、というか既に今日なんだけど、古賀さんと洋くんとかで映画を観に行く約束をしていた。映画の時間は夕方か夜なんだけど、どうせ洋くんの家には夕方集合だ。古賀さんのにやにやの原因は、以前のことを思い出しているからだろう。前に一度映画の約束をしていた時に、彼氏から電話が掛かってきたことがあった。昼過ぎに電話が掛かってきて、約束があると言ったのに結局二時間以上電話が続き、約束の時間に遅れたことがあったのだ。遅れた理由を古賀さんたちに話すと、それは面白そうに笑っていた。電話の半分くらいが無言だったと言うと、二人はお腹を抱えて笑ったものだ。

そんなことを思い出して、私も自然と笑ってしまう。

何なんだろう。ついさっきまで、自分の現状を見て泣きそうになっていたのに、もうそんなことどうでもよくなっている。行けなかったことは悔しいけど、それならこっちで自分の出来ることを最大限にやって他の人に認めてもらえばいいと、今は思える。実際、何人かの先生たちには良い評価を貰っているのだ。

特に何かを話したわけではないのに、古賀さんと話ただけで自分の気持ちが上向いていくのが分かった。

「自分も飲みに行くくせに、何で文句言うんだらうね」

「いや、まあ。今までの話聞いてたら、まったく不思議じゃないけどな」

笑って言う古賀さんを見て、私も笑った。

こうやって、古賀さんは常に私の味方でいてくれる。何かアドバイスをするわけでもなく、かといって変に慰めるわけでもない。ただ、味方になって同調してくれる。それが、今の私には救いで、必要な

もので、嬉しかった。

「あーあ。あほらしい。電話したら雰囲気悪くなるって分かってんのに、何でするかな」

「『さみしい』んだろ」

「あー、もう。それがむかつくよね」

こんな理不尽のような愚痴を聞いても、古賀さんは笑って流してくれる。もう、さっきの電話のことなんて、どうでもよくなっていた。

「上、戻るか」

「うん」

古賀さんの言葉に頷いて立ち上がったところで、ビルの階段から何人かの人を下りてきた。二人してその団体を眺めていると、その人たちは互いに「どーもどーも」と挨拶をして、それぞれ駅やタクシー乗り場に歩いていく。その中に、一人だけこちらに気付いた人がいた。永井さんだ。

永井さんは私たちを見つけると、周りの人たちに挨拶をして、こちらに向かって歩いてくる。古賀さんもそれに気付いて、私の方を見た。

「先戻るな」

「うん。ありがとう」

お礼を言つと、古賀さんは何でもないというように「おう」とだけ言つて、立ち上がった。そしてこちらに歩いてきた永井さんと会釈を交わすと、ビルの中に戻つていった。

永井さんは私の斜め前に立つて、こちらを心配そうに見下ろしていた。

「さつきは、ごめんね。心配してくれたのに、あんな態度とつて」

「いいよ。今はもう大丈夫？」

「うん。すつきりした」

「そっか」

私の答えを聞くと、永井さんは安心したように微笑んだ。それから、自分の腕時計に目をやって、もう一度私を見る。

「何時くらいに終わりそう？」

「えー。何時だろ。分かんないな。なんで？」

永井さんの質問に首をひねつて考えるも、いつ終わるかなんて分からない。飲み放題等の時間は90分だけど、もうこんな時間だから、基本的に店には何時までいても大丈夫だろう。

「俺、今日は飲んでないから、帰り送つていつてあげるよ。どうせもう終電ないでしょ？」

「え、いいよ。何時に終わるかも分かんないんだから」

「どこかで待つよ。まさか歩いて帰るつもりじゃないよね」

歩いて帰るつもりでした。そんなこと言えるわけもなく、視線を不自然に逸らせてしまった。

「え、歩いて帰るつもりだったの？」

永井さんが少し驚いたように聞いてくる。私はそれに肩をすくめて答えた。永井さんが呆れたように溜め息をついている。

「やめてよ。危ないんだから」

「大丈夫だって。今までも何回か歩いて帰ったことあるし、それに、終わってから誰かんちに行くかもしれないから」

それでも、永井さんは首を縦には振らなかった。今度は私が呆れて最終手段に出ることにする。

「永井さんだって、もう日付変わってるんだから、早く帰った方がいいよ。今日は、いきなり誘われたんでしょ？」

そう言えば、永井さんは少し責めるような目でこちらを見てきたものの、大きな溜め息をついて「分かったよ」と頷いた。

「でも、一人で帰ることはしないでね。あと、飲みすぎないように」
「分かった」

私が返事をする、永井さんはまだ少し何か言いたげだったが、もう何も言わなかった。

「じゃあ、来週にね」

「うん、ばいばい」

永井さんに手を振って別れると、永井さんも振り返ってくれて、駅前の駐車場へと歩いていった。私は永井さんがそちらの方向に行ったのを見て、自分も中に戻ろうと席を立つ。

中に戻ると、もうけっこうな人数が酔っぱらっていた。女の先生が私を見つけると、「宮瀬せんせい」と抱きついてくる。そして、永井さんのことを話題に出した。

「学校の先生と喋ってたんでしょ？ やっぱり不倫だー」
「違うって」

その先生を受け止めながら、近くの空いた場所に腰を下ろす。斜め向かいに座っていた古賀さんと目が合ったけど、古賀さんはすぐに逸らしてしまった。こいつか。永井さんのこと言ったのは。

でも、すぐにそれは古賀さんが私に気を使ってくれたんだと理解す

る。永井さんのことを話題にすれば、彼氏との電話のことをみんなに言わなくてもいい。永井さんと彼氏との電話だったら、断然永井さんのことの方が話しやすかった。

「飲みすぎないでねって注意されたんだよ」
「いやー！ 注意だって！」

もう何を言っても、女の先生たちはあらぬ方向へと想像が進んでいつてしまうようで、永井さんのことを口にするたびにきやあきやあと興奮した悲鳴をあげた。

それでも、こんな風にみんなと楽しくやっていたいけば、自分の嫌なことは忘れられた。

「ばいばーい」

夜中の2時、ようやく飲み会が終了した。それぞれ自分の家に帰っていく人や、連れだつて洋くんの家へと向かう人もいた。私もいつもは洋くんの家に行ったりもするんだけど、今日はもうそんな力も残っていない。早く家に帰つて、ベッドに横になりたい。

私は途中まで洋くんの家に向かう人たちと一緒に歩いていき、洋くんの家の近くでその人たちと別れた。古賀さんが気を使って私を送ると言い、二人して並んでバイパス道路沿いの歩道を歩く。

「別に送ってもらわなくてもよかったのに」

横を歩く古賀さんにそう言つと、古賀さんはちらつと私の方を見ただけで、またすぐに前を向いてしまった。

「日付変わってるんだから、さすがに危ないだろ」
「でも、遠回りじゃん、古賀さん」

古賀さんの家は、塾のある駅前から自転車で30分程のところにある。私の家は塾から駅一つ隣なので、そこから古賀さんが帰るとなると、だいぶ時間が掛かってしまう。それに、私は歩きだけど、古賀さんは自転車であつて来たのだ。いくら危ないといっても、一時間無駄に歩かせてしまうのは申し訳ない。

「別にいいって。地元なんだからこの辺はよく漕いでたんだし、お前今日けっこう酔ってるだろ」

「んー、まあ」

古賀さんの言葉に曖昧に答えると、古賀さんはまた私を一瞥して前を見る。

ほんととは、『まあ』なんて言葉じゃ済まないほど酔ってると思う。実際、今歩いているのだからってまっすぐ歩くようにかなり気を使ってるんだから。たぶん、古賀さんはそれに気がついてるんだろう。バイパス道路といつても、もうこの時間には車もあんまり通ってなくて、たまにトラックなんかが通るくらいだ。それ以外は意外にも静かで、自転車のタイヤが回る音がよく聞こえる。空気も冷たいが、アルコールで熱くなった顔にはちょうどいい。

「永井さんって、結婚してるのな」

横を歩いていた永井さんが、出し抜けにそう言った。

「うん」

「知ってたのか？」

「うん。だって、指輪してるし」

両手をコートのポケットに入れて、前を見ながら歩く。

「何か変に仲良くなっちゃってさ、正直どうしたらいいか分かんないんだよね」

「まあ、お前が気にすることないんじゃない？」

「そうなんだけど、ね」

そうなんだけど、やっぱりあの人の距離は測りかねてしまう。どうも、事が事だけに、自分が気にしていることを相手が気にしていないということに、違和感を覚えているみたいだ。まあ、私が気にしすぎなだけかもしれないけど。

「良い人っぽかったじゃん」

「うん。良い人だよ」

良すぎるくらいにね。そう思いながら、古賀さんの言葉に頷く。もし、さっきの永井さんの言葉やこの間会ったときのことを言ったら、古賀さんはどんな反応をするだろう。私と同じように、永井さんとの距離を考えてくれるだろうか。それとも、気にしすぎと云うだろうか。分からない。古賀さんに永井さんのことを言えば、一緒のなって考えてくれるだろうとは思っけど、今はそれを言う気には

なれなかった。自分でもよく分かっていないのに、その答えを古賀さんに求めるのは、何か違う気がするのだ。

「さつきさ、」

前を見ながらぼーっと考えていると、古賀さんが口を開いた。何だろうと思っ、古賀さんの方を見る。古賀さんは、前を向いたままだった。

「藤田さんに、友達紹介してあげるって言われた」

「友達？」

「うん。藤田さんの」

それを聞いて「へえ」と関心を持った。

藤田さんというのは、うちの塾の女の先生で、さつきの飲み会でもみんなと一緒にあって永井さんの話で盛り上がっていた。とても女の子らしい人で、一応彼氏もいるらしい。その藤田さんの『友達』を紹介されるということは、つまり、女の子を紹介されるということだろう。

「良かったじゃん」

「んー。いいのかなあ。俺、あんまりメールとか好きじゃないんだけど」

「頑張れ」

そう言うと、古賀さんは「んー」と首を傾げて考える様子を見せた。古賀さんは、良い人だ。それに、好青年という感じで、女の子受けも悪くないと思う。たぶん、女の子の話もしっかり聞いてくれる人だ。ただ、連絡を取り合うことが好きじゃない。まったくしないというわけじゃなくて、『しないといけない』という気持ちは持つてるから、メールも電話もするんだけど、本当はあまりそれが好きじゃないらしい。そして、それ以上に、面倒くさがりだ。自分の勉強を優先させたいという人だから、『正直な話、遊ぶのは月に一回とかでいい』と前にはつきりと言っていた。

「いいじゃん。紹介してもらえば」
「でもなあ……」

常々私に『女の子を紹介しろ』と言っているくせに、いざとなったら面倒くさがが出てくるらしい。未だに古賀さんは首をひねって考えている。

私は、紹介してもらえばいいと思う。古賀さんは良い人なんだし、何だかもつたいない気がする。ただ、古賀さんがもし誰かと付き合うとなると、今まで通りな関係でいることは無理だろうなとも思うし、それはそれで、少し嫌だった。もし、今古賀さんがいなくなってしまうたら、何かあったときにきつと立ち直れないと思う。自分勝手な考えだけれど、それはどうしても避けたいことだ。それでも古賀さんが誰かを好きになるのは全然構わないし、私にそれを止める権利がないことも分かっている。

「まあ、古賀さんの好きにしたらいいじゃん。連絡来たら来たで、

その時考えなよ」
「だよなあ」

古賀さんはそう言って開き直ったように頷いた。そんな古賀さんを見て、思わず笑ってしまふ。古賀さんもそれに気付いたのか、私の方を見て「なんだよ」と笑った。

「別に」

笑ったままそう返すと、古賀さんは私を鼻で笑ったけど、その顔は楽しそうだった。

そんな風に何でもない、とりとめのない話をしながら家路に着いた。

ゆっくり一時間ほど歩いて、私の家のマンションにたどり着いた。外から見えるどの窓も、明かりが消えている。

「ありがとう」
「おう」

古賀さんにお礼を言って玄關の方に行こうとしたら、古賀さんから呼びとめられた。

「なに？」

古賀さんは自転車を止めることはせずに、ハンドルを握ったまま私の方を向いている。私は首を傾げて古賀さんを見た。

「また何かあったら、言えよ？　話くらいは聞くから」

やっぱり、古賀さんは優しい。さっきの電話でへこんでいたことを気にしてくれている。

「うん」

私の返事を聞いた古賀さんは満足したように頷き、「じゃあ」と言っ
て自転車にまたがった。

「明日遅刻すんなよ」

「古賀さんもね」

二人して手を振りあってさよならをする。古賀さんが曲がり角を曲がったのを見送って、私はマンションの中へと入っていった。

五階にある自分の部屋に上がって、ベッドの上に鞆を放り投げる。時計を見ると、もう3時を過ぎていた。今からシャワーを浴びることに若干気が引けたけど、身体にまとわりつく煙草なんかのにおいが嫌で、結局入ることにした。

シャワーを頭からかぶりながら、帰り道で聞いた古賀さんの言葉を思い出す。

「古賀さんに彼女、か」

一人呟きながら、もし古賀さんに彼女ができたらということを考えてた。それが現実に残れば、私はもう古賀さんの近くにはいられないだろう。私や古賀さんが気にしなくても、古賀さんの彼女が気にすると思う。

私や古賀さんは、自分たちが周りの定義から少しずれていることをしっかりと認識している。こんな風に付き合うのは、自分たちでは何とも思っていないけど、それが周りから見れば少し奇異なことも分かっていく。中には気にしない人たちもいるけど、そんなのはごく少数だ。

だから、きっと古賀さんに彼女ができれば、二人とも何となく距離を置くことになるだろう。それは、私の彼氏がこっちに帰ってきたときも同じだと思う。私はそれが嫌だった。この居心地のいい関係を壊したくなかった。もし古賀さんが誰かと付き合うことになったら、私は誰を頼ればいいんだろう。

そこまで考えて、永井さんのことが思い浮かんだ。あの人も、知らないうちに私のことをよく知る人になってしまっている。性格とか好みとか、そういう私自身に関することじゃなくて、私が腹を立てていることや悩んでいることをあの人は知っている。そんなこと、

私の友達にだって一人くらいにしか話していないのに。今では、永井さんに頼ることも少しはある。話も合うし、喋っていて楽しいと思える。私のことを察してくれる。ただ、それでも、私は今日みたいなことが起こると、他の誰でもない古賀さんを求めてしまう。話すか話さないかは別として、何か起こってどうしようもなく腹が立ったり、パニックになったりすると、まず一番初めに古賀さんのことを思い出す。

そう思うのは、古賀さんとの付き合いが長いということもあるし、古賀さんと私が似ているということもある。そして、たぶんこれが一番の根底にあるんだけど、古賀さんはいつだって私の味方でいてくれる。それが、私には心強かった。

それに、と思う。永井さんは結婚もしている。永井さんに助けを求めようとしても、どこかであの指輪のことを考えてしまつて、自分にストップをかけてしまう。考えすぎかもしれないけど、そこは考えるに越したことはない。

それでも、もし古賀さんとの関係が遠ざかってしまったら、私は結局永井さんに助けを求めるんだろう。それがひきょうだということも、もちろん分かった上で。

そんな起こるか起きないか分からないことを考えている自分に気付いて、馬鹿みたいだと笑つて、シャワーのコックをひねった。

Side K

今日、初めて、宮瀬のいう『永井さん』と会った。

『会った』というか、『見た』というか。お互いそんなに言葉も交わしていないんだから、『会った』というのは少し変かもしれないけど、確実に『見た』ではないと思う。

大学の先生だという割には、だいぶ若く見えたし、実際若いんだろう。飲み会の最中「かつこいいのー！」と騒いでいた同僚の言葉も、あながち間違いではないと思う。研究者だと言われれば、確かにそうかもしれないけど、何というかオタク的な研究者ではない。見た目好青年の永井さんが何かに真面目に取り組んでる姿は、きっと女の人の目を引くだろう。ほんの少し顔を合わせたんだけど、なんとなくそんな予想がついた。

それでもって、永井さんが、友達という枠を超えようと宮瀬のことを気遣っているんだろうなって、なんとなくそんな気がした。

宮瀬が電話をしにいつてから少しして、店の入り口の方に誰かが歩いていくのが見えた。たぶん、あれは永井さんだ。さっき、トイレの前らへんで見たから間違いない。

宮瀬の電話は、きつと彼氏からだろう。ちらっと見た携帯には相手の名前は出ておらず、番号だけが表示されていた。彼氏がただ現地の友達と連絡を取り合いたいからという理由だけで学校側に無理を言って携帯を購入したという話を、前に宮瀬から聞いたことがある。

それもどうかと思ったけど、それ以上にちょっとなと思ったのは、携帯を購入した理由を宮瀬と話したいからと言っていたらしいことだ。連絡を取り合いたいなら、メールかPCでのテレビ電話もできる。まあ、宮瀬はそのどっちも拒否したらしいけど。それでも、携帯以外にも連絡をとる方法はあるのに購入したってことは、結局のところ自分が現地の友達と交流したいからだろうということは、俺にも想像がついた。それなのに押しつけがましく

『買ったんだから電話しよう』と言う彼氏に、宮瀬はだいぶ腹を立てていた。

何にしても、今あった彼氏からの電話はすばらしくタイミングが悪い。あの宮瀬の動揺っぷりがそれを表している。きっと、宮瀬のことだから、飲み会があるから電話はできないと前もって伝えてあるはずだ。それを、彼氏が守るかどうかは別として。

何となく嫌な予感がして、俺も席を立つ。周りは騒いでいるから、俺一人が席を立ったってどうってことないだろう。

入り口の近くまで行くと、透明のドアの向こうに誰かが立っているのが見えた。永井さんだろう。それでも俺は永井さんがいることを無視して、ドアを押しあけた。

案の定、そこには決して大丈夫とはいえない様子の宮瀬が立っていた。永井さんがこちらを見ているけど、今はそれどころじゃない。

「すぐ行くから、下のベンチで待ってる」

外へ出るという宮瀬にそう告げて、宮瀬が頷くのを見てから、俺はドアを閉めて席に引き返した。

「宮瀬が酔ったから、下行って酔い醒ましてくる」

メンバーの中で一番まともそうなやつに伝えて、俺と宮瀬の分のコートを持ってさっきの場所に戻った。途中、トイレの前らへんで永井さんとすれ違い、あっちが俺のことを見てきた。

「彼女、大丈夫かな」

「たぶん。今は少し混乱してるだろうけど、そのうち元に戻ります」

それだけ言う与会釈をして店のドアを開いた。

宮瀬はぼけつとベンチに座って、携帯を見ていた。コートを手渡すと携帯をポケットに入れて、またぼーっとする。隣に座った俺も、何も言わずにぼんやりと駅前のターミナルを眺めていた。こうやって、宮瀬に何かあっても自分からは聞かない。宮瀬が話したくなったら話せばいいと思ってるし、宮瀬もその方が楽だろうと思う。そうしているうちに、宮瀬が少し泣きそうな声で話した。俺はそれにアドバイスをするでもなく、慰めの言葉をかけるでもなく、普通に会話をする。

もう何度も宮瀬から彼氏の話を聞いていて、宮瀬の彼氏がどんな奴かだいたいの想像はついている。詳細は違うけど、宮瀬の夢を横からかつさらったような形になっていて、それを元から自分の夢だというように言い、勝手なまでの『さみしい』アピール。正直いえば、よく付き合ってられるなとも思うけど、今が今だけに宮瀬も決断しかねてるのかもしれない。

話すうちに、宮瀬の顔が段々とすっきりしていくのが分かる。以前にあった集合に遅刻した話を出すと、宮瀬はおかしそうに笑っている。そうして、話が一息つく頃には、宮瀬の混乱もだいたい取り除け

たようだった。

「上、戻るか」

そう言っただけで立ち上がると、宮瀬も立ち上がろうとしたが、その途中で店の方から団体客が出てきて、そちらの方に氣をとられていた。俺もそっちを見ると、その中の一人がこっちに向かって歩いてきている。永井さんだった。

「先戻るな」

「うん。ありがとう」

宮瀬の言葉に「おう」とだけ答えて中へと戻る。ビルの中に入る前に後ろを振り向けば、永井さんが心配げな顔で宮瀬を見下ろしているのが目に入った。

席へ戻ると、何人かの女の先生が宮瀬の様子を心配していた。こっちに戻ってきてからもう一度彼氏の話もしたくないだろうと思い、適当な話がないか考える。すぐに、一番の話題が思い浮かんだ。

「ちょっと酔ってたただけだって。今、あの演劇学の先生と話してるよ」

「えー?! なんているんですか?」

「さあ? 何か他の先生たちに連れられてきたらしいよ」

永井さんの話題を口にしただけで、女の先生たちはきゃあきゃあと盛り上がる。宮瀬の携帯のことなど、頭から吹っ飛んだようだ。宮瀬が下から戻ってきた後も、しばらくはその話題が続いていて、宮瀬が彼氏のことを言う必要はなかった。

その日の帰りは、だいぶ酔っている様子の宮瀬を送っていくことにした。見た感じは普通だけど、たぶんまっすぐ歩くのも必死な状態だったと思う。宮瀬の家の前で別れて、俺は自転車に乗ってその場を離れた。

歩いて帰る途中、宮瀬に永井さんが結婚していることを聞いてみた。俺も今日初めて知ったけど、正直聞いたときは驚いた。今までは何の疑いもなく、永井さんはフリーだと思いながら話を聞いていて、だからこそ宮瀬と何かあるんじゃないかって変に考えていた。それが、結婚してるなんて。

ただ、永井さんが結婚してるからといって、永井さんはそれを気にしてる様子はなかった。もちろん宮瀬の方は気にしているが、永井さんはそういうのを超えて宮瀬に気を使っているように感じられた。はつきりとした理由なんて分からないけど、そんな風に思ったのだ。

「やだな」

自転車を漕ぎながらつぶやく。永井さんを知った今、あいつと永井さんが会うのが何だかすごく嫌になった。

きつと、宮瀬の近くに居るのは俺だ。けど、今日藤田さんに言われた『紹介』が上手くいったら、宮瀬と今まで通りの関係でいるのは難しいだろう。俺でも宮瀬でもなくて、紹介された子が嫌な思いをする。俺たちは互いに付き合っているように見えて、友達として会う分には良いと思ってる人間だ。だが、それが世間一般ではずれた考えだということくらい分かっている。だから、俺たちは距離をとるだろう。宮瀬の彼氏が帰ってきたときも同じだ。

もし、宮瀬との関係がくずれてしまったら、あいつは永井さんを頼るんだろうか。そうなれば、永井さんは宮瀬の助けを受けるだろう。

永井さんのことを知って、ゆつくりと、俺と宮瀬の均衡がくずれていくような気がする。それが、怖かった。俺たちは、今の関係を進めようとも、壊そうともしない。この微妙な位置関係を維持している。永井さんはそんな関係も気にせず、自分の立場も顧みず、何かをやってしまったように思えて、怖い。

「あほか」

そこまで考えて、自分は未だ起きてもないことを危惧していることに気付く。宮瀬と永井さんがどうにかなるなんて、そんなこと起きるかどうか分からない。第一、永井さんは既婚者だ。薬指に光っていたシルバーの指輪が、それを証明している。

自嘲的な笑みを一つはいて、自転車の速度を上げた。

彼女の『相談相手』というのに、たぶん、今日初めて会った。『古賀』という名前しか分からなかったけど、彼が彼女に今一番近い人間だということは、間違いないだろ。

そして、自分がまだ彼女にとって『友達』という枠を超えていないということも、分かった。

夕方、彼女と別れた後、いつもの商業施設に入っている本屋に立ち寄ったことが、ある意味彼を知るきっかけになったのかもしれない。彼女が話題に出していた本を買おうとその施設の本屋をうろついていると、学会なんかで何度か会ったことのある教授と鉢合わせしてしまった。聞けば、何人か俺の知っている教授たちと軽く飲むのだと言う。ほぼ強引に誘われて、時間までその教授と話をしていた。途中、万里子に今日のことを電話で伝えたと、ひどく不機嫌な声が返ってきた。俺も本当は行きたくないただけで、中年特有の強引さに押し切られ、結局は行くことを了承した。

「帰りはだいぶ遅くなるだろうから、先に寝てていいよ」

『マサくん、最近外食多くない?』

「ごめんな。なるべく早く帰るから」

多くないかと聞かれても、実際外で食べたのは二週間前に村瀬と彼女と食べたときだけだ。その前の日にあった学会の後も飲み誘われたが、断っている。それでも、さすがに今日は悪いと思っているから、素直に謝っておく。万里子の小言を二つ三つ聞いて、ようやく携帯を切った。

今日の場所だという隣駅の居酒屋で、彼女と遭遇したときは驚いた。そして、その時に、彼に会ったのだ。たぶんバイトの後なのだろう。彼は、スーッ姿なものの、シャツをズボンから出しており、ネクタイもしていなかった。その時は彼とは会釈だけで別れたが、彼が彼女の『相談相手』だということは何となく分かった。

彼女と別れて席に戻れば、何のことはない、俺の位置からは彼女たちの席が見える。店の奥にいたその団体は、何人かがスーッ姿で、私服姿もちらほら見える。彼は、その席の一番端っこに座っていた。彼女はトイレから戻ってくると、彼の横に落ち着き、何やら話をしている。しばらく普通にしていたかと思うと、彼女はいきなりテーブルを叩くようなしぐさをして、何かを手には立ち上がろうとした。しかし、酔いが回ったのか、よろけて隣の彼に倒れこんでしまう。彼は咄嗟に彼女を受け止めていたが、それが何やら氣にくわなかった。彼女は周りの人間に一言二言何かを告げると、大急ぎでホールを突っ切って店の入り口の方へと消えていった。

もしかしくなくても、彼女に何かがあっただろう。そう思って、彼女が出ていって少ししてから、その後を追うようにして入り口の方へと向かった。

店の入り口まで来ると、透明のドアの向こうに彼女がしゃがんで顔を伏せているのが見えた。手には、携帯を持っている。彼氏から連絡でもあったんだろうか。

ドアを開けて声を掛けると、彼女はゆっくりと顔を上げてこちらを向いた。その顔は、今にも泣きそうな顔だった。大丈夫だと言う彼女に近付いて、彼女を見下ろす。

「大丈夫じゃないでしょ。そんな泣きそうな顔して」

そう言いながら眉をひそめると、彼女は曖昧に返事をする。それを聞いて自然と顔が険しくなるのが自分でも分かった。

黙って彼女を見下ろしていると、彼女は所在なさに視線を泳がす。どうあっても、俺と話すつもりはないらしい。彼女の顔に、混乱が見てとれた。俺は早く席に戻りたいという彼女の思いを無視するかのように、ドアと彼女の間に立って、その手を阻む。

そうしていると、後ろのドアが開く音がして、先ほどの彼の声が聞こえた。彼女が「古賀さん」と声を漏らす。その声に彼女を見ると、彼女は傍目から分かるほど身体の力を抜いて、安心したような顔つきになった。

その時だ。古賀という彼が彼女の相談相手だと確信したのは。

彼は彼女に下で待つように告げると、自分は中へと戻っていった。彼が戻っていった、彼女の方を振り返ると、彼女は俺に向かって曖昧に笑い「ごめん」とだけ言って、下へと降りていった。まった。

その後、彼に彼女のことを聞けば、「混乱してるけど、すぐ戻る」と言われた。俺には、彼女が混乱してることは分かるが、それを取り除くことは出来なかった。コートを持ってさっさと外に向かう彼

には出来るんだろうか。そんなことを考えながら、自分の席に戻った。

彼女は、どう言えば俺が引きさがるかを心得ているようだった。帰りの車の中でそう思った。

教授たちとの食事も終わって帰ろうとしたとき、彼女を見つけて送ると言ったのを、彼女は首を横に振って断った。そして、俺が何も言えないように暗に万里子のことを指して早く帰るよう促した。

確かに、彼女は混乱していた。きっと、彼氏から連絡があったのだろう。そして、その混乱を解いたのは、あの『相談相手』だった。彼女の混乱の原因の一つには、俺も含まれていると思う。俺が、そうなるようにしたのだから。自分の立場を使って、彼女の中にあるメーターを混乱させようとしている。それは、成功しているみたいだ。彼女が俺に何も言おうとしなかったことが、良い例だろう。きっと今までなら、何も考えずに俺に話をしていた。それで、彼女の気持ちが増になるんだから。でも、しなかった。ということは、俺との距離の掴み方が分からなくなってきたいて、どうしたらいいか分からないのだろう。

以前のように、話すところは話す、止まるべきところは止まる、という形じゃなくなってきただけいい。混乱して止まったなら、少しは俺の余地がある。

彼女とどうにかなりたいたいわけではない。ただ、特別な感情を持っているかと聞かれれば、答えはイエスだ。つい一カ月ほど前は、そんな感情もなく、ただ彼女に興味を持っていただけだった。できるな

ら、彼女に信頼される人間になりたいと思っただけだった。彼女の相談相手と肩を並べるくらいに。それが、そこへの執着へと、彼への嫉妬へと変わった。変わったというよりも、変わり始めていると言ったほうがいいか。今日初めて彼を見て、自分の変化に気がついたのだから。

馬鹿らしいとも思う。自分の立場で、そんなことを言う権利がないことも分かっている。それでも、彼を見て心底安心したような表情になった彼女を見て、何かが変わったのは事実だ。それに嘘をつくつもりはない。

問題なのは、その気持ちと万里子への気持ちのどっちが大きいかということだ。万里子を裏切る気は当分ないだろうけど、彼女が求めればそれを受ける気はある。

「……結局、彼女とどうにかなりたい、ってことか」

車中で一人呟いて、自嘲する。

ただ、彼女には彼がいる。お互い求め合っているようだけど、幸いなことに、それはしっかりとした形にはなっていない。それは、彼氏という存在がストッパーになっているからだろう。その彼氏が帰ってきてしまえば、彼と彼女の関係は何らかの終わりを迎える気がする。もちろん、それは俺も同じだ。だが、今一番彼女に近いのは、彼だ。それはきつと、彼も分かっている。だからこそ、彼女との間で保たれたバランスを壊したくないと思っている。なら、別にくずさなくてもいい。彼女には、下手な嘘や小細工は通らない。真っ直ぐに、正攻法にいくだけだ。

次の日の朝、彼女がすっかり帰ったかどうかを確認するためにメールを送った。

『帰ったよー。昨日はほんとごめん』

『いいよ。俺でよければ、また話聞くから』

そのメールからはしばらく開きがあって、夕方頃に返信がきた。

『話せたら来週話すよ』

それを読んで、自然と笑みが浮かぶ。

「マサくん、最近楽しそうだね」

「そう？ まあ、ちよつと良いことがあったからね」

買い物の最中に、万里子がそう聞いてきた。それに嘘でもなく、か
といってすべてを話すわけでもなく答える。万里子が気になって「
何のこと？」と聞いてきたが、それには答えないで買い物を進めた。
その時に、俺と万里子の薬指にあるものが目に入ったけれど、それ
には気にしない振りをした。

知らない番号から電話が掛かってきたのは、金曜日の午前中だった。

たまたま二時間目の授業がなかった俺は、ぐだぐだと友達と大学の中にあるカフェテリアで喋っていた。テーブルに置いておいた携帯がいきなり鳴って、画面を見るも、まったく知らない番号。初めのコールは無視して友達と会話を続けていたけど、それからすぐにもう一度その番号から電話が鳴った。

「出たら？」

「誰だよ、これ」

友達が電話を促してきて、俺はコーヒーを飲みながら携帯の通話ボタンを押した。「もしもし？」と少し警戒して電話に出ると、その向こうから少し安心したような女の人の声が聞こえてきた。

『古賀博己さんですか？』

「はい、そうですけど」

コーヒーのカップを持ったまま女の人の声に答える。勧誘なんかかと思っていたが、女の人の次の言葉で持っていたカップを落としそうになった。

『あの、宮瀬春希さん、ご存知ですか？』

「え？ あ、はい、まあ」

何で宮瀬がここで出てくる。カップをテーブルに置いて電話に集中した。向かいに座っている友達がなんだというようにこちらを見てきたが、俺もまだ何も分かっていないので、それには首をひねって答えた。

『こちら医大付属病院なんです、宮瀬さんが事故に遭われて、意識不明で先ほどこちらに運び込まれてきたんです』

「え？ 事故？ 大丈夫なんですか？」

『事故』という単語に俺も友達もぎよつとなる。

『はい。大きな怪我はありません。ご家族にも連絡したんですが、誰も出られなくて。宮瀬さんの携帯を拝見して、古賀さんのお名前が一番最初にありましたので、ご連絡しました』

「えっと、明法の近くの医大ですよね？」

『はい』

「じゃあ、今から行きます」

それだけ言っと、俺は携帯を切って、残っていたコーヒーを一気に飲み干した。

「おい、大丈夫か？」

俺の慌てた様子を見た友達がそう聞いてきた。俺はそれに頷きながら立ち上がって、鞆とコートを引っ掴む。

「悪い。午後からの授業全部休む。宮瀬が事故ったらしい」

「宮瀬って、お前とバイト一緒の？」

「ああ」

コートを急いで羽織って友達に簡単に事情を説明すると、俺はさつさとカフェテリアを後にした。

医大付属病院は、俺と宮瀬の大学の中間地点にある。自転車で急げば15分も掛からない。

たぶん過去最短の速さで病院に着いた俺は、受付で宮瀬のことを尋ね、そこで教えられた処置室に向かった。

処置室で眠っていた宮瀬は、どんな怪我をしているかと思えば、顔に少しガーゼが貼られているだけだった。ベッドに横に置いてある点滴は、宮瀬の腕に繋がっている。ちょうど近くに医者っぽい人がいたので、名前を名乗ってから宮瀬の状態を尋ねる。

「何でも、歩道から飛び出してきた幼稚園児を避けようとして原付を思い切り横に切ったせいで、原付が横転して道路に横滑りしたらしいです。幸い今の時期は防寒具のおかげでそこまで大きな怪我はありません。それでも、顔の方は少し擦り傷が出来てしまってますが。後は、足にも少し擦り傷と切り傷が」

それを聞いて大きく息をついた。何だ、そこまでひどくはないらしい。事故っていつから、てっきりもつとひどいものかと思っていた。

「でも、電話では意識不明で運ばれたって……」

それを言うと、その医者はいくつにあってたカルテを開いて、俺に説明する。

「ああ。怪我はありませんでしたが、横転した衝撃で脳震盪を起こしたんです。それと、若干貧血気味だったようで、それも影響しているのかもしれませんが。もう少しすれば、目を覚ましますよ」

「分かりました。ありがとうございます」

医者に礼を言つて、宮瀬が眠るベッドに近付いた。コートやマフラーなんかをベッドの上にそっと置いて、すぐそばにあった椅子に座る。

宮瀬の頬から顎にかけてガーゼが貼ってあった。本当にそれ以外に

怪我らしい怪我は見当たらない。この点滴も、事故のせいというよりは貧血のためだろう。

そういえば、と思い出す。大学の授業が後期に入ってから、宮瀬は毎日バイトに入っていた。最近になって金曜日だけは外すようになっていたが、それでもそれ以外の日は最初から最後までほぼ全部のシフトに入っている。それに加えて、こいつは学校の方も手を抜かずに行っている。学生なんだから当たり前だが、朝から学校に行つて、夕方から夜まではバイトで、家に帰るのは早くても10時半過ぎ。家に帰ってから、学校の課題をやつて。それを毎日やっていたら、身体が悲鳴を上げて当然かもしれない。宮瀬は少しくらい体調が悪いと思つても、それが完全に表面に出るまでは休まない性質だ。無理をしてでもそれをやる理由は、やっぱり留学の件があるからだろう。それに行けなかった分、精一杯自分の出

来ることをやつて、誰かに認めてもらおうとしてるんだ。

水曜日にバイトで会つた時、何となく調子が悪そうだということは気付いていた。ぼーっとしてる時もあつたし、疲れた顔をしていた。大丈夫かと尋ねた時に返ってきた「大丈夫」という返事を、そのまま鵜呑みにしてしまった。あの時に無理にでも次の日のバイトを休ませておけば、少しは体調も良くなっていたかもしれないのに。

宮瀬が事故を起こしたと体調不良は関係ないかもしれないけど、そう思わずにはいられなかった。眠っている宮瀬を見て、自分が情けなくなつた。

しばらくして、宮瀬が目を覚ました。初めはぼんやりとした表情だったが、何度か瞬きをして、自分がどうしてここにいるかを理解したようだった。

「大丈夫か？」

椅子に座ったまま、宮瀬を覗き込むようにして声をかけた。宮瀬は俺を見つけて、『何で?』という顔をしたが、俺が説明するより早く医者はこちらにやって来た。

「宮瀬さん? ここがどこか分かりますか?」

「……びょういん」

「どうしてここに来たかは?」

「……こけたあとに、たおれたから」

「はい。じゃあ、これは何本?」

「……いっぽん」

「じゃあ、指を目で追って」

医者が指を左右上下に動かすと、宮瀬はゆっくりと視線でそれを追った。数回それを繰り返すと、医者はペンライトで宮瀬の目を見る。

「……よし。大丈夫だね。その点滴が終わって、もう一つやったら帰れるよ。その間に色々検査も済ませていくから」

医者はそう言うと、カルテに何かを書きこんで、カウンターの方向へと戻っていった。点滴を見ると、あと半分ほど残っている。これをもう一つか。

宮瀬に目を戻すと、さっきよりはだいぶマシな表情をしていた。

「大丈夫か?」

さっきと同じ質問をすると、宮瀬は小さく頷く。そして、また目で俺がここにいる理由を尋ねてきた。

「病院から電話もらったんだ。お前の親がどっちも出なかったらしくて、携帯見て履歴の一番上に名前があっただんど」

「……そっか」

そう言つて、宮瀬は視線を前に戻したかと思うと、いきなり「あつ」と声を漏らした。なんだと思つて宮瀬を覗き込む。

「原付……」

「あほか。それより自分の心配しろ」

よりによつて転がった原付の心配をする宮瀬に呆れてしまう。

「だって、壊れたらぜったい買つてもらえないじゃん」

「そんなもん、請求したらいいだろ」

「そうだけど」

一応事故の責任は飛び出した方にあるんだから、後からでもその親が来るだろう。意識不明の原因も、横転した時の脳震盪だっていうし。

それでもうーうーと宮瀬は唸っている。どうやら、意識は完全にはつきりしたみたいだ。そう思った矢先、処置室のドアから小さな男の子とその母親らしき人が入ってくるのが見えた。男の子の方は、幼稚園の制服を着ている。母親はカウンターで何かを尋ねていて、尋ねられたナースがこちらのベッドを指していた。たぶん、飛び出した子とその母親だ。

二人の親子は手を繋ぎながらこっちに向かってきた。男の子は泣きそうな顔をしている。

「宮瀬春希さんですか？」

母親が確認するように宮瀬を見ながら言った。宮瀬はその声の方を向き、誰だか分かったのか、急いで起きようとする。が、まだ脳震盪を引きずっているらしく、起き上った瞬間によろけて倒れそうになる。咄嗟に手を出して宮瀬を支えた。母親も慌てたように近づく。俺は宮瀬の背中に手をやって支えてやり、片方の手で枕を立てせて宮瀬が寄りかかれるようにする。ベッドの柵に寄りかかって、宮瀬は親子と対面した。

「この度は本当に申し訳ありませんでした」

母親が深々と頭を下げる。宮瀬はそれを見てぎよっとなって手を横に振った。

「いや、そんな謝らないでください。別に大事故ってほどのもので

もないんですし」

「でも、この子が飛び出したせいで事故になって、意識を失ったんですよね」

「あ、いや、まあ……」

墓穴掘ってどうする。

宮瀬は母親に正しいことを言われてまごついている。

子供の方が前に進み出て、母親と同じように頭を下げた。

「ごめんなさい」

「うん。大丈夫だよ。でも、今度からはしないでね」

宮瀬がそう言うと、男の子は泣きそうになりながらも頷いた。宮瀬もそれを見てほっとしたようだ。

その後は、宮瀬と母親の方で連絡先を交換し合い、後日手続きやら何らかのお詫びをすることで、親子は帰っていった。

親子が帰ったあと、宮瀬は親に連絡はしないでくれとナースの人に頼み込んでいた。

「ダメですよ。事故で救急車が出たんですから警察にも連絡が入ってますし、それにさっき一度ご家族には連絡しました」

それを聞いて宮瀬が固まる。

「じゃあ、掛けなおしてきたら、私に話させてください。ちゃんと全部言いますから」

宮瀬はそう言つて必死にお願いする。ナースの人も折れて、それは許可してくれた。

「よかったー」

宮瀬はナースの人がカウンターに戻っていくのを見ながら胸をなで下ろす。

「なんでそんな嫌がるんだよ」

「だって、事故って倒れたなんて知ったら、確実にこっちに飛んでくるんだもん」

「そりゃあな」

宮瀬の言葉に俺は頷く。誰だって、自分の子供が事故って倒れたって聞いたらすっ飛んでくるだろうよ。

「ただ脳震盪で倒れただけなんだから、こっち来てもらうのも悪いでしょ」

「別にいいと思うけど」

「いいの。じゃなかったら、原付とか取り上げられそう」

本音はそれか。

宮瀬の言葉を聞いて呆れたという顔を見ると、宮瀬は小さく笑ってごまかした。

「それより、来てくれてありがとうね」

「ん？ ああ、ちょうど授業なかったからな。検査とか全部終わるまで、ここにいろよ」

「え、いいよ。別に。午後からも授業あるんでしょ？」

「気にすんな。まあ、バイトの時間になったら帰るけどな」

バイトという言葉を聞くと、宮瀬は「そうだねえ」と意地の悪い顔になった。

「ドンキーがうるさいもんねえ」

「良かったな。今日バイトなくて」

俺がそう言つと、宮瀬は「ラッキーラッキー」と言つて笑つた。それに俺も笑っていると、ナースの人が電話の子機を手にこつちに歩いてきた。

「宮瀬さん。お母さんから掛かってきたよ」

ナースの言葉を聞いて、若干まずいという顔つきになったものの、

宮瀬は大人しく電話を受け取った。宮瀬が電話をする横で時計を確認すれば、もうお昼を少し過ぎていた。処置室を見渡せば、順々にお昼の病院食が配られていつている。俺も何かを買ってこようと、電話している宮瀬に合図して、その場を立った。

病院の売店で弁当とお茶を買い、ロビー付近で塾に電話をした。この時間なら、もう教室長はいるだろう。数回のコールで、ドンキーが電話に出た。

俺は宮瀬が事故に遭ったことと、脳震盪を起こしたこと、貧血気味であることを話し、来週の宮瀬のシフトを全部はずしてもらおうように頼む。ドンキーは初め嫌そうな声を出したが、教室で倒れたらどうするんですかと脅しめいたことを言うと、渋々ながら俺の頼みを受け入れてくれた。俺ができる限りカバーするというのが条件だったけど。携帯を切って、溜め息をついた。宮瀬も入りすぎだが、ドンキーもドンキーで、宮瀬一人に頼りすぎだ。人が足りていないというのを知っているが、それなら他の人にも頼めばいいのに。それに、他の奴も誰かをあてにしすぎている。週三日以上シフトに入っているのは、俺や宮瀬を含めてほんの数人だ。講師が二十人はいるのに、なんで人が足りないんだよ。そんないらいらを抱えながら、宮瀬のいる処置室に戻った。

処置室に戻ると、宮瀬にも昼ご飯が配られていた。そして、服が病院で患者が着るような服になっている。

「なんか、脳震盪起こしたから、一応レントゲンとらないといけな
いんだって」

「ふーん」

俺の視線に気付いたのか、宮瀬は両手を広げて説明した。俺は元の椅子に座り、自分の弁当を広げる。宮瀬は俺の買ってきた弁当を見て、羨ましそうな声をあげた。

「私もそつちがいい」

「だめ。病人は大人しく病院食を食べてなさい」
「けち」

宮瀬はそう言つて「いーっ」と俺を威嚇したあと、病院食の蓋を開け始めた。

まあ、事故つていっても怪我は少ないからそれなりに元気なんだろうな。目を覚ました時はぼんやりしてたけど、今はほとんどいつもの宮瀬だ。

「そついや、お母さんの方は大丈夫だったのか？」
「ん？ うん」

ご飯を食べながら、宮瀬が頷く。俺も弁当に箸をつけて、宮瀬の方を見た。

「すごい怒られたけど。こっちに来ることは回避できた。でも、バイト禁止令が出た」

どうしよう、と困った顔で俺を見てくる宮瀬。

「そのことなら、さっきドンキーに電話で言つといた。なんか文句たらたらだったけど、来週のシフトは全部なしにしたから、ちゃんと休め」

もぐもぐと口を動かしながらさっきの電話のことを告げると、宮瀬の顔がぱつと嬉しそうに変わった。

「ありがとー。あ、でも、そしたら古賀さんとか大変じゃない？」

自分の空きを心配して、宮瀬の顔が少しかげった。

「別に。来週は課題もないし、大丈夫。とにかく、今は休め」
「……ありがと」

少しの間があつた後、宮瀬はそう言つて、俺に向かって微笑んだ。俺もそれに小さく笑つて返し、食事を再開した。食事が終わった後、少ししてからナースが空の車いすと共に宮瀬のベッドまでやって来て、レントゲンをすると告げた。宮瀬は車いすに若干の抵抗を示したが、ベッドから下りる際にまたしてもふらついてしまい、結局車いすに乗るはめになった。ついていこうかと迷っていると、ナースの人が「五分程度で終わりますから」と見越したように言つたので、ここで待つことにする。宮瀬が『来ないの?』というように俺を振りかえつたが、安心させるように笑つてやると、

しょうがないというようにナースに押されてレントゲンへと向かった。

ナースの言うとおり、ものの十分ほどで宮瀬は戻ってきた。またベッドに座ると、ちょうど点滴液がなくなったところらしく、ナースの人がてきぱきと新しいものに変えている。ナースの人がカウンターの方へ戻ると、宮瀬は枕を立てた柵に寄りかかって、ぐーっと伸びをした。

「お前さ、」

そんな宮瀬を見ながら声を掛けると、宮瀬は「ん？」と言って俺の方を向く。

「体調悪いなら、ちゃんと休めよ。それが、誰かに言つとか。貧血気味だつて言われただろ」

「ああ……」

俺の言葉に宮瀬は気まずそうに視線を逸らす。

「だって、言ったら迷惑かなと思って」

「何で迷惑になるんだよ。病院から電話あつて、心配したんだぞ」

「……ごめん」

宮瀬は小さく謝って、視線を下に落とした。俺は小さく息をついて、宮瀬を見る。

「何かあったんなら、誰にでもいいから、言ってくれ。いきなり何かあったら、どうしようもできない」

「うん」

「今週からずっと体調悪かっただろ？」

そう聞くと、宮瀬は少し驚いたように俺を見た。

「毎週お前と顔合わせてるんだ。それくらい分かる」

宮瀬が何でと尋ねる前に答えを言っただけ。

「頼むから、無理しないでくれ」

「……うん」

宮瀬は頷いて、少し泣きそうな顔になった。

「ちゃんと言っよ、今度から」

「そうしてくれ」

俺が息をはいてそう言つと、宮瀬は小さく笑つて俺を見た。それに気付いて、目線で「なに？」と尋ねる。

「今日ね、目が覚めて、古賀さんのこと見た時、何でつて思ったんだけど、古賀さん見た時に安心した」

「え？」

「何か分かんないんだけど、『ああ、古賀さんだ』つて思つて、『良かった』つて思った。ほんとにありがとう。来てくれて」

宮瀬はそう言つて笑う。思わずそれを見て、視線を逸らしてしまつた。

「いいよ、別に。心配したつてこと分かつてくれたら」

「うん」

視線を逸らしたままそう言えば、宮瀬はさっきよりは元気のある声で頷いた。

そのまま午後も宮瀬に付き添つていて、その間に医者やナースの人が採血やら何やらと検査をしに来た。時計が3時を少し過ぎたころ、サイドテーブルに置かれていた宮瀬の携帯が振動した。俺も宮瀬もその音に反応して、携帯を見る。画面には『永井 証也』と表示されている。宮瀬はその名前を見てまずいというように「あつ」と声を漏らし、携帯に手を伸ばした。

「もしもし？ あー、うん。ごめん。今日はちょっと……」

永井さんからの電話に言いにくそうに答えている宮瀬。そういえば、金曜日は永井さんの授業があるって言うってたっけ。授業にいなかった宮瀬を心配して、永井さんが掛けてきたんだろう。

「いや、ちょっと、学校行く時に事故って……。え？ いや、大丈夫だから。古賀さんも来てくれてるし」

そこまで言って、宮瀬は溜め息をついた。俺の名前が出てきて顔を上げるも、宮瀬は何でもないという風に顔を横に振る。

「医大だよ。明法の近くの。……はい、待ってます」

そう言って、宮瀬は憂鬱そうに携帯を切った。

「どうした？」

「永井さん、今から来るって」

「ああ、そうなんだ」

宮瀬はそう言って少し考え込むようなしぐさをする。俺も、できれ

ばあんまり永井さんには会いたくない。でも、今は来てもらった方がありがたかった。

「ちょうど良かった。俺、もう行かないとだから」
「あ、そっか」

宮瀬は携帯の時計を見て俺の言葉に頷く。

今日はバイトだから、今から家に帰って塾に行くとなると、もうここを出なければならぬ。今は宮瀬を一人にしておきたくなかったから、誰かにいてほしい。それが、たとえ永井さんでも。

永井さんは、ほんとにすぐにやって来た。まあ俺のところから自転車ですら15分なら、車の永井さんがもっと早いのは当たり前だけど。処置室に入ってきた永井さんは、宮瀬の姿を見とめると、大股でこちらにやって来る。

「大丈夫なの？」

そして、開口一番でそう尋ねた。珍しく、慌てているようだった。俺の中で、永井さんは何事にも動じないような人間になっていたんだだけ。

宮瀬が頷くのを見ると、永井さんは安心したように息をついた。俺はそれを見て、立ち上がる。宮瀬も永井さんも俺の方を向いた。

「もう行くな？」

「あ、うん。ありがとう」

宮瀬が、一瞬、さみしそうな顔をした気がした。けど、宮瀬はすぐに笑顔になってお礼を言ってきた。

「バイトから帰ったら連絡するから、ちゃんと休んどけよ」
「うん」

宮瀬が頷くのを見て、俺はコートやマフラーを羽織る。
出口に向かおうとしたところで、もう一度宮瀬を見下ろした。

「ほんとに、何かあったら言えよ？」
「……うん」

そう安心したように微笑む宮瀬を見て、思わず、宮瀬に触れそうになった。それも、肩とかじゃなくて、頬に手を置きそうになった。腕を動かしかけたところでそれに気付き、ぐっと腕を身体の横にとどまらせる。宮瀬は、そんな俺に気付いていないようだった。

「じゃあな」

そう言っ、手を上げて処置室の入り口に向かう。その時、永井さんがこちらを見ている気がしたけど、それには気付かない振りをし

て、処置室を出た。

早足で病院の駐輪場に向かい、自分の自転車に鍵を通して、大きく息をはいた。

何をしようとしたんだ、俺は。よりによって、宮瀬に触れようとしたなんて。そんなことすれば、宮瀬との関係がくずれてしまうことくらい分かっているのに。そして、たぶん、それを永井さんは見ていた。あの人は、あれで動けないでいる俺を知っただろう。宮瀬との関係を、維持しようとする俺に、気付いただろう。何であんなことしたんだ。

今さら後悔が押し寄せてくる。

それでも、宮瀬が俺を必要としてくれるってことを知って、何かを求めてしまったんだ。それをしちやいけないって分かっているにもかかわらず。

「何やってんだ」

一人呟いて、手で顔をぬぐった。

もう忘れよう、さっきのことは。結局、何もなかった。それでいい。来週は宮瀬に会わないんだ。それで、全部リセットしよう。

そう考えて、自転車を漕ぎ始めた。

永井さんが見ていたかとか、あの人が何をするかとか、そんなことは考えないようにして、ただ自転車を漕いだ。

金曜日、俺がいつものように教室のドアを開けると、珍しいことに彼女がまだ来ていなかった。彼女の友達はずっと同じように座っているが、彼女の姿はない。

避けられてるかな、と少し思った。

先週の金曜日、彼女と居酒屋で偶然遭遇したときの話を聞かせてもらう予定だったが、彼女から友達と遊ぶことになったと断られていた。メールもそれなりに交わしているが、何となくあの時のことを話さないようにしている感じだ。そして、今日である。少しは、そう思っても仕方ない。

そんなことを考えても授業はやらないといけないので、そのうち彼女もやって来るだろうと思い、いつものように授業を始めた。

が、結局、彼女は最後まで姿を現さなかった。これは本格的に避けられてるかなと考えながら、教室の出口に向かって歩いていたら、彼女の友達同士が話しているのが耳に入った。

「ハルさん、今日来てないの？」

「うん。さっきメールしてみたんだけど、返ってこないんだよね。寝てんのかな」

彼女の友達にも、連絡がいつていないみたいだ。

そうなる、避けられているという予想は違うのかもしれない。いくら彼女だって、友達に何も告げずに休むことはないだろう。だい

たい、避けてるからといって、授業を休む彼女じゃない。
じゃあ、一体何があったんだろう。そう思って、彼女にメールを打ちながら、講師控室に向かった。

昼休みを過ぎても、三時間目の授業が終わっても、彼女からの返信はなかった。さすがに、彼女に何かあったんじゃないかと心配になる。大学のメイン広場をさっさと抜けて、駐車場に止めてある自分の車に着いてから、彼女に電話を掛けた。

『もしもし?』

数回のコールのあと、彼女の声が聞こえてきて、少しほっとする。

「もしもし? 今日来なかったね」

『あー、うん。ごめん』

「いいけど、今日は大丈夫?」

『今日はちよつと……』

「何かあったの?」

何だか歯切れの悪い彼女に質問する。

『いや、ちよつと、学校行く時に事故って……』
「え? なに、事故?」

予想もしてなかった答えに思わず大きな声が出てしまう。

「今どこ？ 病院？」

『え？ いや、大丈夫だから。古賀さんも来てくれてるし』

『古賀』という名前に思わず反応してしまう。彼女の相談相手だ。つまり、彼女が事故を起こしてから彼がずっと付き添っていたということだろうか。

そんな考えを起こしながら、俺は車のドアを開けて中に入り込む。

「大丈夫じゃないよ。どこの病院？」

『医大だよ。明法の近くの』

「すぐ行くから、ちゃんと待ってるんだよ」

『……はい、待ってます』

彼女の返事を聞いてから、車のエンジンを掛けてスタートさせた。明法の近くの医大病院には行ったことはないが、場所がどこかは分かる。大学のキャンパスを出ると、まっすぐにそこへ向かった。

病院の来客駐車場に車を止めると、中に入って受付で彼女のことを尋ねる。まだ処置室ににいるという返事を聞いて、足早にそこへと歩を進めた。

処置室の入り口で部屋の端っこのベッドに座る彼女を見つけ、大股で彼女のところへ近付く。彼女の隣には、彼もいて、様子からずつと彼女に付き添っていたようだ。

「大丈夫なの？」

彼女のすぐそばまで来ると、そう尋ねた。彼女が頷いたのを見て、自分でも分かるくらい安心する。すると、椅子に座っていた彼が立ち上がって、バイトなのでもう行くと言う。その時に、彼女が一瞬だがさみしそうな顔をした。けれど、彼女はすぐに笑顔になって彼にお礼を言う。彼が彼女の表情に気付いたどうかは分からないが、その後に彼が何かをしようとしたのは分かった。何かあったら言うようにと告げた後、彼の腕が動く気配を見せた。彼もそんな自分に気がついたらしく、途中でぐつと腕に力を入れて腕を身体の横にくつつけるようなことをした。それから彼は彼女に一言掛けると、早足で処置室を出ていった。

「永井さん？」

彼が出ていった方向を見ていると、下の方で彼女が俺を呼んだ。彼女を振り向くと、どうしたんだというような顔をしている。俺は何もないと首を横に振り、先ほどまで彼が座っていた椅子に腰を下ろした。

「何で事故になんかあったの」

彼女を見ながら尋ねると、彼女は曖昧に笑って、首をひねった。見

れば、大きな怪我はないようだが、彼女の頬から顎にかけてガーゼが貼ってあり、服は患者用の服を着ている。

「いや、学校行く途中でさ、男の子がいきなり飛び出してきたから、思いつきり原付横に切ったら勢いで道路にこけちゃったんだよね。で、すぐに立ち上がったんだけど、こけた時に頭も打って、脳震盪起こして運ばれてきたらしいよ」

「らしいよって……」

「だって、目覚めますまで知らなかったんだから、しょうがないじゃん」

簡単に事故のあらましを話す彼女に、少し呆れてしまう。

彼女の腕には点滴が繋がっていて、残りは三分の一ほどだった。

「大怪我もしてないなら、何で点滴なんてしてるの？」

「ん？」

俺の質問に彼女はわざとらしく聞き返してくる。こういう時は、たいてい何か知られたくないことがある時だ。

「なんで」

彼女の顔をじっと見て先を促すと、彼女は諦めたように息をついた。

「んー。なんか貧血気味らしいから、それ用に」

彼女の答えを聞いて、今度は俺が息をついた。

前々から、彼女の生活が忙しそうだとは思っていた。聞けば、大学が後期に入ってから毎日バイトに行っていたらしいし、夜遅くに帰ってきてから課題をやっているという。最近になって金曜日はフリーの日としてシフトを入れていないと言っていたが、それでも他は学校が終わってからすぐにバイトに行くと言っていたから、大変なことに変わりはない。貧血気味と言われても、当然かもしれない。

「少しは休むことも覚えなよ」

ようやく自分も落ち着いてきて、着ていたコートなんかを脱ぐ。

「大丈夫だよ。来週はシフト全部なくしてもらったって古賀さんも言ってたから」

そう言っただけで笑う彼女。

また古賀さんか。そう思いながらも、彼女のことを考えれば、彼のしたことは正しいと言えるだろう。

「君の友達も心配してたから、連絡しといてあげなよ」

「あー、そういえばメール来てたね。返しとく」

彼女はサイドテーブルに置かれていた携帯に手を伸ばし、友達にメールを打ち始めた。

彼女がメールを打ち終わったところで、俺はもう一度彼女の方を向いて口を開く。

「怪我がなかったから良かったけど、自分の身体にはちゃんと気をつけないと」

「それ、古賀さんにも言われたけど、貧血と事故は関係ないよ」

「それでも、事故があったから貧血気味だって分かったんだよ。何かあってからじゃ遅いんだよ」

少しきつめに言えば、彼女も反省はしてるのか、素直に俺の言葉に頷いた。俺はまた息をついて、ガーゼが貼られている彼女の頬に手をそえる。

「これ、擦り傷とかだよね？」

「え？ あ、うん。すぐに治るって」

「そっか。よかったね」

「うん」

彼女が頷いたのを見て、手を離す。

「そっいえば、家族の人は？」

周りを見て、そう尋ねた。一人暮らしとはいえ、事故を起こしたんだから、家族の一人や二人来てそうだけど。

「ああ、電話して、内容だけ話した。こっち来るとは言ってたけど、ただの脳震盪だし、来なくていいって言っておいた」

「……それ、ちゃんと貧血のことも言ったの？」

そう言うと、彼女は視線を逸らす。

「だから、何で言わないの」

「だって、言ったら絶対来るもん」

「当たり前でしょ」

俺がそう言っても、彼女はうーうーとうなるだけで、反論はしてこなかった。

「これからちゃんと休むんだよ」

「……はい」

俺がそのことにはそれ以上何も言わないでいると、彼女はほっとしたような顔になって、俺の言葉に返事をした。

「じゃあ、何で古賀さんが来たの？」

「携帯の履歴の一番上に古賀さんの名前があつたんだって」

「ああ」

それなら、納得だ。俺は基本的に彼女にはメールしかしないし、電話はごくたまにだ。彼なら、彼女と連絡をとることも多いだろうし、連絡をもらったらもらったで、授業なんか無視して病院に来ることは容易に想像できる。彼が帰る際の行動を思い出して、余計にその考えは現実味を増した。彼は今頃、自分の行動をどう思っているだろうか。

点滴ももう少しでなくなるという頃、医者が彼女のところまで来て、カルテなんかを広げながら彼女に経過を報告した。

「CTも異常がなかったから、もう帰っても大丈夫だよ。今日は、家に誰がいる？」

「いや、いないです」

医者を見上げながら言う彼女に、医者の方は「うーん」とうなって少し困った顔をした。

「それじゃあ、今日は家に帰せないな。一応頭を打ったから、家に誰かいないと帰宅許可できないんだよ」

「え、」

それを聞いて彼女が固まる。そして、医者が俺のことに気付いてこちらに目をやった。

「あなたは、宮瀬さんのご家族ですか？」

「いえ、違います。けど、家にいた方がいいなら、そうしますけど」

俺がそう言うのを聞いて、彼女がぎょっとこちらに顔を向ける。俺がそれを無視して話を続けようとすると、彼女は手を前にもってきてそれを制した。

「友達の家に泊まります。だから、家に誰かいます。大丈夫です」

「友達には連絡した？」

「今からします」

そう言つて、彼女はサイドテーブルにある携帯を掲げる。俺が肩をすくめるのを見て、医者はそれを許可した。

彼女が電話をする間、俺は医者についてその場を離れる。彼女は電話が終わり次第、点滴を抜いて、元の服に着替えるそうだ。医者が彼女のベッドの周りにカーテンを引き、俺たち二人はカウンターの方まで歩いた。

「頭を打ったって、そんなにひどいんですか？」

カウンターに着いたところで、俺が医者に見ねる。医者は彼女のカルテをカウンターの棚のようところに戻し、俺の方を向き直った。

「ひどいというか、脳震盪で気絶しているので、セカンドインパクトが心配なんです。だから、今日くらいは家に誰かいてもらわないと。最低でも、一週間は安静にさせてください」

「わかりました」

正直に言えば、俺は彼女の生活を管理できる立場ではないんだが、医者がそう信じているようなので黙って頷いておく。

医者はそれだけ言々とカウンターの中に戻ってしまい、俺はカウンターに寄りかかって彼女の着替え等が終わるのを待っていた。

ナースによってカーテンが開けられたのを確認し、彼女のところに戻る。

「友達、大丈夫だった？」
「うん」

彼女はそう言うってから、俺の方を睨むようにして見てきた。

「なに？」
「何であんなこと言ったの」
「あんなこと？」

彼女の言っている意味が分からず、首をひねるも、すぐに何のことか分かって「ああ」と返す。

「だって、君は一人暮らしで、家に誰もいないって知ってるから」
「だとしても、冗談でもあんなこと言わないでよ」

びっくりする、と続けて、彼女は息をついた。

俺としては、別に冗談のつもりもなかったんだが。もし彼女の友達が駄目だったら、彼女のそばにいるつもりだった。けど、今それを言ってしまったのは彼女の機嫌を損ねることも分かっていたので、何も言わないで黙っておく。

彼女の腕からは点滴も外されていて、顔にあったガーゼも小さいものに変わっている。それでも、長時間点滴の針が通っていた部分に違和感を感じるのか、彼女は針が刺さっていたところを服の上から撫でている。

しばらくすると、ナースの人が彼女のコートを持ってきてくれた。何やら透明の袋に入れて。それを見た彼女の顔が引きつる。

「破れたりしてないと思うんだけど、やっぱりだいぶ汚れてるし、擦り傷が入ってるかも。でも、これがあつたから怪我しなくて済んだんだけどね」

ナースが袋からコートを取り出して彼女に渡しながら言う。彼女もコートのおかげという部分は分かっているらしく、「そうですね」と小さな声で同意していた。彼女は渡されたコートを広げて、苦笑いをして「あー」とうなった。

彼女のコートは黒地だけど、コンクリートに転がったせいで、その部分が白く汚れている。何箇所か、擦ったような傷らしきものも見えた。お気に入りだったから、けっこうショックなんだろう。

「クリーニング出せば直るかな」

「まあ、黒色だから目立たなくはなるんじゃない？」

俺の言葉を聞いても彼女はショックなようで、へこんだままナースの人が持ってきた書類にサインをした。

ようやく帰宅準備が整って、彼女がコートを着ようと再びそれを広げた。俺はそれを制して、自分のコートを彼女に渡す。彼女のコートはナースが持ってきた透明の袋に入れなおした。

「え、なに？」

「俺の着てていいよ」

「でも、永井さんが寒いじゃん」

「今の君よりも健康体だから心配しないで」

そう言って、彼女にベッドから下りるよう促す。彼女はもう何も言っても無駄だと思ったのか、素直に俺のコートを羽織る。俺と反対側に立っているナースの人は、既に車いすを準備していた。彼女はそれに難色を示すものの、ふらつくことは自覚してるようなので、大人しくナースの人が持つ車いすに座った。俺は彼女の鞆や自分の鞆なんかを持って、その隣に並ぶ。

車いすを押されながらの彼女と一緒に病院の入り口まで向かう。ロビーに出ると、人がまばらにいてだけで、特に大勢いるわけでもなかった。ナースの人はここで待つように言うと、カウンターの一つに向かっていった。

「車回してくるから待ってて」

その間に車を正面まで持ってこようと思い、彼女にそのことを告げると、彼女はきょとんとしたように俺を見上げてきた。

「あ、送ってくれるんだ」

「どうやって帰るつもりだったの。すぐ戻るから、待ってるんだよ」

彼女の発言に呆れながら、俺は病院の外へと出た。そのまま急いで自分の車に戻り、それを病院の正面入り口に着ける。彼女とナースの人は、入り口の外で待っていた。俺は彼女が乗る助手席のドアを開けに一旦車の外に出る。

「やっと帰れる」

車が到着すると、彼女は帰れることが嬉しいのか、その嬉しさのまま勢いよく車いすから立ち上がる。だが、当たり前だけど、一応事故に遭った身体はそれを受け入れるわけもなく、彼女は勢いに負けてふらついて倒れそうになった。

「ちよっ、」

彼女のところまであと数歩というところまで来ていた俺は、そんな彼女を見て慌てて駆け寄る。彼女が倒れそうになるのを抱きしめるような形で受け止めて、ほっと息をつく。見れば、ナースの人も助けようとして動き出そうとしていた。

「まだ万全じゃないんだから、気をつけて」
「ごめん」

腕の中にいる彼女にそう言うと、彼女は苦笑しながら謝った。彼女がしっかりと立つと、ナースの人が鬼の形相ともいえる顔で、彼女に注意をしだす。彼女はその勢いに負かされて、数歩後ろに下がった。ナースの人の怒りが収まると、彼女はナースに謝り、車に乗り込んだ。俺もナースに会釈をしてから、運転席に回って車に乗る。開けた窓から彼女がナースの人に手を振り、俺は車を発進させた。

「薬、もらったの？」
「うん」

彼女が手に持っている袋の中身を見ながら頷いた。俺が鞆が後ろにあることを伝えると、彼女は手を伸ばして鞆を取る。

「さて、家どこか教えてくださいね」

彼女の案内で彼女のマンションまで送ったが、その場所は少し入り組んでいて、確かに彼女が以前言っていたように『説明するの面倒』という場所だった。

マンションに着くと、彼女は鞆と袋に入ったコートを持ってさつさと中に入っていく。どうせ入っても何もできることはないし、俺はそのままマンションの前で待つことにした。

十分ほどで彼女が小さなポストンバッグを持って戻ってきて、また

助手席に座る。俺は彼女が扉を閉めるのを見て、車を再びスタートさせた。彼女の案内で、今度は彼女の友達の家に向かう。

「今日、ごめんね。授業行けなくて」

彼女のマンションの近くにある信号で止まっていると、彼女がそう言ってきた、

「事故だったんだから、それくらいいいよ。診断書も出してくれたら、欠席にはならないし」

「うん。あと、来てくれてありがとう」

「どういたしまして。病院って聞いた時は焦ったけど、意外に元気そうで安心した」

そう言えば、彼女は自分も元気でびっくりしてると笑った。俺もそれにたづなれて笑う。信号が変わったので、車を進めた。

「何より、避けられてるわけじゃないみたいだから、良かったよ」
「え？」

俺の言葉に彼女がこちらを見た。俺は運転しているから、前を見たままでいる。

「用事とはいえ先週は当日にキャンセルされるし、メールもあんまりこの間のことは話したくないみたいだったから」

「ああ……」

「それで今日来てみたら君はいないし。避けられてるかなって思っても仕方ないでしょ？」

「避けてないよ」

最後は彼女を見ながら問いかける。彼女は小さく笑って俺の言葉を否定した。

「避けてないけど、どうやって話したらいいか分かんなくなってる。だから、あんまりその話にならないようにした」

「普通に、思ったまま話してくれていいよ。君がそうしたいなら」

もう一度前を見てそう言うと、彼女からは困ったように笑う声が聞こえた。それから、椅子に深く座りなおす音がする。

「それじゃあ、永井さんがただの都合のいい人になっちゃうよ」

「あんまり気にならないけど」

「そうだろうけど、私が気にする」

「でも、相談相手には言うんでしょ？」

その言葉には少しの間があった。再び信号で止まって、彼女を見ると、彼女が本当に困った顔をしているのが目に入った。彼女は俺の視線に気付いて、曖昧に笑ってみせる。それから、小さな声で「ま

あね」と答えた。

「だったら、俺もおんなじように考えてもらっていいよ。前にも言っただけど、君が話して楽になるんだったら、いつでも聞くから」

「覚えてるけど、今はちょっとよく分かんなくなってきたから、少し整理させて」

「どうぞ」

彼女の言葉に頷くと、彼女は小さく息をついて、窓の外に目をやった。

それから五分程度で彼女の友達の家に着き、止まった車の中で彼女がコートを返そうとそれを脱ぎだす。

「持っていていいよ。クリーニングから返ってくるまで、コート使えないでしょ」

「え、でも、持ってたら変に思われるし。永井さんも困るでしょ？」

「誰も俺のだなんて気付かないよ。それに、家にまだあるから」

彼女の言っている『困る』が万里子に関することだとは分かってはいたけど、それには答えずに、彼女にコートをそのまま持たせる。彼女はそれを了承し、お礼と共に車を下りた。助手席側の窓を開けてやると、彼女が中を覗き込んでくる。

「今日は、ありがとうね」

「気にしないで。来週一週間はゆっくりしてるんだよ」

「はい」

彼女は笑って手を振り、向きを変えようとした。そんな彼女を呼び止めて、もう一度彼女と開かれた窓を通して向き合った。

「俺も、君の味方だから。だから、何言ってくれても大丈夫だよ」
「……うん。ありがとう」

俺の言葉に、彼女は少し目を開いて驚いた。そして、少ししたあと戸惑いながらも頷く。俺はそれに微笑み、彼女にもう行くよう促した。彼女は今度こそ車に背を向け、友達のマンションの入り口へと入っていく。

それを見届けてから、車のアクセルを踏んだ。

車を走らせながら、彼女の言葉を思い返した。彼女は、よく分からなくなってきたと言っていた。それは、たぶん、俺のせいでもある。けど、彼女がそれを口にしたっていうことは、少なからずそれを理解していて、俺にその答えを求めているような気もする。

彼女が求めているものは、話を聞いてくれる人というよりも、味方になってくれる人なんだろう。だったら、そうなればいい。元からそのつもりだったけど、はっきりと口にしたのは今日が最初だ。これで、彼女が少しでも俺を頼ってくれればいいと思う。

家に続く道を車で走りながら、薬指に光るものを目に止める。これは、確かに彼女のストッパーになっている。けど、俺にしてみれば、こんなものよりも、古賀という彼の方がよほど大きなストッパーになっている。

彼は、当分何も起こすつもりがないようだ。なら、俺にはそのストッパーを壊すチャンスがある。

たとえ、彼が何かを起こそうと思っても、自分に止まるつもりはないんだけど。

「はい、ありがとうございました」

そう言つて、彼女がテーブルを滑らせて紙袋を俺に渡してきた。なんだと思つて中を見ると、それは俺が先週から彼女に貸していた俺のコートだった。透明のビニールが掛かつてるつてことは、ご丁寧に、クリーニングまで出したらしい。彼女の着ているコートは、以前の彼女のもので、見た限り傷跡なんかもまったく目立っていない。

「クリーニングなんか出さなくてもよかったのに」
「いいの。そこは礼儀なんだから」

袋を受け取つて横の空いた椅子に置きながら言つと、彼女はそう言いきつて、テーブルの上にある紅茶に手を伸ばした。

今日は、珍しく彼女から連絡をもらつて、いつものカフェに来ていた。彼女と知り合つてからほぼ毎週のようにここに来ている。やっぱり、平日の俺たちが来る時間はお客は少なく、彼女と同じような年代の女の子たちや近所の奥さんたちが子供連れで来ているような感じだった。彼女に連れられてここに来るようになって、コーヒー一辺倒だった俺がたまに紅茶を飲むようになった。そんな俺を見た研究室の院生が、ひどく珍しがっていたのを覚えている。

彼女という存在が、少しずつ俺の生活に入り込んできているようだった。

「それで、どうでした？ 久しぶりの休暇は」

椅子に深く腰掛けてそう尋ねれば、彼女はえらくすっきりした顔つきになって、紅茶のカップを置いた。

「何かね、バイトがないっていうだけで、すごい楽だった。明日は久しぶりに友達と買い物に行くんだ」

やたら嬉しそうに話す彼女に思わず笑みが漏れる。

「よかったね。だったら、来週からもセーブしなよ」

「うん。来週からは少しコマ数減らしたんだ。休んだおかげで、けっこう異常な生活してんだなって再認識した」

彼女はそう言って笑う。俺もそれにつられて笑って、紅茶を一口飲んだ。

確かに、以前の彼女の生活は異常かもしれない。前は、家にいる時間がほとんどないと言っていたくらいだ。今はそれほどでもないらしいけど、学校とバイトの往復ばかりしていた時は電気代がわずか千円だったという時もあったらしい。いまだきそんな学生がいるのかと笑ったけど、案外本当かもしれない。

「原付も無事に返ってきたし。よかったよかった」

「ミラーだけだったっけ？」

「うん。車体も傷ついちゃったけど、それはどうしようもないから」

「そうだね」

彼女の原付の車体の擦り傷を思い出して笑ってしまう。道路に横滑りしたという彼女の原付は、転がった側のミラーだけが割れて変な方向に曲がったらしいけど、それは飛び出した男の子の親からしっかりと修理費が出て、修理してもらったという。今日、いつもの商業施設で返ってきた原付を見たが、ミラー以外は正常だった。ただ、その車体は擦った痕がひどく、原付に入っていた文字がかすれて見えるくらいだった。あれでよく気絶するだけで済んだと思う。俺が笑うのを見て、彼女も自分の原付の状態を思い出したらしく、両手で顔を覆って笑った。

ひとしきり笑うと、彼女は手を顔から離し、袋に入ったコートを指さす。

「永井さんは、コートのこと、何にも言われなかった？」

彼女の顔が何か面白いことを期待しているような顔になる。

「別に。知り合いに貸したって言ったから、特に何か言われたりはなかったよ」

俺が肩をすくめて答えると、彼女は少しつまらなさそうな顔をしたものの、「なら良かった」と言うので、それなりに心配はしてくれていたようだ。

実際には、何か言われたりはした。今は袋に入っているこのコートが特によく着ていたというのもあって、誰に貸したのか万里子はしつこく聞きたがった。万里子も俺が金曜日は別の大学に行っていることは知っていて、大学の知り合いに貸したのだと言っても、簡単には信じてくれなかったのだ。『大学の知り合い』には間違いはなく、本当のことを言ったのだが、万里子はどんな人なのかを知りたがった。仕方なく、大学の教授が自分のコートに水をこぼして使えなくなっただけから貸したという嘘をつく、万里子は変に思いながらもそれ以上は何も聞かなかった。けれど、これを彼女に言うつもりはない。言え、また変に気を使うだろうことは分かっている。そうなれば、彼女からこの間の飲み会での出来事を聞くことはできない。

彼女の方を見ると、彼女は息を吹きかけて紅茶を冷ましながら飲んでた。先週、自分も味方だということを伝えた時は戸惑っていたが、今はそんなことは忘れてしまっているかのように普段通りにしている。彼女が話したのを待とうか、自分から聞くかを考えていると、テーブルに置かれていた彼女の携帯が振動した。

俺がそれに目を移すと、彼女もカップをテーブルに置いて携帯を手にとった。そして、何事もないようにして、携帯を隣の椅子にあるリュックの上に放る。

「電話じゃないの？」

「ん？ ああ、まあ、いいの」

彼女は曖昧にそう言って、俺から目を逸らした。しばらくして振動

音は止んだが、すぐにまた鳴りだす。確認した彼女がうんざりしたような顔になる。どうやら、相手はあの彼氏らしい。

「出た方がいいよ」

俺が見えない携帯に目を向けて言うと、彼女も観念したように携帯を取って通話ボタンを押した。

「もしもし？」

電話に出ながら、彼女は俺に外を指差し、席を立った。そのまま彼女は店の出口に向かい、外に出て電話を続ける。

俺はゆっくり紅茶を飲みながら、外で話す彼女に目をやった。彼女は、ここからでも分かるくらい苛々した様子で電話を続けている。電話に出たときも、声に若干の棘が混じっていたなと思う。しかし、ほとんど毎週彼女と会っているけど、この時間に彼氏から電話が掛かってくるなんて珍しいと思う。

ものの五分ほどで、彼女は電話を終わらせ中に戻ってきた。

「大丈夫？」

席に戻ってきた彼女は、苛々したのを隠そうともせず、携帯をリュックの上に放り投げる。両腕をテーブルの上で組んで彼女に尋ねると、椅子に座った彼女は大きく息をついた。そして、飲み会の場で

見たような、泣きそうな顔になる。俺と目は合わさない。

もう一度は尋ねずに、ただ泣きそうな彼女を見る。彼女は足も腕も放りだすようにして伸ばして座り、ゆっくりと俺に目を向けてきた。

「何で、私が責められないといけないの」

彼女はそう言って、唇をぎゅっと合わせる。

きっと、知り合い——俺といるから電話はできないと彼氏に言つたのを、彼氏が納得しなかったんだろう。地球の向こう側にいる彼女は彼女がこちらで何かをやっていて、自分の時間を過ごしていることを考えたりしないんだろうか。

「きっと、大半の人が君を悪いように言うかもしれないけど、俺や君の事情を知ってる人たちは、君を責めたりなんてしないよ」

「やっぱり、悪いのかな」

「どうか。君の事情を知らない人たちからしたら、そうかもね」

彼女は、俺の言葉に苦笑いを浮かべる。

「でも、少なくとも、俺は君を責めないよ。今だって、泣きそんなのを我慢してるのに、悪くなんて言えないでしょ」

「そんな顔してる？」

「うん。前に飲み会で会った時と、同じ顔だ」

彼女が自嘲的な笑いを漏らして、俺の視線から逃げる。俺は何も言わないで、彼女がこちらに来るのを待った。

「あつちは、私が今何してるかとか、考えたことあるのかな」

少しして、彼女が俺を見て呟いた。

「今日やこの間のこと見てると、あんまり考えてないみたいだね。というか、考えてるけど、自分が一番だと思いたいんじゃないかな」
「ああ……」

彼女が何となく納得したように頷いた。思い当たる節があるんだろう。

彼氏は彼女が何をしてるかということに関してはほとんどお構いなしで、考えてたとしても、自分が何よりも優先されていたと考えられているような気がする。付き合っていたら、そんな気持ちを持って当然なのかもしれない。でも、今は普通の恋人とは状況が違うことを、彼氏の方は理解する必要がある。彼女の今の生活は、きつとバイト関係が中心になっている。そうさせたのは、間違いなく留学という問題であり、彼氏もそれに関係しているはずだ。それでも、向こうには伝わらないのだろう。そのはがゆさが、彼女を苛立たせる原因にもなっている。

「電話できないって言ったらさ、私が悪いっていうみたいにして、『じゃあ、いいよ』とか言うんだよ。ごめんとか、やっぱり大丈夫

とか言ってほしいのが見え見えで、なんかやだ」

彼女は呆れたように鼻で笑う。

それを聞いて、本当に俺が考えているような人間なんだろうなあと
思ってしまう。どうあっても、彼女には自分が必要だと思っ
てほしいみたいだ。俺が知る限り、彼女に必要なのは恋人という名
前がついただけの人間ではなく、彼女の味方になって、そばにいて
くれる人間だ。上辺だけ味方になんかなるんじゃないで、本当に、
絶対的に味方になってくれる人。それが、彼女が求めているものな
だろう。

「勝手に行っておいて、さみしいなんて、意味が分かんない。電話
もしたくないって言ったし、メールもしたくないって言った。連絡
なんて取り合いたくないって、言った」

彼女はそう言っ、また俺から視線を外す。ただ、今度は気まずさ
とかそういうことからではなく、自分が泣きそうになるのを必死に
耐えるためだ。

彼女は、この彼氏がいない期間を、何事もなく過ごしたいのかもしれ
ない。彼氏が留学に行っていたという事実や、自分が行けなかつ
たという事実を、全部なかったことにして、彼氏が帰ってきてから
も何事もなくやっていきたいと。

何も知らない人間から見れば、それは彼女の勝手なエゴかもしれな
い。けれど、彼女はそれも分かった上で、そうしたいと望んでいる
んだろう。そうすれば、自分の夢が叶わなかった現実を無視できる。
彼女が連絡を断ちたいと思っっている理由の根底には、きっと、それ
がある。

「……勝手だね」

俺から視線を逸らせたまま、口の端を上げて彼女がそう呟いた。そして、目の前にあるカップに手を伸ばす。

今の『勝手』は、彼氏ではなく、自分に言っただろう。勝手か。勝手じゃない人間なんていないだろうし、自分のことを勝手だと認識してる人間の方がよっぽどマシだと俺は思う。

「君の思うようにしたらいいよ。何を思うか、何をするか。それに何かを言う人もいるかもしれないけど、気にしないでいい。君の事を理解してくれる人は、ちゃんといるんだから」

彼女がカップをテーブルに置くのを待つて言えば、彼女は逸らせていた目を俺に戻していた。そして、少し驚いたような顔をする。

「君の生活の上では、何かを決める権利は君にだけあるんだから」

「でしょ？」と最後に付け足せば、彼女は少しの間ぽかんとした後、やっと笑顔になって「ありがとう」と言った。

俺もそれに笑って返し、腕をテーブルから離して紅茶を飲む。

「ほんとに、こっちにはこっちの都合があることも考えてくれたら

いいのに」

「それが出来るならとくにやってるよ。出来てないから、君をそこまで苛立たせるんでしょ」

俺がそう言つと、彼女は「そうだねー」と言いながらおかしそうに笑った。先ほどの泣きそうな顔は、彼女の表情からなくなっている。少しは、すっきりしただろうか。そんなことを思いながら、紅茶を啜った。

あれからしばらくして、カフェを後にした。

彼女はあれから彼氏のことを話題にすることはなく、代わりにバイト仲間たちとのことを口にしていた。彼氏のことを話しているより、バイトなんかの話をしている時の方が彼女はずっと楽しそうだ。やつぱり、彼女にとってバイトやその友達とのことは、生活の中心になっっているんだろう。

いつも彼女が原付を止めている商業施設に着いたのは、6時過ぎだった。いつもはもっと早いんだが、今日は割とカフェでゆっくりしていたらしい。駐車場に入ると、彼女が原付を止めている駐輪場の近くまで車を進めた。夕飯近くだからか、今の時間はそれなりに車がある。車を駐車場の端の方にある駐輪場の近くに止めて、サイドブレーキを引いた。

「じゃあね」

「うん」

彼女は頷くと、鞆を持って車を降りようとしたが、何かに気付いたように「あっ」と声をあげてもう一度シートに座りなおした。

「どうしたの？」

彼女の行動の意味が分からず尋ねると、彼女は朝から持っていた小さな紙袋の中から小さな透明の袋を取り出した。

「はい」

そう言って差し出された袋には、口の部分が可愛らしく紐で結ばれていて、中を見ればカットされたチーズケーキが入っていた。

「なに、これ」

「お礼だよ。コートの」

彼女が差し出したものに目を丸くして聞くと、彼女は当たり前だというように返してきた。あまり状況が飲み込めていないものの、一応差し出された袋を受け取る。あまり反応を示さない俺に、彼女は苦笑しながら口を開いた。

「一応友達からも好評価はもらってるから、心配なくていいよ」

「あ、そう」

「え、甘いものダメだった？」

「いや、大丈夫だけど」

彼女の質問に首を振って答える。特に甘いものが嫌いというものないし、出されたものは何でも食べる。が、これはそういう普通の類のものではないし、どう反応していいか分からなかった。

「何で、今？」

「だって、さすがにカフェでそれは渡せないでしょ。中身見えてんに」

そう言っただけで苦笑する彼女に、そうかと納得する。

だいたいこの状況が飲み込めてきて、袋をちゃんと持ち直してから彼女に笑いかけた。

「ありがとう」

「うん。あ、でも家に帰る前に食べちゃいなよ？」

「ああ……」

彼女の言葉に今度は俺が苦笑する。

確かに、こんなものを家に持って帰ったら、万里子が何を言うか分からない。コートは教授に貸したことになるし、誰に貰ったかを説明するのは一苦労だろう。会ったこともないのに、彼女は万里子のことをよく見抜いている。

彼女は俺が苦笑いするのに笑って、「じゃあね」と言って今度こそ車を降りようとした。それを、彼女の腕を掴んで引きとめる。

「なに？」

彼女がきょとんとしてこちらを振り向いた。

「どうせならここで食べてくからさ、それまでいてよ。一人で食べるなんて嫌だし」

そう言えば、彼女は呆れたように笑った。それから、リュックの中を探り、財布を取り出してからまた俺の方を見る。

「コーヒー？ 紅茶？」

「じゃあ、コーヒーで」

俺の答えを聞くと、彼女は財布だけを持って車を降り、すぐそこにある自販機に駆け寄った。彼女がコーヒーを買いにいつている間に、ラッピングの紐をほいてケーキを取り出す。

「はい」

「ありがとう」

戻ってきた彼女からコーヒーを受け取り、運転席のホルダーに入れる。彼女を見れば、自分の分は買ってきてないようだった。彼女が

横で座りなおすのを横目に、ケーキをそのまま一口頬張る。濃厚なチーズケーキの甘い味がした。片手でコーヒーのタブを開けながら、うんうん頷いてみる。彼女が窺うように、こちらを見てきた。

「おいしいよ」

「よかった」

彼女は満足そうにそう言って笑う。

もう一口食べてコーヒーを飲むと、甘いケーキと苦みのあるコーヒーでちょうどいい感じだなと自分でも思った。

「ケーキなんて作るんだね」

俺がそう聞くと、彼女はわざとらしく心外だというようにして顔をしかめた。

「こう見えても、料理はそれなりに出来るんです。お菓子もたまに作るし。それに、今週はけっこう暇だったから」

「なるほどね」

頷きながら、彼女がくれたケーキを食べていく。予想以上においしくて、自分でも分かるくらいぱくぱくと進めている。ケーキはすぐになくなった。最後の一口を食べ終えてからコーヒーを飲み、彼女の方に向き直った。

「ありがとう。おいしかったよ」
「どういたしまして」

彼女は笑ってそう言ったものの、少ししてから困ったような顔つきをした。どうしたと聞くように首を傾げれば、彼女は俺を見て小さく笑う。

「さっきは、ありがとう」
「なんのこと？」

お礼の意図が分からず、先ほどよりも首を傾げてしまう。

「さっき、何をするかも考えるかも、私の思うようにしたらいいって言ってくれたでしょ？」

「ああ、うん」

「あれ、嬉しかったんだよ。決める権利は私にしかないっていう風にも言ってくれて」

彼女は先ほどの事を思い出しているのか、少し俺から視線を外してそう言った。その顔は本当に嬉しそうで、意図を理解した俺は、彼女の顔をじっと見ていた。

「古賀さんもさ、そういう風に言ってくれたことがあって。そうやって言われると、少し安心する」
「そっか」

彼女が再びこちらを向いて言うので、俺は笑みを返してそれに答える。

古賀という彼が、彼女にそう言っていたとしても、今は何も不思議に思わない。彼は、たぶん、彼女に今一番近いところにいて、いつだって彼女の味方になる人間だろう。彼女の欲しい言葉も、分かっている。当然のような気がしていた。

「今日は、永井さんがいてくれてよかった」

彼女はそう言って続ける。

「永井さんがいなかったら、今日は家で一人で勝手に苛々してただけだったろうし。あの時、永井さんがいて、ああ言ってくれて、なんか、安心した。永井さんは、味方でいてくれるんだって」

だから安心したと言う彼女。そう言って嬉しそうに笑う彼女に、自然と笑みが漏れていて、目を逸らせなかった。

「勝手だって分かってるけど……」
「勝手じゃないよ」

俺の視線に気付くことなく話す彼女の言葉を途中で止める。彼女が首を傾げる。俺は彼女から視線を外さなかった。

「君は、夢が叶っていなくても、頑張ってるじゃない。貧血気味だつて言われるまで、がむしゃらに頑張ったんでしょ？　そうまでして何とかしようとしてる君に、勝手だなんて、誰も言えないよ」

その言葉に、彼女は少し笑って、泣きそうな顔をした。

「ほら。そう言ってくれるでしょ？　そんなこと言ってくれる人、ほとんどいないから、本当に嬉しいんだよ」

彼女は笑ったまま、泣きそうな顔でそう言った。そんな彼女の顔に手を伸ばし、目元に手を触れ、そのまま片方の頬を手で包むように触れた。彼女の目が、少し驚いたように丸くなる。

「言ったでしょ？　俺も、君の味方だって」

彼女は口では答えず、代わりに数回小さく頷いて俺の言葉に答えた。彼女が頷くのを見て笑みを返し、触れている頬を指で撫でる。先週出来た擦り傷は目立たないくらいのかさぶたになっていて、触れなければ分からないくらいだった。

俺は彼女から目を逸らさずにしていて、彼女の目が戸惑いで揺れているのが分かった。ゆっくりと、頬を撫でていたのを止める。けれど、頬に触れた手はそのままだった。

つけっぱなしにしてあるラジオから流れている曲が終わりを迎えた。どちら側かのシートが、キツと音をたてた。

「帰るね」

瞳を戸惑いで揺らしたまま、彼女が言った。その言葉と同時に、俺から顔をそむける。自然と、彼女の頬から俺の手も離れた。

「うん」

何事もなかったように返事をし、触れていた手をハンドルに置いた。彼女が鞆を持って、ドアに手を掛ける。

「気をつけて」

「うん」

じゃあねと続けて、彼女は車を降りた。俺の顔を見ないまま。

彼女が駐輪場に走って、原付で帰っていくのを見送りながら、窓に肘を置いた。

自分の行動に呆れた笑いが漏れる。一体、何をしようとしたのか。彼女が座っていた助手席を見て、また笑みが漏れる。まったく、自

分で自分を制御できない年でもあるまいし。

彼女の言ったことに、自分も嬉しさを覚えたことは自覚していた。彼女が俺の言葉で嬉しくなったと言い、俺もそれを嬉しく思った。彼女が微笑んで、それに目を離せなくなった。そして、彼女に触れたいと思ったことも、覚えていた。

ただ、それからどうしようとしたのか、何かをしようとしたのか、キスでもしようとしたのか、それは分からなかった。分かりたいのか分かりたくないのか、それすらも。そんな自分にまた苦笑する。

どうやら、俺が思っていた以上に、彼女は俺の生活に、俺自身に、入り込んできているようだ。

苦笑いを漏らしたまま、車を発進させた。

どういふつもりなんだ、あの人は。

腕を組んで塾の窓を見ながら思った。外はもう真っ暗で、窓には自分の姿がはっきりと映っていた。その顔は、けっこうなしかめっ面をしている。それもこれも、全部永井さんのせいだ。

「せんせー。おーい。せんせー」

「……へ？」

じつと窓を見つめていたら斜め後ろから生徒の呼ぶ声がして、慌て振りかえる。高校生の女の子が、呆れたようにこっちを見ていた。

「先生、さっきから窓見すぎて怖いよ」

「申し訳ございません」

わざとらしく頭を下げて女の子の解いた問題を見ていく。もうすぐ学期末テストだという女の子の問題を見ていき、間違っていたところを解説していく。女の子はふんふん頷きながら話を聞いていて、それが一段落つくと、またこっちを見てきた。

「なんかあったの、先生」

生徒が少し首を傾げて聞いてくる。そんな彼女を見て、かわいいなあなんて考えてしまう私は相当頭がおかしくなってきたのかも知れない。いや、実際、この子はいかにも可愛いんだけど。私服なんて着たら、たぶん私よりも大人っぽく見えるだろう。

「いやー、最近レポート溜まってきたから、何から片付けていこうかなあつて考えてた」

「うわー。レポートとか大学生っぽい」

「大学生ですから」

生徒の言葉に胸を張って答えてやる。受験生でもある彼女は私の発言に羨ましがって、笑いながら「腹立つー」と返してきた。私もそれに笑い返し、次のページを指示して立ち上がる。今度は、窓側の壁に寄りかかって腕を組んだ。

このよく分からない状態を、誰に聞けるといふんだろう。友達にも無理だし、ましてや生徒になんて言えるわけない。

車の中でおかしな雰囲気になった先週の金曜日。あれから永井さんは、特にそのことを気にする様子もなく連絡を寄越してくる。私もそれには返しているけど、永井さんほど先週のことを気にしていないわけではないので、返信は控えめだったりする。いつもなら永井さんと会う金曜日だけど、今日は風邪で講師が足りないという塾からの要望に都合良く乗っかり、永井さんと会うことを回避してきた。一週間経つてもまだ混乱したままだっているのに、こんな状態で永井さんと会うなんて絶対に無理だ。本当に、あの人はどういうつもりなんだ。自分の立場を、薬指にある証を、しっかり覚えていてほしい。

そんなことを思いながら、小さく溜め息をついて顔をあげた。そうしたら、少し離れたブースで教えていた古賀さんと目が合って、古賀さんが何か尋ねるように首を少し傾けた。私はそれに何でもないという風にして肩をすくめ、また壁にい寄りかかって問題を解く生徒をぼんやり眺める。

最近では、私は金曜日にシフトを入れていないので、金曜日に塾に来ることはほとんどない。たとえ講師が足りないと言われようが、自分の休日は断固として守ってきた。けれど、今日に限っては、その主義を少し曲げている。他の講師は私が今日来たことについて何にも不思議に思っていないけど、古賀さんはたぶん不思議に思っている。金曜日に私と永井さんが会っていることを知ってる古賀さんは、私が今日塾に来たのを見てぎょつとしていたんだから。その時は、古賀さんはもう授業に入っていて、私に塾にいる理由を聞いてこなかった。だから、この最後の授業が終わって、二人で喋ってるときに聞かれるだろうなとは予想している。というか、聞いてくれた方がありがたい。そうしてくれれば、今のこのややこしい状況を相談できる。本当は、あんまり聞きたいことでもないけど。でも聞かなかつたら、頭がこんがらがってどうすればいいかわからない。

全部、永井さんのせいだ。

「で、何で今日塾来てんの？」

塾が終わって、二人して塾の駐輪場の定位置に落ち着くと、案の定古賀さんはそう尋ねてきた。さっきまで聞いてほしいとか思っていたくせに、いざとなるとどう答えていいのか分からなくなって、とりあえず口を開かなくていいように鞆から財布を探す。古賀さんはそんな私をちらつと見て、自分の鞆から携帯を取り出しそれをいじり始めた。そんな古賀さんを横目に、鞆から財布を取り出した私は道路の向こう側にある自販機に歩いていく。そこで自分の分の温かいミルクティーと古賀さんの分のコーヒーを買って、元の場所に戻った。

「はい」

コーヒーを差し出すと、古賀さんは少し驚いた顔をしてそれを受け取った。私は元いた自分の原付に座る。

「んで、どうしたんだよ」

コーヒーを開けて古賀さんが再度尋ねてきた。私も缶を開けて、一口飲んでから口を開く。

「ちょうどいい時に、ちょうどいいヘルプのお願いが入ったから」

何となく、曖昧にして答えてみる。古賀さんはコーヒーを飲んで、

意味が分からないという顔をしてこちらを見ていた。私はそれにへらっと笑って、またミルクティーを飲む。古賀さんは反対の手に持っていた携帯をコートのポケットの中に仕舞って、今度は意味が分かったというように私の方を向いた。

「つまり、永井さんから逃げてきたと。そういうことですか」
「そうとも言っね」

古賀さんが呆れたように溜め息をついた。

「なに、ケンカでもしたか？」
「ケンカとかないんだけどねえ」

コーヒーを飲みながら聞いてくる古賀さん。私も自分のミルクティーを飲みながら答える。

ケンカなんていう単純なものだったら、ここまで悩む必要もない。ケンカだったりしてお互い避けるどころか、あの人は何の変わりもなく連絡をしてくる。だいたい、私と永井さんはケンカなんてする間柄なんだろうか。週に一度会って、お茶するくらいなのに。

私の答えを聞いて、古賀さんは『じゃあ何だ』というようにこちらを見てきた。

「分かんない。永井さんとの付き合い方も、自分がどうしたいかも」

そこまで言って、ふーっと息をはいた。吐き出した息が白くなって、空気中に消えていく。古賀さんは、何も言わずにコーヒーを飲んでいた。

なんかもう、何が言いたいのかも分からなくなってきた。

「近いんだよ。永井さんとの距離が。なんかさ、私と古賀さんがこの距離にいるのはオツケーでも、永井さんとだったらアウトじゃない？　なのに、永井さんはそんなのまったく気にしてないし」

『この距離』と言いながら、私と古賀さんに出来ている距離を腕を振って示す。私の原付は古賀さんの座っているコンクリートブロックのすぐ隣に止めてあつて、私と古賀さんとの距離も近い。

古賀さんはコーヒーの缶を両手で持ちながら、首を少し傾げた。

「別にいいんじゃないの。永井さんが結婚してるからって、友達止める必要もないだろ。そんな気にしすぎんな」

「気にしすぎていうか、永井さんが気にしてなさすぎるんだよ。結婚してんのに」

そう言うと、古賀さんは少し困ったように苦笑いを漏らした。私はその意味が分からず首を傾げる。

「だったら、お前も一緒だろ」

「なんで？」

「忘れてるみたいですけど、あなたにも一応彼氏という人がいるん

ですが。地球の反対側にですけど」

「うん。知ってる」

「じゃあ、何で結婚してる永井さんとお前のこの距離が駄目で、彼のいるお前と俺とのこの近さはオッケーなんだよ」

「意味分からん」と、古賀さんが私と同じように腕を振って二人の間の距離を示しながら言った。

それを聞いて、ああそっか、と思う。何だか最近はこの感じが当たり前になりすぎて、変だと思うことすらなくなっていた。古賀さんとの距離も、近いなんて思ったことなかった。私にとって、古賀さんとのこの距離は、なくてはならないものだった。永井さんが気にしてなさすぎていうのもあるんだろうけど、永井さんが私にとって、何か新しい人だったから、この距離に違和感を覚えたということもあるのかもしれない。

それだったら、古賀さんとのこの距離も、止めた方がいいんだろうか。そんな久しぶりなことを思った。

「お前が気にしてなきゃ、俺も気にしてない。だから、いちいち俺たちとのことで悩む必要もない」

考えが顔に出ていたのか、古賀さんが何でもない風にそう言ってくれた。その言葉に、ひどく安心する自分がいた。悩むっていうことは、つまり、私が古賀さんとのこの距離を維持したいと思っているからで。それが無理だったら、私にとっての頼りの柱が無くなってしまう。だから、古賀さんの言葉は、素直に嬉しかった。

古賀さんはコーヒを一口飲んで、また口を開く。

「お前がぶつ倒れないように、いつでも話くらいは聞くから。何かあったら、すぐに言えばいい」

そう言つて、古賀さんは笑う。私もそれを聞いて、安心して笑みを向ける。

古賀さんは、根っからの一番上の長男体質だ。本人はそう思っていない。なんだかんだ文句を言いつつも、結局は自分から助けを買って出るようになってしまっている。そんな古賀さんに今一番甘えているのは、他の誰でもない私だ。古賀さんがいてくれる、味方になってくれる、欲しい言葉を言ってくれる。それがあから、私は腐らずにいられる。古賀さんに甘えているから、『彼氏がいるから』とか『彼氏のおかげで』とか言われても、笑って受け流せる。古賀さんが、私の安心に繋がっていた。

「だから、永井さんのことも別段気にする必要はないと思う。けど、お前が何かかしら引つかかるところがあるなら、距離をとって見たら？」

「うん、そうする」

そう言ってみてから、やっぱり永井さんの指輪を思い出した。

「結局、永井さんが結婚してるから変な感じするんだろうね」
「かもな」

二人してそんなことを言つて、同じタイミングでコーヒーと紅茶を飲んだ。それからお互い何も言わなくなつて、ぼーっとしていたら、微かな携帯の振動音が響いた。自分の確かめるけど、それは私のものではなく、古賀さんの携帯から。

古賀さんは缶を持つていない方の手でポケットから携帯を取り出し、何やら操作をしだす。私も、その間にメールのチェックをした。メール件数は二件。彼氏からと、永井さんから。よりによって、どちらも面倒なものだった。

永井さんからのメールは、気をつけてバイトから帰るようだという内容と村瀬健吾が今度出るらしい番組のことを知らせる内容だった。こんな風に、永井さんは先週のことなんか一切持ち出さず、連絡を寄越してくる。今は、返信を送る気力もない。そう思つて、携帯をコートのポケットに仕舞つた。彼氏からのメールは、開いてすらい。

また缶を両手で持ち、足をこつんこつんと原付にぶつけて古賀さんを見る。古賀さんは、何やら悩むようにしてメールを打っていた。

「そんな難しいメール？」

私の声に気付いた古賀さんが顔を上げて、声になっていない声を出して首をひねつた。

「いや。前に藤田さんに言われた紹介。おとといの夜向こうからメール来た」

「へー。どんな感じ？」

古賀さんは、何も言わずにメール画面を見せてくれた。原付から身を乗り出して、その画面を見る。

「『私もバイト二つ掛け持ちしてるから、気にしないでいいですよ。古賀さん何かサークルとかやってるんですか？』　おー、なんか可愛い感じ」

本文を声に出して読み上げ、感想を述べる。送信者欄に『横山美香』とあるそのメールは、可愛い絵文字や顔文字で装飾されていて、いかにも藤田さんの友達という感じを醸し出していた。古賀さんは私の前から携帯を自分の手元に戻し、また本文を打つ段階で悩みだした。そんな様子がおかしくて笑ってしまう。

「何悩んでんの？」

「いや、俺、サークル入ってないから。その後に続く文考えてる」

「なるほど。ただ、メールするだけじゃないんだね」

「俺には藤田さんっていう監視人がいるからな」

真顔でそう言つて、古賀さんは携帯に目を戻す。私はその言葉に笑つて、紅茶を飲んだ。それから古賀さんは、返信をするのかと思いきや、途中で諦めたようで、携帯をポケットの中に仕舞った。

「もう無理。家帰ってから考える」

首を横に振って言い、残ったコーヒを一気に飲むようにして缶をあおった。私も残り少なくなったミルクティーを飲み干す。そうして、二人どちらともなく立ち上がり、道路の向かい側にあるごみ箱に向かつていく。

「まあ、永井さんのことはあんま気にすんなよ」

「そうする。古賀さんは、美香ちゃんのと考えるんだよ」
「はいはい」

それぞれ原付と自転車のところに戻ってきて、帰り支度をしながら言い合う。私が準備を終えると、古賀さんは自転車に乗って手を上げてきた。

「じゃあな」

「うん。ばいばい」

手を振りあって、古賀さんが行くのを見送った。私も音楽プレーヤーのスイッチを入れて、原付をスタートさせる。大通りに出る角を曲がって、その先にある信号機で止まった。その目の前を、古賀さんが横断していく。

古賀さんに紹介があった。それは、良いことだ。ただ、それは良いことだけど、それがはつきりとした形になってしまえば、私と古賀さんの関係は変わってしまうだろう。変わらざるを得ない。古賀さんは、私に彼氏がいようとこの距離を気にしていないと言ったけど、それは彼氏が地球の反対側にいる今だからこそだろう。あっちが帰ってくれば、二人の関係は何かしら変化があるはずだ。彼氏が帰っ

てこなくとも、藤田さんの紹介が上手く形になったときも同じだ。大きな変化はなくても、何かが変わる。

信号が青に変わって、ぶーんと原付を進める。500メートルほど行つて、また角を曲がってバイパス道路に出た。

古賀さんとの関係が変わってしまったら、私は古賀さんという支えと安心を無くしてしまう。そうになったら、私は永井さんを頼るだろうか。味方だと言ってくれた永井さんに。さつきは距離を置くとか言っていたのに、自分に悪いことが起こりそうになると裏返しのかえを持つ自分に笑ってしまう。永井さんとこれ以上近付いてはだめだと、ちゃんと分かっているのに。

古賀さんとの関係が変わるかなんてことは分からない。でも、そうなくても大丈夫なようにはなっておかないといけない。それは、永井さんに頼るということではなく、自分の中で消化できるようにするということだ。これなら、永井さんから距離を置く理由にもなる。近くに味方になってくれそうな人がいると、その人を頼りにしてしまう。永井さんを、そういう人にしてはいけない。永井さんを一番の頼りにするべき人は、私じゃない。その人は、もう永井さんのそばにいる。

私は、ただの友達であろう。偶然知り合った学生であり、友達。今期が終われば、永井さんとの繋がりもなくなる。それでいい。よく連絡を交わしていたけど、段々と疎遠になっていった人。よくあること。

近づくよりも、そうして離れていく方がずっと楽だ。そう結論付けて、家までの道のりを走った。

『ごめん。今日もバイトになった』

昨日彼女から送られてきたメールをもう一度見て、やっぱり何かあったのだろうと考える。先週も、昨日も、彼女と授業以外で会うことなく過ごしてきた。別に、その日の予定なんて彼女のものなのだからあまり構わない。ただ、それに連絡の頻度が減ってきていることとあまりやり取りを続けたくないと思わせる文面が加わると、どうも何かがおかしいと思わざるをえない。それが、二週間前からだとすればなおさら。

彼女がああの車の中でのことを気にしていることは、何となくメールから想像できた。こちらが何も気にしていないような内容を送っていることが、余計に彼女を悩ませているだろうということも。彼女が俺ともう会いたくないというなら、それも仕方ないと思う。元を正せば、俺と彼女には何の接点もないのだから。だが、その理由が俺との距離を気にしてだということならば、俺は後ろには下がらないだろう。

二週間前のあの時から、彼女は俺に近付いてきていた。カフェで話したことが、彼女に届いたのだ。それを彼女も自覚しているから、あの車でのことを気にしている。俺との距離に、どうすればいいかわからなくなっている。そこまではいい。そのの行きついた先が、俺と会わないということなら、俺はそれを良しとしない。その答えに、古賀という彼が関わっているなら、なおさらだ。

「すみません」

肘かけに肘を置いて彼女とのことを考えていると、横から女の人が座席に着くために前を通ってきた。俺は少し深めに椅子に座り、その女性が通りやすいように道を作る。女性が俺の前を通って、俺の右隣に腰を下ろした。それを横目で見て、また先ほどと同じように座って、肘かけに肘をかけてその手を頬杖にする。反対の手で持っていた携帯は、ジーンズのポケットに仕舞った。

今日は、隣の県まで芝居を見にきていた。なかなか大きな劇団で、それなりに名前の売れている役者も出ている。この劇団の関係者と俺の知り合いの教授が知り合いで、その教授から今日の舞台のチケットを貰っていた。万里子も一緒にということだったが、テレビ俳優が出ているならともかく、元からあまり舞台には興味の無い万里子は『知ってる人がいないから』という理由で来なかった。今日は友達と買い物に出かけると聞いている。昨日も先週も彼女に会わずにいて、余ったチケットをどうすることもできず、部屋のゴミ箱に丸めて捨てた。

横の女性が座ってすぐ、開幕のブザーが鳴る。考えるのを止めて、今日の舞台に集中した。

舞台が終わって、挨拶をする出演者に拍手を送る。最後のファンサービスも終わり、幕が下りると、次々と客たちが席を立つ。俺の周りも、どんどん人が立ち上がっていった。隣に座っていた女性も立ち上がり、俺の前を通ろうとして頭を下げる。俺は最初と同じよ

うに深く椅子に座り、前を開けた。女性が前を通ったとき、その人が手に持っていたマフラーが床に落ちた。

「落しましたよ」

気付かずに歩いていきそうになるその女性に声を掛け、椅子から立って落ちたマフラーを拾い、女性に差し出した。声に振り向いた女性性は、20代後半のようで、俺の顔を見て「すみません」と謝ってマフラーを受け取った。女性がマフラーを受け取ったその時、その顔にわずかながらの失望が見てとれた。

「ありがとうございます」

けれど、顔を上げてそう言う女性はきれいな笑顔になっていて、先ほどの表情は何なんだと思う。「いいえ」と答えた時に自分の左手が目に入って、これかと理解した。

「先、進んですよ」

「え？ あ、ありがとうございます」

そのまま俺の前に立つ女性に、前の人が進んでいることを教える。その女性はそれに一瞬戸惑ったものの、また礼を言っ先を歩いていった。女性以外の右側の席にいた客たちは、反対側の通路に向かって出ていったようだ。

小さく息をついて、自分の席にまた座る。左手を肘かけに置きそうになって、薬指にある指輪が視界に入った。さっきの女性も、どうやらこれを見て失望したらしい。こういうことは、何度かあった。女というものは、男を見るととにかく誰でもそういう対象として見てしまうのか、指輪を見て微かに表情を変える人が過去にも何人かいた。大抵の場合、それには何の意味もなく、単に『結婚してるのか』くらいの気持ちだということはこのうちも理解している。面倒なのは、それがかえって相手に火をつける時だ。障害があれば燃えるのか知らないが、しつこいくらいの積極さを向けられたことが主に遠出の学会等で一、二度あった。さっきの女性は、左手のこれを見た後も動かなかったから、もしかしたらこれが見えずにマフラーもわざと落としたのかもしれない。これほど、この薬指に光るものは、それなりの威力を示す。望むと望まないにかかわらず。

もう一度息をついて、今度は俺も立ち上がって出口に向かいだした。出口ドア付近まで来て、そこから先がまだ少し混雑しているようだった。前の人間に合わせて歩調を緩め、ゆっくりとドアの外に向かう。上にどれだけいたのかと思い、自分よりも上の席の方を見た時、ある人間に目がいった。その人は、俺のことに気がついておらず、階段をゆっくりと下りて、俺が出ようとしているドアより数段上にあるドアに向かっていった。驚きのあまり目を逸らせずにいると、その人間——二週間前から会わずにいる彼女、宮瀬春希も何気なしといった風に下を見て、俺に気付いたようだった。遠くからでも分かるくらい彼女は俺を見て驚いているようで、歩いていた足が止まっていた。ほんの少しの間お互いに目が放せなくなっていたが、俺から先にドアではなく彼女に向かって歩き出していた。彼女もそれに気がついたようで、はじかれたようにその場を離れ、前を歩く人たちを避けながらドアに向かっていく。

「すみません。ちょっと通して下さい」

人の間を縫って歩くようにして、彼女の方に向かう。終わり際の人
といえど、人を押しのけるようにして歩く俺に、何人かは迷惑そう
な顔をした。今はそんなものは無視して、彼女の方へと歩を進める。
先ほど彼女が立っていた場所まで来ると、彼女は既にドアの方にい
て、廊下へと出てしまっていた。俺もその後を追って、廊下へと出
る。だが、廊下を出たところには更に大勢の人がいて、彼女の姿は
その中に紛れ込んでしまっていた。右を見ても左を見ても、彼女の
姿は見えなかった。ドア付近に突っ立っている俺を横目に、周りの
客はほとんど先に向かって歩いていく。俺もそれに続こうと足を
一歩前に進める。

流れについて歩いていったところで、やっと劇場のロビーフロアに
出た。客はそれぞれの方向に歩いていつている。舞台のパンフレッ
ト等売っている物販のところにいる人もいれば、併設されている
駅やショップングプラザに向かう人もいる。その中に彼女を探して
みるも、やはりその姿を見つけることはできなかった。

「永井さんじゃないですか」

携帯で彼女に連絡をとろうか考えていた時、横からそう声が掛かつ
た。声の方を見れば、俺にチケットをくれた教授がそこに立ってい
た。携帯を仕舞って、その教授に向き直る。

「どうも」

「いやー、会えてよかった。もう少ししたらここの知り合いと会う約束になっているんだ。一緒に来ないか？」

教授の誘いに、内心顔をしかめてしまう。『ここ』というのは、おそらく教授と知り合いの劇団関係者だろう。正直、今は彼らと一緒に話したい気分ではない。どうにか断る理由はないかと思い教授の方を向くも、教授の方はにこにことした顔でこちらを見ている。心の中で、溜め息をついた。

「ええ、ぜひ」

そうやって笑って答えると、教授は嬉しそうな顔をして「よかったよかった」と言う。

誘いを断っても、彼女を探すことは分かっていた。いるかいなか分からない彼女を探すより、この人たちと話していた方がマシだろうと、自分で自分に言い聞かせて、教授の話に耳を傾けた。

喫茶店を抜けて、腕時計に目をやって、溜め息をついた。今の時間は5時過ぎ。昼の公演を観終わった時間から考えると、約二時間もここで教授や劇団関係者と喋っていたことになる。その二人は、まだ中で喋っていた。このままだと夜も付き合わされそうで、適当な理由を作って逃げてきた。

駅の地下街を歩きだして、家に帰ろうかとも考えたが、今は家に帰る気にならない。どこか時間を潰せるところはないかと考えて、併設されたショッピングプラザを思い出した。そこなら本屋の一つや二つはあるだろうと思い、そっちに向けて歩きだす。

思った通り、本屋は10階建てのそのプラザの8階にあり、そこそこな人がいた。下の服売り場になると、土曜日ということもあってこれより多くの人がいたが。本屋に入って、適当に何かないかとぶらつく。雑誌のコーナーに行くと、ふと小さな文字で村瀬健吾と書かれてあるのが見えた。手にとってみれば、それはカジュアルな女性週刊誌で、パラパラとページをめくると、村瀬の写真とインタビューが3ページほどあった。メジャーな週刊誌に出るくらいなのだから、村瀬もだいたい名前が売れてきてるらしい。記念に買っただけでやろうかとも考えて本を手には顔を上げると、棚の向こう側にある通路に、彼女がいた。

彼女は、本屋の目の前にあるエスカレーターの横のソファに座っていた。手持ちぶさたな様子で、携帯をいじっている。こちらには、気付いていない。棚を挟んだこちら側で黙って彼女を見ていると、今度は彼女のことをちらちらと見ている大学生くらいの男が目に入った。自然と、眉間にしわが寄る。大学生は彼女の隣にあるソファに座っており、よく見ていると、彼女だけでなくその向かいにあるCDショップにも目をやっている。その視線を追って、俺の位置から斜めにあるCDショップを見ると、二人の大学生ほどの男が彼女の方をやし立てるように見ていた。

そういうことかと、呆れてしまう。彼女の方を見れば、横のソファの男にも、その向かいにいる男にも気付いていないようだった。彼女も女の子のようで、今日みたいな日には服にも気を使ってくるらしい。いつものジーンズ姿と違い、今日はスカートをはいていた。そういえば、以前に会った舞台の時もいつもと服装が違っていたのを思い出す。劇場で見たときは気がつかなかったが、今日は髪も何

かしらアレンジしてあるようだった。

見ていると、彼女も男の方もどちらもまだ動きそうになかった。本を持ってレジへと向かった。

レジで会計を済ませて、彼女が座るソファへと歩いていく。彼女も、男も気が付いていない。

「はい」

彼女の斜め前に立って、今買ったばかりの雑誌が入っている袋を彼女の前にぶら下げた。俺の声に、彼女が勢いよく顔を上げる。その顔は、驚きと戸惑いが混ざっていた。

「え、」

「村瀬が出てたよ。これ」

驚きや戸惑いに加えて、意味が分からないという表情も顔に表れ、彼女は何度も瞬きをする。そんなことは無視して、彼女の前で袋をぶらぶらと揺らす。

「ほら」

「あ、うん」

目の前で揺れる袋を、彼女は意味も分からず受け取った。その時に、ちらっと気付かれない程度に横にいる男を見ると、その男は明らか

に落ち込んでいるような顔でこちらを見ていた。CDショップにいた男たちの方は、『あーあ』というように顔に同情とも諦めともとれる表情を浮かべている。隣の男が友達のところに戻ったのを見てから、座っている彼女に目を戻す。彼女の顔から驚きはなくなっていたが、戸惑いは依然として残っていた。そして、その顔のまま、彼女は居づらそうに視線を泳がせている。俺も何も言わずに、彼女が携帯を持っている方の手を取って、彼女を立たせる。彼女の顔にまた驚きの表情が戻って、俺を見上げている。

「なに？」

慌てて彼女が手を放して、携帯をポケットに仕舞い、尋ねてくる。

「いいから。行くよ」

離れた手をもう一度掴んで、俺は彼女を連れて下りエスカレーターに向かった。

目の前の一人掛けソファに座る彼女は、居心地が悪そうに視線をうろろさせている。小さな丸テーブルを挟んだ向かいに座っている俺は、肘かけに肘を掛けて頬杖をしながらそんな彼女を見ていた。俺が彼女を引っ張って連れてきたのは、ショッピングプラザの一階に入っていた大型コーヒーチェーン店だった。店に入っても彼女の手は放さず、連れだったままカウンターで彼女が以前に頼んでいたものと自分の分のコーヒーを注文した。そして出てきたそれをトレイで持って、店の奥の方にあるソファ席に座ったのだ。

「俺が怒ってるの、分かってる？」

彼女を見たまま尋ねると、彼女は遠慮がちにこちらを見て、諦めたように数回頷いた。そして、俺がオーダーしたラテを飲む。俺も、自分で口にして、どうやら本当に彼女の態度に多少の苛立ちを覚えていたのだということを再認識した。

「ごめん。あんな態度とって」

彼女は素直にそう口にした。彼女が言っているのは、劇場でのことだろう。確かに、あれにも腹が立ったことは事実だ。ただ、あれだ

けじゃない。ここ数日の彼女の態度が、俺を苛立たせている。少しずつ、何もなかったかのように、俺から距離をとろうとしていることに。それに付随して、先ほどの彼女を見ていた男のこともあった。

「さっきのことだけじゃないよ」

暗に最近の彼女の態度を指して言えば、彼女は決まり悪そうに視線を俺から逸らせた。それがまた、俺を苛立たせた。

どうも、さっきの自分の認識を訂正しなければいけないみたいだ。

『多少』の苛立ちではない。彼女の態度に、『かなり』苛立っているようだ。

「何をそんなに頑なに拒否してるの。俺と君の距離が近くなるからって、誰かが悲しんだり、怒ったりするわけじゃない」

彼女はそれを聞いて、ぎゅっと唇を合わせる。それから、視線を泳がせることなく、俺の方に向いた。

「近くなってるって分かってるなら、それなりの距離保ってよ」

そう言う彼女の目は真剣だった。

彼女の言葉が、二週間前の出来事を指しているのはすぐに察しがついた。そして、俺が彼女を混乱させていることを、彼女が分かっているということも。

「俺と君との間には、何もないでしょ」

「……それ、本気で言ってる？」

「たぶんね」

俺が答えると、彼女の眉間にしわが寄った。俺はそれに気にせず、目の前のコーヒーに口をつける。

俺と彼女の間に何もないことは本当だ。何かがありそうだったことはあるけど。それだって、結果的には何もなかった。なら、今のところは何もないということでもいい。

「それより、何で今日いたの？」

コーヒーを置いて、話題を変えた。彼女はそれに顔をしかめたけど、何か異論を唱えるでもなく、小さく息をついただけだった。

「授業で今日観た舞台のDVD少しだけ見たから。気になって調べたら、ちょうどここでやってたし、観にきた」

「そうなんだ」

両手でラテの入ったカップを持ちながら、彼女は言った。ラテを冷ましながら飲む彼女を見ながら、やっぱりそれなりに優秀なんだなと思う。

彼女は俺の授業でも、たぶん、最終成績はトップに入るだろう。彼

女の全体の成績は知らないが、この分野に関してそれなりの力を持つていることは、授業を通して知っていた。彼女がDVDを見たという授業も、演劇だったり舞台といった芸術文化に関係しているものだと思う。この分野の勉強のために留学を目指していたという話も、以前に聞いていた。あれだけのレポートを書くくらいなら、本当に行けなくてもつたいないと思ったことも覚えている。こっちで勉強しても彼女なら何かを得られるだろうが、彼女のように西洋舞台を中心に興味を持っているなら、やはり現地で勉強することが一番だろう。

そんなことを思いながらコーヒーを飲んでいると、今度は彼女の方から質問を投げかけられた。

「永井さんは何でいたの？」

カップをテーブルに置きながら尋ねてくる彼女に、何でもないといったように肩をすくめた。

「知り合いの教授からチケット貰ったんだ。言ってくれたら、余ってたからあげたのに」

そう言えば、困ったように彼女は笑う。どうあっても、俺との距離を縮めたくないらしい。

「舞台の後、あんなところで何してたの？」

代わりにそう聞くと、彼女は「ああ」と苦笑いを漏らした。

「こっちの友達とご飯食べる約束してたんだけど、サークルの人から誘われたってドタキャンされた」

「残念だったね」

「まあ、その誘われた人が、友達の好きな人だったから、いいかなって」

彼女はそう言って微笑んだ。他人の幸せを、そのまま素直に受け取って、喜んでいた。もちろん、それは仲の良い友達だからというのもあるんだろうけど。連絡が来たときも、こんな顔で笑ったんだろう。それを、あの大学生の男が見ていたのかもしれない。

「喜ぶのはいいけど、もう少し気をつけた方がいいよ」
「何が？」

意味が分からないといった顔で、彼女が俺の方を見てくる。どうやら、本当に先ほどの男のことは目に入っていなかったようだ。

「君が座ってた隣で、大学生の男が君のことずっと見てたから」
「え？」

彼女が思いつきり顔をしかめた。俺が肩をすくめると、呆れたとい

うように息をつく。

「よくそんなの気付いたね」

「まあね」

「もしその人が話しかけてきてたら、面白がって見てたでしょ」

口の端を上げて、彼女は笑ってそう聞いてきた。コーヒーを飲もうとして持ったカップを膝で止めて、彼女の顔をじっと見る。

「いや。話しかけさせるなんて嫌だったから、その前に動いた。雑誌はそのための口実だよ。放っておいたら、君はそのままついていっちゃいそうだったからね」

俺の言葉に、彼女が固まる。

「……嘘、ついてよ。そこは」

そして、また最初のように視線をうつつかせてラテのカップを手にとった。俺は持っていたコーヒーを口元まで運んでそれを啜る。

「無理だよ。本当にそう思ったんだから」

コーヒーを置きながら彼女の言葉を断る。椅子に深く座って、彼女の方をじっと見た。彼女はカップを両手で持ったまま、小さく溜め息をつく。

「私のためにじゃなくて、それとペアのやつをはめてる人のために
ついて」

言いながら、彼女の視線が俺の薬指に注がれる。俺は左手をテーブルの上で広げて、自分でもその手を見た。その薬指には、しっかりとシルバーの指輪が光っている。

「……わかった」
「え？」

自分の手を見ながら言うと、彼女はラテを飲んでいた手を止めてこちらに目をやった。

「君がそんなにこれを気にするなら、もう君を混乱させるようなことはしないよ。ただ、君の味方にいる」

「どう？」と聞けば、彼女は何のことか理解していないような顔つきをした。だが、少しして、安心したような笑みを浮かべる。それから、何も言わずに数回頷いた。俺もそれに笑みを返し、またコーヒーのカップを手を取った。

事実を言えば、今の言葉はほとんどその場限りのものともいえなくはない。それでも、彼女が俺の指に光るものを気にしてる以上、何かをする気には今はなれなかった。ただ、この気持ちがいままで続くか自分でも定かではない。それを、彼女に伝えるつもりはないけど。

それから一時間ほどして、その店を出た。時間は7時を少し過ぎていて、外はすっかり暗くなっている。電車で帰るといって彼女を無視して、駅前の駐車場に止めていた車に乗らせることにした。聞けば、今日は元から友達と家で飲む約束をしていたらしく、最寄り駅から歩いて帰るつもりだったらしい。夕方に見た男のことを考えれば、送っていったほうが安心だった。

劇場のある駅から彼女のマンションまでは、一時間程度だった。マンションの窓からは光が漏れているが、外には誰もいなかった。

「じゃあ、ありがとう」

「これも」と雑誌の入った袋を掲げて彼女が言う。

「どういたしまして」

彼女は俺の言葉に小さく笑って、シートベルトに手を掛けた。シートベルトを外す彼女を見ながら、あることを考える。

彼女は、俺に距離を保てと言った。そして、自分からも距離を取る

うとしていた。それは、彼女自身も少なからず俺に近付いてきけると自覚しているからだろ。俺も彼女に近付いていて、彼女もそうならば、何を拒否する必要があるのか。その答えは、当たり前、俺の薬指に行きつく。当然のことだ。けれど、彼女が俺に近付いているかどうかを曖昧にしたいくはない。

「そういえばさ、」

そう言つて、シートベルトを外した彼女の視線をこちらに向けさせた。彼女は顔をこちらに向けて、俺の次の言葉を待った。その顔には、戸惑いなんかは表れていない。

「今日、劇場で女の人が隣だったんだ」
「うん」

彼女は何でもないようにして頷く。

「帰り際に、その人に誘われそうになった」

彼女の顔に、ほんの少しの嫌悪感が表れた。けれど、すぐに面白そうにして笑った顔に変わる。

「ほんとに？」

「たぶんだけど。前通った時にマフラーが落ちて、拾ったのを渡したときに指輪見て、ちよつと残念そうな顔してた。でも、そこから動かなかったから、もしかしたらマフラーもわざとで、ただの話しかける口実だったのかなって」

「それで？」

彼女は面白そうな顔をしたまま続きを促す。俺は窓に肘をついて、彼女の方を見た。

「別に。『先進んですよ』って言って、それっきり」

「なーんだ」

面白がっていた顔を、つまらなさそうにして彼女が言った。

「でも、良かったね。まだ誘われたりして」

口元に面白がっているような笑みを浮かべて、彼女は続けた。その顔には、一瞬だけど浮かんだ、先ほどの嫌悪感のようなものは見られない。元からなかったのか、それとも隠したのか。そんなの、どうでもいい。彼女も、俺に近付いている。

「そうだね」

彼女の言葉に頷きながら、窓から肘を離して、自分のシートベルトを外す。

「良かったよ。君に嫌われてるわけじゃないみたいで」

「嫌いとか……」

彼女が言おうとしたその先は知らない。彼女が今、どんな顔をするかも。

シートベルトを外した俺の手は彼女の頬を包むようにして触れていて、上半身のほとんどは運転席から離れていて、唇は彼女のそれに触れていた。

少しして、初めは触れていただけのそれを、今度は角度を変えて求めた。何度も、何度も。触れては離れる音が、車の中で静かに響いていた。

彼女からは求めてこない。その代わり、離れることもしない。俺は、離れるなんて考えてもいない。

「……帰る？」

それでも、無理やり彼女の唇からゆっくり離れて、そう問いかけた。頬に触れていた手はそのままで、彼女との距離も近い。離れて初めて見る彼女の顔には、今日会ったときと同じように驚きと戸惑いが混じっていた。

目が合うとすぐに、彼女はドアに手を掛け、車を降りていった。ドアを閉め、何も言わずに、何でもないようにしてマンションの入り口の方に歩いていく。

彼女がマンションの中に入ったのを見届けて、自嘲的に笑みを漏らす。『帰る?』だなんて。どんな答えを期待していたのか。制御するつもりはなかった。最後の賭けともいえる言葉に彼女が反応したときから、こうなるつもりだった。ただ、あれほど自分が求めるなんてことまでは、考えていなかった。

「……………そうでもないか」

自分が今考えたことを、言葉で否定する。触れたら止まらなくなると、どこかで分かっていたのかもしれない。それを、俺は容認した。容認したからには、彼女がどう考えようが知ったことではない。距離を取るうとするなら、それが出来なくなるくらい近付けばいい。初めて彼女を求めたときから、そう決めていたのかもしれない。もう一度小さく自嘲の笑みを漏らし、車をスタートさせた。

今まで何も感じなかった薬指が、初めて苦しいと感じた。

『……帰る?』

二日前に言われたこの言葉と、あのことを、今日までで何度思い出しただろう。

私の行動が、永井さんを怒らせていることは分かっていた。劇場で会ったときに逃げたことも、遠ざかるようにしていたメールも、そのどれもが永井さんを苛立たせていただろう。でも、それでも、永井さんはもう私を混乱させないと言った。ただの味方でいると。それを、あの人はその日のうちに覆した。

永井さんが誘われそうになったと言って、それに嫌悪を感じたことは自分でも覚えている。なぜ、と聞かれても、それは分からない。別に永井さんは私のものではないし、私がそんなものを感じる権利がないことも分かっている。第一、永井さんは結婚しているのだ。それなのに、永井さんの言葉を聞いて、何かが嫌だと思った。意味が分からない。自分も、永井さんも。

あの日の夜だって、たぶん永井さんが家に着いたであろう時間に、『お休み』とメールが送られてきた。そんな永井さんに苛立って、返信なんかしていない。日曜日に掛かってきた電話も無視した。何がしたいんだ。土曜日のキスも、ただの気まぐれだったんだろうか。そう考えるものの、たぶんそれはないだろうと思っていた。

いたずらに触れるだけのものではなかった。何度も求められて、繰り返されて、触れた唇から永井さんを感じていた。初めは意味が分からなくて、ただただ驚いていただけだった。突き返そうと思えば、そうできた。それでも、そうしなかった。自分から求めたわけでは

ないけど、永井さんを拒否したわけではない。それが余計に、私を混乱させた。きっと、永井さんもそれを分かっている。

「せんせー！」

「はいはい」

以前の金曜日にみていた高校生の女の子が手を振って私を呼ぶ。定期テスト対策が終わって、だいぶ気が抜けたようだった。今日は普段通りの授業で、学校の進度に合わせたものをやっている。

講師用の丸椅子に座って、雑談を交えながら問題の解説をしていく。

「もー、聞いてよー」

「聞いてるって。彼氏がどうした」

一通り解説を終えて、女の子が不満そうに顔を膨らませた。こういう顔をする時は、たいてい彼氏がらみだ。

「先生つてさ、どっからが浮気だと思う？」

「はい？」

思わず聞き返せば、生徒はいたって真面目な顔をして私の方を見返していた。きれいな顔立ちの目が、じっと私を見ている。

「さあ……」

「一緒に歩いたりするのは？」

「それくらいは別にいいんじゃない？」

曖昧に答えると、彼女の方からぽんぽんと線引きの質問を投げかけてくる。

「やっぱり、手繋ぐとかキスするとかくらいからだよね。浮気って」
「そうですね」

ばらばらと教材をめくって、何でもない風にして生徒の言葉に同意しておく。そのどちらをも、二日前にしまっている私は、完全にアウトだ。自分から望んだ、望んでないにかかわらず。

生徒の話を聞けば、どうやら生徒と彼氏のその基準値が違うらしい。生徒は今言ったように、相手に触れるところからが浮気と考えているのだけど、彼氏の方は彼女が男と歩くだけで嫌らしい。嫌と言っているだけで、それを無理やり止めさせるようなことはしないらしいけど。

この女の子の彼氏は、確か社会人だったよなと、生徒の話を聞きながら思いだす。名前は忘れたけど、大きな会社に勤めていると聞いたことがある。だったら、彼氏の嫌という気持ちも何となく分らないでもない。要は、年の離れている彼女に同年代の男が言い寄ってこないか不安なだけだろう。素直にそう言えばいいのに、恥ずかしがって言えないだけで、余計に面倒な言い方をしている。

「いいねえ」

「何が？」

生徒が話し終わってからそう言うと、生徒は意味が分からないという顔をした。

「そういう可愛い恋愛がしたいよ」

「彼氏作ったらいいじゃん。先生、めんどくさがってそういうことしないでしょ」

生徒の言葉に肩をすくめて答えておく。周りから痛い視線を何となく感じたけど、それらは無視しておく。

生徒には、彼氏がいることなんて言っていない。一応塾内ではそういうことを言わないという決まりがあるが、あまり守っている講師はいない。私の場合、それを守っているというよりも、言えば面倒だから言っていないだけだ。今の状態なら、なおさら。

生徒に次のページを指示して、椅子から立ち上がる。そうして、壁に寄りかかって思い浮かんだのは、やっぱり永井さんだった。

「美香ちゃんとはどうなったの？」

バイト終わり、いつも通り駐輪場の定位置に着いた。コンクリートブロックに座った古賀さんがお茶を飲みながら携帯を開いているのを見て尋ねる。古賀さんはお茶のペットボトルを傾けながら、私の方を見てきた。

「特にこれといった進展はないけど」
「けど？」

ペットボトルの中身をぐるぐる回しながら言う古賀さん。その続きが気になって先を促すと、古賀さんはもう一度お茶を飲んでから口を開いた。

「日曜に電話した」
「おー」

古賀さんの言葉に思わず声をあげる。古賀さんはペットボトルのふたを閉めて、鞆の中に仕舞った。

「どんな感じだった？」

原付に座ったまま身を乗り出すようにして聞くと、古賀さんはその時のことを思い出そうとしているのか、「んー」と首をひねった。

「声は可愛かったな」

「おー」

「まあ、二人とも緊張して無言になった時が何回かあったけど」

それを聞いて笑ってしまう。携帯を手に話題に困っている古賀さんが目に浮かんだ。古賀さんも笑って、「それから」と続ける。

「今度の土曜に、遊ぶ約束した」

「まじで？」

この言葉には驚いてしまって、それを顔に出したまま聞き返してしまった。なぜか古賀さんは困った顔をして、「ああ」と頷いている。

「よかったね。……で、いいんだよね？」

その顔の意図が分からず、何となく付け足すようにして聞いてしまう。古賀さんはその顔のまま、数回頷いた。

「たぶん」

「たぶんて」

「正直分からない。初めて会っし、そもそも会いたいのかも分からないし」

そう言つて、ますます困つたような顔をする。手にしている携帯が、だらんと下を向いていた。

「確かに、紹介だしね」

「それだよ」

そう言つて、古賀さんは小さく溜め息をついた。

しよつちゅう私に女の子を紹介しろと言つていたものの、本人は本当に彼女が欲しいかどうか分かつていないらしい。私の方も、何となくそれを分かつていたから、古賀さんの言葉は聞き流す程度にしていた。それが、今は別の人によつて紹介という手順上にいる。ただメールする段階なら良かったんだろうけど、いざ会つとなると、それがしたいのかどうなのか分からなくなったんだと思う。しかも、今回は藤田さんという監視人付きだ。

「まあ、会っただけ会つてみたら？」

「そう思つてるんだけど、会つたら絶対にさあ……」

その言葉の先を続けずに、もう一度溜め息をつく古賀さん。

何となく古賀さんの言いたいことは分かった。藤田さんという監視人がいる以上、会つたらそれなりの態度を示さないといけないということだろう。それが、古賀さんを逡巡させてもいる。根が良い人の古賀さんは、会つと決めたことをキャンセルするなんてことはできないだろうし、藤田さんにも悪い思いはさせたくないんだろう。きっと、土曜日に遊ぶことも古賀さんから提案したにちがいない。そういうところは、変に真面目だった。

「お前はどつなの？」

ぼーっと悩む古賀さんのことを考えていると、今度は古賀さんの方から質問をしてきた。どうやら、もうそのことについて考えたくないみたいだ。

「どつって？」

質問の意図が分からず、首をかしげて聞き返す。本音を言えば、意図となることがありすぎて、どれのことか分からなかったんだけど。

「永井さんとだよ。距離取るとか先週言ってただろ」

「ああ……」

古賀さんの言葉で、またしても永井さんのことを思い出してしまった。

「それなりだよ。今はそんなに連絡とってないかな」

「そっか」

「うん」

古賀さんが頷いたのを見て、私も頷く。

私から連絡をとっていないことは本当だ。ただ、向こうからは来るけど。実を言えば、バイト終わりに携帯をチェックすると、永井さんからのメールが一通来ていた。それは、開いてもない。

二人とも特に何も言わなくなつて、ぼんやりとした時間が流れている。古賀さんに永井さんのことを聞かれると分かつていたけど、土曜日に起きたことを話すつもりはなかった。さっき、古賀さんから美香ちゃんとのことを聞いて、その気持ちはますます強くなった。自分のことで悩んでいる古賀さんに、面倒なことを話して困らせたくない。話せば、古賀さんは相談に乗ってくれると分かっていた。それでも、今は話したくない。

古賀さんを困らせたくないというよりも、そのことを話して、古賀さんに見放されたくないという気持ちの方が、断然大きかった。

いつもはこの沈黙も何とも思わないけど、今日ばかりは違って、二人ともが早々に自分の場所から立ち上がった。

「じゃあな」

「うん。また何かあったら聞くよ」

「おう」

いつもとは逆な会話をして、古賀さんにはいばいと手を振った。

少しずつ、私の中の色々なバランスが崩れていつているようだった。

永井さんが教室に入ってくると、一番に目を向けられた気がした。結局、この一週間、永井さんからの連絡を全部無視していた。それが原因の苛立ちが、向けられた視線に隠されているようだった。そんなものを思っているのは私一人だけのようで、横に座っている友達は、何ら変わりなく携帯をいじっている。永井さんが教壇に立つと、その携帯もさっさと仕舞って、授業の準備を始めていた。何となくそんな友達がずるくて、いきなり身体をぶつけてやる。

「え、なに」

「何となく、ストレス発散」

「意味分かんないんだけど」

そう言って、友達は笑う。

学校で一番仲が良いともいえるこの友達にさえ、永井さんと知り合いだということは言っていなかった。言えば、この友達も絶対に相談に乗ってくれる。それでも、やっぱり言えなかった。結局、この問題は、自分の中で何とかするしかないと自分でも分かっている。それを、直視したくないだけで。

そうやって考えて、また溜め息をつきそうになって、椅子にもたれかかったままずるずると身体を下げていった。

授業の終わり際に、永井さんが先週提出したミニレポートについて

何人かに聞きたいことがあると言って、学籍番号を呼んでいった。私は特に気にすることもなく、筆箱なんかをさっさと鞆に放り込んで、友達と教室を出ようとすする。

「それから、」

最後に呼ばれた番号は、私のものだった。友達もそれに気付いて、『あれ?』という顔をしてくる。

「名前でも書き忘れたかな」

へらつと笑ってそう言い、友達に先に行ってもらう。周りの学生もどんどんと教室を出ていき、呼ばれた数人の学生が教室の端っこにある教壇に向かっていった。鞆を座っていた場所に置いて、私もそちらに向かっていく。

本当は、名前なんて書き忘れていない。永井さんが、わざと私の番号を呼んだということくらい分かっている。それでも、ああやって呼ばれたからには、行かないと友達が変に思うだろう。永井さんは、ひきょうだ。

数人の学生が列をなしている端っここの教壇に行つて、近くの長机に浅く座る。呼ばれた学生は、本当にミニレポートに関することを聞かれていた。ほとんどが先週来ていないとかで提出できてないということだったけど、中には同じ内容のものを書いた学生もいたように、書き直すか単位を落とすかどうかいいかと聞かれていた。ずるがばれた学生は永井さんからミニレポートを受け取り、肩を落として出口の方へと向かっていった。

最後に私だけが残り、教壇に近付くも、永井さんは私に気にすることなくレジュメなんかを整理している。教壇の反対側からドアが閉まる音が聞こえて、学生がいなくなるのを待っていたのかと思いがたつた。幸か不幸か、永井さんの授業は二時間目で、お昼休みにここに来る学生はいないみたいだ。

永井さんはレジュメを鞆に仕舞うと、教壇とセットの椅子に座って、私を目の前に呼んだ。教壇の前に立っていた私は、素直に教壇を回って永井さんの目の前に立つ。

「何で連絡無視したの？」

机に頬杖をつきながら、永井さんが聞いてくる。

「じゃあ、何であんなことしたの？」

逆に聞き返せば、永井さんは少しだけ首をひねって、また私を見てきた。

「君も俺に近付いてるんだって分かったから」

「なに？」

言葉の意味が分からず、思わず聞き返してしまう。

「君の本心が知りたくて、誘われそうになったことを言ったら、君が嫌そうな顔した気がした。それで、君も俺に近付いてきてるんだって思ってたんだよ」

真つ直ぐにこちらを見て言う永井さんから、視線を逸らせてしまう。やっぱり、永井さんは分かっていた。

「それでも、永井さんは気付かない振りすべきだよ」

もう一度永井さんを見て言えば、永井さんは少し困った顔をして笑う。頬杖を止めて、腕だけを教壇に置いた。

「そうしようと思ったんだけどね。無理だった」

「無理って……。好きとかそういうのがないんだったら、」

「たぶん、好きなんだろうね。君のこと」

あっさりとそう言う永井さんを見て、言葉に窮してしまふ。

「…………冗談やめてよ」

やっこのことでそう口にしても、永井さんは私から目を逸らすことはなかった。

「冗談じゃないよ。あの日、君がああいう顔したの見て、自分から制御するの止めたんだから。簡単に君から離れたように見えた？」

何なんだ、この人は。そう思って、もう完全に永井さんから視線を外す。

あの時離れた永井さんの目は、今でも覚えていた。永井さんの問いかけに「嫌だ」と答えれば、そのままどこかに行きそうだった。「帰る」と言えば、引きとめられて、更に深みにはまりそうだった。だから、何も言わずに車を出た。

「あの後、家に帰って、どうしようもなくて、万里子を抱いた」

『万里子』という名前は初めて聞いたけど、それが誰だかは検討がついた。

永井さんに顔を戻した私を見て、永井さんが小さな笑みを浮かべた。

「嘘だよ」

「え？」

「万里子を抱いたなんて嘘。家に帰ってから、君とのこと忘れられなくて、何もまともなこと考えてない」

永井さんの言葉に、何か言おうと口を開くも、何を言ったらいいのかわからなくなって、結局口を閉じた。

「そんな顔するから、あの時だって止められなくなった」
「そんな顔ってなに」

「嫉妬してるけど、嫉妬してないように見せかけてる顔」
「意味分かんない」

もう嫌だ。何を言えば、永井さんから離れられるんだろう。

「意味が分からないのは君の方だよ。嫉妬してるなら嫉妬してるで、ストレートに出してくれた方が分かりやすい。近付きたいなら近付きたいで、何も考えずにそうしてくれた方がずっと楽だ」
「知ってると思うけど、」

これ以上永井さんの言葉を聞きたくなくて、少し強めに言葉を続けた。それでも、永井さんの表情は変わらない。

「私、まだ大学生なの」
「うん、知ってる」

「ドロドロの不倫にはまる気なんて、さらさらない」

そう言い切っても、永井さんは顔に小さな笑みを浮かべる。

「不倫にするつもりはないんだけどね」
「何言って……」

そこまで言って、永井さんの左手に視線を移した。そうして、あることに気付く。いつもの場所で光っている、シルバーの指輪がそこにはなかった。いつからだろう。

「今日、ここに来るときに外したんだ。今まで何も感じなかったのに、あの日初めてあれが苦しく感じた。無視しようと思ったんだけど、そうもいかなかった」

それを聞いて、何も言えなくなる。呆然とする私に、永井さんは安心させるように微笑んだ。

「君のせいじゃないよ。どのみち、こうなるつもりだった」

そんなことを言われても、まったく説得力がない。『こうなるつもりだった』と言われても、結局こうなったのは私と会ってからで、あんなことがあった後だ。どう転んでも、発端は私にあるような気がした。

永井さんは黙る私を見て笑い、鞆の中を探りだす。そして、そこから取り出したものを、テーブルの上に滑らせてきた。そこにあったものは、電車の切符だ。ここから、三つ隣の県までの。ということは、永井さんの住むところからは隣の県ということだ。行ったことはないけど、確か快速で一時間ちよつとだった気がする。

意味が分からず永井さんの方を見ると、永井さんは相変わらず笑みを浮かべたまま、私の方を見ていた。

「来週の土日に、そこで学会があるんだ。朝が早いから、ホテルをとつてある。良かったら来て」

「なん……」

最後まで言葉を続ける前に、永井さんに引き寄せられて、キスをされていた。椅子に座っているとはいえ、足の長い椅子に座っている永井さんと私では、まだ永井さんの方が高く、両手で頬を包まれるようにして、顔を上に向けさせられていた。

あの時のように、何度も、ゆっくりと唇を重ねてくる。重ねた唇から、永井さんが入り込んでくる感じがする。抱き締められたりとかよりも、永井さんを感じている気がした。押し返そうと上げた腕が、宙ぶらりんのまま、永井さんの膝に落ち着く。

少しして、ゆっくりと離れた永井さんの目は、あの時と同じ目をしていて。どうしていいかわからず、永井さんの目を見返す。

「部屋が分かったら、また連絡するよ」

両手で頬に触れ、真っ直ぐにこちらを見たまま、永井さんがそう言った。そうして、私から手を放し、教壇に置いていた鞆を持って、私の横を歩いていった。

私はどうすることもできずにそこに立つたままできて、後ろから聞こえたドアの閉まる音で、ようやく動き出す。教壇を見ると、電車の切符が置かれたままになっていた。それを手に取って、どうすればいいんだと考える。もう、本当によく分からなくなってきた。自分が何をしたいのか、どうしたらいいのか。

その時、ジーンズのポケットに入れていた携帯が震えた。のろのろと携帯を取り出してメール画面を見れば、先に出ていった友達からだった。まだ時間が掛かるのかという内容を読んで、携帯の時計を見ると、もう昼休みが30分ほどしか残されていなかった。慌てて友達に電話を掛けながら、鞆の場所まで戻る。切符は、自分の財布に仕舞っておくことにした。

家に帰ってから、ぼんやりと切符を眺める。今日は金曜日だけど、永井さんからの連絡もなければ、バイトも入っていなかった。家のソファに座りながら部屋のカレンダーを見れば、来週は月曜が祝日で、土曜から月曜にかけて三連休になっていた。

永井さんは、私が嫉妬していると言った。そんなつもりはなかった。確かに、永井さんが誘われそうになったと言ったときや、奥さんを抱いたなんて言ったときは嫌な気分になったことは事実だ。それでも、嫉妬とは並べてほしくない。永井さんは、嫉妬なんてするべき対象ではないはずだ。いきなり『抱いた』なんて発言されたら、誰だって嫌な気分になるだろう。そうやって勝手に決めたものの、切符は手放せずにいた。

テーブルに置いてあった携帯が、いきなり震えた。誰だと思って画面を見ると、そこに表示されていたのは番号だけ。つまり、彼氏からだ。溜め息をついて、携帯を取ってソファに放る。しつこく鳴っていたが、しばらく無視していると、それも鳴り止んだ。横に放った携帯を見て、自分も一緒かと自嘲する。

永井さんには結婚しているとかどうとか言って、近付くなと言った。

距離が近いと、特定の距離を保てと言った。

自分だって、永井さんと同じ立場のくせに。結婚してないだけで、相手がいることには変わらない。そんな私が、永井さんとどうにかなるのか、どうなのかということを悩む時点で間違っている。永井さんが結婚しているから離れるのではなく、自分に彼氏がいるから離れるべきなんだ。

そう思うのに、私は、切符を眺めたままだった。

次の日の夜、古賀さんに相談しようかと迷っていると、当の本人から電話が掛かってきた。

「どうしたの？」

日付も変わるような時間で、何かあったのかと思う。今日は、美香ちゃんとデートのはずだ。

『いや、ちょっとな』

『なに？』

言いくそうにしている古賀さんに、笑って先を促す。反対の手では、昨日のように切符をいじっていた。

『今日、美香ちゃんと遊んでさ』

『うん』

『結局、付き合うことになった』

切符をいじっていた手が止まる。

「そっか。おめでとう」

『帰ってきたら、話したいことがある』

万里子にそう伝えて、今朝は家を出てきた。

土日に行われる学会には、金曜の今日から現地入りするつもりだった。彼女の通う大学で授業を終えて、その足で学会が開かれる県に向かう。先週から、彼女には連絡を入れていない。自分の考えも、彼女にどうしてほしいかも、あの時に伝えた。だから、それ以降に何かを彼女に伝える気はなかった。決めるのは、彼女だ。

万里子が、今朝の言葉を理解しているかどうかは知らない。正直、彼女に会ってからだって、今までと変わりなく生活してきた。指輪も、家ではしている。家を出てから、市役所に行って、必要な書類

——離婚届を貰ってきた。

明日、彼女が来ようが来まいが、学会から帰れば、万里子にそれを伝えるつもりだ。原因は、彼女じゃない。それをはつきりさせておきたくて、先に示唆した。起因になったのは、彼女との付き合いかもしれない。ただ、それは本当にきっかけにしか過ぎなかった。

最近になって、学会等の研究会に呼ばれることが多くなった。教授のツテという部分も少しはあったが、それよりも純粹に研究が評価されていることの方が多い。以前に書いた論文が、学術誌にも載っていた。研究者の身とすれば、それは嬉しいことだった。それなりの評価が与えられれば、自身の研究を深めようとも思う。実際、今はそうなっている状態だ。俺はそれが楽しくもあり、嬉しくもあった。ただ、万里子はそうでもない。俺が休みの度に書斎にこもるのを嫌がるし、長期や遠出の学会に出ることも嫌がっている。明日の

ような、たった二日の学会であつたとしても。

別に書斎にこもらなくても、リビングでやつたつて構わないが、そうすると万里子があからさまにつまらなさそうにするので、それを見たときからリビングでやるのを止めた。遠出の学会も、年に一、二回しか行かないようにしている。だが、今はそれも難しくなつてきていた。呼ばれることが増えれば、長期休暇に短期研究員としてどこかに行く可能性も出てくる。そうすることで、自分の研究を深めることもできるのだ。今の自分はそれが楽しいし、研究員となればそれなりに給与も出る。

結局、彼女が現れなくても、どのみちこうなつていたのだろう。この先も万里子と生活していくことが、考えられなかった。自分の出来ることを精一杯やっている彼女を見て、その考えが強くなつただけに過ぎない。要は、自分のやつていることを快しとしていない万里子と、これからも暮らしていくことが無理なのだ。きっと、俺はこれからもつと研究にのめり込んでいく。そうなれば、万里子との間に何らかの溝が出来るのは目に見えている。それなら、そうなる前に、適当な措置を取りたい。

現地に着いたのは、5時過ぎだった。それから市内を少し走つて、予約してあるホテルに向かった。

予約したホテルは、市内のほとんど中心部にある。別に会場から近い駅前のビジネスホテルや会場となるホテルでも良かったんだが、そこだと他の教授たちとかぶりそうで止めた。ここから車で会場に行っても、そんなに時間は掛からない。それに、と思う。もし、彼女が来たときに、他の教授と鉢合わせすることは避けたかった。

「すみません。予約した永井ですけど」

ホテルに着いて車を駐車場に入れ、ロビーのフロント係に名前を告げる。フロントは顔に笑みを浮かべていたが、俺の名前を聞きカウンター内のパソコンを操作した時に、その顔が申し訳なさそうなものになる。何だと思って話を聞けば、どうも予約しておいたシングルが現在使えない状態になっているらしい。週末ということもあり、シングルは他に空きがないというので、ダブルの部屋でも良いかと聞かれた。こちらとしては、何も問題ない。シングルの料金で、広い部屋とベッドが与えられるのだ。俺がそれで構わないと言うと、フロントはもう一度俺に頭を下げ、部屋のカードキーを差し出した。

ベルボーイに案内され、部屋へと向かう。一通り部屋の説明を受けて、荷物をクローゼットの中に仕舞った。部屋には広めのダブルベッドと、テーブルとセットになった椅子、窓に近い方には長ソファがあった。これでシングル料金なら得した気分だ。コートやマフラーもクローゼットに仕舞い、ソファに座って携帯で電話を掛ける。しばらくコール音が続いた後に、留守番サービスの音声案内に繋がった。それを聞いて苦笑いを漏らし、携帯を切る。どうやら、彼女は電話に出てくれはしないようだ。代わりに、ホテルの場所と部屋番号をメールする。

メールを送ると、今度は鞆からパソコンを取り出し、部屋に設置されているLANケーブルと繋いだ。発表用の資料は作ってあるが、もう少し詰めようと思って持ってきたものだ。何か追加があれば、明日会場でプリントアウトすればいい。それからは、夕食までそうやってパソコンと向かい合っていた。

夕食は、ホテル内のレストランで済ませた。レストランから部屋に戻る途中、万里子から携帯に電話が入って、「着いたなら連絡して」と少し怒った口調で言われた。ホテルに来てからパソコンとしか向かい合っていないくて、そのことを忘れていたと伝えると、怒りにプラスして拗ねられる。とりあえず謝っておいて、携帯を切った。

部屋に戻ると、また携帯が鳴る。面倒だと思いながら、画面の表示も見ずに出ると、掛けてきたのは村瀬だった。

『お前、どこのホテルにいの？』

「なんだよ、いきなり」

電話の向こうからは、村瀬の声の他に何やら騒がしい音もする。理由も言わない村瀬に、面倒だと思いつつも、ホテルの名前と部屋を教える。それを聞いた村瀬は『わかった』とだけ言って、携帯を切ってしまった。

「何なんだ」

勝手に切られた携帯を見ながら呟く。これからどうしようかなと考えながら、テレビの電源をつける。どうせ何もやることがないので、そのままテレビを見ることにした。

それから一時間ほどして、部屋がノックされた。怪訝に思いながらドアを開けると、そこには村瀬が立っていた。コンビニの袋に入れた大量のビールと共に。こいつ、このままホテル入ってきたのか。

「何やってんだ。こんなところで」

「何やってんだじゃないよ。何やってんだじゃ」

ドアノブに手を掛けたまま尋ねれば、村瀬が呆れともとれる声音でそう返してきた。意味が分らず顔をしかめる。

「お前が何やってんだよ。お、ま、え、が」

一語一語切るようにして、若干大きめな声で言われる。廊下で騒がれても面倒なので、部屋に入れることにした。

「何なんだよ、ほんとにもう」

部屋に入った途端、いきなり怒ったように言いだす村瀬。『何なんだ』はこっちのセリフなんだが。

村瀬はビールの入った袋をテーブルに置き、ソファにどすんと座った。俺は村瀬の後ろを歩いていき、テーブルとセットの椅子に座る。

「だから、何しに来たんだよ」

袋からビールを一本取り出して、ふたを開けながらも一度尋ねる。

「こんなメール見たら、来るの当たり前だろ」

そう言つて、俺に自分の携帯を投げてよこす。それをキャッチしてメール画面を開き、自分の名前が書いてあるメールを開いた。

「ああ」

ついこの間送ったメールを読んで、状況を何となく理解する。

「ああ、じゃないよ」

村瀬もソファから手を伸ばし、ビールを取る。

「何やってんだよ、ほんとに」

ビールを開けながら、村瀬が情けない声を出す。俺はそれに肩をすくめるだけで返し、ビールを缶のまま一口飲む。
村瀬の言っているメールは、俺がこの間送ったものだった。

「『何かしでかした』って、何やったんだよ。お前」

ビールは開けたものの、それを飲まずに村瀬は聞いてくる。
このメールは、二週間前に送ったものだ。彼女に車の中で口づけた日。あの後、家に帰る道すがら、このメールを村瀬に送っていた。

すぐに電話が掛かってきたが、それは取らずに、後に送られてきた何通かのメールも無視していた。

「特には何も」

「嘘つけ」

やっとビールを飲み始めた村瀬がそう言っで、こちらを睨んできた。ビールを何口か流し込み、村瀬の方を見る。

「キスだけ」

「はあ？」

「でかい声出すな」

大きな声で間の抜けた声を出す村瀬に顔をしかめる。村瀬はビールを飲んでいた手を止めて、目を開いてこちらを見ていた。そんな村瀬は気にせずに、ビールを飲む。

「え、え？ 何やってんの、お前」

「今言つたよ」

来てから何回目か分からない質問をする村瀬。その問いかけに、素っ気なく答える。

「どうすんの？」

缶を手にしたまま、ぼけつとした顔で村瀬が言った。村瀬が言っているのは、たぶん、万里子のことだろう。

「別れるよ。書類も貰ってきた。ただ、彼女が原因じゃない」

それを聞いて、村瀬が複雑な表情を浮かべる。そんな村瀬を見て、小さく息をつく。それから、指輪をしていない俺に気がついたように、呆然として俺を見てきた。

「どっちにしろ、限界が近かったんだ。最近、研究が認められてきて、学会なんかも増えてきた。このまま続けても、どこかで破綻してたよ」

携帯を村瀬に投げ返しながらそう言う。携帯は上手いこと村瀬の隣に着地して、村瀬はそれを手に取ることなく、俺のことをぼけつとした目で見ていた。そして、少しして溜め息をつく。

「結局、お前って変わってないのな」

「何が？」

村瀬の言葉の意味が分からず、ビールの缶を傾けながら聞き返す。

村瀬も勢いよくビールを一口飲んで、口を開いた。

「女より、自分のこと優先だろ。今も、大学の時も」

「ああ……。優先ね……。」

「まあ、ちよつとニュアンスが違うけど」

そう言つて、村瀬はまたビールを飲む。村瀬の言つ、大学の時のことを思い出して、自然と口の端が上がった。

大学の最終学年の時に、付き合っていた人がいた。2回生の時から付き合つていて、周りからも認知されていたほどだ。このまま何となく続くだろうなつて思つていた最終学年。彼女は就職へ。俺は、大学院に進むことにしていた。そこで、亀裂が生じたのだ。俺は自分が大学院に進むことを彼女に言っていなくて、それが発覚した時に『どうやって二人で暮らすのか』と責められたことがあった。彼女の中では、なぜか卒業後は二人で暮らすことになつていて、院に行くのは止めると強要された。院に行つて勉強を続けたかった俺は、そこで別れを切りだした。最終学年ということもあり、散々揉めたが、結局は別れた。

「自分のすることを認めてない人間とは、続かないだろ」

「まあねえ」

暗に今の万里子とのことを言つと、村瀬はもう何とも思っていないような口調で返してくる。そこで、俺ももうそのことは口にせず、いつものように村瀬と飲んで、喋ることにした。

日付が変わろうとする頃に、村瀬がソファで横になりだした。

「おい、寝るなよ。俺、明日朝早いんだ」

「大丈夫。俺もお前と同じ時に出るから」

それを聞いて、溜め息をつく。

「明日も暇なのか？」

寝転がりながら、村瀬が聞いてくる。

「……分からない」

「今の間はなんだ。今の間は」

閉じかけていた目を開けて、ぐいっと顔をこちらに向けてくる。その視線に、もう一度溜め息をつく。

「彼女が来るかもしれないんだ」

「……え？ 彼女って、春希ちゃん？」

頷いて答えれば、村瀬が何とも言えないような顔をする。

「まだ分らないけどね。泊まってるところ教えたただけだから、来るかは彼女次第だ」

「来たらどうすんの？」

「さあね」

村瀬の質問には曖昧に答えておいて、最後の一本のビールを飲み干す。空になった缶をテーブルの上に置き、テーブルから離れた。

「おい、」

後ろから村瀬が声をかけてきたが、それには後手を振って、バスルームへと向かった。

2（前書き）

R15 弱の表現が含まれています。

土曜日、朝から会場入りして、他の出席者の発表を聞いた。自身の発表もそれなりにいって、昼に行われた昼食会でも何人かの教授と挨拶を交わした。

朝起きると、村瀬は案の定駄々をこねて、なかなか起きようとはしなかった。そこで、村瀬の携帯を勝手に拝借し、アドレス帳の中からマネージャーに連絡をして引き取りにきてもらった。

学会が終わってホテルに戻った時間は、5時頃だった。彼女からの連絡は、ない。

「何か伝言があったりしませんか？」

ホテルのロビーでそう尋ね、自分の部屋番号と名前を告げる。フロントからは、何も入っていないと返された。

「もし、あった場合は、お部屋にお繋ぎしましょうか？」

フロントがそう聞いてくるのを、少しの間考える。

「いや、いいです。ありがとうございます」

フロントに礼を行って、自分の部屋へと戻った。
部屋に戻って、鞆を適当にソファに放る。整えられたベッドに座り、そのまま仰向けに倒れ込んだ。片腕を額に置き、反対の手で携帯をズボンのポケットから引っぱり出して、受信や着信が入っていないか確認する。受信も着信も入っていなかった。

『来たらどうすんの？』

携帯を横に置いて、昨日の村瀬の言葉を思い出す。

彼女が来たら、どうするつもりなのか。それは自分でもよく分かっていなかった。ただ、来れば何かが変わるだろうとは思っている。彼女が来なければ、もう彼女に近づく気はなかった。もう少しで今期も終わる。それで、彼女との繋がりもなくなる。だから、今日が彼女との繋がりを続けるかどうかの、分かれ目の日だった。ぼんやり彼女のことを考えていると、段々と瞼が下がってくる。昨日あれだけ飲んで、朝が早かったんだから、眠くなっても当然か。そう思いながら、それに逆らうことなく、意識を落とした。

どれだけの時間が経ってからか、ゆっくりと意識が戻る。閉じていた目を開けて、数回瞬きする。横においてあった携帯を手探りで取り、時間を確認した。時計は6時を過ぎていた。一時間程眠っていたみたいだ。枕もしないでそのまま寝たからか、何だか頭が痛い気がした。目が覚めてるような覚めてないような感じで、このままベツドで横になっていたような気もした。それでも、少しの間だけそのままの体勢でばーっとすると、頭もはつきりしてきて、ゆっくり

りと起き上った。喉に渴きを覚えて、そういえばこの階に自販機があったなと思い、買いに行くことにする。ソファに放り投げた鞆から財布を取り出して、カードキーを手に廊下へと出た。

少し歩いたところにある自販機コーナーでミネラルウォーターを買い、その場で少し飲む。水分を取ったことで、目が完全に覚めた。財布をズボンのポケットに入れ、部屋に戻ろうと自販機コーナーを後にする。

部屋に向かって廊下を歩いていくと、どこかの部屋の前に人が立っているのが見えた。目で部屋の数を数えて、それが自分の部屋だと分かる。立っているのは、彼女だった。

思わず足を止めてしまう。彼女は少し前に来たのか、部屋のドアをしばらく見た後、こちらに立っている俺には気付かずに、反対方向へと身体を向けて歩きだした。それを見て、ようやく足が動く。大股で走るようにして彼女の方に向かい、俺の部屋を少し過ぎたところで、彼女の腕を掴んで引きとめた。

「あ、」

腕を掴まれて、彼女は驚いたようにこちらを向く。掴んだのが俺だと分かれると、戸惑いながらも、俺を見上げてきた。

「ごめん。水、買いにいった」

少し息を切らせて言えば、彼女は小さく笑う。そんな彼女を見て、自分の余裕がなくなっただのが分かった。

彼女の腕を引っ張って、過ぎた自分の部屋へと向かう。後ろから彼

女の何か言う声が聞こえたが、それは無視して歩を進める。

部屋の前まで来て、ポケットからカードキーを取り出し、ドアを開けた。彼女を中に引き入れ、ドアが閉まるか閉まらないかの内に、彼女を壁に押し付けて唇を奪う。持っていたペットボトルやカードキーは、床に落とした。

両手で彼女の頬を包み、強引なくらいに、何度も唇を合わせた。片手を彼女の身体に滑らせて、途中で彼女が持つ鞆を掴んで床に落とす。そのまま、その手で彼女の腰に手を回し、身体を引きよせた。宙をさまよっていた彼女の手が俺の身体に触れ、身を任すように手を肩や腰に回される。

そのままの状態で、何度も唇を合わせ、彼女に触れた。合わせた唇はそのままで、頬や腰から手を離し、彼女が着ているコートに手を掛けた。意図していることが分かったのか、彼女も一旦俺の身体から手を離す。離れた腕を通してコートを床に落とし、また彼女の腰を抱いた。

何が、『自分でもよく分かっていない』だ。どうするかなんて考えられるほど、冷静でもないくせに。初めから、彼女を求めて、欲しいと思っていた。

一度彼女から離れて、また腕を掴んで部屋の奥へと入る。彼女の顔を見ないまま、彼女をベッドに押し倒した。それから、一度だけ唇に触れて、ゆっくりと顔を離して彼女を見る。そこに、戸惑いがあったら、止めるつもりだった。けれど、そこにある彼女の表情は、きつと、今の俺と同じであろうものだった。求めて、欲しがって、止まらないような。

「……みつともない……」
「え？」

彼女を見下ろして、自嘲する。下にいる彼女が、聞き返してくる。

「こんなにも、余裕ないなんて」

片手で彼女の頬に触れながら言えば、彼女はそれに自分の手を重ねてくる。

「余裕、ないよ。私だって。あれだけ言ってたのに、結局、来たもん」

「来なかったらどうしようって、少しだけ思ってた」

少しだけ、嘘をついた。本当は、来なかったらと『かなり』思っていた。でも、それは言いたくない。

けど、彼女はそれを分かっているかのように、俺を見上げて、小さく笑った。

「永井さんの嘘って、けっこうすぐ分かる」

「……分からない振りして」

そう言うと、彼女は「無理」と言って、また笑う。俺もそれに笑い返して、顔を近づけた。今度は、ゆっくりと、彼女の唇に触れる。角度を変えて、何度も、何度も。もう、止まらなかった。

腕の上で、彼女が離れていくような気がして、反対の手を彼女の腰に回した。

「……何してるの？」

目を開けながら尋ねると、彼女はこちらを向いて、困ったような顔をしていた。浮かしかけた身体をもう一度ベッドに沈めて、首をかしげる。

「帰ろうと思って。今ならまだ電車あるから」

その言葉を聞いて、眉間にしわが寄るのが自分でも分かった。

「泊まっていけばいいよ」

そう言っても、彼女はまだ困った顔をする。

「今から起きて君のこと送る気力ないから、泊まって」

そう言いながら、彼女を抱きよせる。何も纏っていない柔らかな彼女の身体が、俺の身体と寄り添う。

「…………お腹すいた」

俺の言葉に答える代わりに、彼女はそう口にした。

「確かに。それはあるね」

首だけ動かして、サイドテーブルに付属しているデジタル時計を確認する。9時を少し過ぎていた。昼から何も食べてないんだから、お腹がへって当然か。

「外か中、どっちがいい？」

すぐそばにいる彼女を見下ろして聞くと、彼女はまたしても困ったような顔をした。

「服買いたいよ」

「ああ。じゃあ、外で食べようか」

帰ると言っていたくらいだから、泊まる用意なんて持ってきてるわけもないか。彼女の言葉にそう思い当たって、外で食べることにする。

「疲れてない？」

「……疲れてはないけど、」

「けど？」

「そういうことは聞かないでほしいなあ」と言って、彼女は上半身を起こす。その顔は、おかしそうに笑っていた。背中だけが、露わになっていた。

「そう？ 無理させたかなって思ったただけなんだけど」

「思っんだったら、止めたらよかったじゃん」

そう言って、彼女はまた笑う。起き上った彼女の腰を引きよせて、もう一度ベッドに倒した。彼女が驚いたように声をあげる。

「止められたらいいんだけどね」

言いながら、片手を彼女の頬に滑らせ、口付ける。

「ご飯、行く？」

「……その手には乗らない」

ゆっくりと口付けた後、ほんの少しだけ顔を離して尋ねると、彼女はぐいっと俺の身体を押した。

「その手つてなに」

押された身体を素直に元に戻して、彼女に問いかけた。彼女はまた起き上って、俺の方を見てくる。

「永井さんの嘘なんかすぐ分かるんだから、知らない振りしても無駄だよー」

彼女はふざけるようにそう言って、きょろきょろと自分の服を探し始めた。

「嘘って分かっても、乗ってくれたらいいじゃない」

「やーだ。ほら、早くご飯行こう」

彼女に腕を引っ張られ、俺も身体を起こす。手近にあったシャツを彼女の顔に掛けて、自分はベッドから抜け出た。彼女がシャツを外す前に下着とズボンだけ身につけて、バスルームに向かう。

その途中で、彼女の下着を放ってやると、珍しく彼女が恥ずかしがっていた。

近場の店で当面必要なだけのものを買い、夕飯に出かける。時間も時間だったので、大半の店は閉まっていて、明日の服なんかは明日買うことにした。

近くのレストランで食事をしてから、少しだけ散歩をして、ホテルに戻ってきた。

「明日の朝は早いから、寝てていいよ」

部屋に戻るときにそう言えば、彼女は「うん」と頷く。朝が弱いことは、俺よりも彼女の方が分かっている、それに逆らうつもりはないようだ。

「何時くらいに帰ってくる？」

「自分の分は今日終わってるから、お昼には帰ってこれると思う」「そっか」

部屋に着いて、彼女は着ていたコートをクローゼットのハンガーに掛ける。俺も自分のコートをハンガーに掛けてクローゼットに仕舞うと、その中からスーツケースを引っ張り出した。彼女は部屋の奥に行っていて、たぶん、買ってきたものを整理している。俺はスーツケースの中からロングTシャツを取り出して、ケースをまたクロ

ーゼットに仕舞い、彼女のところに歩いていった。

「はい。これなら着れるでしょ。シャワー、先に使っていていいよ」

ベッドの上で買ってきたスウェットズボンのタグを切っている彼女にTシャツを差し出す。

「ありがとう」

それを笑顔で受け取り、買ってきたものと一緒に彼女はバスルームへと向かった。

彼女がバスルームに向かうのを見送って、自分は部屋の奥にあるソファに座る。ズボンから携帯を取り出す。彼女と出掛ける前に、携帯の電源は切っていた。電源を入れると、二通のメールと数件の着信履歴が残されていた。メールは、村瀬と万里子から。電話は、すべて万里子からだった。

『ばーか』

村瀬からのメールは、この一言だけだった。どうせ馬鹿だよ。そう思いながら、村瀬からのメールに苦笑する。

彼女が来ても冷静でいられると思っていた馬鹿だ、俺は。こんなにも自分が彼女を欲しがっていたなんて気付かなかった馬鹿だ。彼女か万里子かなんてこと、考えることもしなかった。万里子のことな

んで、考えてもいなかった。彼女が部屋の前にいるのを見た瞬間、余裕とか、冷静とか、そういうものはどこかに飛んでいった。

そんな自分にもう一度苦笑して、鞆からパソコンを取り出す。昨日と同じようにケーブルを繋いで、パソコンを立ち上げた。万里子からのメールは、開いていなかった。

しばらくパソコンに向かって明日の下準備をする。自分の分は終わったが、それなりに調べたいことはまだあった。キリの良いところまで書きあげたところで、バスルームから彼女が出てきた。その髪はまだ濡れていて、髪が簡単に拭いただけのようだった。

「何してるの？」

俺の座るソファのところまで歩いてきて、彼女が首を傾げながら尋ねた。

「明日の準備だよ。そこに今日発表した資料があるから、読みたかったら読んでいいよ」

テーブルの上に広げてある今日の資料を指して言えば、彼女は興味深そうにそれを手に取った。俺が貸したTシャツはそこまで大きくはなかったようだけど、袖の部分はやはり大きかったのか少しまわってある。パソコンの画面を保存して立ち上がり、彼女をソファに座らせた。

「そのファイルにも色々入ってるから、どうぞご自由に」

「頑張つて解読する」

笑つて言う彼女にこちらから笑い返して、俺はバスルームに向かった。着替えを手にバスルームに行き、彼女なら解読とまでいかなかったも、しっかりと内容を理解するだろうと予想できた。彼女との関係を差し引いても、彼女にはこの分野の勉強に対する才能があると思っていた。それに気付いている教授がどれほどいるかは知らないが。

そんなことを考えながら服を脱ぎ、何の気なしにバスルームの鏡に目を向けた。そこで、自分の肩らへんに赤い痕があることに気付く。何だと思いつながら、鏡に近付いてその痕をよく見る。それには、小さな歯型のような痕があった。何でこんなところに、と思つたすぐ後で、その原因に思い当たる。

さつき、彼女を抱いたときだ。正面から彼女を抱いていた時に、彼女が声を我慢するためか、しっかりと俺に抱きついてきていた。その時に、唇を肩に当てられていたんだろう。夢中だったのは、どっちだったんだか。今の今まで気付かなかったんだから、自分は相当いっぱいいっぱいだったに違いない。赤い痕を見ながら笑みを浮かべ、鏡に背を向けた。

バスルームから出ると、彼女はソファの上で体育座りをするように座っていて、真剣な表情で資料やパソコンを見比べていた。

「何か面白いもの見つかった？」

タオルで髪を拭きながらソファに近付いて彼女に聞くと、彼女は顔を上げて苦笑いした。

「これ読んで面白いと思えるほど賢くないよ。こういう解釈もあるんだなあつて、すごいなつて思っただけ」

「まあ、解釈なんて人それぞれだからね。君のレポートも、けっこう面白いと思うよ。俺は」

「ほんとに？」

俺の言葉に彼女は嬉しそうに笑う。よく見れば、彼女の髪は未だに濡れたままだった。

「まだ乾かしてないの？」

髪を指してそう聞けば、彼女は持っていた資料をテーブルに置いて、困ったように首を傾けた。

「だって、ドライヤー、バスルームにあるし」

「ああ、そっか。待ってて」

タオルを首に掛けて、来た道を引き返す。バスルームからドライヤーを持ってきて、ソファの隣にあるドレッサーのコンセントにコードを差し込んだ。

「はい、後ろ向いて」

「優しいねー」

ドレッサーの椅子を近くまで引つ張ってきてそれに座り、彼女に後ろを向くように促す。彼女はおかしそうに笑いながらも、肘かけを背にして、俺に背中を向けた。ドライヤーのスイッチを入れて、彼女の髪を乾かしていく。彼女は気持ちよさそうに目をつむっている。

「そっいえばさー」

ドライヤーをしている途中で、彼女が少し大きめの声で声を掛けてきた。

「何で部屋こんなに広いの？」

「こんなに」と言いながら、彼女は腕を広げて部屋を表現する。

「本当はシングル予約してたんだけど、部屋が使えなくなったとかでグレードアップになったんだ」

「えー。そんなのほんとにあるんだ」

髪を乾かしながら同じように大きめの声で返すと、彼女は少し驚いたような、羨ましそうな声をあげた。

髪が完全に乾いて、ドライヤーのスイッチを切ると、彼女がくるりと俺の方を振り返った。

「なに？」

「乾かしてあげる」

少し楽しそうな顔で言われ、文句も言わずにドライヤーを手渡す。椅子を鏡の方に向き直して、自分も鏡を見るようにして座りなおす。彼女はソファから立ち上がって、スイッチを入れたドライヤーで俺の髪を乾かし始めた。鏡に映る彼女は楽しそうにっていて、俺の顔にも自然と笑みが浮かぶ。

「なに笑ってんの？」

それに気がついた彼女が不思議そうに問いかけてくる。

「君が楽しそうだから」

「何それ」

俺の答えにおかしそうに笑って、ドライヤーを続ける。

乾かし終わると、ドライヤーのスイッチを切って、コードを抜きにドレッサーに近付いてきた。「もう寝ようか」なんて言いながらコードを縛る彼女の腕を引っ張って、椅子に座る自分の膝に彼女を座らせた。彼女が持っているドライヤーを取って、ドレッサーのテーブルに置く。

「どうしたの？」

膝に横座りになった彼女が驚いた顔で尋ねてきた。俺は手を彼女の腰に回して、彼女との距離を近付ける。その距離に、彼女が戸惑うことはなかった。

「別に？ やっぱり細いよね」

彼女の問いには適当に答えておいて、彼女の腰に腕を回したまま別の話題を振る。彼女は首を傾げたあとに、「んー」とうなった。

「細い、のかな？ 服買う時に試着したら、店員さんにびっくりされたことはあるけど」

「それは十分細いうちに入るよ」

「特に気にしたことないから分かんないだね」

俺の肩に手を置きながら、何でもないようにして彼女は言った。普通こんなことを言おうものならただの嫌味にしか聞こえないんだろうが、彼女は本当にそう思っているような言い方をするので、同性からもあまり反感を買うことはないようだ。

「俺としては、もう少し気にしてほしいけどね」
「なんで？」

「細すぎるよ。ちゃんと食べてるのか心配になる」
「食べてるよ。さつきも食べてたじゃん」

彼女が不満げに俺の言葉に言い返す。

確かに、先ほど夕飯を食べていた時も、彼女はしっかりと食べていた。それでも細いような気がして、心配になる。

「永井さんだつて、細いよ」

「標準だよ。だいたい、俺と比べる対象いないんだから、分からないでしょ」

「じゃあ、永井さんは私と比べる対象いるんだ」

彼女の言葉に眉を上げてそちらを見れば、彼女はにやにやとした顔で俺を見ていた。

「だてに大学で教鞭とつてませんから」

「たまに高校でも教えてるもんねー」

動じずに答えたそのすぐ後に、彼女が面白がるようにして付け足してきた。これには驚いて、彼女の方に顔を向ける。俺の驚いた顔が面白かったのか、彼女はしたり顔で笑っていた。

「なんで知ってるの？」

思わず質問してしまう。

確かに、週に一回だけ、高校で教えていたことがある。普通科の高校ではなく、芸術科のようなものがある高校だけだ。

「永井さんのいる研究室のプロフィールに書いてあった」

「ああ、そういうこと」

彼女の答えに納得して、小さく息をつく。彼女は「びっくりした?」と言って、おかしそうに笑っていた。

彼女が見たプロフィールは、たぶん、大学のホームページのことだ。院に関しては研究室ごとにホームページがあつて、そこに教授や准教授のプロフィールも載せてある。俺の分は写真がないが、名前はしっかりと載っているのですぐに分かっただろう。

「サイトに行くほど俺に興味持ってくれて嬉しいよ」

彼女を膝から立たせて、自分も椅子から立ち上がり、彼女の手を引いて歩きながら言う。

「見つけたのはだいぶ前だけだね」

「どれくらい?」

「確か、後期の授業始まつたくらいだよ。前期に受けた何かの授業で、永井さんの名前聞いたことあつたんだ」

それを聞いて、歩いていた足を止める。彼女を振りかえると、彼女は何でもない風に肩をすくめていた。

「参考文献探してる時にも見つけて、授業取ることになったから、検索してみた。だから、名前だけなら前期から知ってたよ」

笑って言う彼女に、思わず溜め息をついてしまう。彼女が戸惑ったように「なに？」と声をあげたのを無視して、すぐそばまで来ていたベッドに腰を下ろす。

「あのね、あんまりそういうこといきなり言わないで」

「なんで？」

「びっくりするし、けっこう嬉しいから」

目の前で立ったままの彼女の腰を引きよせて、ぐっと二人の距離を近付ける。座っている俺と彼女では、少しだけ彼女の方が高くなる。彼女は俺の言葉を聞いて、また面白そうに顔に笑みを浮かべた。

「永井さんも同じでしょ」

「何が？」

「私の名前知ってたし。私も、知っててもらってびっくりしたけど、それなりに嬉しかったもん」

その彼女を言葉を聞いて、初めて彼女とともに言葉を交わした時のことを思い出す。確かに彼女は、あの時驚いた顔をしていた。あの時から、彼女との繋がりができたのだ。

「他にもいっぱいいるのにね、学生」

そう言う彼女からは、『何で自分だったんだろうね』という意味が含まれていて、小さく笑ってしまう。そんなもの、俺にも分からない。初めは、優れたレポートを書く学生で、どういう子なのか興味を持っていただけだ。それでも、それを彼女に言う気はないけど。

「たまたまだよ」

俺の髪をいじっていた彼女が、この言葉で俺の顔を見下ろしてきた。

「嘘だ。ぜったい何かあるでしょ。永井さん、嘘つくの下手なんだから」

「それでも教えてあげない」

そう言って、片手を彼女の頭の後ろに回して引き寄せた。ゆっくりと唇が重なって、俺と彼女との間に距離がなくなる。

「朝早いんでしょ」

「頑張つて起きるよ」

キスの合間にそう言えば、彼女はまた何か言おうと口を開く。それを自分の唇で塞いで、彼女の身体を更に抱き寄せた。ベッドに倒れ込む時に、ソファの方で携帯のバイブが響いたが、俺はそれを無視する。

「鳴ってるよ？」

バイブの種類で俺の携帯だと分かったのか、彼女が首をかしげて言った。

「いいよ。どうせ、村瀬とかだから」

言いながら、彼女の髪を撫でて、もう一度キスをする。鳴っていた携帯も、しばらくして切れた。電話は、きつと、万里子からだ。俺も彼女も、それを分かっている。それでも、今はどちらかを天秤に掛けることもなく、彼女を選んだ。

合わせた唇の合間に息を漏らして。彼女に触れて、触れられて。さつきよりも深く、彼女を求めた。

次の日、隣で眠る彼女を仕方なく残し、俺は前日と同じ会場に向かった。それでも、その日は特にやることもなく、昼過ぎにはホテルに戻る事ができた。

「あれ、服買ったの？」

ホテルに戻り、部屋のドアを開けると、さすがに彼女も起きていた。昨日とは違う服を着て。泊まる用意を持ってきたいなんだから、当然着替えなんか持ってきているわけがない。その彼女が昨日とは違う服を着てるということは、朝起きてから買い物に行ったんだろう。

彼女は俺が部屋に入って声を掛けると、ぱっと両手を広げて服を見せてきた。

「うん。起きてもすることなかったし、今日の分だけ買ってきた」

「上だけだね」と言いながら、それでも彼女は嬉しそうに笑う。確かに、彼女がはいているジーンズは昨日と同じものようだった。まあ、上が変わるだけで全体が違うように見えるのだから、それはそれで良いんだろう。

それよりも、彼女の言葉から察するに、彼女は明日までしつかりここにいてくれるようだ。明日は月曜日だが、祝日なので問題はない。彼女のことから、今日帰ると言いだすのではないかと少し心配していた。

「いても、いいんだよね？」

一応安堵の気持ちを持っていたんだが、彼女にはそれがどういう顔に見えたのか、困ったようにそう尋ねてきた。鞆をベッドに置いて、ソファのところまで行ってその前に立っていた彼女に微笑みかける。

「帰るって言われたらどうしようかと思ってたよ」

そう言えば、彼女はほっとしたような笑みを見せる。それと同じくらい俺がほっとしているのを、彼女は分かっているんだろうか。帰ってきたら昼ご飯に行こうと決めていたので、二人して部屋を出る準備をする。彼女がクローゼットからコートを取り出して着ていた時に、思い出したように声をあげた。そして、少し非難するような顔で俺の方を見てくる。

「なに？」

その視線の意味が分からず問いかけると、彼女はむっとしたように口をつぐんだ。

「……あんまり痕つけないでよ」

彼女の言葉に『ああ』と合点がいく。試着する時にでも見えたんだろ。昨日俺がつけた痕が。

「先につけられたのは俺なんだけどね」

ベッドから鞆を取りながら言うと、彼女は意味が分からないといったように俺のを見てきた。鞆を持って、コートとマフラーを着た彼女を見下ろす。着ていたシャツのボタンを数個開けて、肩らへんが見えるようにした。

「ここ。小さいけど、痕がついてるんです。意識してなかったみたいだけどね」

赤く痕になっているであろう場所を指しながら言うと、彼女は何も言えなくなつて、慚然としたままドアの方に身体を向けた。それに笑うと、またしてもむっとしてこちらを見返してくる。

「おあいこだよ、これで」

ボタンを閉めながら言えば、彼女は何も言えないままドアを開ける。俺はそれに笑って、彼女の後に続いた。

彼女の機嫌は、昼ご飯を食べた頃にやっと直った。美味しいものを食べると気分が良くなると、彼女は嬉しそうに笑ってそう言った。

「それは安上がりでいいね。今度拗ねられたら、美味しいもので釣るよ」

「じゃあ、ものっすごい高いので」

「俺の財布と折り合いがいたらね」

こじんまりとしたレストランを出て、そんな会話を交わしながら市街を二人して歩く。日曜日の今日は、やはり人が多かった。家族連れもや友達同士もいるが、やはり目がいくのはカップルで、皆休日の午後を楽しんでいるようだった。

街の通りを歩きながら、隣を歩く彼女の手を取った。周りを歩くカップルと同じように手を繋ぐと、彼女は驚いたようにこちらを見上げてくる。それには気付かない振りをして、彼女が手を放さないように、ぎゅっと手を繋ぐ。少しして、彼女も俺の手を握り返すように繋いできて、彼女に気付かれないように笑みを浮かべた。

「またああいう服着てよ」

横断歩道で止まっている時に、向かい側の歩道にいる大学生くらい

の女の子を指差して言った。彼女は見えにくいのか、少しだけ目を細めてその女の子を見る。それから、「ああ」と声を出した。

「ああいうの一応持つてるけど」

「うん。前に見たことあるけど、似合ってた」

「覚えてたらね」

少し照れたように彼女はそう言って、青になった横断歩道を渡り始める。

俺が指差していた服は、以前に彼女が村瀬の舞台を観にきた時に着ていたようなものだった。丈が短めで、裾がふわつとしているズボンのようなもの。最近大学でもよく見るけど、名前までは知らない。横断歩道を渡り切って、先ほどとは反対の歩道を歩く。彼女の服を買うため、その途中にあった大きめのファッションビルに入ることにした。

ビルの中も、人が多かった。人ごみが苦手らしい彼女は、その人の多さに若干引いていたものの、服を買うためと溜め息をついてエスカレーターを上がっていく。正直、俺の方はこんなところ久しぶりすぎて、どこをどう行ったらいいか分からず、彼女についていくだけだ。それでも、彼女と一緒に女ものの店に入っていくのも特に何とも思わないので、店の前で所在なさに待つ男を横目に、彼女の服選びに付き合った。

彼女は俺の注文通りに、あの女の子が着ていたようなボトムを選んでくれた。

「お客様、細いですね」

店員の一人が、服を試着した彼女に向かって、少し驚いたような声で言う。試着室は店の奥にあるものの、店員の声はそのテナントに十分聞こえていて、何人かの客が彼女の方を向いていた。彼女は顔を引きつらせて「はあ」と困ったように言うしかなかった。それがおかしくて店員の後ろで笑っていると、彼女が目で『笑うな』と制してくる。結局、ボトムはそれに決まり、同じ店で上の服も買うことにした。

「何もあんな大きい声で言わなくてもいいのに」

店の袋を持ちながら、彼女が呆れたように言った。

「いいじゃない。細いなんて、みんな羨ましがるよ」

「私はこの細さに危機感覚えてるんですけどね」

彼女も彼女なりに自分の体型を気にしてるようで、困ったような顔つきになる。

「周りは気にしなくてもいいと思うけど、ちゃんと食べてね」
「食べてるよー」

昨日と同じような会話をして、エスカレーターを降りていく。ビルを出たところでまた彼女の手を取り、ぶらぶらと通りを歩く。

今度は、驚いた顔も、手を放すようなこともせず、俺の手を握り返してくれた。

ホテルに帰ってきたのは、8時頃だった。彼女の服を買った後に俺の服を見にいたり、近くにあった観光場所に行ったりとして、外で夕飯を食べて帰ってきた。

昨日と同じ順番でシャワーを浴び、髪を乾かし、ソファに座ってゆったりとしていた。彼女は昨日よりも身体を楽しみにしていて、パソコンを開く俺の隣でのんびりと本を読んでいた。明日はどのようなかと話して、彼女がガイド本通りに動いてみようと言うので、そうすることにする。部屋は彼女が本をめくる音と、俺がキーボードを打つ音しかしなかったが、二人とも別段それが気になるというわけでもなかった。ゆっくりとしたその時間を壊したのは、ドレッサーのテーブルに置いてある俺の携帯だった。

「出ないの？」

携帯に気付いた後もそれを無視してパソコンを打つ俺に、彼女が遠慮がちに聞いてきた。それには小さく笑って応え、パソコンを打ち続ける。携帯のバイブ音はしばらくして止んだが、またすぐに鳴りだす。彼女は声には出さないものの、それを気にしていた。パソコンを打つ手を止めて、ドレッサーに手を伸ばし、携帯を手を取った。掛けてきたのは、万里子だ。手の中で鳴り続けるそれには出ず、電

源を切った。

「……ごめん」

携帯をソファの横に置いてある鞆に仕舞うと、隣に座っている彼女が小さな声でそう言った。

「君が謝る必要ないよ」

そう言うも、彼女は困ったような笑みを浮かべ、読んでいた本を閉じる。

「違うよ。永井さんのためじゃない。言えば、私が楽になるから言った」

本を自分の隣に置いて、彼女がそう言った。そして、俺の方を向いて、何ともないようにして小さく笑う。

「言わないようにしてたんだけど、無理だった。ごめん」

小さく笑う彼女の下には、悲痛で歪む彼女が見えた。こんな風に、彼女は自分の気持ちを隠そうとする。泣きたいのに、笑って。怒り

たいのに、笑って。言いたしたいことを、飲みこんで。

パソコンの画面を保存してから電源を切り、何も言わずに彼女の手を取ってソファを立った。大人しくついてくる彼女をベッドに座らせて、その頬を両手で包んだ。

「この件に関して、君が謝る必要なんてない。君をここに来させたのも、俺だから。でも、言って君が楽になるなら、どれだけでも言っている。そのことを、謝る必要もない」

揺れる彼女の瞳を見ながら、「ただ」と続ける。

「今は俺を見てほしい。先のことなんか考えなくて、俺の事だけ考えてほしい。明日が終われば、君の自由にしていい。君が何かしらの決断をするまで、ちゃんと待つから」

最後の言葉に、彼女が目を開いて驚いた顔をする。そして、何か言おうと口を開きかけるのを、目で制した。

分かっていた。彼女が、まだ迷っていることを。何かにぼんつと背中を押されたように、俺のところに来たことを。きっと、明日が終われば、彼女はまた連絡を断つ。俺を遠ざけるためでなく、何かしらの決断をするために。

「俺は、曖昧でも何でも、君が欲しいと思ってる。どれだけ君が不安定な気持ちを持ってたとしても、手に入れておきたいと思ってる。ただ、君が欲しいだけだ。だから、君を呼んだんだ」

彼女の顔が、泣きそうになる。

彼女は自分を勝手だと、卑怯だと言う。それは、俺も同じだ。不安定な彼女を呼んで、抱いて、俺をしつかり覚えさせて、彼女の中の俺を占める部分が増えればいいと思った。悩む間に、俺のことを思い出すようにした。少しでも、俺を選んでくれるように。

「明日が終われば、どう思ってもいい。でも、今は、俺を欲しがって」

ほとんどその言葉と同時に、彼女に口付けていた。余裕なんて、冷静なんて、そんなものはない。天秤なんて、はなっからないも同然だ。彼女のことしか考えていない。彼女しか、欲しがっていない。何度も合わせる口付けに、彼女も応えてくれた。頬に触れている俺の手に自分のそれを重ねて、袖口を引っ張った。それに引かれるようにして、彼女をベッドに押し倒す。

「春希、」

名前を呼んだ。初めて抱いた時と同じように、何度も彼女の名前を呼んだ。彼女が俺を思い出すように、何度も呼んで、繋がった。

次の日の朝、先に目が覚めた。彼女が、抱きつくようにして眠っていた。

しばらくして起きた彼女と、ごろごろとベッドでじゃれ合って、ぎりぎりまでふざけていた。

昨日決めていたように、ガイド本通りに街を巡って、夕方にはそこを出た。

家まで送ると言うのに、彼女はそれを頑なに拒否した。確かに、彼女の言う通り、彼女を送って自分の家に帰るとなると、予告していた時間よりもだいぶ遅くなってしまう。折れない彼女を見て仕方なしに、俺の住む県から電車に乗ってもらうことにした。それでも彼女は断ろうとしたが、この日最後のわがままだと言えば、頷いてくれた。

彼女を駅前で下ろして、自分の家に向かった。もしかしたら彼女と触れあうことはないかもしれないというのに、別れ際に何かを言うでもなく、いつもと同じように「じゃあ金曜日に」と別れた。そうすることで、何か期待を持ちたかったのかもしれない。

マンションの駐車場に車を止めて、一度運転席で溜め息をついた。これからが、一番大変かもしれない。きっと、電話に出なかったことを責められるだろう。離婚について、なぜと言われるだろう。嫌だと言われるかもしれない。それでも、それを止めるつもりはなかった。誰のためでもない。これからの生活を考えられない万里子とは、もう一緒には暮らしていけない。

『女より、自分のこと優先だろ』

三日前の村瀬の言葉を思い出す。その通りだ。結局、自分の研究を優先させたいから、万里子とは別れる。もし万里子がそれに理解を示したとしても、この決断を変えることはないんだろう。車を出ようとしたところで、携帯が鳴った。万里子だろうと思いいながら開くと、それは万里子ではなく、村瀬からだった。

『ばーか』

二日前に送られてきたのと同じメールが送られてきて、思わず苦笑する。

『ばかでいいよ』

村瀬にそうメールを返して、今度こそ車を出た。エレベーターで上がって、家の階に着く。

「ただいま」

家に着いて、いつもと同じように声を掛けた。部屋の奥から、万里子がスリッパの音を鳴らしてこちらにやってくる。

「マサくん、何でメールも電話も出ないの？」

怒ったような口調と顔で万里子がそう言い、俺に答えを求めてくる。車のキーを靴箱に置いて、そんな万里子を見やった。

「うん。ごめん」

それだけ言っで、靴を脱ぎ、部屋に上がる。そのまま万里子の横を通って、リビングへと向かった。万里子が怒って後ろからついてくる。二人ともがリビングに着いたところで、俺は後ろの万里子を振りかえった。

「万里、話があるんだ」

携帯を持ちながら、溜め息をつきそうになるのをぐっと堪える。

『なんで、別れるとか言うんだよ』

「今言っただじゃん。違う人に誘われて、デート行っただって」

ソファに座りながら、投げやりに答える。

携帯でどこににいるか分からない彼氏と話を続けながら、部屋のカレンダーを見やる。電話の向こうからは、楽しい会話が続いてきた。会話はもちろん英語だけど、嬉しいのか腹立たしいのか、その会話を全部理解してしまう自分がいた。

心の中で溜め息をついて、カレンダーの日を数える。永井さんのところから離れて、二日経っていた。今日は水曜日で、バイトが終わってから、家で彼氏に電話を掛けた。もちろん、別れ話をするために。予想通りというか、彼氏は別れることに反対した。永井さんと一緒になったとは、言っていない。けれど、私はちゃんと真実に近いことも言っていて、それでも別れたくないという彼氏が正直分らない。

『俺も言っただじゃん。女の子に、いきなりキスされたって。それでも、春希とは別れたくないから、断ったんだよ』

このやり取りが、かれこれ一時間は続いている。

私が知り合い——永井さんと出掛けたことを言うと、彼氏はなぜか現地で知り合った日本人の女の子にキスをされたことがあると言い出して、二人がおあいこだからまだ続けたいと言ってきた。意味が分からない。

『春希が俺のこと嫌いになったんじゃないなら、別れたくないよ』

好きか嫌いかで聞かれたら、たぶん、もう彼氏のこととは好きじゃないんだろう。それでも、そうやってはつきりと言えない自分がいて、永井さんとのことを引っ張ってきて、別れる理由にしようとしている。最悪だ。本当に。

『ごめん、みんな呼んでるから』

そう言つて、私が何も言わないうちに、電話を切った。

自分も携帯の切ボタンを押して、大きく溜め息をついた。結局、これは別れられなかったということだろう。

永井さんがいるからとか、そういうことではなく、単にもう彼氏との関係を終わらせたかった。これ以上続けても何の意味もないだろうし、連絡も取り合っていないのに、付き合つてるともいえないだろう。彼氏が留学から帰ってきてずるると関係を続けるより、ここで終わらせておいた方がずっといい気がしていた。それをはつきりとは言えなくて、永井さんとのことを引っ張り出したんだ。

永井さんが好きなのか。それもよく分からなかった。それでも、永井さんを受け入れた。

本当は、土曜日に、行くかどうかを直前まで迷っていた。先週のバイトで、行こうかどうしようかと、古賀さんに相談しようかと思っていた。その度に、古賀さんに聞かされた『美香ちゃんと付き合うことにした』ということが思い出されて、結局聞けずじまいだった。そのまま、事後報告のような形になって、バイトが終わった今日、永井さんとのことを古賀さんに話した。

「永井さんに誘われた？」

バイトが終わって、お互いがいつもの場所に着いたところで、永井さんに誘われたことを話すと、古賀さんが驚いたように私を見てきた。

「で、行っただの？」

「……うん」

私が頷くと、古賀さんは何とも言えないような表情をして、小さく溜め息をつき、私から顔を逸らせた。

「何で今言っただ？」

私から顔を逸らせたまま、古賀さんが問いかける。

「言おうと思ってたんだけど、ほら、美香ちゃんとのことがあったし」

「ああ……」

美香ちゃんの名前を出すと、古賀さんは今思い出したように呟いて、また小さく溜め息をついた。

「別に、言えばよかったのに」

「そうもいかないでしょ」

苦笑しながら言えば、古賀さんも分かっているのか、小さく息をついただけで、何も言わなかった。

「……どうすんの？」

顔を私の方に戻し、古賀さんが言った。私は苦笑いを漏らしたまま、肩をすくめる。

「別れるよ。もう、一緒にいても意味ないもん」

そう思っていたのは前々からで、永井さんのことがあって、その考えが強くなった。

「そうじゃなくて、永井さんと」

そんなことは分かっているという風にして、古賀さんが言った。その質問にも、苦笑を漏らすしかない。

「分かんないんだ。一緒にいたいのか、いたくないのか。永井さんは別れるって言ってたけど、不倫だもんね。私のしたことって」
「そのことは、お前に責任ないだろ。誘ったのは、永井さんなんだから」

「……悪いって言うてくれた方が、だいぶ楽なんだけどね」

私の言葉に、古賀さんが少し怒ったような顔つきになる。

「人から悪いって言われて決めるんじゃないで、自分がどうしたいかで決める。そうでないと、永井さんだって納得しない。あの人は、本当にお前のことが好きだって言ったんだろ」

「……ごめん」

真剣に言われて、小さく謝る。そんな私を見て、古賀さんの顔も少

し柔らかくなった。

「お前のしたいようにすればいい。どんな結果になっても、俺はお前の味方だから」

古賀さんの言葉は、上辺だけのものじゃなくて、本当にそう思っているようなものだった。いつだって味方でいてくれる古賀さんに、その時はどうしようもなく申し訳なくなつて、小さく頷くことしかできなかった。

「美香ちゃんとのことは気にしないでいいから、何かあつたら、いつでも言え」

帰り際に古賀さんがそう言った。私はそれに頷いたけど、古賀さんも私も、それが本当にそうなるとは思っていなかった。美香ちゃんと古賀さんが付き合っているという事実が、二人の今までの関係を変化させているということに、二人とも気付かないようにしていた。

今日の古賀さんとのやり取りを思い出して、また溜め息をついた。古賀さんは、私の味方でいてくれると言った。けど、それは、私と

彼氏が別れるという前提でだ。結局私と彼氏が別れていないと知ったら、いくら古賀さんでも、私を軽蔑するような気がした。それに私は耐えられるんだろうか。こんな曖昧なまま永井さんと一緒にいることにして、それを古賀さんに言えるんだろうか。誰に何と言われてもいい。勝手だとか、卑怯だとか言われてもいい。でも、古賀さんには味方でいてほしかった。古賀さんがいなくなったら、私は、きつと耐えられない。

永井さんと一緒にいるのは止めよう。こんな風に、よく分からない感情を持ったまま、永井さんといえることはできない。あの人はすぐに分かってしまうから。私が何を考えているかを。

携帯をソファに放って、そうすることに決めた。あとは、それを言うだけだ。大丈夫だと思って、濡れていた髪を乾かそうとソファを下りる。鏡を手にとって、それを見たときに、よれたＴシャツから首元に赤い痕があるのが見えた。

『春希、』

私の名前を呼ぶ、永井さんのことを思い出した。初めは切羽詰まったように、次には優しい声で、最後は全部の気持ちをぶつけるように、私の名前を呼んだ。その声のまま、私を抱きしめていた。何度も何度も私の名前を呼んで、キスをして、触れ合って。

嫌いじゃない。永井さんのことは。どうでも良かったら、こんなことと思ひ出さない。だから、嫌だった。永井さんを嫌いだと思って、彼氏となあなあに続けられたら、どれだけ良いか。

彼氏と続けるのは、完全に情性だ。一年付き合って、今は恋人らしいことをしていないけど、なあなあに続けている情性。それにプラスして、自分も似たことがあったからおあいこだと言われ、続けようとはだされた結果。

彼氏と続けるなら、永井さんとは一緒にいられない。それをしてしまったら、私は古賀さんを失くしてしまう。

最低だ。私は。永井さんとのことなのに、何一つ、永井さんのことを考えられていない。本当に、永井さんはどうして私なんだろう。どうして、永井さんと繋がりを持ったんだろう。あれがなければ、もう少し楽だったのに。

ばかみたいなことを考えて、Ｔシャツで首元を隠した。

結局、うまい伝え方なんて何一つ考えつけずに、金曜日を迎えてしまった。

永井さんは、私が決めるまで待つと言ったけど、それがいつになるのか自分でも分からない。それなら、今日言ってしまったおうと思っていた。後に持ち越すより、今言ってしまった方が楽な気がした。どうせ、あと少しで、永井さんの授業も終わる。会わなくてすむ。思い出しても、会うことがないなら、大丈夫だ。

「おはよ」

先に教室に着いて携帯をいじっていると、後から来た友達が横に座りながら声を掛けてきた。携帯を仕舞って友達の方を向く。

「はよー」

永井さんのことを頭の隅に追いやって、へらつと笑ってみせた。

授業が始まる前も、その最中も、終わった後も、永井さんはいつも通りだった。いつものように舞台背景を説明して、先週出されたミニレポートの内容で教室を笑わせて、教壇に座ってDVDを観て。

その手にだけ、いつもの指輪がなかった。

「ちょっと聞きたいことあるから、先行ってて」

「わかったー」

授業が終わった後、友達にそう伝えて、教壇の周りや教室に人がいなくなるのを待つ。何気ないように携帯をいじって、動く人たちがから浮かないようにした。

最後の人たちが出ていったのを見て、ゆっくりと歩いて永井さんのいる端っこの教壇に近付いた。永井さんは以前のようにレジュメをすべて整理してから、私の方を見た。

「意外と早いんだね」

椅子に座って、目の前に来た私に永井さんがそう言った。言葉の割には、別段驚いている様子も、戸惑っている様子も見えない。

「うん」

そうやって頷いて、永井さんの顔を見た。永井さんはいつものように、小さく笑っている。もう何度思い出しかも分らない、『春希』と呼ぶ声を、また思い出した。そんなのを全部頭から追い出して、口を開く。

「やっぱり、永井さんと、一緒にいることはできない。私は彼氏がいるし、永井さんは、結婚してるし。あんなことしておいて最低だけど、永井さんとは、無理だよ」

頭の中を全部そのことでいっぱいにして、ちゃんと永井さんを見て、そう口にした。永井さんの顔から笑みが消えたけど、その顔は怒っているでもなく、悲しんでるわけでもなかった。じっと私のことを見て、今の言葉を探っている感じだった。

「ちゃんと彼氏とも話して、続けることになった。だから、永井さんとは一緒にいない」

言い終わってから少しして、永井さんが小さく息をはいた。

「そっか。君がそう言うなら仕方ない」

永井さんの言葉を聞いて、ばれないように心の中で安堵する。でも、永井さんの言葉には続きがあった。

「でも、それが君自身で考え出したことじゃないなら、納得しない。彼氏と続けるって決めたのは、君？ 両方？」

永井さんは涼しげな顔して聞いてくるけど、その目はしっかりと私を見据えていて、少しだけ、逃げ出したくなった。

「ちゃんと俺の事見て」

「見てるよ」

「違う。逃げないで、俺のこと考えて、それで答えを出して」

永井さんは、分かった。やっぱり。私が永井さんのことを何一つ考えないで永井さんのことを決めたこと。

「俺は、曖昧でも何でも、君が欲しいって言ったよね。君がこのまま何となく彼氏と続けたままでも、俺を選んでくれたらと思ってる。それで君が誰かに冷たい目で見られて、それが嫌なら、もう何も言わない。俺のことが嫌いじゃない限り諦めないとは言わないけど、せめて君自身の答えを聞かせてほしい。俺がどうか、周りがどうか、そうじゃない答えが欲しい」

そこまで言い切られたら、もう永井さんを真っ直ぐに見ることはできなかった。

永井さんは分かっているんだ。私が、古賀さんを失うことを恐れていることを。それで、それを言わなかったことを。分かっても、永井さんは私を望んでいた。真っ直ぐな永井さんのそれに、私は向き合えなかった。

「春希、」

永井さんが、私の名前を呼ぶ。思わず視線を永井さんに戻すと、さつきより柔らかくなつた目でこちらを見ている永井さんと目が合った。

「正直に言えば、曖昧なのは俺も一緒に、まだ家を出た状態じゃない。このことはちゃんとするつもりだけど、それがいつになるかは分からない。それでも、君を欲しいと思ってる。だから、曖昧だとかどうとかで悩む必要はないよ」

「勝手なのは俺も同じだよ」と、永井さんは続けた。そして、座つたまま私の腕を取り、ゆっくりと自分の方に引き寄せた。永井さんのすぐ目の前に立たされて、どうしたらいいか分からず、目が泳いでしまう。永井さんはそんな私を見て笑みを漏らし、指先で私の頬を撫でた。しばらく頬を撫でられて、今度は手で頬を包むようにされた。右も、左も。それから、永井さんの顔が近付いてくる。それを見て、自分でも不思議なくらい、自然と目を閉じていた。

ゆっくりと重なった唇から、永井さんを感じる。驚きとか、戸惑いとか、嫌悪とかなんて、一つもなかった。何も不思議に思わず、自然に受け止めていた。

「来週まで待つから。来週まで考えて、それでも考えが変わらなかつたら、もう何も言わない。どんな答えだろうと、ちゃんと受け止めるよ」

少しだけ顔を離してそう言われ、頷くしかなかった。頷く私を見て、永井さんは私から手を放す。自惚れかもしれないけど、そうする永井さんが、名残惜しそうに見えた。

「それじゃあね」

教壇に置いてあった鞆を手にとって、永井さんが私の横を通っていった。

後ろでドアが閉まる音を聞いて、のろのろと自分もドアの方へと向かう。

私は一体何がしたいんだ。彼氏とも別れられず、古賀さんに軽蔑されることを恐れ、永井さんと離れることもできなかった。ばかりみだ。一度は決断するくせに、それを実行することもできない。相手の言葉に、ほいほいと流されてしまう。自分を勝手だと思う自分が、勝手な人間で、ひきような人間に思えた。

授業のあった棟を出て、友達といつもご飯を食べる場所に向かう。その途中にある喫煙スペースで、見知った人たちを見かけた。その人たちは、本来ならここにいるはずもなく、いる必要もない人だった。片割れの人が私の方を見て、なぜかあたふたしている。

「何やってるんですか？　こんなところで」

「あ、宮瀬ちゃん」

声を掛けると、あたふたとしていた一人がへらつとわざとらしい笑みを向けてくる。その隣に立つ人は、『だから言わんこつちやない』

という風に溜め息をついている。この人たちとは、以前バイト帰りにご飯を食べたお店で会ったことがある。古賀さんの友達だと教えられたこの人たちは、会った瞬間から、なぜか私に親しげに話しかけてきた。特に今あたふたしている人。

この人たちは、古賀さんの友達で、古賀さんと同じ大学の人たちだ。だから、ここにいる理由がない。それを不思議に思つて尋ねただけなのに、あたふたしていた方は「えっと、」やら「あー」という言葉を繰り返すだけで、なかなか教えてくれない。見かねたその人の友達が、代わりに教えてくれた。

「明法の友達に会いに来たんだけど、そいつ教授に呼び出されててさ。今待つてるところなんだ」

「あ、そうなんですか」

そう答えながら、周りを見回す。古賀さんから『よく一緒にいる奴ら』だと聞かされていたので、その本人もいるかもと思つただけど、どうやら古賀さんは来ていないようだった。

「古賀は学校で教授から呼び出し。呼び出していつでも、手伝いとかなんだけどね」

「優秀だから」と、その人は私の考えを読んだかのように言った。それに頷いていると、横からあたふたしていた方が「そうなんだよ」と大げさなくらい合いの手を打つ。教えてくれた私の前に立つ人が、うつうつしそうに顔をしかめた。

「古賀のこと聞いた？ あの、美香ちゃんっていう子のこと」

顔を元に戻したその人が、そういえばと尋ねてくる。横にいた人が、『え、』というようにその人を見た。

「あー、うん。聞いたよ。良かったよね」

古賀さんの友達なら、美香ちゃんのことを知っていて当然だ。水曜のことを思い出しながら、笑いながら頷いて答える。

「古賀ってさ、ほんとに美香ちゃんのこと好きだと思う？」

あたふたしていた人が、頷く私に質問する。その顔は、やけに心配そうだった。

「そうだと思うけど。古賀さんは優しいけど、嘘で付き合ったりはしないよ」

そう答えると、その人はほっとしたように安心した笑みをみせた。「そうだよなー」なんて言いながら、顔を笑みでいっぱいにする。真っ直ぐな人だなと、そう思った。古賀さんのことが心配で、それでもそれを気付かれないようにして。この人の性格上、本人は気付

かれてないと思ってても、すぐにばれたりするんだろっけけど。
本当は、古賀さんが美香ちゃんを好きかどうかなんて知らない。付き合ったという報告は受けたし、たまにデートのことなんかも聞いたりするけど、二人の間で美香ちゃんのことを深く話したことなくてない。それは、しちゃいけないような気がしているからだ。二人とも。

「じゃあ、友達が待ってるんで」
「あ、うん。はいはい」

にこにこしながら、手を振ってくる。その横にはその人を呆れたような目で見ている人がいた。
二人から離れ、小さく息をつく。

『来週まで待つから』

永井さんの言葉を思い出す。

こうやって日があくと、私はまた悩む。古賀さんに言うべきか、どうか。古賀さんは美香ちゃんのことなんか気にせず、何かあれば言えと言ってくれた。だけど、それを本当にその通りにしていいんだろうか。今現在で、美香ちゃんのことを無視して、以前のように何でも相談して。それに、事が事だ。私が一番怖いのは、古賀さんと美香ちゃんがどうにかなることじゃなくて、古賀さんを失うことだ。こんな曖昧な自分を、古賀さんは軽蔑しないだろうか。

と、そこまで考えて、またかと自嘲した。また、永井さんのことを考えていない。

私は結局、何が欲しいんだろう。

「先生さ、最近さつきみたく窓見てたり、腕組んでぼけつとしてること多いよね」

月曜日のバイトで、いつも授業をみている高校生の女の子にそう言われた。その言葉にペンを動かす手が止まり、ぎぎぎつと鈍い音になりそうなほど、ぎこちなくその女の子の方を見る。女の子は私のこのぎこちなさには気付いていないようで、両腕を机の上に置いて「何かあった？」なんて可愛らしく聞いてきた。

「いや、特に何もないけど。学期末だから疲れてるんですよー」

わざとらしく疲れた顔をしてみせ、へらつと笑う。

「えー。先生そのうち倒れるんじゃない？」

「倒れたら看病よろしく」

「やだよ」

生徒が冗談で笑って言うことに、冗談を返して、それに返ってきた生徒の返答に二人して笑う。笑いながら、気付かれないことにぼつとする。

最近のことを考えれば、『何かあった』どころの話ではない。彼氏とは未だ別れられず、古賀さんにもまだ何も伝えていなくて、永井さんとはどうなるかさえ分かっていない。それを自分でどうにかしなきゃならない。誰かに全部ぶちまけて楽になりたいような、そうでないような。そんな気分だ。

生徒に次の場所を指定して椅子から立ち上がる。金曜日から、何も進んでいない。自分の欲しいものが何なのか、未だに分かっていないだから。

バイトが終わって、いつものように古賀さんと二人定位置に座って二人ともが何も言わずにぼーっとしていた。古賀さんは携帯を開いて何かをしていたようだけど、それもすぐに終わらせて、何を言うでもなく、いつものコンクリートブロックのところに座っている。

私の方は、意味もなく携帯をいじって、永井さんのことや彼氏のことを言おうかどうしようか迷っていた。言いたいけど、言いたくない。今の状況を話してしまいたい気持ちもあったけど、それを話して古賀さんに嫌われたくないという気持ちもあった。

「……どうなった？」

古賀さんが、私の考えを読んだかのように、そう口にした。携帯を持ったまま顔を上げると、古賀さんがこちらを見ていた。その古賀

さんを見るだけで、また古賀さんが気を使ってくれたんだと理解する。自分からは言いだせない私に、助け舟のように、古賀さんから聞いてくれたんだ。やっぱり、古賀さんは優しい。

「なーんにも進んでない。別れてもないし、断れてもないし。別れようって言っても、おあいこだから別れたくないとか言われて、一緒にいれないって言ったら、ちゃんと私の答えが欲しいって言われて。人に流されちゃってる」

軽い口調で言ってみたら、古賀さんが、少しだけ眉を寄せた。きつと、古賀さんは私がそんな口調と同じ気持ちでいるなんて思っていない。眉を寄せた古賀さんを見て、そう思った。

「彼氏とかそういうの全部無しにして、お前は どうしたいのか？」

それを聞かれると、うまく答えられない自分がいた。古賀さんから視線を外して、こっんこっんと足を原付にぶつけながら、ぼんやりと地面に目をやった。古賀さんは私を急かすことなく、黙って私の答えを待っている。

私は今、どうしたいんだろう。このままでいいのか、それとも永井さんと一緒にいたいのか。

「永井さんと、一緒にいたいのか？」

斜め向かいから、古賀さんが尋ねた。それでも、私はそれには答えずに、こつんこつんと足をぶつけたままにいる。

永井さんと一緒に、いたいんだろつか。嫌いじゃない。永井さんのことは。永井さんと会って、カフェで話をするあの時間が、好きだった。何があっても味方だと、永井さんは言ってくれた。曖昧でも何でも、私が欲しいと。

「……たぶん」

足を原付にぶつけながら、視線を古賀さんから外したまま、古賀さんの質問に答えた。

自分で答えてから、本当にそうなんだろうなと感じた。

「なら、それでいいじゃない？」

私の答えに同意してくれる古賀さんの言葉を聞いても、それを素直に受け止めることができなかった。古賀さんに目を向けずに「うん」と曖昧な返事をして、まだ足を動かす。

「お前が彼氏と付き合ったまま永井さんと一緒にいることを選んでも、俺は、俺とお前は、変わらない。ずっと、このままだ。何かあれば、話しにすればいい」

そう言う古賀さんの言葉を聞いて、やっと私は古賀さんの方を向い

た。暗くて古賀さんがどんな顔をしているかまではつきと分らないけど、古賀さんはちゃんと私の方を向いていて、今の言葉が嘘ではないと感じられた。そんな古賀さんを見て、少しだけ泣きそうになった。

古賀さんは、本当に私のことをよく分かっているみたいだ。私が、情性で彼氏と続けることも、永井さんに気持ちが向いていることも、古賀さんは分かっていた。曖昧な自分が古賀さんに軽蔑されることを恐れていることも、分かっていた。ずるくて、ひきょうな私を、分かっていた。それでも、自分は変わらないと、そう言ってくれている。

「何かあったら、変なこと考える前に話せて、いつも言ってるだろ。お前が変なこと考えだすと、ろくなことない」

少し笑いながら、古賀さんがそう言った。

「だって、古賀さんがいなくなったら、どうしたらいいか分からない」

「いなくなるもならないも、同じバイトなんだから変わらないだろ。あほなこと考えんな」

「どうせあほですよー」

いつもみたいなやり取りをして、さっき泣きそうになったことを隠した。古賀さんがいつものように笑ってる。それを見て、私も笑えた。いつものように古賀さんに話したおかげで、さっきまで感じていた重苦しい気持ちが、どこかに飛んでいった。全部、全部古賀さ

んのおかげだ。だから、私は古賀さんがいなくなることが怖い。

「お前の好きにしたらいいんだよ。どうするか決める権利は、お前だけにあるんだから」

もう何回目かも分からない言葉を、古賀さんは口にした。こうやって、古賀さんはいつも私が欲しい言葉をくれる。それがどれだけ助けになっているか、きっと古賀さんは知らない。

「ありがとう」

「どういたしまして。何かあるなら、話せばいい。話くらいは聞くから」

「だから、それが嬉しいんだって。こんなこと言えるの、古賀さんしかないんだよ」

「あー、あの時、お前の愚痴なんて聞くんじゃないかったー」

わざとらしく落ち込む古賀さんが、本当に優しくて、嬉しかった。周りに何を言われても、古賀さんがいると思えば、それだけで乗り越えられる気がした。

『バイトお疲れさま。私も今バイト終わったんだ〜』

水曜日、バイト終わりに宮瀬と別れて、家に帰って、風呂に入ったり夕飯を食べたりして、自分の部屋で落ち着いた頃、このメールに気付いた。送信者は、美香ちゃん。送られた時間は、10時半。今は、11時。それでも、バイトのある時にこの時間に家に帰ってこれるのは早い方だ。バイトのある日は、たいてい帰ってくるのは1時半くらい。バイト終わりに宮瀬と喋っていると、いつも時間を忘れてしまう。ただ、今日は違った。二人とも、何となくいつもみたくいれなくて、何でもない振りしてさっさと帰ることにした。

『お疲れ。ゆっくり休んでね』

ベッドに寝転がりながら、そう返信した。それに対して、美香ちゃんからもすぐにメールが返ってくる。それにすぐに返す気にはなれず、ベッドから下りて、鞆から明日の授業で使う分厚い教科書を取り出した。そしてまたベッドに寝転がって、それを読む。予習なんて高校時代で終わりかと思っていたら、何のことはない、大学でもしっかりとそれは義務付けられていた。他の学部や授業では知らないが、この授業と実験の時だけは別だ。一番最初の授業の時に『予習はしっかりやるように』と教授からも伝えられていた。全ての学生がそれを守っているかどうかは別として。さして勉強が嫌いじゃ

ない俺は、特に予習も苦にはなっていない。それで、今も予習と称して教科書を読んでいるんだが、今日はあまり頭が使える状態じゃないようだ。内容がまったく頭に入っていない。

ちらつと枕の横に置いてある携帯を見る。美香ちゃんと付き合うと決めて、一週間以上過ぎた。正直、会ったその日に付き合うことになるとは、俺も思っていなかった。初めて会った土曜日のことを思い出して、こういうのをほだされたというんだろつかと、呑気に考えた。

美香ちゃんと初めて会う土曜日。待ち合わせは、俺の住む県とは隣の県の駅前だった。県を超えらるってても、俺の家の最寄り駅からは20分ほどでそこに着く。バイトが同じ藤田さんとは高校時代からの友達だという美香ちゃんは、現在その県に一人暮らしをしていた。

待ち合わせは昼頃になっていて、美香ちゃんは俺よりも少しだけ遅れて待ち合わせ場所に到着した。美香ちゃんを見た瞬間、『ああ、藤田さんの友達だな』と納得した。美香ちゃんも、藤田さんと負けず劣らず女の子らしい子で、女の子らしいワンピースを着て、小さなポシェット風の鞆を肩から斜め掛けにしていた。俺たちと遊ぶときはほとんどジーンズで、リュックや男がよくしているようなメッセンジャーなんかを持っている宮瀬とは、まったくかけ離れた子だ。

「古賀くん、だよな？」

俺は美香ちゃんのことを一度も見たことはなかったけど、美香ちゃんは俺の写真なんかを藤田さんから見せてもらったことがあるそうだ。だから、俺は美香ちゃんが分からなくても、向こうが分かって声を掛けてきてくれた。

「美香ちゃん？」

「うん」

声に気付いて確かめると、美香ちゃんは嬉しそうな顔で頷いた。とりあえず、その場で簡単な自己紹介をして、昼ご飯を食べようと歩き出す。場所は、美香ちゃんが決めてくれていた。

「ここのパスタがすごく美味しいんだよ」

「そうなんだ。ありがと。決めてくれて」

「いいよー」

にこにこと笑いながら案内してくれる美香ちゃん。美香ちゃんの言葉を聞きながら、やっぱりパスタって定番なのか、なんてくだらないことを考えた。高校時代付き合っていた彼女も、デートの時はそういうものを食べていた。『今日はラーメンが食べたい』と、でかい声でバイト終わりに言っていたことがある宮瀬を思い出して、あいつもデートなんかではパスタとか言うんだろうかと思う。

「古賀くんは、彩香ちゃんと同じバイトなんだよね？」
「うん」

店で注文したパスタを食べながら、美香ちゃんの質問に頷く。『彩香ちゃん』が誰なのか、気付くまでに数秒掛かった。『彩香』は、藤田さんの名前だ。

「古賀くんとか、何か恥ずかしいからやめてよ。君付けとか、小学校以来されてない」

「えー、じゃあ何て呼べばいいの？」

俺の言葉に、美香ちゃんが本当に困ったという顔をする。その表情さえも女の子らしくて、普通に可愛いと評されるんだろう。

「好きにしたらいいよ」

そう言えば、美香ちゃんは少しの間悩んで、窺うようにしてこちらを見てきた。

「じゃあ、博己くんって、呼んでいい？」
「いいよ。俺だって名前で呼んでるし」

俺の答えを聞いて、美香ちゃんは嬉しそうに「よかった」と言う。

この辺から、今日のデートに対する気持ちだが、俺と美香ちゃんとで若干の違いがあることに何となく気付いていた。

「俺の写真とか見たことあるって言ってたけど、どんなの見たの？」

食事中はお互いのことを話しながらで、食べ終わった後に、俺がそう聞いた。すると、美香ちゃんは少しだけ照れたような様子を見せ、恥ずかしげに笑みを浮かべる。

「写真も見ただけど、ビデオ見せてもらったんだ。彩香ちゃんに」

「ビデオ？」

「うん。あの、飲み会ときに撮ったっていうやつ」

「ああ、あれか」

美香ちゃんの言っているビデオというのは、九月くらいに、夏期講習お疲れ様会と称してやった飲み会時のビデオのことだろう。バイト仲間の中山が新しくビデオカメラを買ったというので、それを持ってきて飲み会の様子を撮影していた。後で見たら、あまりのぐだぐだ感に、みんなして笑ったのを覚えている。たぶん、そのビデオを藤田さんが中山に頼んでDVDか何かにしてもらったんだろう。

「あんなの見たら、ぐだぐだ過ぎて呆れるでしょ」

「そんなことないよ。楽しそうだなあって、ちょっと羨ましくなった」

俺が笑いながら言うと、美香ちゃんはすごい勢いで訂正してきて、少しだけ目を丸くする。驚く俺に気付いた美香ちゃんが、またしても恥ずかしそうに「えっと」とか言って、顔を赤くして伏せてしまった。

「まあ、呆れられたんじゃないなら良かった」

フォローのつもりでそう言うと、美香ちゃんは恥ずかしそうなままだったけど、顔を上げて笑った。

昼ご飯を食べた後は、街の方まで歩いて、映画を見ることにした。イギリスの有名な探偵を主人公にした映画で、原作とは程遠い話になっているらしいが、なかなか面白いらしい。初デートにはちょうどいいんじゃないかと、宮瀬が笑っていた。

映画を見ている最中に、飲み物を取ろうと動かした手が美香ちゃんの手に触れて、「ごめん」と小さく謝った。暗くてよくは見えなかったが、美香ちゃんは大げさなくらい首を横に振って、映画に集中しようとしていた。なんだかな、と思いながら俺も映画に集中する。藤田さんという監視人がいる手前、美香ちゃんと会うと決めたからには、会わないわけにはいかなかった。会って、それから決めたらいいんじゃないかとも、思っていた。ただ、会うからにはそれなりのアクションも必要だろうとも、思っていた。別に今日何かをする必要はないだろうけど、次に会うかどうかまでは決めなければならぬんじゃないだろうか。

『意味分かんねー』

美香ちゃんとメールしていると告げた時に、そうやって吠えていた友達を思い出す。真っ直ぐな奴で、その後もぶつくさと文句を言っていた。俺だって、意味が分からないのに。宮瀬とつかず離れずな関係でいて、それでも絶対に近付くことはなくて。一番近いのに、一番遠い。そんな関係が続けると決めたのも自分で、宮瀬もそれを望んでいっている。それに、永井さんが現れて、もっと意味が分からなくなった。あの人は、何を望んでいるんだろう。宮瀬は、何が欲しいんだろう。俺は、どうしたいんだろう。

そんなことばかり考えて、結局、映画は詳しいストーリーを理解しないまま終わってしまった。

映画の後は、二人してぶらぶらと街を歩いた。俺の服を見たり、美香ちゃんの服を見たり。さすがにレディース服の路面店は入りずらいので、通りにあるでかいファッションビルを中心に回る。良いのか悪いのか、下に二人の妹がいるのと、宮瀬からの入れ知恵とで、美香ちゃんの話にもだいぶついていける。どこの服がどうか、あの店のあれは美味しいとか、女子が好きそうなことは自発的にでなくても受動的に知識が入っていた。美香ちゃんの話についている俺を見て、美香ちゃんも驚いていたが、「話が合って嬉しい」と喜ばれたほどだ。

だいぶ暗くなってきたから、二人して夕飯を食べた。その後に、近くにあったコーヒーチェーン店で俺はコーヒーを、美香ちゃんはカフェモカをテイクアウトして、ゆっくりと人の少ない通りを歩いた。

「今日は、ありがとう。楽しかった」

歩きながら、美香ちゃんがそう言う。俺はコーヒーを飲みながら首を振った。

「こっちこそ、ありがとう。会ってくれるなんて思ってたなかった」

誘ったのは俺の方からで、「冗談交じりにそう言えば、美香ちゃんはまたしても『とんでもない』というように首を横に振った。

「誘ってくれて嬉しかったよ！　だって、私から博己ちゃんと知り合いたいって、彩香ちゃんにお願いしたんだもん」

「え？」

俺の反応を見て、美香ちゃんが「あつ」と声をあげる。それから「どうしよう」などと言って、慌て始めた。

これには、俺も『どうしよう』だ。藤田さんからは、単に『すごく良い子がいるから紹介します』と言われただけだった。多少、入れ込んでいるなとは思っていたけど。それが、藤田さんからではなく、美香ちゃんからの発信だとすれば、俺の今日のデートに対する認識と美香ちゃんのそれとは大きな差がある。若干の違いどころではない。

二人とも気まづくなって、何も言わなくなってしまった。ちょうどいいのか悪いのか、すぐそこに河原があつて、夜だからカップルがたくさんいた。

「とりあえず、下、おりようか」

河原を指して言えば、美香ちゃんは「うん」と頷いた。

河原まで下りると、カップルがいるところは少し距離をとったところで落ち着いた。二人とも立ったままだけど、今は座る気にもなれなくて、そのままにいることにする。何を言えいいんだと思うながらいると、先に美香ちゃんの方から口を開いてくれた。

「あのね。最初に彩香ちゃんからみんなで写ってる写真見せてもらった時は、楽しそうだなくらいにしか思わなかったの」

ぼつぼつと美香ちゃんが話すのを聞いて、ビデオを撮った時に写真も撮っていたことを思い出す。

「その後に、彩香ちゃんにビデオ見せてもらって、みんなが騒いでる中、博己くんはずっと落ち着いてて」

「そう、かな？」

美香ちゃんの言葉にそうだったかと首をひねる。あの時は、俺もだいぶ気分が良くなっていて、それなりに喋っていた気がするけど。だけど、彩香ちゃんは俺の疑問を消すように「うん」と続けた。

「楽しそうにしてたけど、ちゃんと周りのこと気にしてて、優しいんだなって思ってた。最後とかも、気持ち悪そうな人に水配ったりして、すごいなあって」

美香ちゃんの話聞いて、何だか複雑な気持ちになった。確かに、最後に水を配ったりはしてたけど、周りを気にしてたっていうよりも、隣の宮瀬を気にしてたっていう方が正しい。あの時は、宮瀬がやたらとアルコールを飲むので、もう止めろと最後は水を渡していたんだ。案の定、宮瀬は酔っ払い、その居酒屋から近い中山の家で気持ち悪いと寝ていた。朝方に、宮瀬を家の近くまで送ったことを覚えている。

「どんな人なのかなって思って、気になりだしたら、友達になってみたくて、それから……」

俺の考えには気付かずに、美香ちゃんがどんどん話を続ける。『

それから』の後が続かなくなつて、美香ちゃんの方を見ると、恥ずかしそうに顔を伏せていた。それを見て、『そうなんだ』と理解した。

「……付き合つて、みる？」

「え？」

美香ちゃんが、伏せていた顔を上げる。俺は顔を前に戻して、反応に気付いてから、もう一度美香ちゃんの方を見た。

「俺は、まだ美香ちゃんが好きかどうかは分からないけど、付き合ったら、美香ちゃんのことともっと知れると思うんだ。だから、美香ちゃんが嫌じゃなかったら、だけど」

「い、嫌じゃない！」

遮るようにして言われ、少しきょとんとしてしまう。美香ちゃんも自分の声の大きさに気付いたようで、あたふたと両手を交差させる。

「え、あ、ごめん。大きい声出して。あの、嬉しかったから」

「じゃあ、あのー、付き合つてことでいいの？」

「うん」

美香ちゃんが大きく首を縦に振る。思わずその様子に笑ってしまうと、美香ちゃんも恥ずかしそうに笑みを見せた。

美香ちゃんと別れて、家に帰ってから、宮瀬に電話で付き合うことになったと報告した。何で一番最初に宮瀬に言おうとしたのかは、自分でも分からない。本来なら、藤田さんに言うところだ。でも、それは美香ちゃんの方からいくだろうと勝手に決めて、宮瀬の番号を押していた。もしかしたら、ただ宮瀬の反応を聞きたかっただけなのかもしれない。

付き合うことになってと告げても、宮瀬は宮瀬だった。あっさりと、いつも通りに、「おめでとう」と返され、俺も「ああ」と普通に返していた。その後も少しだけ喋ったけど、あまり内容のない話だった。宮瀬との電話はいつもそうだけど、この日は、本当にただ電話してるだけという感じで、話しているなんて感じはしなかった。

それから一週間以上経って、宮瀬が永井さんに誘われたと、今日聞かされた。実はバイト中に講師控室で宮瀬がしゃがんでいた時に、宮瀬のシャツの首元から赤い痕が見えた。その時は何とも思わなかったけど、バイト終わりに宮瀬から誘われたことを聞かされて、点と点が一直線に繋がった感じがした。

「寝たん、だよな」

教科書を腹の上に置いて、ぼそつと呟いた。

宮瀬も大学生で、彼氏もいる。永井さんは結婚していて、当たり前だけど、大人だ。そういうことがあっても、何もおかしくない。なのに、そういうことを一ミリも危惧していなかった自分がいて、今更だけど馬鹿みたいに思える。永井さんは結婚しているのに、とか

そういうことは、もうこの際どうでもよかった。あの人はそういうことを捨ててまで、宮瀬を欲しがったんだ。何を望んでいるのか、ちゃんと自分で分かっていた。

それで、俺は自分がどうしたいかも、自分の立場も、何も分かっていなかった。何で今日言ったのかと尋ねた時、宮瀬は美香ちゃんのことを口にした。帰り際に美香ちゃんのこととは何も気にするなと言ったけど、それが無理なことだと、俺はその時やつとはつきりと分かった。美香ちゃんとのことがはつきりとした形になれば、宮瀬と俺の関係は変わってしまうと分かっていたのに。それを目の当たりにするまで、本当には理解していなかったんだ。それでも、宮瀬の味方していると伝えて、俺はどうしたいんだ。これを伝えたって、宮瀬が不安でいることは、変わらないだろうに。

『お前って、ほんと、意味分かんねー』

先週に、美香ちゃんと付き合つと伝えたときの友達を思い出した。その時の友達はやたらと怒っていて、いきなり『もう知らん』と言いだして、カフェテリアを出ていった。もう一人の友達が呆れながらそいつを見ていた。

確かに、意味が分からない。宮瀬との関係を変えると分かっている、それを進んでやるなんて。

あいつは、どうするんだろうか。

その結果は、二日後の金曜日にはつきりとした。

いつも通り、バイト終わりに二人して駐輪場に座り、ぼんやりとしていた。宮瀬は、自分のことを『人に流されてる』と言った。彼氏とも別れられず、永井さんからも宮瀬自身の答えを欲しいと言われ、宮瀬の答えだけでいけば、きっと、永井さんに気持ちが向いているんだろ。人の好き嫌いが激しい宮瀬だ。嫌いでなければ、毎週のように会って話したりはしない。気持ちが向いてなければ、会いにいったりはしない。それを素直に言えないのは、彼氏と別れていないという事実があるからだ。そして、自惚れかもしれないけど、俺に嫌われることを怖がっている。彼氏と続けたまま永井さんと一緒にいることを選んで、俺が宮瀬をどういう目で見るかを恐れている。俺は、宮瀬の味方でいると伝えた。それは、状況がどういうものであっても変わらない。一番遠くても、一番近いところにいる。

宮瀬に永井さんといいたいのか尋ねると、控えめだが肯定ととれる答えが返ってきた。それでも困ったようになっているのは、俺の予想が外れていないからなんだろう。

「お前が彼氏と付き合ったまま永井さんと一緒にいることを選んでも、俺は、俺とお前は、変わらない。ずっと、このままだ。何かあれば、話しにすればいい」

ぼーっと地面を見る宮瀬に、そう言ってやる。こちらを見た宮瀬と目が合って、嘘ではないと目線で伝える。俺の意識をくみ取ったらしい宮瀬が、少しだけ、泣きそうな顔になった。暗くてよくは見えないけど、そんな気がした。

何かあればすぐに言えばいい。俺を頼ればいい。いつだって、宮瀬の味方になる。そうやって思いながら、宮瀬と笑いあって、以前の

ような関係を維持しようとした。

家に帰って、風呂に入って、夕飯を食べて、部屋に入ったところでメールに気がついた。美香ちゃんからだった。

『明日って、暇ですか？』

美香ちゃんは、基本的には俺の予定を優先させてくれる。メールも電話もそこそこで、決して多くはない。二人ともそれなりに忙しいから、毎週は遊ばない。藤田さんは、見事に俺の要望通りの子を紹介してくれていた。それなのに、俺は携帯を机に放って、ベッドに身体を投げ出した。

宮瀬は、自分のことを勝手だと言う。それをいうなら、俺だって同じだった。美香ちゃんと付き合っておきながら、宮瀬とは以前と同じような関係でいたいと望んでいる。彼氏と付き合ったまま永井さんといえることを選んでも、頼るなら俺であればいいと思っている。

『だって、古賀さんがいなくなったら、どうしたらいいか分からない』

宮瀬は、そう言った。だったら、俺は宮瀬のそばにいればいい。俺が宮瀬の安心に繋がるなら、そうであればいい。俺と永井さんが別のところにいると考えれば、宮瀬が永井さんといっていると決めても、大

丈夫なような気がした。

俺と宮瀬は、これからだって変わらない。ばかみたいに笑って、同じバイトに通って、何かあれば話を聞いて。それでいい。それが、俺と宮瀬だ。

そうやって、頭の中で勝手に結論付けて、机に放った携帯に手を伸ばした。

「意味分かんない！」

そう言つて、万里子がソファに置いてあつたクッションを投げてる。それを身体で受け止めて、ずるずると落ちてくるクッションを手にとつた。

「何が意味分らない？　ちゃんと説明するから」

手にしたクッションをダイニングの椅子に置き、万里子の方を向いた。視線を向けた先の万里子は、当たり前だが、怒っている。

「いきなり離婚なんて、意味分かんない！」

「それはいきなりじゃないって、さっきも言つたろ。ずっと考えてたつて。これ以上、万里子と生活していくことはできない」

「それも意味分かんない！」

そう叫びながら、今度はソファの向かいにあるテーブルから雑誌を引っ掴み、こちらに投げってくる。それも身体で受け止めて、雑誌は俺の足元へと落ちていった。

彼女と別れて家に帰つてきてから、このやり取りが幾度となく続い

ている。帰ってきてすぐに万里子に離婚のことを切り出すと、初めは嘘だと拗ねられ、俺の言葉が真実だと分かると今のようにして怒りだした。いきなりだということも分かっていたし、非があるのはこちらだということも分かっていた。だから、万里子が怒ることに關して、俺は何も言えないし、言わない。けれど、いくら理由を説明しても意味が分からないと繰り返す万里子に、さすがに疲れてきていた。

「俺は、きつと、これからもつと自分の研究に没頭する。そうなれば、家を空けることも多くなるだろうし、万里子の望みのままいることもできない。溝が深くなる前に、万里と離れたいんだ」

「私はマサくんと一緒にいれたらそれでいい！」

「違うだろ？ 万里、俺のしてること、ちゃんと理解示してくれてるか？ これからどんどん遠出や長期の学会も増えてくるし、そういうの許せるのか？ 俺が書齋にこもっても、平気でいられるのか？ これから研究を続けていけば、今までみたく、万里と一緒にいることはできなくなる」

「それでもいいのか」と続けると、万里子は唇を噛みしめて、また雑誌を投げつけてきた。それを制することもなく、小さく溜め息をつく。

「仕事が忙しくなるからなんて、嘘ばかり！ 私と別れて、他の女の人と一緒にいるんでしょ！」

「そうじゃない。万里とのこれからの生活が見えないから、別れたいんだ」

そう言っても、万里子は信じない。相変わらず怒ったままでいて、自分がくしゃくしゃにした離婚届を手にして、それを破り始めた。

「そんなことしても、気持ちが変わらない」

「気持ちってなに？ 私となんて別れて、他の女の人のところに行くってこと？」

まったく変わらない万里子の発言に、思わず溜め息が大きくなり、髪をかき上げた。それを見た万里子が、更に激昂した。ソファのあるリビングから俺のいるダイニングテーブルのところまで歩いてきて、テーブルに置いてあった俺の鞆を探り出す。俺が止めるのも聞かずに、その中から俺の携帯を取り出した。

「何してるんだ」

「証拠見つけるの！」

「いい加減にしろ！」

万里子の行動に、思わず声が大きくなる。めったには大声を出さない俺を見て、万里子が一瞬動きを止めた。

「見たいなら好きにすればいい。けど、その中には女からの連絡だつて入ってる。仕事やプライベートのものも含めて。それを証拠にしたいなら、そうすればいい」

自分でも、声に冷たさと呆れが混ざっているのが分かる。もともと携帯にロックなんかは掛けないし、見られて危ないものなにかない。男女関わりなく、仕事もプライベートでも関わりがある。当たり前前に、携帯には女からの連絡だつて入っている。それを証拠扱いしたいならすればいいが、どうやっただって証拠になんかならない。

「なによ！」

万里子もそのことを理解したのか、大きな声をあげながら携帯をこちらに投げてきた。それは壊すわけにはいかず、身体にぶつかった携帯を手でキャッチした。そして、俺が何か言う前に万里子は俺の横を通り過ぎて、リビングを出ていってしまった。廊下の方から、寝室のドアが閉まる大きな音が聞こえた。

万里子がいなくなつてからもう一度溜め息をつき、携帯を鞆の上に放る。一度で分かつてもらえとは思っていなかったが、ここまでこじれるとは思っていなかった。とりあえず、リビングに散らかつたものを片付けていく。一通り片付け終わったところで、シャワーを浴びに向かった。鞆も携帯もそのままだ。万里子が携帯を見ようが何をしようが、知ったことではない。万里子が寝室にこもろうと、折れる気はなかった。

シャワーを浴びて、簡単な夕飯を食べると、もう遅い時間になっていた。その日はリビングのソファで眠ることにして、一日を明かした。どうせ、朝も俺の方が早いだろう。

その次の日、大学から帰ってくると、万里子の姿がなかった。

まず書斎に入って、自然と溜め息が出た。机の上は散らかされ、本棚からは本が落とされ。床の上には机の上にあつたはずの書類や文具、本棚の本が乱雑に落とされていた。そこに鞆を置くことは止め、リビングへ行くと、更に大きな溜め息が出てきた。

「なんだ、これは」

昨日片付けたはずのクッションや雑誌はまたしても床に投げられており、その他にもグラスや棚に置いてあつた小さな花瓶が割れて粉々になっていた。寝室に行けば、クローゼットから万里子の衣類がいくらか出されており、その中であつたスーツケースもなくなつていた。行き先の予想はついたが、今はそれよりも一人になりたい。リビングに戻って鞆をダイニングの椅子に置き、ゴミ袋を持ってきて片付けを始める。鞆から携帯を取って、村瀬に電話を掛けた。

『なんだ、ばかやろっ』

声に不機嫌さが感じられたが、電話に出たということはそこまででもないんだろう。

「はいはい。馬鹿野郎でいいから、結果聞きたくないのか？」
『もう出たのか？』

グラスの破片をゴミ袋に放り込みながら言えば、村瀬が電話の向こ

うで驚いた声を出す。村瀬も俺と同様に、事がすんなりと運ぶとは思っていなかったようだ。

「ある意味ではな」

『それは、良い意味でか？ 悪い意味でか？』

「さあな。つつ……」

話しながら破片を片付けていたら、その破片で指を切ってしまった。一瞬だが痛みに顔をしかめれば、通話口で村瀬が『大丈夫か？』と声を掛けてきた。

「ああ。ガラスの破片で指切った」

切れた指を見れば、少しでも血が出ている。これくらいなら大丈夫かと思い、血の出ている指を舐めて、片付けを再開した。

『お前、今何やってんの？』

「万里子が散らかした部屋の後片付け」

『散らかしたって、どんくらい？』

「書斎がめっちゃめっちゃにされてて、リビングもめっちゃめっちゃ。クッションとか雑誌とかが散乱してて、グラスとか花瓶が割れてる。ちなみに、万里子はいない。どこかに出ていった。一時的かどうかは知らないけど」

俺の言葉に、村瀬が電話の向こうで『おお……』と驚きのような言葉も出ないというような声をあげた。それを聞きながら、破片をどんと袋に放っていく。

『え。つまり、それが結果ってことか？』

「そういうこと。ああ。離婚届も破られたから、新しいのもらってきたら、保証人のところにサイン頼んだぞ」

『え、俺がかよ』

「よろしく。村瀬健吾さん。また何かあったら連絡するよ」

村瀬の嫌そうな声は無視してそう告げると、電話を耳から離す。通話を切るうとして、離れた通話口から村瀬の声が聞こえてきた。もう一度電話を耳にあてて、なんだと尋ねる。

『お前、春希ちゃんのこと、どうすんの？』

『春希』という名前に、片付けていた手が止まった。電話を持ちなおして、ものが落ちていない床に座る。

「さあ。まだ分からない。これからどうするかは、彼女が決めるよ」
『彼女が、ってお前……。春希ちゃんは大学生なんだぞ。これから彼氏だってできるかもしれないし、』

「言ってなかったか？ 彼女にも彼氏がいるよ」
『は？』

村瀬の言葉を途中で遮って言うと、何とも間抜けな声が返ってきた。電話の向こうで、村瀬が慌てている。その様子が目に浮かんで、思わず笑ってしまった。

『え、ちょ、え？ は？ え、なに。お前、それ知ってたの？』

「知ってるも何も、彼女と知り合ったきっかけは彼氏関係のことだ」

『え。それなのに、お前、キス、とか。え？』

村瀬は彼女に彼氏がいたという事実を知って、だいぶ混乱している。それで、それにもかかわらず、俺が行動を起こしたということに、意味が分からなくなっているようだった。

『え。じゃあ、どうすんの？ 春希ちゃん、彼氏と別れんの？ て

いうか、その前にお前、』

「寝たよ。彼女と」

質問に先回りして答えてやると、村瀬が絶句した。

拾える範囲で破片を拾い、言葉を続ける。

「それと、彼女が彼氏と別れるかどうかは知らない。それも含めて、俺とのこと考えてるのかもしれないし」

『え、ごめん。もう意味分かんない』

「曖昧でも何でも、彼女が欲しいって伝えた。だから、俺は彼女が彼氏と続けたままでも構わないって言っている」

村瀬の溜め息が、通話口から聞こえた。

『なに、そのちぐはぐな感じ。要はお前も浮気相手ってこと?』

「そう言われれば、そうだな」

『何で今気付いた風なんだよ』

「いや、本当にそう思ったんだ。彼氏は今日本にいないくて、彼女も彼氏と連絡取り合いたいと思ってないから」

その言葉は本当だった。彼女の彼氏の存在が曖昧すぎて、そういう考えはまったく思いつかなかった。というよりも、彼女という時は、彼氏がどうとかなんて考えていない。

『えー。もう、春希ちゃんもどうなってんの?』

「彼女が話してもいいって言ったら、今度話してやるよ」

『おー』

「いきなり電話して悪かったな。また何かあったら連絡するよ」

元氣のない村瀬の返事を聞いて、電話を切った。

破片を拾うのを一旦やめて、後ろにあったダイニングテーブルの脚に寄りかかる。小さく息をついて、昨日までの、彼女とのことを思い出した。

彼女が欲しいと、いつの間にそこまで欲深くなったのか。名前を呼ぶだけじゃ足りなくなつて、キスにしても足りなくて、触れてももっと触れたくなつて。彼女に関しては、どこまでも欲深くなる。彼

女に相手がいようが、関係ないとすら思ってしまうほど。彼女が自分の立場を悩む必要はない。俺だって、彼女と立場は同じなんだから。

彼女自身の答えが聞ければ、それでいい。俺といたくないというのなら、それも仕方ない。それが彼女の出した答えなら。

だけど、彼女が俺のことではなく、誰かのことを考えて出した答えなら、俺はそれを受け取れない。

自分勝手な人間だと笑えた。結局は、彼女が欲しいだけか。そう自嘲しながら、もう一度立ち上がって、片付けを再開した。

いつも通り、車を駐車場に止めてそこから出ようとして、無意識に溜め息をついた。そんな自分に気が付き、今度は苦笑が漏れる。

彼女から答えを聞いて、一週間が経った。思った通りというか、彼女の答えは『永井さんとは一緒にいない』というものだったが、それが俺とのかを考えてから出したかという点、それは違ったようだ。いろんなものが頭の中でごちゃごちゃとなつて、それなら俺と合わないとなつたのかもしれない。納得しようとしたが、やはりそんな答えでは無理だった。今日、もう一度彼女からの答えを聞く。聞かせてくれるかどうかは分からないが、今日出たものならば、どんなものであっても受け入れるつもりだった。

万里子の方は、離婚を切り出した次の日以来、家には帰ってきていない。たぶん実家に帰っているんだろうと思い、実家の義母に確かめれば、やはりその通りだった。今は万里子のしたいようにしてくださいとだけ伝え、その電話を切ったのも、離婚を切り出した次の日だ。正直、この部分に関しては、申し訳ない気持ちがある。家を出るなら、万里子ではなく、俺だ。

今日までのもろもろのことを思い出して、もう一度溜め息が出た。車の中のデジタル時計を確認して、ようやく車を出ることにした。

「来週の授業で最終レポート出してもらうけど、今日持ってきた人いたら出していいよ。今見て、来週もう一回出してもいいし」

今日もいつも通り授業を終えて、終わりにそう告げると、いつもの席に座っていた彼女が顔を引きつらせた。周りにいた二人ほどの友達、にやにやと笑って彼女を見ている。その様子に内心首を傾げながら、教室の真ん中にある教卓の椅子に座って、レポートと今日のミニレポートが提出されるのを待った。

俺が教室に入ってから、彼女はいつも通りだった。変に顔をこわばらせることもなく、かといって不自然に目を逸らすわけでもなく、いつも通り、俺と彼女がただの知り合いでいたときのように、友達と話したり、授業を聞いたりしていた。

「どんまい、宮瀬」

「別にいい。今出して、どん底に落とされたくないし」

椅子に座って、早くも提出された一人の学生のレポートを読んでみると、彼女の友達と彼女が話す声が聞こえた。読みながらその話を聞くことで、彼女の引きつった顔の原因と彼女の友達のにやにやとした顔の原因が分かった。どうやら彼女は二週間前にはレポートを完成させていたらしいが、面倒がってそれをプリントアウトしていないということらしい。まあ、別に期限は来週だし、俺も本当に今日出す学生がいるとは思っていなかった。

「んー。微妙に筋が通ってないところがあるよ」

「え、どこですか？」

彼女から意識を外して、目の前に立つ女子学生にレポートの指摘を

した。学生は俺の手元を覗きこむようにして、指摘したレポートを見ている。簡単にレポートの添削をして、それを学生に返す。学生をお礼と共にそのレポート受け取ったが、すぐに席に引き返すことはせず、その場に立ったままだった。

「どうかした？」

レポートを両手で抱えるようにして持つその学生に尋ねれば、学生は少し恥ずかしげに笑みを浮かべて、小首を傾げた。

「先生、指輪、外したんですね」

「え？ ああ、今日は忘れてきたんだ」

左手を指しながら言われた言葉に、何でもないというように嘘をつく。本当はだいぶ前から外していたが、それに気付いてることもないだろう。そう思ったが、その予想は外れた。

「嘘。だって、だいぶ前から外してたじゃないですか。何かあったんですか？」

初めの言葉は拗ねたように、最後の問いかけは心配するように聞かれた。

「何にもないよ。修理に出して、するの忘れてただけだから。最終レポート、忘れないでね」

その言葉を最後にするようにして言って、目の前に立つ学生の次の質問を封じた。学生は不満が残っているような顔をしたものの、素直にレポートを持って引き返す。その後ろ姿を見ながら、溜め息をつきたいのを堪えて、椅子の背に寄りかかった。授業終了のチャイムが鳴るまでもう少しあるが、ほとんどの学生が教室から出ていく。視線を前に向けると、たまたま出ていく先ほどの女子学生と目が合った。それには気付かない振りをして、端にある教壇に移動しようと席を立つ。端に移動して、鞆の中に今日つけたレジメを仕舞いこんでいく。どうも、あの女子学生に変な意識を持たれているようだ。自惚れであってほしいが、指輪のことを聞いてきた時の学生の目と態度のことを考えれば、それも間違いじ

やないような気がする。というか、じゃなかったらわざわざ指輪のことなんか聞かないだろうし、気付いていたとしても普通なら無視しようとする年齢だ。

溜め息をつきながら彼女が座っていた席を見れば、彼女もいつの間にかいなくなっていた。

三時間目の授業で、さっきの女子学生がここにもいたことに初めて気がついた。

二時間目の授業と同様に最終レポートのことを告げ、今回も早めに授業を終える。またしても、女子学生がレポートを手に教壇に来た。「さっきぶりですね」と笑って言われ、「そうだね」と返した。レポート内容は不出来というわけではないが、ところどころ筋の通っていない部分や、意味が分からない部分があって、一番採点が困る

パターンだ。レポートを読みながら、70点後半かなと目星をつける。今回も簡単な添削をつけて、レポートを学生に返した。

「じゃあ、最終、頑張つて」

女子学生が何か言いたそうにしていたのは見えたが、それは無視して後ろに並ぶ学生のレポートを受け取った。

三時間目が終わって、やっぱり間違いないんだろうなと思った。女子学生の表情は、いつかの劇場で見た女性のもと同種のものだ。威力を発揮していた指輪がなくなり、その所在を確かめようとしていた。好意を寄せられても、俺はあの学生の名前も知らないのにこの授業に登録している学生も、二時間目と同じくらいに7、80人はいる。一回生から登録できるものだから、もしかした二時間目のものより多いかもしれないくらいだ。その中で特定の学生の名前と顔を一致させるなんて、はなから無理な話だ。あの女子学生が二時間目にも三時間目にもいたことを、今日初めて知ったくらいなんだから。そう考えれば、彼女のことを知ったのは、本当に偶然でしかないのだと改めて思う。彼女が一番初めにレポートを提出して、それが他に抜きんでて優れていて。今思えば、その優秀さがあつたから、彼女に会えたのか。

「考えすぎか」

自分の考えに笑って、教壇の上を片付けた。

キャンパスを抜けて駐車場に戻りながら、携帯の履歴を確認する。全ての授業が終わっても、彼女からの連絡はなかった。ということは、先週から答えは変わっていないということなのかもしれない。自分から言い出したことだ。それも仕方ない。少しの心残りはあるものの、彼女の意志を妨げはしない。

「遅いよ」

車を止めてあつた場所まで来て、彼女の声が聞こえた。見ていた携帯から顔を上げると、車のボンネットに寄りかかっている彼女と目が合う。

「なに、やってるの？」

てつきり連絡は来ないものと思っていて、今彼女がここにいることをうまく処理できない。それでも歩いて彼女のそばに行けば、少しずつそれを飲みこんでいけた。

「永井さん待ってた」

彼女は一旦俺から視線を外したものの、ゆっくりと俺を見上げてそう言った。

きつと、答えを告げに来たんだろう。そう思って、もう何も言わずに彼女からの言葉を待つ。彼女は一度息を吐いて、口を開いた。

「やっぱり、彼氏とは別れられなかった。別れたくないって言われた。もう好きじゃないけど、はつきりそう言えなくて、ずるずる流された」

彼女の視線が下に落ちて、言葉が止まる。何を言ってもなくそのまま立っていると、彼女がゆっくりと腕を上げて、俺のコートを掴んだ。

「ごめん。勝手に。ひきょうで、ごめん」

顔を上げないまま、彼女は言った。泣く、まではいかないも、その声は微かに震えていた。

この言葉の続きがどちらに向かうかなんて、俺には分かるわけもなく、ただ彼女の次の言葉を待つことしかできない。彼女は一旦息を吐いて、「けど、」という声とともに顔を上げた。

「けど、永井さんといたい。こんなんだけど、今は永井さんといたい」

「ごめん」と、彼女は続けた。不安で覆われたその顔が、少しだけ泣きそうになった。

彼女の言葉を聞いて、顔を見て、自分でも安堵したのが分かった。これだけ不安で泣きそうになっても、彼女は俺を求めてくれた。

鞆を持っていない方の手で、彼女の頬を一撫でし、引き寄せてその唇を塞いだ。一度だけ触れたそれを離し、また彼女の頬を撫でる。彼女の顔から泣きそうなそれは無くなった。代わりに、目を開いて驚いている。

「ちょ、」

混乱する彼女に、笑みが漏れる。

「そう思ってくれてよかった」

「よくないよ。今の私の立場で、永井さんといいたいなんて」

彼女はそう言いながら自嘲気味に笑って、俺から視線を外す。それでも、その手はまだ俺のコートを掴んでいて、それが彼女の気持ちを表しているようだった。

「立場のことを出されると耳に痛いんだけど」

「あ、ごめん」

俺の言葉に、彼女が今気がついたというように顔を上げる。俺は言葉とは反対に顔には笑みを浮かべて、彼女を見下ろしていた。

「不謹慎な話だけど、立場とかどうでもいいと思えるほど、君が欲

しいんだ。それに君が応えてくれただけで嬉しい」

「……変なの」

「変でもいいよ。君がいるなら」

そう言えば、彼女の顔にやっと安心したような笑みが浮かんだ。それに俺も笑みを返して、彼女の頬を撫でる。

「家の前で待つて。迎えに行くから」

撫でていた手を離し、彼女にそう伝えたと、彼女は何のことだと首を傾げる。

「久しぶりにあそこに行こう」

「ああ。うん、分かった」

『あそこ』と言えば、彼女も俺の言っていることが分かったようだ。彼女と初めて会った時から通っているカフェ。今日は金曜日で、授業が終わった金曜日はいつもそこへ行っていた。彼女はどうか知らないが、俺は長いことそこに行っていないくて、何となく今日は行きたい気分だ。彼女も同じ気持ちなようで、俺の言葉に頷くと名残惜しげにコートから手を離し、自分の原付の元へ行くために俺に背を向けた。

彼女が原付のところに向かったのを見送って、俺も車に乗り込む。鞆を助手席に放り投げて、車のエンジンを掛けた。

ここに来たのはいつぶりか。そうやって考えてしまうほど、彼女とこのカフェに来たのは久しぶりなことだった。

俺たちが来なかったからといって、ここは変わることもなく、いつもと同じような客足で、変わらない時間が流れている。

ただ、同じ中にも、おかしいことが一つあった。俺たちが店に入ると、なぜか店員の女の子と男が大げさに反応していて、店長らしき男はそれを呆れた目で見ていたのだ。彼女もそれに気がついたらしく、いつもと同じ席についてから「変なの」とこぼしていた。

「今日、レポートプリントアウトしてなくて出せなかったんだって？」

いつもと同じように紅茶を頼んで、それを飲みながら彼女に聞いてみた。彼女は一瞬何のことか分かっていないようだったが、すぐに思い当たったようで、少し呆れた表情になる。

「よく聞いてたね」

「まあね」

「今日出していいなんて思ってなかったし。せつかく書いたのに」

そう言って、彼女は下唇をちよつと突き出して拗ねた顔をする。俺

がそれに笑うと、恨めしげな目をしてこちらを見てきた。

「別にいいけどね。今出して、へこみたくないし」

教室で言っていたのと似たようなことを言って、彼女も紅茶のカップを手を取った。それを両手で持ちながら紅茶を飲みだす。俺には彼女の言葉の意味が分からず、少しだけ首をひねった。

「だって、その場で添削するんでしょ？ それで『ちょっと……』みたいなこと言われたら、普通へこむでしょ」

俺の顔に気付いた彼女がそう続ける。彼女の言葉を理解して、思わず笑ってしまった。

「そんなこと気にするんだね」

「するよ。単位かかってるんだから。だいたい、永井さんの出した課題、難しいし」

「そう？」

「課題出した瞬間のみんなの顔見てないの？」

そう言われて、課題を出したときのことを思い出そうとしたが、彼女の言う学生の顔なんてまったく覚えていない。というか、スライドで説明していたから、学生の顔なんて見ていない。それが顔に出ていたらしく、彼女は呆れた顔をして、カップをテーブルに置いた。

「友達曰く、『まじありえない』そうですけど」

「ほんとに？」

「ちなみにその友達はまだ手つけてないみたいだったけどね」

「採点するの怖いな」

彼女の言葉に苦笑いをこぼして言うと、彼女は面白そうに笑いだす。

「頑張って採点してね」

にやにやと面白がっているような笑みを浮かべて、彼女は続けた。
それに肩をすくめて返し、紅茶を一口飲んでテーブルに置く。

「春休みは何か予定あるの？」

その問いかけに、彼女は持っていたカップを置く。それから、嬉し
そうな顔をした。

「友達と旅行行くんだ」

「お土産買ってきてあげる」と続けて、彼女は笑った。そんな彼女
を見て、こちらも自然と笑みが漏れてくる。

「永井さんは何か予定ないの？」

「どうかな。短期研究員のやつは前に断っちゃってるから、たぶん何回か発表会があるくらいで、他はわりかし暇かもね」

「そっか。研究員って、何するの？」

「その名の通り、研究かな。まあ、実験とかはないから、主に論文書きに追われるけど。他の人と共同でやつたりもするよ」

以前に行った研究員としての内容を話すと、彼女は興味深そうに聞き入ってくる。

「興味あるの？ じつじつと」

一通り話し終えたあとにそう聞けば、彼女は少し考えるようにして首を傾げる。

「たぶん、好きだよ。そういう、勉強とかは」

「院とかは行かないの？」

俺の言葉に、彼女は小さく笑って、困った顔をする。どうしたのかと思って、目で先を促せば、彼女はその顔のまま話しだした。

「行けたらいいなって思うけど、どうなんだろうね」

そう言つて笑つたが、その笑いが空元気なように思われて、先が氣になつてしまう。それでも、彼女はその先を続ける氣はないようで、また別の話を振つてきた。少し氣にはなつたが、大きなことでもないかと考えなおして、彼女との話を続けることにした。

いつもは5時くらいにここを出るのが、久しぶりに来たからか、氣付けば6時を過ぎていた。そろそろ帰ろうかと彼女が言い出したので、俺も頷く。だが、立ち上がる前に提案が浮かんで、彼女が立ち上がる前に口を開いた。

「夕飯、食べていこうか」

「え？」

横の椅子からコートを取ろうとして、彼女がきよとしたようにこちらを向く。それから、少し戸惑つたような顔になった。

「え、でも、」

「今日くらい遅くなつても大丈夫だよ。ちゃんと連絡はするから」

そう言つても、彼女はまだ戸惑っている。

連絡なんてしなくても、家に万里子はいないんだから大丈夫だが、それを彼女に言つつもりはなかった。言えば、彼女はそれを氣にして、ついてくることはしないだろう。

「これからだつて一緒にいる時間は限られてるんだ。初めくらい、一緒に食べよう」

彼女の目を見て言うと、彼女はやっと頷いてくれた。彼女が戸惑いながらも、俺と一緒にいたいと思ってくれていることは間違いないみたいだ。彼女の返事を見てから二人して席を立ち、久しぶりのカフェを後にした。

カフェからほど近い場所にあつたレストランで食事をしてからも、俺と彼女は一緒にいた。近くにあつた商業施設に入り、中に入っていたチェーン店でコーヒーとラテを買って、その三階にある外のベンチに座つてゆっくりした。そこからは周りの風景がよく見えて、軽い展望場になっていた。

「あー、週末だと車いっぱいだー」

ベンチに座りながら柵の向こうにある下を見下ろして、彼女が楽しそうに言った。食事の後も一緒にいることに後ろめたさを感じていたようだが、今はその様子が見えない。後ろめたい感情がなくなつたのか、隠しているのか。それは分からなかったが、見た限りじゃ彼女も俺いることを嬉しく思っているようだった。

「来週で授業終わりだね」

下を見ていた彼女が、ふいにそう言うのを聞いて、顔を彼女の方に向ける。

「さみしい？」

「それはない。バイトもあるし。ちゃんと会ってくれるんでしょ？」

俺の問いかけに、彼女は笑って首を横に振った。こちらを見ながらされた質問に、笑みを浮かべて数回小さく頷いて答える。それを見た彼女は、満足そうに笑って「よかった」と返してくる。

風が吹いて、彼女の髪が揺れる。それが彼女の顔にかかったのを見て、手を伸ばし、髪を耳にかけてやる。耳にかけている途中で彼女と目が合い、彼女が小さい笑みを浮かべた。

「来週で終わりでよかった」

「なんで？」

手を彼女から離して聞き返すと、彼女は訳知り顔になって、こちらを見てきた。

「永井さんが誰かに誘惑されずにすむから」

一瞬何のことか分からず、目を丸くしてしまう。訳知り顔で笑う彼女を見て少ししてから、ようやく何を言っているかに思い当たった。

「見てたの？」

「見てたし、聞こえてましたー」

わざとらしく語尾を伸ばす彼女に笑って、コーヒを一口飲んだ。彼女が言っているのは、今日レポートを提出しにきた女子学生のことだろう。いつの間にかいなくなっていたと思っていたが、どうやらあの場面を見ていたらしい。

「知らなかったんだけど、あの学生、三時間目の授業にもいたよ」
「わー。よっぽど好きなんだね」

ちやかしているような口調で彼女は笑う。

「面白くなかった？」

ラテを飲んだ彼女に問いかければ、彼女は「んー」と声をあげて悩む素振りを見せる。

「面白かったような、面白くないような」

「何それ」

彼女の言葉に、今度は俺が笑ってしまう。彼女も笑っていたが、それには少し困った顔がついていた。

「永井さんが困ってるのは面白かったけど、あの人が永井さんを好きそうなのは嫌かなあ」

「そういう一般的な感情を持つてるのは嬉しいんだけど、何で俺が困ってたら面白いの」

「めんどくさいなあ、みたいなのが丸分かりだから」

意地の悪い笑みを浮かべながら彼女が返してきた。それを見て、苦笑が漏れる。

「知らないんだろうけど、『先生』ってポジションだけで女子的にはかつこよく見えるもんなんだよ」

「そんなの知らないよ」

「じゃあ、今から知つといてね」

彼女の言葉に笑いながら頷けば、彼女は満足そうにして、ラテを口にした。

彼女の家に着いたのは、9時近かった。万里子が家にいないことを知らない彼女は、未だに後ろめたさを感じているようだが、それを顔に出したり口にしたりすることはもうなかった。

「じゃあね。送ってくれてありがとう」

家の前に着いて、彼女はそう口にしてシートベルトを外した。そして、そのままドアに手をかける。

「春希、」

外に出る前に彼女を呼べば、彼女は少し驚いたような顔をしてこちらを振り向いた。それに微笑み、自分のシートベルトを外して、振り向いた彼女の頬に触れる。もうそれに戸惑いを見せることのない彼女を引き寄せると、彼女はそれに素直についてきた。頬に手を触れたまま唇を重ねて、ゆっくりと彼女を感じる。何度か重ねることを繰り返して、彼女を放した。

「お休み」

離れてるのか触れてるのかの距離でそう告げると、彼女は数回頷いて笑みを浮かべた。その笑みが何を示すのか考える暇もなく、もう

一度短く唇を重ねられ、彼女が離れた。

「気をつけてね」

彼女はそれだけ言うと、俺が何かを返す前に車を出ていった。窓の外を見れば、にこにこ手を振っている彼女がいて、してやられたと苦笑いが浮かぶ。彼女に軽く手を振り返して、俺は車を発進させた。

部屋のドアを開けて、以前に見慣れていた靴があるのを見て、万里子が帰ってきていることを悟った。万里子の靴の隣には、もう一足靴があり、見る限りそれは義母のようだ。ドアの開く音を聞いたのか、リビングの方から、万里子がスリッパの音をさせてやってきた。その後ろのリビングからは、やはり義母が顔を出している。黙って会釈をすると、向こうも返してくれた。

「マサくん、お帰り！」

万里子が、以前と同じようにして言った。その様子に、気付かれないうちに眉間にしわを寄せる。

「お母さんも来ててね、一緒にご飯食べようって」

「……外で食べてきたから、俺はいいよ」

俺の目の前に立って鞆を持つとするのをさりげなく制して言えば、万里子の顔に微かな苛立ちが見えた。けれど、それも一瞬のことですぐに万里子は笑顔になり、「そっか」と言っただけで俺が家に上がるの

を待った。内心で溜め息をついて、キーを靴箱に置き、靴を脱ぐと、万里子に連れだって義母が待っているであろうリビングへと向かう。

「お母さん。マサくん、外で食べてきちゃったんだって」
「そうなの」

ドアの近くで待っていた義母は、万里子の言葉に頷くも、その顔はどこか困ったようなものだった。キッチンの方へと歩いていく万里子を見ながら、鞆をダイニングテーブルの椅子に置き、声をかけた。

「答え、聞かせてくれないか」
「えー？」

わざとそうしているのか、万里子は俺の声が聞こえないというように聞き返してくる。ここに義母を呼んだのは、俺を牽制するためだろうか。そうだったとしても、それは俺にとって何の意味もなさない。義母の方を見れば、俺と目が合うとどうしようもないというように首を振った。

「万里。こんなことしても意味ない。先に進もう」

そう言っても、万里子は聞こえない振りを続ける。盛り付けた料理を運んできて、義母に座るよう促した。

「万里」

先ほどよりも強めの声で呼べば、万里子の動きが止まる。

「離婚しよう」

以前にも伝えた言葉を、もう一度口にした。それがきつかけだったようで、この言葉を聞いた万里子の顔が、怒りに歪んだ。

「嫌だつて言つたじゃない！ マサくんとは別れない！」

「万里子、」

義母が怒鳴る万里子を抑えようと手を差し出した。その手を振り払つて、万里子は近くにあつたものをこちらに投げてくる。幸い、それは陶器やガラスのものではなく、身体に当たっても痛くはなかった。義母は嘆くように首を横に振る。

「今のまま続けても、いつかはこうなる。なら、その前に離れよう」
「そんなの分からないじゃない！」

「分かるよ。俺が変わるんだ。それを受け入れられない万里とは、きつと続かない」

「いや！」

怒りのままダイニングテーブルを叩き、万里子はその上に置いてある料理の盛られた皿を手で振り落とした。身体を少し横にずらしたものの、左手が皿と中身にぶつかり、痛みと熱さに顔をしかめる。皿はそのままリビングの床に転がって、中身がぶちまけられた。義母が万里子に覆いかぶさるようにして、後ろから腕を回した。万里子は肩で息をして、俺の方を見ている。

「もう、終わりにしよう」

母親に抱かれていても、万里子は首を横に振る。

「内訳なんかは、何もかも万里の好きにしてい。俺はそれに応じるから」

「いや！ 絶対に別れないから！」

最後にそう叫んで、万里子は母親を振りほどき、リビングを出ていった。あとから、玄関のドアが閉まる音が聞こえた。義母はリビングの入り口まで追いかけたが、それを待つことなく、万里子が出ていったようだ。話は平行線のまま終わって、リビングには俺と義母の二人だけが残された。

「すみません。勝手なことを言い出して」

入り口のところで立ちすくす義母に声を掛けると、義母はこちらを振り向いて首を横に振った。その意味が分からなかったが、とりあえずは後片付けをしようとキッチンに布巾とゴミ袋を取りに行く。布巾を持ってダイニングに戻ってくると、義母が床に転がった皿を拾っていた。それを受け取り、一旦はダイニングテーブルに置いておいて、俺は床の汚れを拭く。義母がその場を離れたかと思うと、すぐに救急箱と絞ったタオル二つを手に戻ってきた。

「いずれはこうなるんじゃないかと、そう思っていたの」

少しずつ汚れを取っている俺の隣で、義母が静かにそう言った。思わず顔を上げると、義母が悲しげに微笑んでいるのが目に入った。それに何と返したらいいのか分からず、曖昧に笑って、床に座って汚れを拭う。義母もその隣に座って、床に広がった料理を一つのタオルで取り除いていく。

「あなたと万里子は、あまりにも違いすぎて、お互いに歩み寄れないんじゃないかと心配で。その心配が、的中したのね」

悲しげに微笑んだまま、義母は続けた。二人でやったおかげで、床はだいぶきれいになった。汚れた布巾とタオルをそのままゴミ袋に放り込んで立ち上がるうとすると、義母が俺の腕に手を置いてそれを制した。大人しくそれに従って床に座りなおすと、義母は使っていない方のタオルを俺の左手に当てる。そのタオルは冷たく濡れていて、さっき料理がぶつかった個所からじんじんとしながらも熱を取っていつてくれる。

「反対では、ないんですか？」

タオルの置かれた左手を見ながら聞けば、義母は微笑みを浮かべたまま首を横に振る。

「反対しても、あの子に幸せは見えないわ。あなたが万里子を見ない以上、あの子が幸せになれることはもうないでしょう」

救急箱の中から包帯や何かの薬を出しながら、義母が言った。俺は自分の左手から顔を上げ、義母に顔を向ける。義母は、この先俺と万里子が続けたとしても、いずれ何かしらの溝が出来ることを分かっているようだった。

「あの子が怒ってうちに帰ってきたときに、『ああ、やっぱり来てしまった』と思ったのよ。あなたがそれだけ言うなら離れてみたらと言っても、万里子は首を横に振るだけ。小さい頃から上の兄妹に可愛がられて、かまってもらってばかりで、欲しいものが手に入らないことなんてなかったから、意固地になってるのかもしれないけど」

濡れたタオルを取り、近くにあったティッシュで水滴をふき取りながら、義母は続けた。

「お見合いした時も、あの子はあなたを見て一目で好きになったよ
うだけど、私はもう少し考えてみたらと言ったのよ。あなたはどう
見ても、万里子とはタイプの違った人だから」

ティッシュをゴミ箱に入れ、少しでも優しい微笑みを俺に向けてく
れた。義母は救急箱から取り出した塗り薬を少し取り、俺の左手に
薄く塗り始めた。よく見れば、皿が当たったところが赤く腫れてい
る。

義母は薬を塗る間何も言わず、塗り終わってから、何も言わなか
った。義母は左手にガーゼを当てて包帯を巻き始める。俺を責める
ことなく、万里子の幸せのためだと言う義母を見ると、つか
えることもなく言葉が出てきた。

「離婚を切り出す前に、他の女性と関係を持ちました」

「そう」

その言葉を聞いても、義母は怒ることはなかった。義母が返した一
言は、そんなことはもう知っているという風にさえ聞こえた。それ
が、口を軽くした。

「離婚を考えていたのは、その女性と関係を持つよりずっと前から
です。それでも、結婚している身でありながら関係を持った事実は
変えられません」

「それを、後悔しているの？」

義母が、顔を上げて尋ねてきた。俺は戸惑うことなく、首を横に振る。

「いいえ。勝手な話ですが、その女性が俺のところに来てくれて嬉しいとさえ思いました。その女性という間は、万里子のことを少しも考えなかった」

自嘲気味な笑みを漏らして言えば、義母はまたしても顔を俺の左手に向けて、包帯を巻くことを再開した。今の言葉で、俺が遊びではなく、本気で関係を持ったのだということは分かっただろうが、それでも義母はそれを問い詰めるようなことはしなかった。

「離婚は、その女性とのことが原因ではありません。その女性が起因になったことは確かですが、今回のこととその女性は、まったく関係のないことです。信じてもらえないでしょうが」

自分でそう言っつて、本当にその通りだろうなと感じた。彼女は離婚に関係ないと言ったところで、今の現状で誰がそれを信じるというのか。今更そんなことを再確認して、自分が馬鹿らしく思えた。彼女を巻き込みたくないと思っていたくせに、自分がそれを誘発している。

俺が言葉を発しなくなると、義母も黙ったまま包帯を巻いていた。少ししてそれも終わり、義母が使った包帯や薬を救急箱に戻していく。俺はすぐ隣に置いていたゴミ袋を手にし、義母と一緒に立ち上がる。

「今のこと、万里子に言ってもらっても構いません。それからもう一度話しあっても遅くはないでしょうから」

「いいえ。万里子には伝えません。それを伝えたところで、万里子のプライドを傷つけるということ以外、何が起るこるといの」

「そうですね」

分かっていたことを目の前で言われ、またしても自嘲の笑みが漏れた。

俺がキッチンに行つてゴミ袋を捨ててリビングに戻つてくると、義母は救急箱を片付け終えており、帰り支度をしていた。

「万里子のこと、お願いします。もし、詳細が決まれば、連絡ください」

「ええ、分かっているわ」

コートを身に付けた義母を玄関まで送り、もう一度リビングに戻った。

ダイニングの椅子に置いてあつた鞆を手にリビングのソファに座つて、大きく溜め息をつく。皿のぶつかった左手が、じんじんと痛んだ。少し熱を持っているから、軽い火傷もしているようだ。ソファに身体を沈めてぼーっとしていると、鞆の中に入れてあつた携帯が震えた。それを取り出して画面を見れば、珍しく、そして久しぶりに彼女からメールが来ていた。

『おやすみ』

たった一言だが、それだけで笑みが浮かんでくるのが自分でも分かる。彼女という時にも感じていたが、彼女が本当に俺を求めているんだと、このメールで改めて実感する。自分の立場を無視しても、一緒にいたいと。

義母は、万里子のために俺のしたことを黙っていると云った。きっと、相手が普通の女だと義母は思っているだろう。立場を無視して一緒にいるべき相手を裏切ったのは、俺だと。実際、その通りだ。村瀬だって、そう思っていた。ただ、俺も、そして彼女も、自分の立場を無視している。お互いに一緒にいるべき相手を裏切って、別の人間を求めている。普通の人間なら、何を馬鹿なことをと笑うだろう。それでも構わない。周りを気にしないほど、俺は彼女を求めている。彼女も、応えてくれた。それだけで、十分だ。

そこまで考えて、一人の男のことを思い出した。いつだって彼女のことを見守っていて、そばにいて、近くにいるであろう男のことを。彼は、彼女の出した答えを笑ったりはしないだろう。見守って、変わらずにそばにいるんだろう。

その代わりに、彼女を奪った俺を、恨んだりするんだろうか。そんな男には見えないけどな、と考えて、馬鹿なことを考えているなと笑えた。

笑ったまま、彼女への返信を、画面を開いた。

「これ似合うんじゃない？」

「これー？ 俺、こんな普段着ないんだけど」

「だからいいんじゃない」

宮瀬が持ち上げた服を見ながら不平を言うも、簡単にそれは宮瀬によつて封じ込められた。着てみるというようにハンガーに掛かったままの服をこちらに押し付けてくるので、無理やりそれを掛かっていた場所に戻した。

「あー。なんで戻すの」

「これは無理です」

「わがままだなー。あ、じゃあ、これは？」

宮瀬は隣の棚にあるＴシャツを取つて俺に見せてくる。にやにやと意地の悪い笑みを浮かべながら。

「ふざけんな。誰がこんなキャベツ歩いてるのなんか着るか」

「いいじゃん。イメチェン、イメチェン」

宮瀬が持っているものを取り上げてポイツと棚に戻す。そうすれば、

宮瀬は「もー」とまたしても膨れる真似をして、別の棚へと歩いていく。その後をついていきながら、宮瀬を観察する。どうやら、永井さんとのことで悩んでいたのがなくなったようだった。今日は、いつも通りの宮瀬だ。結果はどうであれ、永井さんとのことで何かしらの答えを出したんだと思う。俺は、その答えを知らないけど。土曜日の今日は、宮瀬と谷原の三人で近くのショッピングモールに来ていた。目的は映画と、俺の明日のデートのための服を買うため。本当は映画だけの予定だったんだけど、昨日の夜電話していた時にぼろっとデートのことと服を買わないかということをお口にしてしまい、こうして宮瀬と服選びをすることになってしまったのだ。そう、宮瀬と二人で、だ。谷原のやつは絶対に休むわけにはいかない授業の補講があるとかで、映画の時間からここに来ることになっている。俺と宮瀬の二人は昼過ぎにここに来て、服を買うため店を何軒も回っている最中だった。

「じゃあ、これはー？」

先を歩いていた宮瀬がひょいっと一つのシャツを掲げてこちらに見せてきた。

明日のデートは、もちろん美香ちゃんとのデートだ。それは宮瀬にも当たり前にお見通しで、それを電話で知った宮瀬は張り切った声で服選びを「手伝う！」と言ってきたのだ。付き合うことを報告した時は、あんなに普通だったくせに。

そんなことを考えながら、宮瀬が待つ場所まで行って、掲げられている服を見てみた。

「あー、かわいいな」

「でしょ？」

「でも、だから、俺こんな着ないって」

「だーかーらー」

宮瀬が先ほどと同じことを言いそうなのを察して、ぱつと宮瀬の持っている服を取る。それを見て、宮瀬は満足そうに笑みを浮かべた。呆れた顔でそれに返しつつ、しょうがなくそれを胸の前に当てて、近くにあつた鏡で自分の姿を見てみた。横から宮瀬もそれを見ている。

「あー、似合う似合う」

「そうか？」

宮瀬はそう言うが、正直、俺は自分にそれが似合っているのか分からない。俺が首をひねっても、宮瀬は「絶対似合う」と意味不明なくらい断言する。俺が胸の前で当てている服は、黒地に白のドットがあるシャツだが、普段の俺はこんな柄の入ったシャツなんか着ない。さつき宮瀬が差し出してきたものも、何か柄というか絵がプリントされたものだった。

俺が悩んで、隣の宮瀬が「買え買え」とはやし立てる中、一人の店員が鏡に映り込んできて、俺のすぐそばで止まった。

「何かお探ですか？」

その声に、俺と宮瀬が店員の方を向く。男の店員が、にこやかに立

っていた。さつきまではしゃいでいた宮瀬が、急に大人しくなる。俺の横に大人しく立って、にこやかに笑顔を浮かべた。この笑顔が、まったくの他人だけに向けられる類のものだということは、宮瀬と長いこと一緒にいることで覚えた。この、人見知りが。

「えーと。明日ちょっと出掛けるんで、何か良いのないかなと思って」

店員としゃべる気のない宮瀬の代わりに俺が答えると、店員は「そうなんですか」とこれまたにこやかな笑顔で返してくる。

「そつちは新しく入ってきたもので、他にはチェック柄でこういうのもありますよ」

店員は近くの服が掛かっているところから、俺が持っているものよりもだいぶ明るい色合いのチェック柄の服を取った。それを見て、若干顔が引きつる。そんな明るい色、久方ぶりに着てない。それが宮瀬にも伝わったわしく、横に立っている宮瀬がにやにやと笑うのが横目で見えた。

「イメチェンって大事だと思うよ」

横からにやにやとした顔のまま宮瀬が言った。それから、店員が援護射撃なのか知らないが、宮瀬の加勢をする。それも、とんでもな

言葉で。

「彼女さんの言う通りですよ」

店員が、愛想良く「ねっ」と宮瀬に聞いた。俺も宮瀬も、今の言葉を飲み込むために数回瞬きをしている最中だった。そんな俺たちの様子に気がついた店員が、『あれ?』という表情をする。

「残念だけど、別の人とデートするんですよ。この人。捨てられましたー」

「この人」と言いながら、宮瀬が俺のことを指差した。そして、わざとらしく悲しい顔をして、店員に訴える。本来なら、思いつきり気まずい雰囲気の流れるところなんだろうが、宮瀬がふざけたおかげで、それは回避された。店員は慌てたように謝ってきたが、その顔には笑みがあつた。

「試着してみたら? どっちでもいいからさ」

店員の謝罪が済んだところで、宮瀬が俺の持っているシャツを指差して言った。店員の持っている方を指差さなかったということは、宮瀬もそれは俺に似合わないと思ったんだろう。店員の目の前で断るのも面倒だったので、とりあえず宮瀬に勧められたほうだけ試着することにする。店員に試着室に案内され、ドット柄のシャツを手

にその中の一つに入った。

中に入ってその日着ていたパーカーを脱いで、シャツを広げた。確かに、良いと思う。服の趣味が合うことも、俺と宮瀬が似ていると思う原因の一つだ。男のくせして『かわいい』という基準で服を選ぶことのある俺と、女のくせに男物の服を買うことのある宮瀬とは、その境目がちょうど合うらしく、雑誌なんかを見ていても意見の合うことが多かった。一度、軽いB系のようなダボダボな服装をして出掛けようとした谷原を見て、二人して「ふざけんな」とダメ押しをしたことがある。谷原が雑誌を見てかつこいいと言った服を二人ともが「びみょー」と言ったこともある。他の友達ともちょこちょこ合うところはあるが、宮瀬ほど俺と似ている部分が多いやつはなかなかいない。そんな俺が、宮瀬とは似ても似つかない、美香ちゃんと付き合っている。美香ちゃんと初めて会った時に感じた微妙な違和感は、たぶん、すぐそばにいた宮瀬と比べていたからだろう。ばかみたいなことだ。

「着替えたー？」

外から宮瀬の声が聞こえて、考えを振りはらってパーカーの中に着ていたTシャツの上にシャツを羽織った。軽く整えてから試着室のカーテンを開くと、宮瀬と店員が揃ってこちらを見てくる。

「あー、やっぱり似合うよ」

自分の見つけたやつだからか、宮瀬が嬉しそうな声をあげた。普段こんなを着ないから似合ってるのかどうかは定かじゃないけど、宮

瀬がそこまで言うんだったらそれなりに似合ってるんだろう。

「今みたいに羽織ってもいいですし、今日着てらしたパーカーとかカーディガンの下に着てもらっても似合うと思いますよ」

「へー」

店員からも好意的なアドバイスを貰い、少しずつ買う方向に気持ち が傾いていく。ぺらっとボタンの部分についていたタグを裏返すと、 そんなに高い値段でもない。

「どうする？」

試着室の壁に寄りかかって宮瀬が聞いてきた。

「じゃあ、これ一枚買おうかな」

タグを放して言うと、宮瀬が嬉しそうな顔をした。店員もにこやかに笑って、「預かりますよ」と手を差し出してくる。羽織っていただけのシャツをその場で脱ぎ、店員に渡して、着ていたパーカーを もう一度着る。

「楽しみだなあ。それ着た古賀さん」

会計を済ませてその店を出ると、宮瀬がにこにことした笑みを浮かべながら言った。

「明日のデートで着てくんだから、お前が楽しみにしなくてもいいだろ」

「いいじゃん。似合ってたよ。それ。古賀さんに」

「どーも」

「洋くんちで一回着てみてよ」

ショッピングモールの通路を歩きながら、宮瀬がへらつと笑う。

「やだよ」

「いいじゃん。着てよー」

宮瀬の頼みにはにべもなく断るも、宮瀬は駄々をこねるように押してくる。何度か嫌だ嫌だと断っていたが、宮瀬の方も一向に諦める様子を見せないで、結局俺の方が折れてしまった。渋々ながら頷いてやれば、宮瀬は嬉しそうにして喜ぶ。こんな風に喜ぶ宮瀬の顔が、実は少し好きだったりするっていうのを、改めて感じた時だった。

「あ。あれ、お前に似合うんじゃない？」

そんなことを考えてしまう自分が恥ずかしくなつて、偶然目に入つた近くの店の帽子を指差した。宮瀬も俺の言葉に反応して、俺から顔を背け、その店の方に視線を向ける。二人して足をその店に向け、店の一番前にある棚に飾つてあつた帽子を宮瀬が手に取つた。それから髪を少しだけ整えて帽子をかぶる。すぐそばにあつた鏡で帽子の位置を確認し、満足いったところで、ぱつと俺の方に顔を向けてきた。

「どう？」

「あー。うん。似合う」

「ほんとに？」

俺の答えに少しの間があつたのを察してか、宮瀬が疑うように聞き返してきた。今度はちゃんと頷いてやると、宮瀬もその帽子が気に入つたようで鏡を見ながら「そうかー」と頷く。少しの間迷つていた宮瀬だが、決意したのか「よし」と言つて、もう一度俺の方を向いた。

「買ってくる」

「おう。ここで待ってるわ」

宮瀬が帽子を手にレジの方へ歩いていくのを見送って、少しだけ歩いて吹き抜けになっっている一階を見下ろせる柵に寄りかかった。柵に寄りかかって、小さく溜め息をついた。会計をする宮瀬を見ながら、その本人のことを考える。

ほんのちよつと、本当にちよつとだけ、帽子をかぶって振り向いた宮瀬を、可愛いと思ってしまった。俺がいつも見ている宮瀬は、不安げだったり何か悩みを持っていたり、笑うときだってもちろんあるけど、さっきのとはどこか違うものだ。さっき振り向いたときの宮瀬の顔は、何ていうか、純粹にこの時を楽しんでるかのようなだった。遊んでる時はいつも同じのはずなのに、そう感じた自分に意味が分からなくなる。さっきのやり取りが、付き合ってる同士のやり取りのように感じた自分が、理解不能だ。店の中を見たままばんやり考えていると、宮瀬がこちらに戻ってくるのが見えた。考えるのを止めて、柵からも離れて宮瀬の方に歩いていく。

「お前も谷原んち行ったらファッションショーしろよ」
「なんで。私、帽子だけじゃん」

戻ってきた宮瀬にそう言うと、言外に嫌だという意味を含ませながら宮瀬が反論した。

「帽子かぶって、谷原のB系ファッションな」
「は？ やだよ。古賀さんがしたらいいじゃん」

「やですー」

通路を歩きながら、いつものように軽口をたたき合う。そうやってれば、さっき感じた意味不明なことも、消化できるだろうと思って。

「あー。負けたー」

ベッドの上にコントローラーを投げて、宮瀬がそのままベッドに後ろ向きに倒れた。俺はコントローラー片手に小さくガッツポーズをして、早々にゲームに負けた谷原はその向かいで笑っていた。テレビ画面がゲーム画面ではなくなったのを見て、俺もコントローラーを置いてテーブルに置いてあったお茶に手を伸ばす。

谷原と宮瀬の三人で映画を見た後、いつものように谷原の家で夕飯を食べて、ぐだぐだとして、暇だからと谷原の部屋にあったゲームをしていた。谷原は、俺と宮瀬の買いい物が終わって数十分後にシヨッピングモールに来て、それから映画の時間までは三人してぶらぶらとしていた。

ベッドでごろごろとする宮瀬を横目に、自分の腕時計を確認する。と同時に、思わず声をあげてしまった。宮瀬が何だというように身体を起こす。谷原も不思議そうにこちらを見ていた。

「もう2時かよ。明日早起きなのに」

その言葉で意味が分かったのか、宮瀬も谷原もなるほどという顔でそれぞれ時計に目をやった。明日は、というかもう今日、美香ちゃんとデートだった。調子に乗っていつも通りに過ごしてたが、明日は昼ご飯と一緒に食べようと言っているので、いつもの休日よりは早起きをしなければならない。

「もう帰ろっか」

宮瀬も時計を見て、ベッドから立ち上がった。俺も立ち上がって、ベッドの上に放ってあったコートを手に取る。宮瀬も同じようにして、コートを着ていた。

「じゃあねー」

「はい、お休み」

二人ともが準備したところで、宮瀬が谷原に向かって手を振る。谷原も振り返ってきて、それを見てから谷原の部屋を後にした。

宮瀬と肩を並べて、寒い外に出る。当たり前だが、外は真つ暗だ。しかも、国道からそれたところにある谷原んちのマンションの近くはこの時間帯とても静かで、それが余計に寒さを増している気にもなる。二人して背を丸めながら、それぞれの自転車と原付に向かった。

「古賀さん、」

自転車に鍵を差し込んだところで、後ろから宮瀬に呼ばれた。何か
と思つて振り向くと、宮瀬の方は原付に鍵も差していない状態だっ
た。

「なに？」

自転車を背にするように向き直つて、宮瀬に尋ねてみた。宮瀬は首
を少し傾けた状態で、少し俺から視線を外していて、迷っているよ
うな様子だった。もう一度聞きなおすことはせずに宮瀬が話したす
のを待っていると、宮瀬がゆっくりと口を開いた。

「昨日、永井さんに言った」

ようやく俺と視線を合わせて、宮瀬がそう言った。

やっぱり、予想は間違つてなかった。宮瀬は、答えを出したんだ。
それで、たぶん、その答えは……。

「永井さんと、一緒にいることにした」
「……そっか」

宮瀬は言いながら、小さく笑みを浮かべた。だけど、俺の返しに頷いてみせたものの、その顔には少しだけ不安が隠れているような気がした。それに首を傾げそうになったが、すぐにその原因が思い浮かんで、それをやめる。

「言つたろ。俺とお前は、変わらないって。お前がどういう風に永井さんというか決めても、このままだ」

そう言えば、宮瀬の顔から不安がなくなつて、本当に嬉しそうな微笑みが浮かんだ。

宮瀬は、永井さんと一緒にいることに決めた。たぶん、彼氏とも続けながら。それを、永井さんも受け入れた。そうまでしてでも、永井さんは宮瀬を欲しがった。

宮瀬は、そうする自分が勝手な人間だと認識している。でも、周りの人間が何と言つても、俺は宮瀬のそばにいる。これまでと変わらず。

「よかつたな」

「……うん」

宮瀬は泣きそうになつて、それでも嬉しそうに頷いた。その嬉しさの中に、俺も入っていればいいと思つた。永井さんだけじゃない。俺も、同じようにお前を受け入れる。永井さんと形は違つかもしれないけど。

「古賀さんとか、永井さんとかがいるから、他の人にどんな風に見られても、大丈夫だっと思える。今日だって、『そんな目で見たいなら勝手に見る』って思ったし」

思い出すようにして笑って、宮瀬がそう言った。俺は何のことかと考えて、少しして宮瀬の言っていることを理解した。

宮瀬の言っていることは、今日のショッピングモールでのことだ。谷原が到着して、三人でモール内をぶらぶらしていると、三、四人の女子が宮瀬のことをちらちらと見ていた。反対方向から歩いてきたその女子たちは、少しだけ、いや、かなり面白がった目を宮瀬に向けていた。あの、女子特有の『やだー』と誰かを馬鹿にするような、蔑むような目で。それが宮瀬に向けられているのだと気がついて、反射的に宮瀬を見ると、宮瀬はその女子たちを一瞥しただけで、小さく鼻で笑うようにして目を逸らしていた。それを見てぱつとその女子たちに目を戻せば、彼女たちはすぐごと通り過ぎていくところだった。

「あの、女子たちのことか？」
「うん」

今度ははつきりと頷いて、口の端を上げるようにして笑った。

「あの人たちにね、前学校で『他の男の人と遊んでるなんて、彼氏がかわいそう』って言われたんだ。それにもいらってしたけど、段々あの人たちがああいう目で見てくるようになったから、面倒だな

って思ってた」

『ああいう目』っていうのは、今日モールでしていたような目のことなんだろ。そう考えて、宮瀬の話聞く。また少しだけ泣きそうな顔になって、宮瀬は自嘲的に笑う。それでも、すぐにさっきの清々しいような顔つきに戻った。

「でも、古賀さんたちみたいに、ちゃんと分かってくれる人もいるから大丈夫だって、思えるようになったの。分からない人たちは分からないままでいればいいし、その間に私は自分のできることしたらいいって」

「ね？」と言って、宮瀬はすっきりした笑顔で、俺に首を傾けてきた。

「今さら気付いたか。ばーか」
「ばかでいいですー」

いーっと、いつも見せるようにして宮瀬が拗ねた。

「よかったな」

さっき言った言葉をもう一度言ってやれば、宮瀬は安心したように、

満足げに「うん」と頷いた。

それを合図のように、二人してそれぞれの自転車と原付に向き直った。いつものように宮瀬の準備が整うのを待って、俺も自転車に乗る。

「じゃあな」

「うん。お休み。明日のデート、楽しんで」

にやにやと返してくる宮瀬に笑ってやる。

「おう。何かあれば、また言え」

「うん」

そう言っ、お互いに手を振り合っ、反対方向に進み始めた。

自転車を漕ぎながら、さっきの感覚を思い出す。宮瀬がこちらを向いて、同意を求めるように笑顔を浮かべた時の感覚。それは、宮瀬が帽子をかぶってこちらを見てきた時と、同じものだった。純粹に、気持ち俺だけに向いている感覚。まるで、付き合ってるみたいな感覚。

馬鹿みたいだと思った。そんなこと、あるわけないのに。あいつの気持ちは、今は永井さんに向いているのに。馬鹿みたいだ。けど、あいつの安心の中に俺がいることが、どうしようもなく嬉しいと思っってしまう。

こんな気持ちを、俺は美香ちゃんに持てるんだろうか。

「かわいいね。今日着てるシャツ」

次の日、昼ご飯を食べて、ぶらぶらと街を歩いていると、美香ちゃんがいきなり言った。

「え？」

さっきまで「あそこのランチ美味しかったね」なんて話してたのに、いきなりそんなことを言われて、思わず聞き返してしまった。対して美香ちゃんの方は、ごく普通に俺の方を見てにこっと笑った。

「それ」

歩きながら俺の身体を指差して、またしてもにこやかに笑う美香ちゃん。美香ちゃんの指差す先がコートの中に着ているシャツだとやっとなんと理解して、混乱をごまかすために数回頷いてみせた。

「ああ。うん。ありがと。昨日買ったんだ、これ」

「そうなんだ」

「うん。今日デートだったから、昨日友達に付き合ってもらって、買ってきたんだ」

横断歩道の信号に引っかけた、美香ちゃんと二人その手前で止まる。美香ちゃんが急に何も言わなくなつて、どうしたのかと思つて少し下の目線にいる美香ちゃんを見下ろす。美香ちゃんはなぜか恥ずかしそうにして顔を下に向けていた。

「どうしたの？」

美香ちゃんがそうする意味が分からず、視線を下に向けながら尋ねた。美香ちゃんは未だに恥ずかしそうにしていたが、やっと顔を上げてくれて、はにかむように笑った。

「えーと。嬉しくつて」

「嬉しいって、何が？」

美香ちゃんの言っている意味がまったく分からず、首をかしげてしまふ。タイミングが良いのか悪いのか、信号が青に変わつて、一応二人とも足を進めた。

「だって、今日のためにわざわざ買ってくれたんでしょ？」

「あー、うん」

「それって、嬉しいよ。博己くんも、今日のデート楽しみにしてくれたんだなって」

そう言つて、美香ちゃんは恥ずかしさの残る顔で笑った。

「そっか」

小さく笑つて美香ちゃんの言葉に返すと、美香ちゃんは「うん」と笑顔のまま頷いた。その顔が、少しだけ昨日の宮瀬とかぶって見えただけ、今日もワンピース姿な美香ちゃんを見て、自分の考えを頭から追い出した。

「その人と仲良いの？」

人通りの多い歩道を歩きながら、美香ちゃんが聞いてきた。

「うん。最初はこの服も買う気なかったんだけど、『ぜったい似合うから買え』って言われてさ」

「そうなんだー。珍しいね。男の人が可愛い感じの服勧めるなんて」

美香ちゃんの言葉に足を止めそうになる。が、そこは何とか我慢した。代わりに首をひねってしまう。美香ちゃんは、今、『男の人』と口にした。俺は友達が男とも言つてなければ、女とも言つてない。

言わずもがな、俺の言った友達は宮瀬のことだが、それを美香ちゃんに伝えるのは、何だかまずい気がした。だから、俺は適当に「あー、うん」と言っておいて美香ちゃんの言葉をやり過ごす。すると、俺の言葉を聞いた美香ちゃんの方がなぜか慌てた。

「あ、ごめんね。男の人が可愛い服着たらダメっていうのじゃなくて。何ていうか、ただ珍しいなって」

どうやら自分の言葉で俺が不機嫌になったと思ったようで、美香ちゃんも焦ったように言葉を続ける。俺はそんな美香ちゃんの様子がおかしくて、少しだけ笑ってしまった。

「大丈夫だよ。別に怒ってないから」

「あ、ほんとに？」

「うん」

笑ったまま頷けば、美香ちゃんは安心したように溜め息をついた。それから「よかった」と言いながら、胸をなで下ろしていた。俺はそれを見て、口の端を上げて笑った。改めて、俺と宮瀬の関係が、特殊だということを認識した。俺が普通に『友達』と言えば、その友達は男として認識される。それが女だと思われることなんかほとんどないだろうし、間違えられたそれを訂正しても、それはそれで変に思われることなんだろう。そうやって考えれば、昨日見た宮瀬の学校の女子たちの行動も分からないでもない。俺は今さらそんなことに気付いたけど、宮瀬はずっと前から気がついていたんだろうか。

「博己くん？」

「ん？」

美香ちゃんの方を向けば、『どうしたの？』という顔をされた。ぼんやり考え事をしてたみたいで、少し悪い気がした。何でもないと返し、考え事してたのを悟られないように美香ちゃんの手を取った。びつくりしたようにこちらに目を向けてくる美香ちゃんに、首を傾げて了解を求めると、恥ずかしそうにしながらも美香ちゃんに頷いてくれた。

その日の夜は、いつものように河原でのんびりとした。デートの終わりに、この河原でのんびりと過ごすのが、すでに定番となっていた。二人並んで座り、買ってきたコーヒーやカフェオレを飲む。

「テスト、いっぱいあるの？」

カフェオレを一旦地面に置いて、美香ちゃんがこちらを向いた。

「そうだね。少し多いかも」

「そっか。じゃあ、テストが終わったらまた遊ば」

「うん」

答えながら、コーヒを飲んで、もう春休みかと考えた。今学期はあと一週間で終わって、その次の週からのテスト期間が終われば、あとは二カ月以上続く春休みを残すだけだ。それが済めば、二回生も終わる。色々あった、二回生が、終わる。

「あーあ。二回生も終わっちゃうね」

「そうだねー」

美香ちゃんの言葉に頷きながら、二回生でいた一年を思い出す。一年間のことを思い出そうとしても、思い浮かんでしまうのは、夏休み以降の約半年間のことばかりだ。夏休みから宮瀬の彼氏は日本を離れて、それをきっかけに宮瀬との距離が縮まっていた。ほとんど毎週のように谷原も含めた三人で遊んで。どんどん、どんどん宮瀬と近付いて。それでも、ぜったいに触れるところにはいないで。春休みが済めば、宮瀬の彼氏も帰ってくる。俺と宮瀬の関係は、何か変わるかもしれない。俺は宮瀬が永井さんという決めても変わらないと言ったけど、彼氏が帰ってきてからのことは宮瀬が決めるしかない。俺がどうこう言っても、それに納得する彼氏ではないだろう。こうやって、二回生でいた時のことやこれからのことを考えるその全部の中に、宮瀬がいた。

「二回生の時に、博己ちゃんと会えてよかった」

隣で、美香ちゃんが心からそう思っている口調で、そう言った。隣を向くと、やっぱり恥ずかしそうな顔をした美香ちゃんがいて、それを隠すようにカフェオレを飲んでいた。

「二回生で会えたから、春休みにいっぱい遊べるもんね」

カフェオレから口を離れた美香ちゃんは、そう言って笑う。美香ちゃんの写真に俺も笑い返す。美香ちゃんは、笑みを交わしあった後も、俺から目を離さなかった。それに気がついて、俺は持っていたコーヒーを美香ちゃんがいるのとは反対側の地面に置く。美香ちゃんの方に向き直って、地面に置かれていた美香ちゃんの手に自分の手を重ねた。顔を見れば、恥ずかしそうに、それでも、嬉しそうにはにかむ美香ちゃんがいて、それが余計に、宮瀬を思い出させた。そんな宮瀬も、俺の名前を呼ぶ宮瀬も、全部頭から追い払って、美香ちゃんと顔を近づけて、ゆっくりと唇を重ねた。

やっぱり、何かあったんじゃないのかな。

金曜日、いつもより遅れて永井さんの授業にやってきて、何だか疲れている様子の永井さんを見て、そう思った。前回の授業で、今日はレポート提出だけだと聞いていたから、今朝は油断して思いっきり寝坊してしまった。教室の前の方にあるドアを開くと、真ん中の教壇に座っていた永井さんと前の方の席に座っていた友達がこちらを向いた。あと、他の何人かの人も。入ってきたのが私だと分かると、永井さんは少しおかしそくに笑みを浮かべていた。友達の方もやっぱり、という顔をして笑っている。教室にいる学生の人数は、いつもより少ない。ほとんどの人が、レポートを提出してすぐに教室を出ていったみたいだ。とりあえず、友達が座る席まで行って、鞆を下ろす。

「やっぱり、寝坊したね」

「起きたらもう授業開始時間でびっくりした」

へらつと笑いながら帽子を脱いで、鞆の中からレポートの入ったファイルを取り出す。

「あれ。それ、最近買ったやつ？」

鞆の上に置いた帽子を指差して言った。レポートをファイルから取りながら、「そうだよ」と頷いておく。

「土曜日に買った。若干衝動買いに近かったけど」
「へー」

帽子を手にとって見る友達の横を通り過ぎて、教壇に座る永井さんのところまでレポートを出しに行く。永井さんの目の前まで行つて、「どうぞ」とレポートを既に出されてあつたレポートの上に重ねる。

「寝坊？」

口元に笑みを浮かべたまま永井さんが聞いてきて、答える代わりにまたへらつと笑う。しょうがいなどでもいうような顔をして、永井さんは重ねられたレポートの束を重ねてトントンと机の上で整える。その時になつて、永井さんの左手に包帯が巻かれているのが目に入った。その視線を永井さんの顔に向けて、疲れている表情を見せる永井さんに首をかしげてみせる。それに気付いた永井さんは、私になぜそんなことをしているのかも分かっているようで、少し笑つて「何でもないよ」と言った。そんな心許ない言葉で納得なんかするわけもなかったけど、今この場で永井さんに理由を聞くわけにもいかず、「そっか」とだけ言つてその場を離れた。

友達のいるところに戻れば、友達が私の帽子をかぶって遊んでいた。

「いいね。これ」

「でしょ。けっこう安かったよ」

かぶられたままの帽子はそのままにしておいて、ファイルを鞆の中に仕舞う。その帽子は、先週の土曜日に古賀さんと谷原さんと一緒に行ったショッピングモールで買ったやつだ。これを買ったときは古賀さんと二人だけで、その時に一緒に古賀さんの翌日の日曜日のデートのために着ていく服も買っていた。古賀さんとはその買い物やデート以降もバイトで会っているけど、「デートどうだった？」と聞いても、楽しかったよくらいの答えしか返ってきてない。まあ、楽しかったならいいけど思いながらも、あんまり話したくないのかなとも思えて、あまり突っ込んだことは聞けていなかった。

友達の隣に座って、もう一度永井さんを見た。やっぱり、疲れているように見える。永井さんは、自分のことを、つまり結婚のことを、ちゃんとずっと言っていた。私のためというよりも、自分のためという感じで。そうは言っても、やっぱり、私の存在は重荷になるんじゃないだろうか。永井さんが何とかしようとすることで、負担が増えていつているんじゃないだろうか。でも、例えそんなことが起こっても、永井さんはそのことを私に話したりしないだろう。そんな人だ。永井さんは。

結局その時間に永井さんに理由を聞けることなどできず、昼休みを終えて、三時間目も終えてしまった。たぶん、この後にいつものようにカフェに行く。でも、それでも永井さんは理由を聞かせてくれないと思う。なら、無理やり聞きにいこう。三時間目の間にそう考えて、三時間目の授業が終わると、永井さんが授業をやっている教室に向かった。教室のそばの廊下で、中の学生が全部出ていくのを待つ。全部の人が出ていったのを確認して、教室の中に入った。ドアの開く音で顔を上げた永井さんが、私の姿を見て少し驚いた顔を

する。

「どうしたの？」

「ちよつと」

永井さんの質問にはつきり答えず、真つ直ぐに永井さんがいる端つこの教壇に向かった。永井さんの目の前まで来て、じつと永井さんの目を見る。いつもみたいに笑みを浮かべてこちらを見てくるその顔は、やっぱりどこか疲れているようだった。

「ねえ、何かあつたの？」

「え？」

「え、じゃなくて。そんな疲れた顔してるし、怪我もしてるし」

教卓に置かれた左手に視線をやつて言うと、永井さんは笑みを浮かべたまま首を横に振った。

「何にもないよ。これは、少しよそ見しててなったものだから、気にしないでいい」

授業の時と同じようなことを言つて、私の質問から逃れる永井さん。そう言うだろうと思つていた。だから、カフェには行かずにここで聞いてしまおうと思つていた。カフェに行つてしまつたら、何だか聞けずじまいになつてしまいそうで、それが嫌だった。

「嘘つかないで。それ、絶対に私も関係してるでしょ？ やだよ。知らないところで永井さんが変に疲れるのか」

だんだんと視線が下りていって、最後には永井さんから目を放してしまった。言うだけ言ってしまったらどうしたらいいか分からなくなつて、そつと永井さんの服をつかんだ。少しして、永井さんが小さく息をはいた。その溜め息に顔を上げると、少し困つたような顔で笑みを浮かべている永井さんと目が合う。

「こうなりたくないから、言わないつもりだったのに。心配、かけるつもりなかったんだけどね」

「やっぱり嘘つけないね」と続けて、永井さんの手が私の頬に触れた。そのまま永井さんは教壇の椅子に座つて、私の腕を引いた。

「今から言うことに、『ごめん』って言うの禁止ね」

前置きされる言葉に頷いて、頬に触れている永井さんの手に自分の手を重ねる。永井さんは優しく微笑んで私の手を握り返すと、繋いだ手をゆっくりと自分の膝に置いた。

「正直に言つと、少しまいってる。話し合いがあんまり進まなくて、

今はやりすぎなくらい良い妻アピールされてて。これは、先週話合った時にできたんだ」

包帯の巻かれている左手を上げて、永井さんは苦笑いを漏らした。

「なかなか進まないことと、進められない自分に、まいってる」

やっぱり私自身もそのことに関係していて、何か言おうと口を開きかけた。けど、永井さんがそれを目で制するのを見て、開きかけた口をまた閉じる。代わりに、繋がれた手をぎゅっと握った。永井さんもそれが分かったようで、優しげに笑みを浮かべてくれる。

「君がいるっていうことで、甘えてるのかな」

「私だって、甘えてるよ」

私の言葉に、長井さんは少し嬉しそうな顔をして、手を繋いでいない方の手で私の腰に手を回して、自分のところに引き寄せた。繋がれた手を離されて、その代わりに永井さんの両手が私の背中に回された。私も永井さんの首に腕を回して、二人の間にあつた距離をなくす。四時間目始まりのチャイムは当に鳴っているけど、幸いこの教室は使われないみたいだ。時々、遅れてきた学生の走る音がドアの向こうで聞こえる。

「鞆があつて抱きしめにくい」

少しして出た永井さんの言葉に、思わず笑ってしまう。永井さんも笑っていて、笑いながら私がかついでいるリュックを下ろそうとする。

「ちょっと、下ろせないよ」

「やだ」

永井さんが非難の声をあげるが、私はそれを無視して永井さんに抱きつく。それでも、二人とも笑ったままだった。永井さんから離れて、途中まで下ろされていたリュックをかつぎ直す。

「それ、似合ってるね」

「え？」

離れて言われた言葉に首を傾げてしまう。永井さんは言葉の代わりに私の頭を指差した。指差すものが帽子だと分かって、「ああ」と頷く。それで、古賀さんに似合うと言われてこれを買ったの思い出す。

「ありがと。この間、古賀さんと洋くんと遊びにいった時に買ったんだ」

「そっか」

「うん」

帽子を買ったのを思い出すことで、古賀さんのデートのことも思い出しそうになって、それを打ち消すように帽子を買った経緯を話す。永井さんはそれに頷いて、机に置いてあった鞆を手に椅子から立ち上がった。

「さ、行こうか」
「うん」

二人並んで教室を出て、キャンパスを歩いて学校を出た。

「今日は、ありがとう」

いつものようにカフェに行つて、その帰りに、永井さんはそう言った。車は私のマンションの前に止まっていて、シートベルトを外そうとしていたところだった。

「何が？」

ありがとこの意味が分からず聞き返すと、永井さんは小さく笑った。

「まいてるってこと、言えてよかったと思って。いつも通りにカフェに行ってたなら、言わずにいただろうから」

「そう思ったから、教室まで行っただよ」

やっぱり、私の思った通り、永井さんはいつものままだったら理由を言う気はなかったらしい。わざとそんなこと初めから分かったたというような口調で言えば、永井さんはおかしそうに笑う。そのまま永井さんの手が伸びてきて、前みたく私の頬に触れられる。それからゆつくりと永井さんが近付いてきて、私は目を閉じる。すぐに唇が重ねられた。何度も重ねられる永井さんとのキスに、もう戸惑うことなんてなかった。

「日曜日、一緒に出掛けようか」

唇が離れた後で、永井さんが提案した。手は頬に触れたままで、今は優しく頬を撫でられていた。

「大丈夫なの？」

「うん。村瀬が来るから、夕飯は三人になるけど。残念だけどね」

「村瀬健吾が来るなら行こうかな」

「ひどいなあ」

にこにこ笑ったままやり取りをして、永井さんがもう一度軽くキ

入をする。

「時間決めたら、また連絡するから」
「うん」

私の答えを聞いて、今度は長めに唇を重ねてくる。

「じゃあね」
「ん。気をつけてね」

永井さんの手が私の頬から離れる。少しの間永井さんを見て、それから車を降りた。開けられた助手席側の窓の外で永井さんに手を振り、永井さんの車が見えなくなるまで見送る。車が角を曲がったところで、私もマンションへと歩を進めた。

「けっこう人いるね」

永井さんと並んで歩きながら、周りを見回して言った。

「そうだね。まあ、ここでやるくらいだから、それなりに集客見込みあるんだと思うよ」

「へー」

以前にも来たことのある、隣県の駅に併設された劇場のロビーで永井さんにそう聞かされて納得した。

永井さんに出掛けようと言われた日曜日の今日、舞台を見るために永井さんと隣県に来ていた。タイミング良く知り合いからこの舞台のチケットを貰ったらしく、「よかったらどう？」と昨日連絡が来て、断る理由のない私は即決で「行く」と返事をしていた。

その舞台は、ついさっき開場が開始されて、多くの人が劇場内に入ろうと入り口のところに詰めかけていた。私と永井さんは混雑を避けようと少し遅れて入るために、開場されてもまだロビーで待ったままの状態でした。

「今日、いつくらいに来るの？」

「誰が？」

ロビーの端の方で永井さんに聞くと、永井さんは本当に分かっていない様子で聞き返してきた。

「誰って、村瀬健吾。来るんでしょ？」

永井さんの様子に少し呆れて返せば、永井さんは今思い出したというように「ああ」と声をあげた。

「たぶん、7時過ぎじゃないかな」

「そつか。でも、私いていいの？」

「そんなこと気にしなくていいよ。あいつの方が君のこと聞きたいって言うてから」

永井さんの言葉に、思わず首を傾げてしまう。なんで、村瀬健吾が私のことを聞きたいんだろう。それが顔に出ていたようで、永井さんは私の顔を見て小さく笑った。

「君とのこと話したら、あいつが君のこと知りたがってね」

「私のことって、普通の大学生ですけど」

「まあ、それ以外にもいろいろ。君が嫌じゃなかったら、だけど」

永井さんの顔に、少し申し訳なさそうな表情が見えた。その顔で、村瀬健吾が何を聞きたいのか、何となく分かった気がした。永井さんが村瀬健吾に私とのことを話したということは、私に彼氏がいるということも話したんだろう。それで、その上で永井さんと一緒にいると決めたことも。別にそれを言わないでほしいなんていう考えはないし、言われて困ることなんて特にはない。何といっても、永井さんが話した相手は、村瀬健吾だ。私からすれば、完全に芸能人で、普段なら接点すらもない人なんだから。ただ、私のことを話すのは、少し気が引けた。どういう状況でこうなったかを話すなら、彼氏とのごたごたや留学の件で揉めたことも話さないといけない。もう何ともないと言いたかったけど、あれを簡単に流せるほど私は出来た人間じゃない。

「話したくなかったら、無理しなくていいからね。俺も了承したわけじゃないし」

永井さんから視線を外した私を見て、永井さんが言った。もう一度顔を上げて永井さんを見ると、優しくこちらを見ていて、本当にそう思っているようだった。

「ううん。たぶん、話すくらいなら大丈夫だし。味方が増えるなら嬉しいもんね」

笑ってそう言えば、永井さんも笑ってくれた。その永井さんが、いきなり私の背に手を回して、私を自分のところに引き寄せた。逆らうこともできずにそのままされるがままにしたら、次には頬に永井さんのコートの感触がしていた。

「ほんとに、無理することないからね」

「……うん」

片手を背中に回されて抱きしめられたまま、永井さんが小さな声で言った。そこから抜け出すこともせず、私は永井さんの言葉に頷く。少して永井さんの腕が緩められて、私もそこからゆっくりと離れた。ロビーの人が少なくなってきたので、それを頃合いに私と永井さんも劇場内に入るため入り口の方に向かった。永井さんが知り合いから貰ったというチケットは、だいぶ舞台に近いところだった。それも、舞台を真正面から見れるところ。

「すごいね」

席に着いてそのことを言うと、永井さんは困ったような顔で頷いた。

「何か、悪いな。こんな良い席のチケット貰ったなんて」

「知り合いって大学の知り合い？」

「ん？ まあ、ね」

珍しく歯切れの悪い答え方をする永井さん。私の顔を見ると、そう思われているのが分かったのか、また困ったような顔で笑った。

「最近知り合いになったんだ。正直、知り合いって呼べるのかどうかも微妙だけど」

「何でそんなちょっとひどい言い方なの」

知り合いになったことがあまり嬉しくないような口調で、それを言う永井さんの顔が面白くて、思わず笑ってしまう。

「ちょっとあってね」

「へー」

「ちなみに、知り合いになったのは男だからね」

付け足すように言われて、またしても笑ってしまう。

「別に心配してませんよー」

「そこは心配してほしただけだね」

残念だ、と少し笑いながら言われて、私の方も笑った。その時になってちょうど開演のブザーが流れて、二人とも舞台に集中することにした。

「また居酒屋か」

駅前にたくさんある中の一軒の居酒屋の前で、永井さんが呆れたようにぼやいた。その様子がおかしくて私は笑った。

舞台を見終わった後、私と永井さんはぶらぶらと街を歩いて時間を潰し、7時過ぎに村瀬健吾から連絡をもらって駅前に戻ってきていた。村瀬健吾が連絡してきたお店は、前回と同じく居酒屋だった。

村瀬健吾はすでに来ているらしい。呆れている様子の永井さんを引っ張って居酒屋に入ると、店内にはすでに多くのお客がいた。ここも、前のお店と同じように個室にはすだれがついている。村瀬健吾は、お店の少し奥の方にある個室にいた。

「なんで居酒屋なんだ」

村瀬健吾の向かいの椅子に座りながら、永井さんが不満の声をあげた。村瀬健吾はそんな永井さんの様子を気にすることもなく、にこにこ笑って私に手を振ってきた。

「別にいいじゃん。ね、春希ちゃん」

手を振り返しはするものの、村瀬健吾の言葉には曖昧に笑って首を

傾げておく。確か、永井さんは今日車で来ていたはずだ。ということとは、帰日も車だろうし、それを考えると『別にいいじゃん』とも言えない。

「いいけど、俺、今日車だからな。飲めないぞ」
「え！」

案の定永井さんが車のことを持ち出して、村瀬健吾はそれに今気付いたというような声を出した。気付いてなかったんだ。そんな気持ちを抱きながら村瀬健吾を見て、隣の永井さんを見ると、永井さんも呆れた目で村瀬健吾を見ていた。

「車かよー」

落ち込む村瀬健吾をよそに、永井さんはメニュー表を取ってぱらぱらとめくり出す。私もそれを覗き込むようにして見ていると、向かいの村瀬健吾が何かを思いついたように「あっ」と声をあげた。何だと思っで私と永井さんが顔を上げると、村瀬健吾が楽しそうな顔で私の方を見ていた。

「じゃあさ、春希ちゃん、飲もうよ」
「え、」

いきなりな言葉に私が戸惑っていると、横から永井さんがたしなめ

るように「おい」と声をかけた。

「いいじゃん。一人で飲むとか面白くない。春希ちゃん、飲めるよね？」

「え、あ、まあ」

「じゃあ飲もう！」

はつきりと頷いたわけではないのに、思いつきり飲む方向で話をまとめられた。ここで飲みませんと言おうものなら、目の前でへこまれることは確実だ。

「あの、ビールじゃなかったら」

「やった！」

向かいでは村瀬健吾に喜ばれ、隣では永井さんに呆れられた。ごめんの意味と帰りお願いしますの意味を込めて、苦笑いしながら首を傾げると、永井さんはしょうがないというように溜め息をついた。アルコールについての小競り合いが終わって、村瀬健吾はビールを、私が梅酒で永井さんは烏龍茶を頼み、あとは適当に料理を頼んだ。店員さんに注文を終えて、すだれが下がった後に、村瀬健吾がにっこりと笑って私の方を向いた。

「今日はありがとね。来てくれて」

「いえ。こっちこそ、何かついてきちゃって」

「いいよー。俺が春希ちゃんもって誘ったんだから」

そう言つて笑いながらテーブルに肘をつく村瀬健吾は、やっぱり芸能人だった。前に『単体じゃそこまでかっこよくない』って言つたのを、すぐにでも取り消したい。笑顔全開の村瀬健吾に、こちらも自然と笑顔になつてしまう。

「目の前で他人に見惚れないでね」

横からそんな永井さんの声が聞こえてきて、ぱつとそちらを向いた。私が村瀬健吾に見とれていたことなどお見通しだというような顔で小さく笑みを浮かべている永井さん。誤魔化すためにへらつと笑うと、永井さんはおかしそうに笑つた。その時にタイミング良く、店員さんが飲み物と一品料理を運んでくれた。ジョッキをそれぞれに配つて、料理の乗つたお皿は真ん中らへんに置く。店員さんがいなくなつた後で簡単に乾杯をして、頼んだ梅酒を口にした。耐ハイといつてもアルコールで、少しの苦みが口に広がる。その苦みに顔をしかめて、もう一口飲んだ。やっぱり、ソフトドリンクとかにしておけばよかった。

私の表情に気付いたらしい永井さんが、自分の烏龍茶を「飲む？」と差し出してきた。それには首を横に振つて答え、梅酒の入つたジョッキをテーブルに置く。

「やっぱり、付き合つてんのな」

ぼろつと、向かいに座る村瀬健吾がそうこぼした。私は少し驚いて

目を丸くさせ、永井さんは料理を食べながら何でもないように、村瀬健吾の方を見た。村瀬健吾の言ったことはその通りなんだけど、改めてそう言われると、何と言えいいのか分からない。

「今さら何言ってんだ」

代わりに、永井さんが答えてくれる。その答えは、完全に村瀬健吾の言葉を肯定していて、それにも何でか少し混乱してしまった。永井さんが村瀬健吾に言ったことは舞台を見た時にも分かっていたことなのに、永井さんが村瀬健吾の言葉を肯定して、『だから?』というように返したことに、戸惑ってしまった。自分が思っていたほど、私は私と永井さんの関係を消化しきれてないんだろうか。

「いやー、何か優しいなと思って。お前が」

「普通だよ」

「いや、ぜったい普通じゃない。ねえ、春希ちゃん?」

ぼんやりと二人の会話を聞きながら梅酒を飲んでいると、いきなり矛先が私に向けられた。あんまり話を聞いていなくて、思わず「へ?」と返してしまう。村瀬健吾はそんなことには構わず、もう一度質問を繰り返した。

「こいつって、普段から優しいの?」

「あー、優しいんじゃないですか? 初対面でも愚痴とか聞いてくれましたから」

「愚痴？」

不思議そうに聞き返されて、やってしまったと思った。永井さんが嫌なら話さなくていいよと言ってくれたのに、自分から『愚痴』の内容を話さなきゃいけない状況を作ってる。さすがに困ってしまった。適当に「えーと」と言いながら村瀬健吾から視線を外そうとした。外そうとしたけど、それは少しだけこちないものになってしまった。こちらを見る村瀬健吾の目が、本気で私の『愚痴』の内容を聞きたがっているように見えたから。表面的には興味本位のような表情をしているけど、目だけは本気だった。ともすると、その目は、怒っているようにも見えた。何か怒らせるようなことしたっけと考えようとして、すぐにその原因が思い当たった。たぶん、その目が怒っているのは、私の横にいる永井さんのためだ。離婚をして、彼氏がいるのに私と付き合う永井さんを、村瀬健吾は本気で心配してるんだ。だから、私がなんでこんなことをするのか、どうしてそうなったのか聞きたいんだろう。そうやって誰かのために怒る村瀬健吾を見ると、古賀さんを思い出した。周りがどうかではなく、自分の気持ちで考えろと言ってくれた、古賀さんを。その時の古賀さんを思い出して、小さく笑みが漏れた。

「おい」

永井さんも村瀬健吾の表情に気がついたようで、少し強めな声で村瀬健吾を制しようとする。そんな永井さんの服の袖口を引っ張って、こちらを向いた永井さんに大丈夫と笑みを向けた。その時にすだれが上がって、店員さんが大皿に乗った料理を持ってくる。店員さんも少しだけぴりぴりした雰囲気気配に気が付いたのか、料理を置くと「失

礼しました」とやりすぎなくらいの笑顔で去っていった。すだが下がったのを見て、私はもう一度村瀬健吾のことを見る。

「えっと、まあ、いろいろあつて。永井さんには愚痴聞いてもらってたんです」

そう始めて、彼氏のことや彼氏と揉めたこと、今も続くこと、このことも話し出した。

全部話し終えた後で、村瀬健吾がむっと眉間にしわを寄せた。

「よく我慢できるね、そんな奴ら」

村瀬健吾の第一声に、声は出ず、数回瞬きしてしまう。『でしょー？』と村瀬健吾のテンションに乗ることもできず、『そういえば永井さんにもそんなこと言われたな』と呑気に考えてしまった。そんな私に気付いてるのか気付いてないのか、村瀬健吾は怒ったような声のまま続ける。

「目の前であからさまに『やだー』とか言われたら、俺、ぜったいキレル自信ある」

「はあ……」

「『だって声聞きたいし』とか、無理。止むにやまれずとかそういうのならアリだけど、勝手に行つてそれは無理」

ありがたいことに、村瀬健吾は私寄りな意見のようだった。向かいの席で堰を切ったように言葉を並べる村瀬健吾に圧倒していると、横でおかしそうに笑みを浮かべる永井さんが目に入った。

「よかったね」

「うん、まあ」

二人で顔を向けて頷くと、向かいから「春希ちゃん」と勢いよく声をかけられた。

「はい、なんですか」

無視できるような勢いでもなかったので、そちらに向き直って村瀬健吾を見る。

「俺、春希ちゃんサイドだから」

「はあ。まあ、でも、私にも落ち度はあったんですけどね。お金のこととか、あんまり調べてなかったし」

「それでも、俺は春希ちゃんサイドだよ」

先ほどの怒ったような顔が嘘のように、頑なな言葉で宣言された。その表情は嘘を言ってるようなものではなく、村瀬健吾の言葉が本物だと感じられるものだった。それを感じて、自然と顔に笑みが浮かぶ。

「ありがとうございます」

「え？」

今度は村瀬健吾がきよとした顔で聞き返してきた。それを見て、さらに笑みが広がる。

「こっちサイドについてくれるって言うてくれて。この話するの、けっこう怖いんですけど、そう言うてくれると嬉しいんで」

「怖いの？」

「怖いですよ？ だって、全部話した後に、『お前の方が悪い』とかって言われたら、どうしたらいいか分からなくなっちゃうじゃないですか。だから、そう言うてくれると、嬉しいんです」

「あ、そうなんだ」

少しだけ間の抜けたような声で納得する村瀬健吾に、「はい」ともう一度頷いた。話しすぎて渴いた喉を潤そうと、近くに置いてあった梅酒に手を伸ばしてそれを飲んだ。

「あんまり見るなよ」

横から永井さんがそう言うのが聞こえて、顔をそちらに向ける。見れば、永井さんが呆れたような顔で村瀬健吾を睨んでいて、それに気付いた村瀬健吾が誤魔化すようにへらへらと笑っていた。

「さ、春希ちゃん、どんどん飲んで」

私の視線にも気付いたらしい村瀬健吾が、飲め飲めとあおってくる。とりあえず持つてくるジョッキの中身だけを飲んで、それをテーブルの端に置いた。それとほぼ同時に、店員さんが残りの料理を運んでくる。帰ろうとする店員さんに、村瀬健吾が止める間もなく私の分の梅酒と自分の分のビールを追加した。

11時近くになって、ようやくお店を出ることができた。村瀬健吾のペースに付き合わされて、少し頭がふらふらする。それでもまだ足りないと言う村瀬健吾に、呆れを通り越して勘弁してと思ってしまふ。永井さんのコートを掴んで、何とかばれないようにちゃんと立つのがやっとだった。

「あとで部屋来いよ」

駅前のホテルに泊まっているらしい村瀬健吾が、永井さんを誘った。その声を聞きながら、外の冷たい空気に触れて頭が少しだけすっきりしてきて、掴んでいた永井さんのコートを放す。

「行けたらな」

「いいじゃん。万里ちゃんいないんだから。どうせ、家帰っても一人だろ」

村瀬健吾の言葉に、醒めたはずの頭がふらついて、はしつと永井さんのコートの裾を掴んでしまった。頭を小さく振って、村瀬健吾の言葉を頭の中で繰り返す。村瀬健吾は、永井さんが家に帰っても一人だと言った。『万里ちゃん』というのは、たぶん永井さんが前に言っていた『万里子』と同一人物で、それは永井さんの結婚している人だ。永井さんから、その人との話し合いが進まないことは聞いている。だけど、その人が今家にいないことは聞いていない。永井さんが家にいて、その人がいないっていうことは、その人が家を出ていったということなんだろう。ぐるぐると色々な考えが頭の中を巡って、気分を晴らすと頭をもう一度小さく振った。

「行ったら？ さつきは飲めなかったんだから」

顔を上げて、何でもない風を装って言うてみた。「ね？」と村瀬健吾にも同意を求めてみる。永井さんの顔は、申し訳なさそうな、困ったような、怒っているような、表現のしにくい表情になっていた。それでも、ここで何かを言うわけにもいかず、簡単に「そうだね」とだけ口にする。

「ぜったい来いよ」と叫ぶ村瀬健吾と別れて、私と永井さんは車に乗って、私の家までの道のりを走った。車が走る中、どちらも何も言わなくて、私はせめて酔いを醒まそうと、シートに身体を預けて目を閉じた。

一時間もかからず私の家に着いて、車の中に沈黙が流れた。

「金曜日に、言わなかったことがある」
「うん」

話し始めたのは永井さんで、私はそれに頷いた。その内容は村瀬健吾のおかげでもう分かっていたけど、永井さんが話す言葉を黙って聞いた。

「初めて離婚を切り出した時に、万里子が家を出ていったんだ。それからしばらく帰らなくて、君からの二回目の答えを聞いた日の夜に、また帰ってきた」

その言葉を聞いて、また頭がふらついた。私が永井さんと一緒にいたいと言った日に、その人は帰ってきたということだ。永井さんの左手の怪我也、その時の話し合いでできたものなんだろう。

「その日にも万里子は家を出て行って、まだ帰ってきてない。だけど、その代わりにほとんど毎日大学に来て、弁当なんかを持っている。俺よりも、外堀から埋めてくつもりらしい」

永井さんに自嘲の笑みが漏れる。金曜日と言っていた『良い妻アピール』っていうのは、このことなんだろうか。

「言ってくれたら、よかったのに」

やっと出てきた言葉がそれで、自分でも嫌になる。本当に、そんな

こと言ってほしかったんだろうか。言えば、余計に自分がぐるぐる
と悩むだけなのに。きつと、永井さんもそれを分かったた。

「もう君から、拒否の言葉や後ろ向き言葉は聞きたくなかったん
だ」

「拒否なんて、しないよ」

「でも、また『ごめん』って言うでしょ？」

やっぱり永井さんは分かっている、私はそれ以上何も言えなくなっ
た。

「安っぽい言葉だけど、聞いてほしい。このことは、ちゃんとする。
だから、もう何も言わないで」

永井さんの言葉に答えの代わりに頷く。それと同時に永井さんが近
付いてきて、唇に永井さんのそれが重ねられた。重ねられた唇はす
ぐに離れて、私はそれと同時に「お休み」と告げて車の外に出た。
別に、永井さんの言葉を疑ってなんかない。永井さんと一緒にいる
と決めたくせに、永井さんの今の状況を聞いて勝手に申し訳なくな
っただけだ。

「春希、」

後ろで車のドアが閉まる音がして、次には腕を掴まれていた。声を

出す暇もなく、腕を引っ張られて、永井さんの腕の中に閉じ込められた。

「ごめん」

苦しいほど強く抱きしめられる。私も永井さんの背中に腕を回して、ぎゅっと抱きついた。

「ごめんとか、言わないで。謝られたら、私も謝っちゃいそうだから」

「万里子が出ていったことと、春希は関係ないよ」
「違う。そのことじゃなくて、」

首を横に振って、永井さんの言葉を否定した。永井さんがどういうことが聞こえたのか、腕の力を弱める。それが分かってても、私は永井さんから離れなかった。

「変に、期待しちゃうんだって。思ってたよりも早く済んじゃいそうだなって。いろいろ大変なことが。私が、そんなこと思える立場でもないのに」

言い終わってすぐ、また永井さんに強く抱きしめられた。

「思ってたいいよ。期待して。変だけど、君にそう思われてるっていうのが、嬉しいんだ」
「なんで」

少しだけ泣きそうになって、それを笑って聞き返すことで、誤魔化した。でも、永井さんはそれを分かってるのか、片手で優しく私の頭を撫でてくれた。

「春希も、俺を欲しがってるって分かるから」

ぎゅっと、さらに強く永井さんに抱きついた。その通りなんだと思う。欲しがってるくせに、自分の立場を考えたり考えなかったり、永井さんの立場を考えたり考えなかったりして、こうやってぐちゃぐちゃなことになってしまっただ。

回されてる永井さんの腕の力が弱まって、私と永井さんの間に少しだけ距離が空いた。だけど、それも一瞬のことで、永井さんの手で顔を上に向けられて、次には唇が触れていた。背中に腕を回す代わりに、永井さんのコートを掴んで、そのキスを受け止める。ゆっくりとそれは繰り返されて、その度にもっと欲しがってしまう。

「そんな顔しないで。帰したくなくなる」

唇が離れてから、涙を拭くように私の目元に触れて、優しい顔で永井さんが言った。その手を取って、大丈夫だと笑みを浮かべた。

「来週、また会える？」

「うん。基本的に金曜日は大学にいないから、大丈夫だよ」

「少しでいいから、いつもより長く一緒にいたい」

少しだけ、わがまを言ってみた。今日、ここまで気持ちが吐露してしまったら、いつもと同じだけでは足りない気がした。だけど、言っただけ後悔したのも事実で、「ごめん」と下を向いてしまう。

「いいよ。また連絡するから、その時に何するか決めよう」

顔を上げれば、優しい顔のままの永井さんと目が合った。その言葉が嬉しくて、また、笑みが浮かんでくる。

「ありがとう」

「俺もそう言おうと思ってたから」

笑みを浮かべながらそう言われ、少し気恥ずかしくなって、視線を外した。上から永井さんの小さく笑う声が聞こえて、それを確かめるより早く、もう一度、今度は短くキスをされた。

「そろそろ帰るよ」

唇が離れて、永井さんがそう言った。頷いて答えると、永井さんは私の髪を一撫でして、車に戻っていく。助手席側の窓が開かれて、運転席に座った永井さんが見えた。手を振って永井さんが出発するのを見送って、自分もマンションの中に入ることにした。金曜日のときとは違って、ほんの少し心の中に引っかかりを持ちながら。

「好きだから焼きもちやくのも分かるけど、行き過ぎってよくないよね。そう思うでしょ、先生も」

「え、あ、うん」

「もー、ちゃんと話聞いてよー」

目の前に座る生徒に、ちょっとストップと手をかざしてしまう。反対の手でこめかみを押さえ、じんわりと残る頭の痛さに耐える。昨日のアルコールが、まだ抜けきっていない。

「ストップじゃなくて、先生もそう思うでしょ!」

「はいはい、そうですね」

毎度のこのように、今日の授業でもこの女子生徒の恋の相談に付き合わされていて、流すようにして聞いてばらばらと教材を捲った。

「あ、でも、先生ってすごい冷めてそうだから、嫉妬とかしないタイプだろうね」

私の心を読んだかのように言われて、思わず顔が引きつってしまふ。生徒がそれを見て、「当たり前だー」と喜んだ。

「どうせ嫉妬なんかしない人間ですよーだ。そんなこと言うヒマがあるんだったら、次はここやろうかな」

生徒が苦手としている範囲の発展問題のページを開いてやり、軽い仕返しをしてやる。「やめてー」と叫ぶ生徒は無視して、椅子から立ち上がった。いつものように壁に寄りかかって辺りを見回すと、ちょうど向かい側の席で授業をしていた古賀さんと目が合った。今の会話を聞いていたのか、にやにやと笑ってこちらを見ている。何だと目で問うと、何でもないというように肩をすくめて返され、生徒に呼ばれたらしくひょいっとパーティションの影に隠れてしまった。

問題を解く生徒を見ながら、確かに自分は嫉妬するタイプではないと再確認した。そう思っではいるけど、それに似た感情を持つことはある。永井さんが他の人に誘われそうになったと聞かされたときは普通に嫌だと思っだし、それとは少し違うけど、古賀さんに彼女ができそうと思ったときも、何となく嫌な感じはした。ただ、それは嫉妬というか、安心に繋がる人がいなくなってしまうという恐れからくるものなんだと思う。自分でも意味不明だなと思うけど、どうしても古賀さんがいなくなることだけは嫌だった。

いつものようにバイトを終えようと、私と古賀さんだけが駐輪場に残った。他のみんなはご飯を食べるといって、バイトが終わるとさっさとどこかに行く。これもいつも通りのことで、私と古賀さんは定

位置に着いてあれこれと話をしていた。

「あー、やっと頭痛いのなくなった」

原付に座りながらぐーっと腕を伸ばして言うと、ペットボトルのお茶を飲んでいた古賀さんは何のことだと顔をこちらに向けた。それに気がついて、へらっと笑みを返した。

「昨日、ちよつと飲みすぎた」

「珍しいな。お前が飲み会以外で飲むなんて」

本当にそう思っているような口調に、「まあね」と苦笑いで返す。古賀さんの言う通り、アルコールがそこまで好きじゃない私が飲み会以外でそれを飲むのは珍しいことだ。

「ほんとは一杯だけにしようと思ってたんだけど、相手につられて」
「誰と飲んだんだよ」

古賀さんがおかしそうに笑う。私もそれに合わせて笑いつつ、どうしようかと考える。はたして昨日飲んだ相手が村瀬健吾だと言ってそれを信じてもらえるだろうか。しかも、その人が永井さんの友達だなんて。

悩む私を見て、古賀さんがどうしたという風に私を見てきた。少し悩んだけど、言っても支障ないだろうと結論付けた。

「村瀬健吾だよ」

「なにが？」

「昨日一緒に飲んだ相手」

古賀さんが何度も瞬きをする。一生懸命私が言ったことを理解しようとして頑張っているのが目に見えて、その様子が面白い。

「……え？」

やっと出てきた言葉も、私の言葉を聞き返すもので、それが余計に古賀さんの動揺を表していておかしかった。

「嘘じゃないよ。なんか、永井さんの友達なんだって」

「……まじ？」

「まじまじ」

何度も頷いて答えると、古賀さんもその言葉を本当だと受け取ったみたいで、何とか私の言葉を飲み込んだようだった。古賀さんは感心したように息をついて、持っていたお茶をもう一口飲んだ。

「お前、サインとか貰ってないの？」

「忘れてた」

「忘れんなよー」

自分だって村瀬健吾のことは『そこまでだった』とか言っていたくせに、私が会ったとなると何かしら見せてほしくなったらしい。昨日のことを思い出すと、自然と村瀬健吾が言った言葉も思い出された。

『万里ちゃんいないんだから。どうせ、家帰っても一人だろ』

それを聞いて申し訳ないような、嬉しいような気持ちになって、それに気がついて、そう思った自分に呆れた。私は、そんなことを思える立場ではない。そんな考えが何度も繰り返し返されて、何度も自分に呆れて。その度に、永井さんに気持ちが向いてるのだと実感させられた。そんな変な気持ちだが、小さな黒い塊となって、私の中に居座っている。

「何かあったのか？」

原付に座ってぼーっと地面を見ていると、向かいから古賀さんの声が聞こえた。顔を上げると、さっきの表情とはまったく違う、真剣な目でこちらを見ている古賀さん。すぐに『何でもないよ』と答えそうになって、やめた。古賀さんに言わなくて自分の首を絞めたことは、今までに何度もある。古賀さんも、言わないより言ってくれた方がいいと言ってくれた。

「……永井さんの奥さん、家から出てっちゃったんだって。離婚の話したその日に」

古賀さんは何も言わない。それを良いことに、私は話を続けた。

「昨日それ聞かされて、何かいろんな考えがぐちゃぐちゃになって。申し訳なくなったり、ちよつと嬉しくなったり、それで、自分に呆れたり。永井さんは気にしないでって言うてくれたけど、それも完全には無理だった」

一気に話したいことだけ言ってしまったて、ふーと一つ息をついた。古賀さんから返ってくるのがどんな言葉でも、言えただけでも少し楽になった。今は自分でも言葉に表せないくらいごちゃごちゃとしていて、それが少しでも外に出た分軽くなった気がする。

「いいんじゃない？ 永井さんの言った通りにすれば」
「言った通りって？」

全部言い終わつたのを待つて、古賀さんが言った。その言葉の意味が分からず、首を傾けて古賀さんのことを見た。古賀さんは肩をすくめて、お茶を飲む。

「気にしないでいいんじゃないかってこと」

「できたらいいんだけどね」
「まあ、だろうな」

苦笑いを漏らす私に、古賀さんが当たり前のようにして返してきた。

「今ん所は、お前と永井さんの結婚してる人との間に何の接点もないんだから、変に気にすることないんだよ。それでも何か頭の中ごちゃごちゃするなら、そうなった時にまた言え」
「え？」

最初の部分は分かったけど、最後の部分の意味が分からなくて聞き返してしまう。こちらを向いた古賀さんは、何でもない顔をしているけど。

「言えば少しは楽になるだろ。納得できないこと考えてるなら、それを外に出した方が楽じゃないか？」

「あ、うん」

「じゃあ、そういうことで」

びつくりするくらい簡単に言われて、流れで頷いてしまった。私が今の流れにぼかんとしていると、古賀さんが呆れたような顔をしてきた。

「どんな顔してんだよ」

「え、だつて、」

そんな簡単に解決されるなんて思つてなかった。そう思つていても、それを口には出せないでいて、ぽかんとしたまま古賀さんを見る。古賀さんは立ち上がつて自転車に近付く。

「納得できないことも言い続けたら、少しはどうでもよくなるだろ」

そう言われて、夏休みが終わつた頃のことを思い出した。今もだけど、留学とか彼氏のことでもつと古賀さんに愚痴つていたのは、その頃だった。あの時は、正直これ以上怒れることはできないというくらい彼氏のことに腹を立てていて、何度も同じような愚痴を古賀さんに言っていた。それでも、今はその時ほど腹を立てることもない。もうだいたい諦めがついたというのもあるんだろうけど、やっぱりあの時に古賀さんに愚痴を聞いてもらつていたというのが大きい。それと同じことを、古賀さんは言っている。

「おい、帰るぞ」

すでに自転車の鍵を開けている古賀さんが、何も準備をしてない私に声をかけてきた。

「あ、うん」

私も慌てて原付のキーを取り出して、鍵穴に差し込んだ。二人とも準備ができて、それぞれ自転車と原付に乗る。

「じゃあな」

「うん。ありがと」

自転車を漕ぎ出す前にそう言えば、古賀さんはどういたしましての代わりに片手を上げて、自転車を漕ぎ出した。古賀さんがいなくなっても、私はしばらく原付に乗ったままでいて、古賀さんの言葉を思い出していた。簡単にああいうことを言ってくれる古賀さんはやつぱり優しく、古賀さんがいるから何かあっても大丈夫だと思えるんだろう。嫉妬とは違うけど、古賀さんがいなくなることは、やつぱり考えたくない。こんな変な考えを誰かに言えるわけもなく、自分の中だけに仕舞って、私も原付を出発させた。

春休みも中盤になった。

俺たち大学生にとって春休みなんていうのは、テストが終わればのんびりできる長期休みだ。ただ、塾は違う。高校受験や大学受験もいるし、当たり前になが書き入れ時だ。まあ、うちの塾はそれなりに講師の人数もいるから、今より一日程度シフトを増やすくらいで支障はない。あつたとしても、それ以上増やしたりしないけど。

その中で、俺や他のやつらは適度に遊んだり、彼女、彼氏とデートしたりしていた。俺も宮瀬も、例外ではない。永井さんの奥さんが家を出ていったと知った宮瀬は、永井さんの言葉通りそれをあまり気にしないようにして、あの人と会っているみたいだった。それでも、何かどうしようもない時だけ、以前のように俺と話している。奥さんが出ていったことに、宮瀬が責任を感じてないといえば、嘘になる。あいつは、そのことにそれなりの感情を抱いているけど、自分がそれを持つ資格がないと思っている。自分にも彼氏がいて、永井さんが結婚していることも承知の上で付き合っていて、そんな自分がどうこう言っているものじゃないと。だけど、それでも気持ちが永井さんに向いている今、永井さんの結婚している人が出ていったということに、少しでも嬉しいと思ってしまう。そんな自分に気がついて、また呆れる。その繰り返しで、何日かの周期で、どうしようもない気分になるようだった。

そんなことが、前にもあった。あいつの留学が駄目になって、彼氏だけが向こうに行ったとき。頭では行けなくなったことを分かっているけれど、それについていけない心があつて、あいつは苛立つて、混乱して、どうしようもない気持ちを抱えていた。俺には何もできなくて、話を聞くだけだったけど、それで宮瀬が楽になると言った。

だから、今もそうしている。抱えているものを外に出して楽になるなら、いつだって言えばいい。そう、宮瀬にも伝えた。

「あー、やっと終わったー」

少し先を歩く松木が「よっしゃー」と両手を上に伸ばして喜んでいゑる。その後ろを歩く俺と犬居も、声には出さないが、気持ちゑは松木と同じだ。

今は春休み真つ只中。だけど、俺と友達の松木と犬居は、二つ隣の県にある大学に来ていた。今学期の休暇中に開講される集中講義を取っている俺は、その授業のまとめとして、この大学に来て同じ内容の授業をしているクラスと合同授業兼実験をやっていた。その授業がついさつき終わって、クラスの他の奴らについて見知らぬキャンパス内を歩いていた。

「昼飯どうするよ?」

前を歩く松木がこちらを振り向いて聞いてきた。時間は昼を少し過ぎていて、確かに腹もへっていた。せつかくここまで来たんだから、何か美味しいものでも食べていきたい。

「この辺何あるんだろ」
「知らん」

犬居の問いにはつきりと言い切る松木。それに呆れる犬居を見て笑ってしまう。何が食べたいかな、なんて考えながら歩き、何気なく真正面にある建物を見た。その棟は俺の位置からは全面ガラス張りになっていて、中の様子がばっちり見える。その棟を横目に通路を右に曲がろうとして、思わず足を止めてしまった。

「おい、古賀ー？」

先を歩く松木と、俺を置いてその隣に並んだ犬居が不思議そうに俺のことを呼ぶ。

「あ、おう」

松木の声に返事をするものの、なかなかそこから動けずにいて、変に思った犬居が俺の隣まで歩いてきた。それでも、俺は棟の中を歩いている人——永井さんから目が離せないでいた。松木が「なんだよー」とぶつくさと言っている。俺が永井さんのことを見ていると、棟の中を誰かと並んで歩く永井さんも、ふいに視線を外に向けた。そして、俺のことは見つけて、向こうも足が止まった。だけど、永井さんの方はそれも一瞬のことで、隣を歩いていた人に何か言うとその人から離れてその棟の入り口に向かって歩き出した。その入り口は俺の右手にあつて、つまり、永井さんは俺の方に来ているってことだ。

「俺たち、適当に昼食べるな」

隣にいた犬居が何かを察して、気を利かせて俺の隣を離れた。

「あ、悪い」

松木の隣に並んだ犬居に一声かけると、犬居は気にするなという風に片手を上げて、なんだとこねる松木を引っ張って歩いていった。永井さんは案の定入り口を出てきて、俺のところまで近付いてきた。

「古賀くん、だよな？」

「あ、はい」

俺が頷くと、永井さんは「よかった」と言って笑みを見せた。

「なんで、ここにいるの？」

「ああ。集中講義の最終授業がこつちであつたんで。永井さんのいる大学って、ここだったんですか？」

「そうだよ」

至極最もな質問をされて、肩をすくめて答えた。永井さんが大学の教授だつてことは知っていたが、まさかこの教授だったなんて思つてもみなかった。見れば、永井さんは頷きながらも俺との遭遇に

驚いている様子だった。俺の方も驚いたが、永井さんも俺を見つけて驚いたみたいだ。

「この後、時間あるかな」

時計を見た永井さんが、そう尋ねてきた。犬居も松木もいなくなってしまったので、俺の方は何も予定がない。

「ありますよ」

「じゃあ、昼、一緒にどう？」

この後の予定なら、ない。断る必要性も、ない。ただ、断る理由ならあった。言えないだけで。

「いいですよ」

笑ってそう答え、駐車場で待つてと言う永井さんの言葉に頷き、永井さんと反対の方向に歩きだした。

「じつじつところ、来るんですね」

永井さんの運転する車で来た場所は、カフェレストランのようなところで、店内は白を基調とした内装の中にカラフルなものも置いてあった。オシャレといえばオシャレだけど、永井さんがこういうところに好んで来るなんて思ってもみなくて、少し驚いてしまう。それが顔と言葉に出ていたのか、永井さんはおかしそうに笑みを漏らす。

「研究室の学生に教えてもらったんだ。近くて美味しいから、行ってみてっ」

「ああ、なるほど」

頷いて、店内を見回した。確かに、学生のような人が多い。オシャレにエプロンを着こなした店員が、注文したランチセットを持ってきて、とりあえずは二人ともそれに手をつける。

「美味しいですね」と言う言葉に、「そうだね」と返される普通の会話をしながら、一体何を話したいんだろうと考えた。永井さんが俺を誘ったのは、宮瀬のことで何か聞きたいからだろうと簡単に推測できた。でなきゃ、一、二回会っただけの俺と昼ご飯と一緒に食べようなんて思わない。推測できたからこそ、永井さんの誘いを受けるのが少し嫌だった。宮瀬から永井さんのことを聞くのはいい。あいつが嬉しそうに笑って、楽しそうにするから。そうでなくても、何かしら話を聞いた後はすっきりとした顔をする。それが分かるだけでもいい。だけど、永井さんから話を聞くのはまた別だ。ぺらぺらと話されて、「そうなんですか」と聞き流せるほど俺は大人じゃない。

「気付いてると思うけど、君を誘ったのは、彼女のことでも聞きたい

ことがあつたからなんだ」

『そういえばね』なんてわざとらしい始め方もせず、永井さんはストリートに言った。水を飲みながら永井さんの言葉に軽く頷いておいて、次に出てくる言葉を待つ。

「聞ってる、よね。俺の奥さんが家を出てること」

「まあ……」

はつきりとイエスとは言えなくて、曖昧に頷いておく。永井さんの宮瀬に対する印象を悪くはしたくない。だが、そう思ったのは俺だけのようで、永井さんは俺の言葉を聞くと「そっか」と安心したような笑みを浮かべた。意味が分からず首を傾げると、永井さんは少し困ったように笑う。

「いや、彼女にとって君はそういう人なんだろうなとは思ってたんだ。何かあつた時に相談するのは、君なんだろうなって」

「そう、ですか」

「うん。当たってるみたいでよかったよ」

心底そう思ってるような口調に、少しだけ溜め息をつきなくなった。少ししか会ったことのない俺のことをそういう風に見てるってことは、宮瀬が俺のことを話したか、永井さんがそれほどよく宮瀬のことを見ているかのどっちなんだろう。今の永井さんの発言からして、それは後者みたいだけど。たぶん、永井さんと初めて会った時

から、そう思われてたんだろう。宮瀬が混乱した、あの時だ。

「聞きたいことって何ですか？」

『聞きたいことがある』と言われても、俺が永井さんに何かを話せるかなんてはなはだ疑問だが、聞かれた以上はその先を促してみる。

「うん。彼女、大丈夫かな」

「……は？」

水を一口飲んで言われたその言葉に、フォークを持っていた手が止まる。疑問詞も目的語も入っていないその言葉で、俺に何を理解しろっていうんだ。永井さんもそれに気がついたようで、「あ、ごめんと苦笑いされた。

「妻が家を出てったことで、彼女が不安、ていうか、どうにかなってるんじゃないかと思って」

困ったように笑い、永井さんは俺に目を向けた。その言葉を聞いて、やっと永井さんの聞きたいことを理解した。皿に残っていた最後の一口を食べ終えて、喉を潤すために水を一口飲む。

「どうにかなってるっていえば、どうにかなってるんだと思います。というか、ならないのもどうかと……」

「まあ、そうなんだけどね」

俺の言いたいことが分かるらしく、永井さんは苦笑いを見せた。一応永井さんがどう考えていようが、形としては未だに『不倫』・『浮気』という形から抜け出せていないのだから、宮瀬がそのことで何にも思わないわけがない。それはもちろん、永井さんにも言えることなんだろうけど。ただ、永井さんが言いたいのは、そういう、一般論的なことじゃない。それは、俺にも分かる。

「正直にいえば、たぶん、混乱してます。で、自分でも何考えてんのか分からなくなってるんだと思います」

「そっか」

永井さんは溜め息ともとれる息をつくとともに、『やっぱり』という顔をした。

永井さんの皿も俺の皿もきれいな片付いていて、店員がそれを下げると同時に、初めに頼んでおいた食後のコーヒーをテーブルに置いていった。二人ともそのコーヒーに何も入れず、少しだけ飲み、ほとんど同じタイミングでカップをソーサーに置く。

「永井さんの奥さんが出てったことに少しだけ嬉しくなってる、それでも申し訳ない気持ちもあって、そういうこと考えた後に、自分がそんなの考える立場じゃないって呆れるんですって。でも、やっぱり嬉しいものは嬉しかったりでっていう感じで、終わらない考えがずっとぐるぐる頭の中でループしてるみたいです」

「そう、か。やっぱり、タイミング悪かったな。知られるの」

そう言っつて、永井さんは苦笑を漏らす。

「そのこと知られたの、偶然だったんだ。友達が口滑らせる感じで言っっちゃってね」

「そうなんですか」

永井さんの言う『友達』は、たぶん、村瀬健吾のことなんだろう。芸能人と友達なんていうのは、あんまり信じられないけど、宮瀬がわざわざ言ったくらいだから本当なんだろう。永井さんが何とも言えない顔しているのを見て、それから視線を避けるようにコーヒを飲んだ。永井さんの言葉で、どうして宮瀬があそこまで変に混乱してるのかも分かった。永井さん自身から聞かされたんじゃない、寝耳に水のような形で聞かされたのが原因みたいだ。永井さんなら、もう少しタイミングを選ぶだろう。

「宮瀬が混乱してるのって、それを言ってもどうにもならないって分かってるからなんだと思います。どうにもならないって分かってるのに、その考えが止まらなくなって、それでも自分の気持ちは変

えられなくて。頭での理解に、感情がついていってないんです」

あの留学のことがあった時と同じだ。分かっているても自分の気持ちがついていけてなくて、誰に何を言ったらいいかも分かってなくて、それでも話し始めたらずまらなかった。

俺が言葉を止めても、永井さんは何も言わなかった。俺は視線を永井さんの目から外して、永井さんがどこを見ているかは分からない。それを良いことに、俺は言葉を続けた。

「俺は、宮瀬と永井さんの関係に、どうこう言うつもりはありません。どういう形であれ、それは本人が決めたことで、それがあるかということ俺が宮瀬を変な風に見るなんてこともない。もちろん、永井さんのこともです。正直、彼氏なんかよりも、永井さんの方がずっと宮瀬のこと考えてると思います。それであいつは楽しそうだし、嬉しそうだ。それに何かを言うつもりなんてない。だけど、」

そこで言葉が切れて、続きの言葉を探した。言いたいことはあるのに、それをどう言ったらいいか分からなくて、一瞬言葉に詰まる。その時に、どうにもならない気持ちを話す宮瀬の顔を思い出して、顔を上げた。こちらを見ていた永井さんと目が合ったけど、今はそれを気にする余裕もない。

「だけど、宮瀬を混乱させないでください。混乱して、あいつは変に気持ちを溜めるんです。誰かに話せば楽になって、それで済むことなのに、あいつはそれをしない。溜めて、溜めて、限界が来た時にそれを吐き出すんです」

宮瀬は、留学のことがあった時も、涙は見せなかった。俺に愚痴を話す時も、一つの涙も見せなかった。自分の夢が破れたのに、『腹立つよね』なんて笑いながら、その後ろに泣くことを隠した。一人の時はどうかは知らない。だけど、それが怖かった。もし、宮瀬が気持ちを溜めこんで、一人の時だけ泣いていても、俺は何もしてやれない。目の前で泣かれた方が、よっぽど安心できたのに。

今回だって同じことだ。俺は話を聞くことしかできない。宮瀬は『何言ってるんだろかね』なんて言って笑うけど、それが一人の時でもできてるんだろつかと思う時がある。何度やっても同じの考えを、何度も頭の中でループさせて、それがどうしようもなくなった時、あいつは一人で泣いてるんじゃないだろうか。混乱して、混乱して、また自分に呆れてるんじゃないだろうか。笑ってるその奥に、泣いてる姿を見ているようで、それが怖かった。

「気付いてないことないでしょう？ あいつは、混乱したら、無理をする。何でもないって笑って、気持ちを隠す。俺はあいつの話の聞くことはできるけど、それで全部が解決するわけじゃない。だから、宮瀬を混乱させないでください」

最後にもう一度目を合わせて言った言葉に、永井さんは少し目を逸らして少しの笑みを漏らした。その笑みに、少しだけ自嘲が見えた気がした。

ずいぶんな我儘を言っていることは、自分にも分かっていた。間違ったことをしているのは、何も永井さんだけじゃない。宮瀬だって、間違ったことをしている。それが自分の首を絞めてもいる。だけど、宮瀬にそれを止めるなんてこと、俺には言えない。卑怯だと言われ

てもいい。

永井さんは視線を戻して、困ったような、苦い笑みを浮かべた。

「やっぱり、混乱してたんだね」

そんな笑みを浮かべながらも、永井さんはどこか納得したような顔つきをしていた。

「参ったな」

「え？」

困ったように笑みを浮かべながら、その一言を言われた。意味が分からず聞き返すと、永井さんはその顔のまま俺に目を向けた。

「彼女が混乱してるんだろうなとは思ってたんだ。それで、一応自分なりに動いた」

「動いたって？」

その先を促す言葉に、永井さんはさらに困った顔になる。

「俺も、家を出たんだ」

「……え？」

永井さんの言葉を理解するのに、少しの間が空いた。

「まだ正式に離婚したわけじゃないし、妻もまだ家には帰ってきてない。けど、少しでも進めたくて、家を出た。届も、妻の欄だけ空けて、渡してある」

「いつから、」

「二週間くらい前からだよ。家を出たのは。新しい部屋の方も、だいぶ落ち着いてきた」

先回りされて答えられた永井さんの言葉に、「そうですか」としか返せなかった。何でか、喉がからからに渴いて、コーヒーに手を伸ばす。飲みながら、永井さんが言った意味を考えた。確かに、永井さんは動いた。だけど、それが宮瀬の混乱を解くかといったら、たぶんその答えはノーだ。むしろ、悪くなるかもしれない。自分一人が何もしないと、さらに混乱するだろう。永井さんも、それを分かっている。

「正式に形がちゃんとするのは、もう少し先だろうね」

コーヒーの手にして言う永井さんは、言ってしまったことで少し気持ちが悪くなったようだった。顔にはまだ困ったような笑みが浮かんでいるけど、さつきほどではない。

「宮瀬に、言う気はないんですか？」

俺もコーヒーを飲みながら尋ねる。永井さんの方が先にカップを置く。

「まだ言うつもりはないよ。少なくとも、彼女がふっ切るまではね。今言っちゃったら、それこそ混乱させる」

少しおかしそうに笑いながら、永井さんは言った。それでも、宮瀬を思っていることが、十分すぎるほどに分かる言い方だった。

「もつと分かりやすい我儘だったら、いいんですけどね」

誰がなんて言っていないけど、永井さんには誰のことか分かったようで、優しい顔で「そうだね」と言った。そう言いながら、宮瀬が『こうでないと嫌だ』と分かりやすい表現をするなんてことは滅多にないことを、俺も永井さんもよく分かっていた。

駅までの帰り、永井さんが俺の頼みを聞いてくれ、少し遠回りして永井さんが言った新しい家の前を通ってくれた。街の中心部から少し離れたそこは、住宅街のようなところではあったが、それほど交

通の便も悪いというわけではないらしい。以前に会ったときに、宮瀬がふざけて『こういうところ住みたい』と不動産屋のフリーパーを見ながら言ったところだという。

駅前まで送ってくれた永井さんと、なぜか言われるまま連絡先を交換して、宮瀬には内緒だと笑って言われた。永井さんの車が去っていくのを見送って、俺も駅の中へと進んだ。

ちょうど良く電車が来て、それに乗ったところで、コートのポケットに入れておいた携帯が震えた。空いていた席に滑り込むようにして座り、携帯を確認する。送信者は、宮瀬。

『お土産どれがいい？』

メールには、写真も添付されていた。どこぞの夢の国の主人公の手をかたどった、携帯ストラップだ。宮瀬は今、友達とそこへの旅行の真っ只中だ。行く前に何のお土産がいいかと聞かれて、俺が『携帯クリーナー』と言ったのを覚えてるらしい。

メールを見て、こつちがどんな状況かも知らずにと、思わず呆れた笑みがこぼれた。それでも、その笑みはなかなか消えずに、宮瀬への返信を作成する自分がいた。

『別れよう』

地球の反対側にいる彼氏にそんなメールを送ったのは、友達との旅行から帰ってきた次の日の火曜日だった。今度は、のりくらりとかわされるつもりはない。その後押しをしてくれた共通の友達には、感謝でいっぱいだ。申し訳なさそうな顔をして、それでも知っておいた方がいいと言いながら教えてくれた彼。そんな彼を思い出して、自分も同じなんだけどと少し苦笑いが漏れた。

その友達と偶然会ったのは、学校だった。旅行から帰ってきた私は用事があつて、春休みだというのに学校に来ていて、彼もまた同じような理由で学校に来ていた。「久しぶり」と言葉を交わした次に彼は妙に真剣な顔になって、「ちよつと」と言いながら人がいない地下ラウンジに連れていかれた。

「あの、本当は、こういうのって言わない方がいいと思うんだけど……」

ラウンジのテーブルの一つに向かい合って落ち着いて、彼は言い出した。さっきまで真剣な顔をしていた割には、今は困ったように視線をうつろらせている。そんな顔をされると、こっちまで困ってしまう。そもそも、この男友達とは一回生の時に英語のクラスが同じだったというだけで、そこまで会ったりもしない。彼とはお互い彼氏と彼女が留学しているという共通点はあるけど、普段はすれ違う時に「久しぶり」と言い合うくらい仲だ。そんな彼と私の間に、真剣な顔をして話し合うことなんてまったくもって思いつかなくて、それだけに何で彼がこんなに困った顔をしているかも分からない。彼女と別れたりでもしたのかな、というくらいが想像の限界だ。

「でも、やっぱり知っておいた方がいいと思ったんだ。春希が頑張ってるのに、あいつが呑気なことしてると思うと、何かやなんだ」「はあ……」

困った顔をしつつも真剣な表情をのぞかせる彼を目の前にしても、私には話の見当もつかず、ただ頷いて言葉を発するしかなかった。唯一考えたのが、そういえばこの人も私のことを名前で呼んでいたな、というどうでもいいことだった。高校時代に留学をしていたという彼は、非常にフランクな性格で、ほとんど学校では会わない私のことも一回生の頃から名前で呼んでいた。ちゃん付けだったり、さん付けだったりはあるけど、呼び捨てにされるのが今のところ家族以外には永井さんからだけなので、余計に違和感を覚えてしまう。

真剣な彼とは正反対の私の無礼な考えなど知る由もなく、彼は話を続けた。

「俺の友達があいつと同じところに留学生として行ってて、そいつから聞いた話なんだ」

「うん」

彼がなかなか話の核心部分に触れないので、私の方は頷いて話の続きを待つしかない。今日はバイトもないから早く家に帰ってゆっくりしたかったのに。そんな呑気な考えも、彼の次の言葉で停止してしまった。

「友達があいつのこと知ってるっていうから話が盛り上がって、春希のこと話題に出したら、そいつが『え、別れたんじゃないの？』って」

「は？」

私の間の抜けた声を聞いて、向かいに座る彼がやつぱりという顔をした。何か言おうとする私を制して、彼が先を続ける。

「で、俺が『別れてないよ』って言ったら、『じゃあ、何であいつこっちで彼女いんの？』だって」

何度も瞬きを繰り返して、目の前の彼の顔を見た。彼の言葉を理解しようと思いがものすごい速さで回転しているのが分かる。いや、理解はしている。整理しきれないだけかもしれない。要は……。

「浮気してるよ、あいつ」

「……あ、うん」

代わりに彼から答えが出てきて、私はそれに同意するように頷く。
たぶん私の顔は未だにぼかんとしたままだと思う。

「ごめんな。急にこんな話して。聞きたくなかったと思うかもしれないけど、知っておいた方がいいと思ったんだ」

彼には私の今の様子が、なぜか、失望とか悲観とかそういう類のものに見えたらしく、本当に申し訳なさそうな顔で謝ってくる。私の方は、単に今の言葉を飲み込むのに時間が掛かっただけで、悲しいとか最低だとかそういう感情はまったくといっていいほど沸き上がってこなかったというのに。

「最低だよな。浮気なんて。春希だって、本当は留学できたのに、行けなくって、こっちであいつのこと待ちながら頑張ってるのに」

「え？」

彼が吐き捨てるように言う言葉の中で、彼が知っているはずのないことが口にされて、私はそこに反応してしまった。彼の方も私の聞き返して気付いたようで、少しだけしまったという顔をする。『最低だよな』と言った時の顔とは打って変わって、彼はまたしても困り顔で視線をうろつろさせる。

「なんで、知ってるの？ 私の話」

視線を彷徨わせる彼に尋ねても、彼は「えーと」と言いながら視線をうつしかせる。

私が留学に行けなかったという事実を知っている人は、本当に数人しかない。というか、この学校の中だけでいえば、私の友達一人くらいじゃないだろうか。それなのに、何でほとんど交流のない彼が知っているんだらう。

止まった思考がその話題で再び動いて、戸惑う彼から視線を離さずにいると、しばらくして彼がしょうがないというように息をはいた。

「聞いたんだ。教務課の人に。その人、留学関係のことも担当してて、よく話すんだ、俺。で、あいつのこととか春希のこととか話すときあつて、教務課に春希がいた時に『春希も留学すればいいのにつて言ったら、そのこと教えてくれた。本当は、試験に合格してたんだって？ それも、あいつよりだいぶ良い点数で」

「あー、うん、まあ」

彼に優しい口調で言われて、私は曖昧に答えるしかできなかった。一体、いつ彼に教務課で会ったというんだ。基本的に周りに明らかに知っている人がいる時以外は周りに気を配らないので、彼が教務課にいたという記憶はまったくなかった。

「ほんと、最低だよ」

優しい顔から一転、眉間にしわを寄せて腹立たしげに彼はそう口にした。

彼が私のことを思っただけでなく、そう言ってくれるのはよく分かる。ただ、『最低』と言われる度に、私は曖昧に笑うことしかできないでいた。勝手に私とは別れたということにして浮気をしている彼氏が最低なら、彼氏とは別れられないまま永井さんと付き合っている私も、同じように最低な人間だ。

彼に目をやると、本当に彼氏に腹を立てているのが分かる。それが、私を思っただけのこと。そうまでして言ってくれた彼に、嘘をつく気にはなれなかった。

「最低なのは、私も一緒だよ」

「え？」

怒っていた顔をきょとんとさせて、彼がこちらに目を向けた。

「私だって、浮気してるもん」

「……え？」

今度は彼が間の抜けた声を出す。その声は、静かな地下ラウンジにやたらと響いた。私は、自分が今言った言葉に後悔することもなく、ぽかんとしている彼を見て笑った。

「言ってくれてありがと。何か色々ふつきれそう。私のことも、別に言っても構わないよ」

未だにぽかんとしている彼に笑って言い、席を立った。言いながら、脅しめいてるかなとも考えたけど、本心からの言葉なので今さら撤回する気もない。「ばいばい」と手を振って彼に背を向けると、後ろから慌てたように彼が呼び止める声があった。振りかえると、彼も立ち上がっている。

「なに？」

問い掛けると、彼は少し迷ってから、私の方を見た。

「その、あいつよりも好きなの？ えっと、その、人のこと」

『浮気相手』とはさすがに言えなかったようで、適当な言葉を探すようにして彼が言った。それに少し笑って、私は彼を見返す。

「うん。好きだよ」

つかえることも、迷くこともなく、するりと出てきた。その言葉で彼は更に顔を呆けさせる。私はそれにまた笑って、「ばいばい」ともう一度手を振り、今度は呼び止められることなく地下ラウンジ

を後にした。

彼氏の浮気を伝えられ、自分の浮気についても暴露したというのに、私はやたらと清々しい気持ちでキャンパスを歩いていた。

ぼんやり家でテレビを見ながら今日のことを思い出す。本当に、彼のおかげで色々とおふつきれた。変にストップしていた色々なものが動き出せる気がした。メールを送っただけで何かが変わるとは思っ
てないけど、少なくとも一歩は前進できたと思う。

そう考えていたちょうどその時、ソファに放り投げてあった携帯が着信を知らせた。表示を見れば、番号だけ。ということは、彼氏、じゃなくて元彼氏から。いつもならそのまま無視するが、今日は違う。連絡を先にしたのは自分で、その連絡がメールだけで済むとは思ってなかった。だから、未だ振動を続ける携帯を取って、通話ボタンを押した。

「もしもし？」

『……春希？』

電話から聞こえる声に、そういえば男友達と永井さん以外にも名前と呼んでる人がいたなと思い出した。前だったら当たり前だったことを『そういえば』というように思い出してる時点で、私の中の彼氏という存在がどれほど小さくなっていったのかを改めて思った。電話の向こうは、以前のようにうるさい。通話口から聞こえる声には、おそろおそろといった感じが含まれているような気がした。

「なに？」

『なに、じゃないよ。どういうこと？ 別れようって』

電話を掛けてきた理由なんて一つしかないのに、それを無視して問い掛けると、向こうからは当たり前前に怒った口調でさっきのメールの件を聞かれた。そのことを聞かれるのは分かっていたけど、何で怒られなきゃいけないんだろうか。

「どういうことって、そのまんまの意味だけど。別れたい」

電話の向こうで息を止める音が聞こえた。改めて言われて混乱でもしてるのかもしれない。見えない向こうのことを確かめる術も、意欲もなく、私はソファに置かれていたりモコンを取って適当にチャネルを変え始める。

『俺、前に嫌だって言っただね。嫌いじゃないなら、別れないって確かに、俺も他の女の子と色々あったけど……』

「色々って、付き合ってるってこと？ 彼女、いるらしいね。そっちに」

向こうの言葉を遮って言えば、逆に向こうの言葉が失われた。すぐに反論してこないってことは、本当にそういう相手がいたらしい。二人の間に沈黙が流れて、音という音は、こちらのテレビの音と向

こうから聞こえる騒ぐ音しかない。

『……誰が、そんなこと言ったの？』

少しして、ようやく向こうから言葉が出た。さっきまでの勢いのある言い方とは違って、真偽を確かめるような口ぶりだ。

「言えないよ。その人に文句でも言われたら嫌だし。でも、嘘ではないと思う。だって、そっちにいる人から聞いたって言ってたし」
『なに、それ。俺のこと信じてくれないの？』

「自分は散々疑ってたくせに、それ言うのって間違ってたない？」

向こうが過去に古賀さんや谷原さん、その他バイト仲間と私とのことを疑っていたことを持ち出すと、相手は「だって」と言いつつも先が続かないようだった。こういう状況になって初めて、自分がどれほど私の行動にいちいち難癖をつけていたかを感じたようだ。遊びにいくと言っているだけなのにぐちぐちと文句を言い、電話はしたくないと言えばさみしくないのかと言い。

「別に彼女がいることで何か言うつもりはないよ。単に別れたいっただけ。そっちに彼女がいるなら、別に私のことはいいでしょ」

そう言えば、この面倒なやり取りも終わると思った。浮気がどうのこうので揉める気なんて初めからない。彼女がいるなら、私に固執

する必要もないだろう。永井さんのことを言う気にはなれなかったし、これはこれでちょうどよかったような気さえしていた。だけど、向こうの考えは違うらしい。

『嫌だよ』

「は？」

この期に及んで、こいつは何を言ってるんだ。そんな気持ちが思いつきり出たであろう聞き返しをしてしまった。それでも、向こうはめげない。

『だから、嫌だ。春希とは別れない』

「別れないって、彼女いるんですよ」

『……それは、彼女っていえるような人じゃない。確かに仲良くしてるけど、彼女とかそういうのじゃないし、春希が一番好きなんだ』

呆れた口調で言えば、向こうは焦ったようにつらつらと言いつめいたことを並べてくる。リモコンを放って、その手で髪をくしゃりとかき上げた。

『どうせ、あと二、三カ月だよ。そしたらその人とも離れるし、もう少ししたら会えるじゃん。だから……、』

「それ以上先言わないで」

自分では抑えたつもりだけど、予想以上に冷たい声が出た。向こうが慌てて口をつぐむ。

今の言葉で、向こうの考えてることが分かった。それが、いかに最低最悪な考えかということも。向こうの彼女は、向こうの彼女。留学が終われば、彼女は私一人に戻るか、もしくはそのまま二人と続けるか。

あまりの考えに怒りを通り越して呆れてくる。ばれないとでも考えているんだろうか。

『向こうは今だけでもいいって言ってるけど、俺は春希だけだよ』

その言葉で、溜めていたものが大きな溜め息となつて出てきた。『今だけでもいい』っていう相手の言葉にそのまま乗っかってる自分が、どれほど最低か分かってるんだろうか。

「そうやって考えたいならそうしてればいいよ。私は、もういい。これ以上付き合う気なんてない」

『なんで』

「今の言葉言つて、なんでなんて言える立場？」

苛々した口調を抑えようと頑張ってみるも、それはなかなか難しいことだった。

『違う子と付き合ってるのは、謝るよ。ちゃんとする。だから、別れるなんて言わないでよ』

「だから、彼女がいるのとかはもうどうでもいいんだって」
『じゃあ、なんで。俺のこと嫌いになったの？』

こういう流れになるのが嫌だったから、さっきの段階で終わらせたかったのに。そう思いながら、また溜め息を漏らした。

嫌い、というよりも、もうどうでもよかった。向こうのことよりも今は自分自身の生活の方が楽しかった。勉強や、バイトや、友達と遊ぶことの方が何十倍も楽しかった。それに、今は永井さんがいる。永井さんが呼ぶ『春希』という声が、どれほど耳に心地良いかは、さっき向こうから呼ばれた時にはっきりと分かった。でも、それを言いたくはない。言ってしまったら、止まらなくなりそうだ。

『他に好きな人でもいるの？』

私の考えなんか気付くわけもなく、向こうは畳みかけるように聞いてくる。

もう、どうにでもなれ。

「いるよ。好きな人、いる。その人と、付き合ってる」

向こうの、何度目か分からない、息を飲む音が聞こえた。

『なに、それ』

「そのまんまの意味。好きな人がいて、その人と付き合ってる」

今の言葉を聞いたら、永井さんはどんな顔をするんだろうか。電話をしている相手より、そんなことが気になる自分が笑えた。それほど、私にとって向こうはどうでもよくなっていた。

『浮気じゃん、それって』

「そうだね。だから、別れようって言ってるでしょ」

『何それ。ひどくない？ 俺がいない間に、他の人と付き合ってたの？』

「どっちもどっちだよ。私もそっちも、お互いに許されないことしてた」

『何だよ、それ。俺がどんな気持ちで……』

そっちの気持ちなんて知るか、言っただけでやりたくなった。気持ちを無視してくるのは、いつだって向こうだった。連絡したくないと伝えても、さみしいと言っただけで来た。向こうの生活なんて聞きたくないと言っただけで、どれだけあっちの生活が楽しいかを自慢げに話された。別れたいと言っただけで、嫌いじゃないなら別れないとかわされた。そんなのを棚に上げて、私だけが悪いように言わないでほしい。

『その人だつてひどいよな。俺がいない間に、春希に近付くなんて』
「……そんなこと、言われる筋合いはない」

冷たくて、怒りを含んだ声で反論した。抑えようと数秒間を置いたけど、それも無意味だった。

「いない間にとか言うなら、そっちはどうなの。私のいない間だけでもいいって言われて、それに乗ったんでしょ。どっちもどっちだって、言ったよね。これ以上そのことで何か言うつもりなら、話し合いなんてしない。勝手に、別れたことにする」

向こうは、もう何も言わなかった。しばらく無言が続いて、ようやく向こうから「分かった」という言葉が返ってきた。それを聞いて、どつと肩の力が抜けるのを感じた。お互い別れることに同意して、やっと電話を切ることができた。

携帯を放り投げて、ずるずるとソファに沈み込む。やっとだ。やっと、一つのことが終わった。向こうがこっちの友達に私のことを何と言おうが知ったことかと思う。何とでも言えばいい。今さらそんな言葉で、折れたりなんかしない。

電話を終えて疲れてはいたけど、気分は上向いていた。高まった気分のまま永井さんに今のことを伝えようと携帯に手を伸ばして、メール画面を開いてから、それが戸惑われた。私一人は、変わった。

だけど、永井さんからは何も伝えられていない。今、私が向こうとの関係を終わらせたことを言っても、それが永井さんにプラスになるとは思えない。

永井さんの奥さんが家を出ていったことを、二人とも気にしてないと言えは嘘になる。それを聞かされてからも普通に会ってはいた。だけど、二人とも、というよりも私がそれを気にしていた。永井さんはそんな私を気にしている。二人とも何事もなくしているけど、単にその部分に触れていないだけだ。

永井さんは、自分の話が進まないことにまいていっていると言った。そんな中で、私が今自分の変わった状況を言ったところで、永井さんの話が進むかと言えは答えはノーだ。永井さんと奥さんの話は、私一人が変わったからといって簡単に進むことじゃない。もちろん、永井さんは変えようとするだろう。だけど、それで永井さんが更にまいるようなことにはなってほしくない。

携帯をもう一度ソファに放り投げて、ごろんと横になった。今日はまだ火曜日だ。永井さんに会うまで、あと三日ある。いつになく会いたい気持ちを抱えながら、横になったままテレビを見ていた。一つの問題が終わったはずなのに、今日の午後の時ほど、気分が清々しくはなかった。

「はい、おみやげー」

次の日の水曜日、バイト終わりにいつもの駐輪場で古賀さんに旅行

のお土産を手渡した。某ネズミキャラクターの手の形をした携帯クリナー。なかなか可愛くて、自分的にはナイスだと思ってる。

「サンキュ」

いつものコンクリートブロックの場所に座ったまま、古賀さんがそれを受け取って、さっそく中身を取り出している。私の方は原付に座っているけど、中身を見た時の反応が知りたくて少し前かがみになりながら古賀さんの様子を見ていた。

「お、けっこういいじゃん」

「でしょ?」

袋からクリナーを取り出した古賀さんから好評価をもらっ。古賀さんはパッケージからそれを出して携帯のストラップ部分に取り付けた。クリナーを取り付けた携帯を目の前にかざし、ゆらゆらと揺れる手を見ている。

「楽しかったか?」

「うん」

ひとしきり揺れるストラップを見た後で古賀さんに尋ねられ、首を思いつき縦に振って頷いた。その様子を見た古賀さんが少し呆れたように笑っ。

「寒かったけど、夜のショーも見たよ。めっちゃきれいだった。昼のは風が強くて中止になっちゃったんだけど」

古賀さんの呆れた顔なんてものともせず、旅行での話を続ける。やたらと大学生っぽい人が多かったことや、カップルの女の子が異常なくらいクマのぬいぐるみやストラップを買っていたこと。古賀さんは呆れた笑みを見せてはいたけど、嫌がる素振りを見せることなくそんな話を聞いてくれた。

「はいはい。楽しかったんですね」

きやっきやっとはしゃいで話す私に、小さい子に向けて言うようにして返してくる古賀さん。旅行後の興奮で、今はそんな話し方も気にならなかったけど。

旅行の話が一通り済むと、私は原付に座りながらぐーっと両手を上に上げて伸びをする。

「だからやたらと今日テンション高かったのか」

納得したと言わんばかりの古賀さんのセリフを聞いて、「まあね」と曖昧に返した。その答えで納得したらしい古賀さんは、鞆から携帯を取り出してそれをいじりだす。

「それもあるけど、やっぱり彼氏と別れたのが一番すっきりした要因かな」

古賀さんが携帯をいじるのを見ながら、足をぶらぶらとさせて、何気ない風にして言ってみた。古賀さんの携帯をいじる手が止まり、ぎぎぎつとぎこちなく首がこつちを向く。瞬きを繰り返す古賀さんと目が合って、へらっと、それでもどうだというように笑ってみせた。

「……なに？」

未だに瞬きをする古賀さんが、やっと発した言葉。あまりにもさらっと言いすぎたかな、と少し反省する。

「別れたんだ。彼氏と。やっと、昨日」

もう一度、今度はちゃんと古賀さんの顔を見て言った。それでも、古賀さんは目を点にさせている。それに、少し笑ってしまった。もともと、古賀さんには言うつもりだった。彼氏が行ってしまったから、古賀さんに一番迷惑を掛けていたし、助けてもらっていた。昨日、全部が終わった後に連絡してもよかったんだけど、それよりかは会って言いたかった。会って、ちゃんと今までのことにありがとうと言いたかった。

古賀さんはまだぼけっとしたまま私のことを見ていたけど、しばらく

くすると、その顔がふつと優しいものに変わった。

「よかったな。で、いいよな？」

優しく言ってくれたものの、すぐに確かめるような顔つきになって、それが古賀さんらしくておかしくなる。小さく笑って、私は古賀さんの言葉に頷いた。

「大変だったんだよー。友達からさ、あっちが浮気してるとか聞かされて」

「は？」

古賀さんの顔が、すぐにさっきのようなぼかんとした顔に戻った。私はまたそれに笑って、「まあ、聞いてよ」と先を続ける。

昨日の経緯を全部聞いた古賀さんは、やっぱりぼかんとした顔で、「何それ」と一言。

「え、どっちもどっちだけど、なんだ、その彼氏の言い分は。『今だけでもいい』っていうのに、普通乗つかるか？」

「乗ったんだよ。あっちは」

「意味分かんない奴だとは思ってたけど、ほんと、意味分かんないな」

「ま、どっちもどっちだから別にいいけどねー」

ぽかんとした顔をようやく崩して、古賀さんは長い溜め息をついた。「理解できん」と、古賀さんは小さく首を横に振る。そんな古賀さんを横目に、私はもう一度腕を上げて伸びをした。今までのややこしい関係が一つ清算できて、ほんとにすっきりしている。誰かにそれを伝えられたことも、すっきりとした気分に関係している気がする。すくと腕を下に落として、また古賀さんの方を向いた。古賀さんは、また、優しい顔になっている。その意味が分からなくて、『なに?』というように首を傾げてみた。

「永井さんに、言ったのか? そのこと」

その言葉に、自分の顔からゆっくりと今の笑みが消えていく。曖昧な笑みを顔に残したまま、それを伝えるように首を傾げた。古賀さんには、それだけで言わなくても分かったようで、困ったような顔をする。

「なんで言っていないんだよ」

「言えないよ。私ばかり、楽になってるし。今私のこと言って、永井さんに変に焦ってほしくない」

古賀さんは相変わらず困ったようにしていて、私は耐えきれなくなつて視線を古賀さんから外した。

永井さんに言いたい気持ちはあった。別れて、ちゃんと永井さんといられると言いたかった。だけど、永井さんはそうじゃない。永井さんには永井さんの片付いていない問題があつて、私はそれに介入できなくて、できないからこそ永井さんを困らせるようなことは言

いたくなかった。困る、まではいかなくても、永井さんは問題を前に進めようとして、前言っていたみたいに『まいる』ような状況になってしまうかもしれない。それは、嫌だった。

「二人して、おんなじようなこと考えてんのな」

ふいに古賀さんにそう言われて、何のことか分からず顔を上げる。顔を上げた先にいる古賀さんは、困ったような呆れたような笑みを漏らしていた。顔を上げた私に気付いて、古賀さんが小さく笑う。

「先週、お前が旅行してる時に、たまたま永井さんに会ったんだ」
「た、たまたま？」

古賀さんと永井さんに『たまたま』が発生する可能性なんてあるのか。そんなことを思っていると、古賀さんにもそれが伝わったようで、「おう」と簡単に頷かれた。聞けば、古賀さんが取っている集中講義の最終日が、永井さんのいる大学で行われたという。そこで、『たまたま』永井さんに会ったらしい。

「永井さん、家出たってさ」
「……え？」

今度は、私がぼかんとする番だった。古賀さんが、面白そうに笑う。そんな顔を見ても、私は今の古賀さんの言葉をうまく処理できない

でいた。

「い、いつ？」

「えーっと、二週間、じゃないな。もう三週間前になるのか」

「そんな前？」

古賀さんの言葉で、頭の中でざっと計算をする。永井さんが家を出てからも、私と永井さんは会っていた。その間、私は永井さんが家を出たなんてことは知らずに。永井さんも、何かそういうことを言うことはなかった。ただ、いつも通りにカフェでお茶をして、ゆっくりとその辺りを歩いて、夜になれば永井さんは私を送って帰っていった。私は、何も聞いてない。

「おんなじこと考えてたって言っただろ」

私の考えを読みとつたらしい古賀さんが、呆れたようにそう言った。言っている意味が分からず、眉間にしわを寄せてしまう。古賀さんが、また呆れたような顔で溜め息をついた。

「永井さんも、お前を混乱させたくなくて言わなかったんだよ。家出たっていつても、まだきれいに片付いたわけじゃないし、言ったら言ったでお前が自分のこと気にするからって。考えなしに、何も言わない人じゃないだろ」

分かっていたはずのことを古賀さんに言われて、私は口を閉じるしかなかった。古賀さんの言う通りだ。永井さんは、何も考えずにそういうことはしない。それで、永井さんの考えていたことも、その通りだと思った。

もし、私がまだ彼氏と別れていない状態で、永井さんから家を出たと伝えられたら、きっと私はまたどうしたらいいか分からなくなってしまう。永井さんの状態に喜んだり、それでも少しいたたまれなくなったりして、それで自分のことを考えて何を馬鹿なことをと呆れてしまうだろう。言われて、改めて思った。昨日までの自分が、そういう状態だったというのに。呆れる。自分に。

「お前、明日バイトは？」

急に何の関係もないことを聞かれた。意味が分からず古賀さんの方を見たまま黙っていると、古賀さんがもう一度「バイトだよ」と聞いてきた。

「え、ない、けど」

意味が分からないものの、とりあえず今週のシフトを思い出して答える。今週はシフト登録が遅れたせいで、水曜日の今日しかバイトがなかった。それがどうしたと思っていると、古賀さんが何かを考える素振りを見せた後に、もう一度私の方を向いた。

「明日、永井さんのところ行ってこいよ」

「は？」

いきなりな提案に変な声が出た。古賀さんの方は、何ともない顔をしている。

「いや、行つてこいよつて。別に明日じゃなくても、明後日会つていうか、その前に永井さんの家知らないし」

「俺、知つてる」

またしても、平然としてとんでもないことを言う古賀さん。目が点になっているであろう私を見て、古賀さんがおかしそうに笑つた。古賀さんに教えてもらった永井さんの家の場所を聞いて、今度は何の反応も口にすることができなかった。

「ふざけて言つたらしいな。『こついうところ住みたいなあ』つて」

古賀さんが、おかしそうに笑いながら聞いてくる。私はそれに、何かを返すこともできない。

以前、不動産屋が何かのフリーペーパーを見て、私があるマンションの写真を見て『いいな』と言つたことがあつた。その場には永井さんもいて、私の言葉に『そうだね』と返してくれていた。もちろん、私の言葉はふざけているもので、本当にそう思つたわけではない。単なる願望であつて、それは将来そうなつたらいいなという程度のものだった。永井さんは、今、そこに住んでいる。古賀さんは、そう言つた。

「部屋探してる時にお前の言葉思い出したらしくて、不動産屋聞きにいったら空いてるからって、そこに決めたらしいぞ」

それを聞いて、泣きそうになる。

私は、自分が永井さんとのことを考えているつもりだと思っていた。だから、永井さんが納得いく形で問題が片付くまで彼氏とのことも言わないつもりでいた。だけど、永井さんは、私以上に、私のことや私と永井さん自身のことを考えている。家を出たことを言わないでいたのも、わざわざそのマンションを選んだことも、全部私のことを考えていてくれていたからだ。古賀さんにだけそのことを言ったのも、私が古賀さんを頼っていると知っているからだ。

永井さんは、私に甘えてると言った。だけど、本当はそうじゃない。私が、永井さんに甘えてるんだ。

「会いにいけよ。永井さんは、十分お前のことを考えてる」
「……うん」

古賀さんの言葉に、素直に頷く。古賀さんの顔が、また、優しいものに変わった。

「さて、ならそろそろ帰りますか」

古賀さんがコンクリートブロックから立ち上がり、ぐっと腕を上

伸ばして伸びをする。ふうつと息をつきながら腕を下ろして、古賀さんは私の原付の隣にある自転車へと歩いてきた。

「ほら、帰るぞ」

未だに原付に座ったままでいる私に声を掛けて、古賀さんは自転車に鍵を差し込んだ。カシャン、と鍵が外れる音を聞いて、私はようやく原付を一旦降り、そこからヘルメットなんかを取り出し始める。私がヘルメットを取ったところで、古賀さんが「じゃあな」と手を上げた。

「古賀さん、」

呼び止めると、自転車にまたがった古賀さんがこっちを振り向いた。私は、まだ原付の隣に立ったままでいる。昨日から言おうと思っていた言葉がなかなか出てこなくて、両手で持ったヘルメットに視線を落としてしまう。

「どうした？」

呼び止めたくせに何の言葉も発しない私を前にしても、古賀さんは焦れることなく待っている。その声にもう一度顔を上げて、古賀さんの方を見た。

「ありがとう」

「何が？」

いきなりなお礼に目を丸くさせて、次には何のことだというような顔をする古賀さん。それに、少し笑ってしまう。

「ほら、今まで、愚痴聞いてくれてたでしょ。古賀さんがいなかったら、そういうこともできなかったし。古賀さんがいなかったら、今みたいにすっきりした気分になることもなかったと思うから。だから、ありがとう」

言ってしまったら言ってしまったで、照れくさくなってしまって、そんな自分に照れ笑いしてしまった。古賀さんの方は、お礼の理由を聞いてからも、きよとした顔をしている。それでも、それも少しの間だけで、古賀さんの顔はまた優しいものへと変わった。

「どういたしまして。ほんと、俺に感謝しろよな」

「だから、してるって」

いつものように、古賀さんらしい発言をして、古賀さんも私も笑みを漏らす。

「じゃあな」

「うん。ばいばい」

言葉とともに手を振って、今度こそ古賀さんは自転車を漕ぎ出した。古賀さんが見えなくなつてから、私もヘルメットをかぶり、原付をスタートさせる。会いたい気持ちが急いで、走るスピードも、過ぎる時間も遅く感じるほどだった。

「先生、明日も来ないんですか？」

研究室のデスクで帰り支度をしていると、院生の木田がソファから自分の荷物を取りながら聞いてきた。他の院生も自分たちの荷物をまとめたり、コートを羽織ったりしている。

「ああ。金曜日は来ないって言ってるだろ」

椅子の背に掛けてあったコートを取ってそれを羽織りながら答えれば、木田が不満の声をあげる。

「もー。どうせ春休みでヒマなんだから来てくださいよ。俺、論文見てほしいんですって」

「あー。私も見てほしい！」

「勝手に暇だって決めるなよ」

木田の言葉に数人の院生が賛成の手を上げ出して、こっちは苦笑いを漏らす。

「何で学期が終わったのに金曜だけ来ないんですか」

「俺だってそれなりに用事があるよ。ほら、早く出る。鍵閉めるから」

木田や他の院生が文句をこぼす。院生たちを追い出すようにして研究室を閉め、彼らと一緒に棟の外へと向かう。

キャンパス内を歩いてそれぞれバス停や駐輪場に向かう途中でも、木田や他の院生はぶつくさと不満を漏らす。そんな木田たちの声は無視して、「じゃあ来週」と自分の車が止まっている駐車場へと向かった。

「俺、明日も来るんで、気が変わったら来て下さいよー！」

車に乗り込む寸前、木田が駐輪場から叫んだ。返事の代わりに手を上げて、さっさと車に乗り込む。

院生たちからああして毎週のように金曜日も来いとせっつかれ、内心まいったなと思う。今学期は彼女の大学で講義をしていたせいもあって、金曜日は研究室に顔を出していなかった。本来なら学期が終了した今は時間に余裕もあるので、行こうと思えば行ける。だが、金曜日は唯一彼女と会っている日でもあって、俺自身それを外したくはなかった。そんな理由を院生に言えるわけもなく、適当に誤魔化して今日まで来てるわけだが。春休みだというのに、それなりに研究室に顔を出す自分の院生たちを考えて、真面目なのは良いんだけどと複雑な気持ちになる。そうして一息ついてから、車のエンジンのかけた。

新しく借りたマンションは、大学から車で三十分ほどのところだ。

それなりに近いといっても、大学の最寄り駅を挟んで反対側にあるので、知り合いに会うなんてことはまずない。近くのお店で夕飯の買い物を買わせて、住宅地の方へと入っていく。マンションの入り口が見えてきて、駐車場となっている一階部分に車を入れた。その時に、エントランスの前で誰かがコンクリートブロックに座っている気がしたけど、誰かを待っているんだろうと決めつけ、特に気にすることもなかった。車を自分の駐車スペースに止め、荷物と一緒にエントランスへと向かう。エントランスまで来て、そこにいたのが誰だかようやく分かった。予想もしてなかった人物に、思わず足が止まる。向こうも歩いてきた俺に気がついたように、ゆっくりとブロックから立ち上がった。

「なんで、ここに？」

近付きながら問えば、彼女——春希は困ったように首を傾げた。

「古賀さんから、教えてもらった」

いつもかっついていられるリュックの肩ひもを両手で握って、こっちを見上げて彼女は言った。

確かに、古賀という彼にはこのことを教えてある。そうしたのは、彼女が何か吹っ切れたとき、彼に真っ先にそれを言うと思ったからで、そうすれば彼の口からこのことが彼女に伝わると思ったからだ。そうは思っていたが、こんなに早く彼女が現れるとは思っていなくて、未だ少し困惑してしまう。

「全部、聞いたから。古賀さんから」

彼女の言葉に「そっか」としか返せず、それが自分の驚き具合を物語っていた。

「入っても、いい？」

彼女はこちらを見上げて、そう尋ねた。その顔からは不安の表情が見てとれる。それを見て、自分の中にあつた困惑が少しずつとれていった。何も考えずに、彼女はここに来たわけじゃない。古賀という彼も、考えなしにこのことを伝えるはずもない。不安に揺れる彼女を安心させるよう笑みを浮かべ、「いいよ」と頷いた。

エントランスにあるオートロックを開錠すると、目の前の自動ドアが開く。彼女の先に立ってマンション内に入り、エレベーターのボタンを押した。エレベーターを待つ間、横に立つ彼女を見れば、まだ不安げな表情をしている。荷物を片手で持つて、空いた手で彼女の手を取った。彼女がぱつとこちらを見上げてくる。それに笑みを返し、ちょうど来たエレベーターに乗り込んだ。

6階でエレベーターを降り、彼女の手を引いて角部屋になっている自分の部屋へと進む。

「適当に座ってていいよ」

鍵を開けて、まず彼女をリビングへと通した。自分はリビングと続いているキッチンへと入っていき、買ってきたものを冷蔵庫へと仕舞う。一通り片付けたところで何か飲むかと尋ねようと対面になっているキッチンから顔を出すと、リュックも下ろさず、コートも脱がずな状態でリビングの入り口の方で立ったままにいる彼女が見えた。

「どうしたの？」

キッチンから出て彼女のそばに立って聞けば、彼女はまたしても困ったように笑う。

「ん。けっこう揃ってるんだなあって思って」

リビングを見渡して彼女は言った。

「ああ。まあ、入居してそれなりに経ってるからね」

鞆を対面キッチンになっているテーブルに置いて、俺も同じようにリビングを見渡して彼女の言葉に答える。リビングのものはさすがに元の家から持ってきてくれるものもなく、ほとんどが新しく買ったものばかりだ。リビングと続き部屋になっている寝室兼書斎は、デスクや棚だけ自分の書斎からそのまま持ってきてある。ベッドは新しいが、部屋に備え付けのウォークインクローゼットがあったのでそ

の分の支出は出さずに済んだ。

そのことを言うか言うまいかと頭で考えていると、とんと身体に小さな衝撃を感じた。見下ろせば、彼女が抱きついてきている。驚きはしたが、彼女がこれほど自分から触れてくることなどあまりなく、離すことはせずに片手で髪に撫でるように触れた。

「わか、れた。彼氏と」

「え？」

顔を胸に埋めたまま、彼女が呟くようにして言った。内容は理解したものの、反射的に聞き返してしまう。彼女は顔を上げ、少しだけ俺から距離をとった。背中に戻されていた手が、ぎゅっと俺のコートを握りしめている。

「別れたの。彼氏と」

「えっと、いつ？」

「一昨日。いろいろ揉めたけど、やっと終わった」

「そう、なんだ」

彼女からその言葉を聞いて、嬉しく思う自分がいた。彼氏がいるままでも構わないと言ったのは自分だが、彼女がその彼氏と離れたと聞いて、彼女に触れられるのが俺だけだと思うとやはり嬉しくなる。

「友達にね、あっちが浮気してるって聞かされて、何か吹っ切れちゃった。もう、いいやって。で、円満とはいえないけど、ちゃんと

別れた」

そう言う彼女の顔はすっきりとしていて、俺の方も笑みが漏れてしまつ。だけど、彼女は視線を下げてその顔を隠す。

「それで、その日のうちに永井さんに言おうと思ったんだけど、いろいろ考えちゃって、言えなかった。私ばかり楽になって、それが永井さんにプラスになると思えなくて」

「そんなことないのに」

彼女が言っているのは、当たり前俺と万里子の問題のことだ。自分が別れたことを伝えて、俺に負担が掛かると思ったんだろう。彼女がそう考えても仕方ないと思うが、俺はそんなこと気にはしない。むしろ、彼女からそれを聞けば喜んでいただろうと思う。

「私、永井さんのこと考えてるつもりだったけど、古賀さんから永井さんのこと聞いて、やっぱり自分のことばかりだなんて思つて永井さんは、ちゃんと考えててくれたのに、私はそれに気付かないですつと変にぐらぐらしてて。ごめ……」

彼女が最後の言葉を言い切る前に、唇を重ねてそれを防いだ。ゆっくりと彼女から離れて、頬を撫でる。

「謝る必要なんてないよ。君からの『ごめん』はもう聞きたくない」

「あるよ」

泣きそうな顔で、彼女は首を横に振った。

「だって、私は永井さんがちゃんと考えてくれて、こうやって家まで出てくれて、嬉しいと思ってる。ばかみたいに悩んでたくせに、永井さんと一緒にいられる時間が増えるって喜んでるんだよ。こんななら、もつと早く言ってくれたらよかったのになって、わがままなこと考えてる」

泣きそうな顔を俺に見せないように下を向いて、彼女は気持ちを伝えてくる。こんな風に言ってくれるのも滅多にないことで、それが俺の気持ちとも一緒に、嬉しいとか触れたいとかそういう感情が湧きあがってくる。

「そんなに考え込む必要ないよ」

顔を伏せる彼女の髪をもう一度撫でてやると、彼女がゆっくりと顔を上げた。

「俺だって同じだから。君が俺のこと考えてたって、ちゃんと分かっている。それなのに、別れたってことが嬉しくて早く言ってくれたらよかったのになって、考えてる。まあ、俺の問題の方はまだ片付きそうにないから、もう少し待ってもらわないとただけだね」

最後に苦笑いを漏らして言うと、彼女は泣きそうな顔で笑った。そうして、俺が何か言う前に彼女が近付いてきて、彼女の唇が自分のそれに重なっていた。軽い音をたててそれは離れ、驚く俺を見て彼女は小さく笑う。その顔に、泣きそうな表情は見られなかった。

「もう変に考えたりしないから。ちゃんと待つし、永井さんのこと信じてるから。だから、言ってよ。しんどかったり、まいったりしてる時は。永井さんだけが好きだとか、考えないでよ」

真っ直ぐ俺を見て言う彼女の言葉は、強く感じた。それと同時に、どこかで、そう思っていたのかもしいないと思った。彼女が不安に感じるようなことは、今までも避けてきた。それは俺も彼女も分かっている。だけど、どこかで、彼女よりも強く自分が彼女を求めていると思っていた。理由なんて分からない。ただ、そう思っていただけだ。自分でも気付かないうちに。

彼女が言ったのは、自分も俺を求めているということだ。知っていたはずなのに、彼女の言葉で、どこかで違うだろうと考えていた自分に気がついた。

「君は、ほんとに」

言葉が続かない。何と云えばいいかすら、分からない。

彼女の方は、何だというように首を傾げている。自分でも何が言いたいかわからず、苦笑いを浮かべて首を横に振った。

「そうやって考えるくらい、君が好きなんだよ」

彼女の言葉に答えるような形で言葉を続けて、嬉しそうに笑った彼女の唇に口付けた。髪を撫でていた手を頭の後ろに回しこちらに引き寄せて、彼女との距離をさらに縮める。もう片方の手で彼女ががついでいるリュックを下ろして、床にそれを落とした。何度かキスを交わしてから、唇を離す。

彼女がまた首を傾げる。それには小さく笑みを返し、彼女の腕を引いて隣の部屋に向かう。

「片付いてるのか片付いてないのか微妙だね」

隣の寝室兼書斎に入ると、彼女がきよろきよると部屋を見て漏らした。彼女の言葉はその通りなので、反論することもなく「まあね」とだけ返す。実際、ベッドは今朝起きた時に適当に整えただけだし、散らかってないとはいえ、デスクの上は資料や参考文献なんかでほとんど物を置くスペースもない状態だ。

それらを見ておかしそうに笑う彼女を引き寄せて、もう一度唇を重ねた。口付けながら、自分のコートを脱いでいく。脱いだコートを床に落としてもなお、彼女とはキスを交わしたままでいた。彼女のコートにも手を掛けて、ボタンを外していく。彼女は抵抗することもなく、俺に身を任せていた。彼女のコートも床に落として、腰に手を回し彼女をぐつと引き寄せる。反対の手は彼女の頬へと滑らせ、そのまま手を頭の後ろにやって撫でるようにして髪に触れた。彼女の手が、ぎゅっと俺の服を掴む。部屋には、キスを交わす音だけが響いていた。

彼女を押し倒すようにして、すぐそばにあったベッドにゆっくりと倒れ込む。

「優しくできる自信ないな」

一度唇を離して言えば、彼女はまたしてもおかしそうに小さく笑う。それに俺も笑って、彼女からの答えを聞く前に、また唇を合わせた。

「春希、」

キスの合間に互いの名前を呼んで、飽きることなく唇を重ねて、幾度となく彼女に触れた。

事が済んで、先に目を覚ましたのは俺だった。

枕に肘をついて、横で身体をこちらに向け心地良さそうに寝息をたてる彼女を見下ろす。片手で眠る彼女の髪に触れ、梳くようにしてゆっくりと撫でる。それでも彼女は小さく声を漏らすだけで、起きることはなかった。

何度も彼女に触れて、自分が彼女に飢えていたのだと自覚させられた。これまでだって毎週会っていたし、キスも交わしていた。それ

で十分だと思っていたのに、結局はそれだけでは足りていなかった。一度触れてしまえば止めてしまうことは難しく、もっとと求めてしまおう。今は彼女の腕の下に隠れている胸元に見える赤い痕が、自分の欲求を表しているようで苦笑が漏れる。

「ん……」

何度か髪を撫でることを繰り返していると、彼女がもう一度小さく声を漏らし、今度はゆっくりとその目を開いた。

「目が覚めた？」

「……ん」

まだすっかりとは覚えてないのか、彼女は何度か瞬きをする。彼女が起きた時に止めていた手をもう一度動かして、ゆっくりと髪に触れる。瞬きをして目が覚めたらしい彼女が、気持ちよさそうに笑みを浮かべる。

「今何時？」

「ん？ ちょっと待って」

枕に頭をつけたまま彼女が尋ねてきて、俺は髪に触れている手を一旦止める。身体を反転させて床に置いたはずの腕時計を探した。時計はベッドのすぐそばの床にあって、脱いだ服の上に乗っていた。

それを手に取り、時間を確かめる。

「7時半前だけど」

彼女は俺の答えを聞いて、顔を枕に押し付けて「んー」とうなったかと思えば、小さく息をついて顔を上げた。

「帰らないと」

「帰るの？」

思わず聞き返した俺に、彼女は当たり前のように「うん」と頷いた。今度は俺が息をついてしまう。

「泊まっていけばいいよ。というか、泊まってほしいんだけど」

彼女はこちらを向いて、困り顔で首を傾げた。その意味が分からず目で問いかけると、彼女はその顔のまま「だって」と言葉を続ける。

「何にも持ってきてないもん。着替えとか」

それを聞いて、今度はさっきよりも大きく息をついた。肘をつくの止めて、ごろりとベッドに仰向けになる。その時に彼女の腰に手

を回し、反動を利用してぐっとこちらに引き寄せた。彼女は声をあげたものの抵抗する暇なんてなく、なすがままに仰向けになった俺の上に彼女が乗っかる。

「何でいつも何も持ってこないかな」

枕の位置を軽く調節して、彼女と目線を合わせるようにして今回のことや以前のことを思い出して指摘する。彼女はそれに何も言えないように、視線をうろつろとさせた。

「だつて、」

ようやく視線が俺のところで止まったかと思えば、彼女は少しむくれた様子で口を開いた。

「そんなの考える余裕なんてなかったし。とにかく会おうって思ってた」

だからしょうがないじゃん、と彼女はむくれたまま続けた。その言葉に、俺はまた溜め息をついてしまう。今度は、さっきとは違う意味でだが。彼女はそんな俺を見て、「なに？」と首を傾げた。分かっている様子の彼女には首を横に振って答え、片手で撫でるように彼女の頬に触れた。そのまま、髪を耳にかけてやり、もう片方の手は彼女の腰に回す。

「じゃあ、今日は必要なものだけ買って、明日着替えとか取りにいこう」

「明日？」

「うん。週末、何か予定ある？」

「ううん」

「それなら、週末はここにいてほしいな」

俺の申し出に彼女はきょとんとして目を丸くしている。

「いいの？」

「だめなわけないよ」

そう答えれると、彼女は嬉しそうにして笑みを浮かべた。

「ちょっと待ってて」

喉に渴きを覚えて、彼女を一旦胸の上から下ろし、自分は床に散らかる衣類から下だけ探し当て、ベッドから抜け出た。途中で散らかるコートなんかを適当にデスクの椅子に引っ掛けて、リビングの方へと向かう。その床に力なく落とされている彼女のリュックを取って、リビングのソファに置いておく。キッチンの冷蔵庫から水のペットボトルを取り出して、口を開けながら寝室へと戻った。

「飲む？」

一口飲んでから彼女にペットボトルを見せると、彼女は頷いて身体を起こす。身体の前を布団で隠す彼女にペットボトルを渡し、自分はその彼女の隣に腰を下ろした。ゆっくりと水に口をつける彼女の背中が、当たり前だが、隠されることなく見えている。水を飲む彼女をちらっと見てから、気付かれないように彼女の背中に唇を押し付けた。唇が背中に触れた瞬間、彼女が身体を跳ねさせて後ろを振り返ろうとする。動かないように前から腕を回して彼女を抱きすくめ、もう一度肩に口付けを落とした。

「ん。冷たいよ」

動けないと分かった彼女が、言葉で不満を漏らす。さっき飲んだ水のせいで、唇が濡れているんだろう。それでも、俺は構わずに彼女の背中に唇を触れさせた。

「どうしたの？」

唇が触れるたびに身体を跳ねさせて、彼女が不思議そうに聞いてきた。どうしたと言われても、ただ触れたいと思ったただだから、特に言うべき言葉が見つからなくて少し考えてしまう。

「離したくないなと思って」

結局、正直な気持ちを口にすれば、彼女は「なにそれ」と笑った。いきなりそんなこと言われたらそう思っても仕方ないかと考えて、俺の方も笑みが漏れる。だけど、その言葉は本当だった。

「本当だよ。いつも会ってたけど、会う日が楽しみで仕方なかった。会ったら会ったで触れなくなっただけ、触れたら触れたで、もっと欲しくなる」

言い終わると同時に、音をたてて彼女の肩にキスを落とした。

「うん。私も、会うのが楽しみだったよ」

肩越しに振り向かれ、笑みを浮かべた彼女にそう言われた。それを見るだけで、彼女に触れたいと思ってしまう。

彼女が持っているペットボトルを取り上げて床に置き、こっちを向いた彼女に唇を重ねた。段々と口付けは深まり、もう一度ベッドに倒れ込みそうになる。抱いていた彼女を後ろに倒そうとして、彼女にぐいっと身体を押されてしまった。

「だめ」

「なんで？」

「もう無理だから」

変にむくれた顔でそう断言されてしまって、それ以上先には進めなくなる。小さく溜め息をついて彼女を見ると、諦めた俺に満足したようで、満足げに笑みを浮かべていた。

「じゃあ、夕飯でも作るよ。その間に必要なもの買っておいで」
「ん」

最後にもう一度だけ軽いキスを交わし、俺は床のペットボトルを拾い上げる。寝室を出る際にクローゼットから適当な服を取り出して、それを着ながらキッチンへと向かった。

出掛けた彼女は三十分ほど戻ってきて、買ってきたものをリュックに仕舞うと、リビング側から対面になっているキッチンを覗きこんできた。

「何か手伝うことある？」

「んー。じゃあ、サラダの野菜切って」

「はい」

返事と同時に彼女はキッチンの方に来て、冷蔵庫の中から野菜を取り出す。取り出した野菜を持ってコンロの前に立つ俺の隣に並び、まな板や包丁なんかを準備しだした。

「カレーだ」

鍋の中でぐつぐつとなっているものとその隣に置いてある市販のルーを見て、彼女が嬉しそうに声をあげる。

「うん。カレー、好きだったっけ？」

「んー。好きっていうか、たまに食べたくなるよね」

軽く首を傾げながら俺の言葉に答え、彼女はテンポよく野菜を切っていく。前に言っていた『それなりに料理はできる』という言葉は嘘ではないみたいだ。

「永井さんって料理できたんだねー」

切った野菜をざるにあけながら、彼女が笑いながら言った。そのざるをシンクの水切り場に寄せ、他の野菜を切っていく。

「学生の際は一人暮らしだったからね。毎日外食ばかりじゃ、お金掛かって仕方なかったし」

「あ、外食してた時もあったんだ」

「そりゃあね。大学に慣れてきたら作るのも面倒になった時あったし」

「やっぱそういうのって誰にでもあるんだねー」

「誰にでもって、そういう時あったの？」

お玉でアクを取り除きながら聞けば、彼女は「もちろん」と頷いた。当たり前だというその頷き方に、思わず笑ってしまう。

「後期の授業始まったくらいは、外食多かったよ。バイト終わりにご飯作るのも面倒だったから」

「じゃあ、初めて会ったくらいの時も外食だったの？」

「そうかな。あ、でも、そのくらいから外食やめて、ご飯作ってからバイト行くようにしてた」

「へえ」

彼女の言葉に頷きながらお玉を横に置き、火を止めてからルーを入れる。彼女の方は切った野菜を先ほどと同じざるにあけ、まな板と包丁をシンクで洗いだしていた。

ルーの溶けたカレーを煮込んでいると、タイミング良く後ろの棚にある炊飯器から炊飯終了を知らせる音が鳴った。彼女に皿のある場所を教え、サラダを盛り付けてもらう。その間に、俺はカレーを入れる容器を取り出した。

「できたー」

カレーとサラダをリビングのテーブルに運び、二人して並んでソファに座る。簡単な夕飯だったが、彼女はテーブルに並んだ料理を見て嬉しそうに頬を緩めた。

「何か飲む？　っていつても、君が飲めそうなのは水とかお茶くらいしかないけど」

「お茶がいいな」

彼女の言葉に頷いてからキッチンに行き、冷蔵庫からお茶のペットボトルと自分の分の缶ビールを取り出す。それにグラスを持ってリビングに戻り、お茶とグラスを彼女の近くに置いた。

「いただきまーす」

手を合わせた彼女が先にカレーを、俺は先にビールを一口飲んでから、カレーに手をつけた。横で笑みを浮かべながら「おいしい」と言う彼女の言葉通り、なかなかうまいことできていた。

「そういえば、あそこ、何にも置かないの？」

スプーンを持ちながら、彼女が空いた手でキッチンの方を指差して言った。その言葉に、俺もそちらに目を向ける。

「ああ。どうしよかなとは思ってるんだけどね」

彼女が指差した場所は、対面キッチンの目の前の変に空間の空いたスペースのことだった。対面キッチンになっているので、こちら側にはささやかながらテーブルがあるのだけど、あまり広いものではない。その代わりに、本来はその空いたスペースにテーブルを置いたりしてダイニングとして使いたい。一人でここに住む俺には特にそのテーブルが必要とは思えなくて、何も置かずの状態になっている。彼女と直角になる位置には一人掛け用のソファもあるが、それがあってもテーブルを置くスペースは十分にあって、物を置いていない今の状態が何だか変に感じるくらいだ。

「あんまり大きいのかいらないしなとも思っ、何にも考えてないんだ」

「でも、ここで食べるの変な感じしないの？」

「前は思わなかったけど、今はそう感じるな」

ビールに口をつけながら言えば、彼女は「今さら」と言って笑った。ここに住み始めた時は、このリビングでソファに座って夕飯を食べることに何とも思わなかったが、今彼女と二人並んで食べていると、やっぱり変な感じはしてくる。というか、ソファに座っているからか、テーブルとの高さが合わない。一応床にラグは敷いてあるが、そこに座って食べるというのも何だか変だ。

「今度、探しにいくのか」

「テーブル？」

「うん。大きいのはいらなから、小さめのやつ」

「永井さんの気に入るやつ、あるといいね」

彼女はこっちを見て笑いかけ、またカレーを食べることを再開した。

夕飯が終わると、渋る彼女に先に風呂に行かせ、こっちは食器を洗った。あらかた片付いたところで、寝室のクローゼットから彼女が着れそうな服を探し、彼女に一声掛けて脱衣所に置いておく。そこからリビングに戻ると、対面キッチンのテーブルに置きっぱなしになっていた鞆から携帯の振動音が聞こえてきていた。鞆から携帯を探し当て、画面を見てから通話ボタンを押す。

「何だ、村瀬」

『何だじゃねーよ。何回も掛けたんだぞ』

電話に出るなり、村瀬にぎやあぎやあと騒がれた。眉間にしわを寄せ、通話口を少し耳から離す。

「悪い。鞆の中に入れっぱなしだったから、気付かなかった」

『ほんっと、お前ってそういうの無頓着だよな』

不満げな村瀬の言葉は適当に流し、先を促しながらソファへと移動する。

『お前さ、今日ヒマ?』

「暇じゃない」

村瀬の誘いともいえる質問に即答で否定してやる。途端に、村瀬がまたむっとなった。

『何だよ。忙しいのか？』

「忙しくはないけど、暇でもない」

『何だよ、それ』

またしても村瀬がぎゃあぎゃあと騒ぎだす。

「わめくな。彼女が来てるんだ。暇なわけないだろ」

『え？ 春希ちゃん、来てんの？』

「ああ」

村瀬の声音が一転した。声だけで、電話の向こうできょんとしている村瀬が浮かんだ。

『あれ？ でも、お前、春希ちゃんに教えてないんじゃない？』

「まあ、いろいろあってね」

『何だよ。教えるよ』

村瀬は俺が家を出たことは知っていて、さらに俺がそのことを彼女

に教えていないことも知っていた。たぶん村瀬の頭にはたくさんの疑問符があるんだろうが、今それに答えてやる気はない。

「また今度な」

『まーたそうやって逃げる。じゃあ、明日な！ 明日！』

「勝手に決めるなよ。彼女に聞いてもないのに」

『じゃあ、春希ちゃんにも聞け！』

勝手に話を進める村瀬に溜め息をついてしまう。彼女が俺の隣にいて思っている村瀬が通話口から『早く！』と急かしてくる。彼女がいる浴室の方向に目をやって、もう一度溜め息をついた。

「後で聞いておくよ。覚えてたらな」

『ちゃんと聞けよ！』

「はいはい」

息まく村瀬の言葉には適当に返事をして、電話を切った。小さく息をついて携帯をテーブルに置き、ソファに深く座った。

浴室の方からドアの開く音がして、少ししてから彼女がリビングのドアを開けて中に入ってきた。

「お風呂、ありがと」

「うん。やっぱり大きかったね」

俺の服を着てこちらに歩いてくる彼女を見て言えば、彼女も自分の格好を見直して、「そりゃあね」と苦笑いを浮かべた。彼女の着ているスウェットジャージの上はそうでもないが、下のスウェットズボンはさすがに大きかったようだ。明らかにぶかぶかだし、裾の部分は折り曲げてある。見れば、腰ひもも目一杯縛ってあるみたいだった。

「何か飲みたかったら、適当に冷蔵庫から取っていいから」
「うん。ありがと」

すぐそばまで来た彼女と入れ替わりにソファから立ち上がり、頭を一撫でしてから自分も浴室に向かう。村瀬の電話のことは、都合良く忘れることにした。
風呂からあがった後は、リビングでいつかのように交代で髪を乾かし合い、一休みしてからベッドに入った。

「なんか、久々に永井さんとゆっくりしたなあ」

ベッドで横になって、仰向けのまま顔だけをこちらに向けて、彼女が頬を緩めながら言った。俺は完全に横にはならず、肘を枕につけて彼女を見下ろした。撫でるように髪に触れると、彼女は気持ちよさそうに目を細める。

「毎週会ってたのに、変だね」

少しだけ自嘲の笑みを浮かべて続けた彼女に、「そんなことないよ」と返す。問い掛けの視線を投げかけられて、小さく笑みを浮かべた。

「俺も、久しぶりにゆつくりできたなと思ったし。会えるのは嬉しかったし、それで十分だと思ってたけど、やっぱり足りなかったなと思って思った。会うだけじゃ、駄目だったんだな」

言い終わると、彼女が嬉しそうにして笑った。

彼女の言葉と、同じ気持ちを持ったのは本当だ。会うだけでは、駄目だったのだ。一日のうち数時間しか一緒にいられず、いつも夕刻には別れていた。付き合っているくせに、その辺の高校生よりも行儀の良い付き合い方だ。それでも、どちらからもそれを破ることはなかった。それは、両方ともお互いのことに、少なからず引っ掛かりを持っていたから。彼女は自分の立場と俺の立場を。俺は、彼女のことを。

彼女は、俺が自分よりも二人のことを考えていると言った。それは、合っているようで、違ってもいた。正確には、俺は彼女のことしか考えていない。彼女のことを考えるから、その他のことも自然と考えられていくだけだ。

「盲目的だな」

「え？」

以前に話をしたことのある院生の言葉を思い出して、無意識にそれが口について出る。言葉と同時に、先ほどの彼女のように自嘲の笑

みが漏れた。彼女がそれに反応して「なに？」と問い掛けてきて、その笑みのまま首を横に振る。

「やっぱり、こうやってしたかったんだなって思っ。会っだけじゃ、もう足りないよ」

嬉しそうに笑みを浮かべたまま、彼女が身体をこちらに寄せた。髪を撫でていた手を彼女の向こう側に置いて、そのまま覆いかぶさるようにして唇を重ねた。

翌朝、先に目が覚めたのはやっぱり俺だった。彼女はまだ気持ち良さそうに隣で寝息をたてている。彼女を起こさないようにベッドから抜け出てリビングへと向かい、朝ごはんを用意する。朝が弱いと言っていた彼女は、それからしばらくして「おはよう」と目をこすりながらリビングにやってきた。

用意した朝ごはんを食べ終え、いつ頃彼女の家に向かうかと相談していた時、リビングのテーブルに置いてあった俺の携帯が振動した。俺が携帯を取って画面を確認している間に、彼女は立ち上がって着替えて寝室へと戻っていった。振動音は電話着信で、その相手は院生の木田だった。

「もしもし？」

『せんせい！ どうしよう！』

電話に出るなり、通話口から木田の泣きそうな声が聞こえてきて、

何事かと思う。よく聞けば、木田の後ろからも他の院生の焦った声がしていた。

「どうした？」

『研究室のパソコンがいきなり止まって、データが出てこない！
つていうか、画面が映んない！』

「は？」

木田はどうしよう、と泣きそうな声で繰り返す。

研究室には院生が使えるパソコンが一台あり、研究室の資料を使いながら作った資料やレポートをそこに保存している。俺は自分のパソコンがあるからデータの心配はいらないが、普段からバックアップをとっていない木田のような院生には死活問題だ。

「学生部の方には連絡したのか？」

『したけど、何の対応もしてくれない！』

管理部門というところは、いつこの研究室の一台のパソコン程度では、どうもなかなか腰を上げてくれないらしい。

木田の答えに小さく溜め息をついて、ソファから立ち上がった。ちようど着替えた彼女が寝室から戻ってきて、何だというように首を傾げた。俺も寝室の方に移動しながら、木田と会話を続ける。

「今から行くから、もうあんまり触るなよ」

『早く来てくださいよ！』

携帯を切って、未だ首を傾げている彼女の前に立った。

「ごめん。研究室の方で、何かパソコンが止まったらしいんだ」

「え、大丈夫なの？」

「直らなかつたら、一部の院生は一から作り直しだな」

「うわ……」

顔を引きつらせる彼女に苦笑いを返し、俺は寝室に入っていく。クローゼットから服を取り出して着替え、デスクの引き出しから鍵を一つ取って、鞆と一緒に寝室を出た。彼女の方も、出掛ける準備が済んでいる。

「これ」

差し出した鍵を見て、彼女が首を傾げる。

「部屋の合鍵。俺が遅かったら、入れないでしょ」

「あ、そういうことか」

今気がついたという顔で納得して鍵を受け取る彼女に呆れてしまう。

「まさか帰るつもりだったわけじゃないよね？」

「え。いや、何か大変っぽいから、帰ってた方がいいのかなと思って」

「学生部をせっついてくるだけだから、そんなには遅くならないよ」

へらつと笑う彼女に呆れた口調で返し、彼女と一緒に部屋を出る。

彼女を駅まで送り、俺は大学へと向かった。

研究室に着くと、木田を含めた何人かが絶望的に落ち込んでいた。ほとんどの院生はバックアップをとってあつたらしく、それほど損を被ることはないらしい。まったくバックアップを取っていなかったのは、木田を含めた二、三人くらいだった。

パソコンの復旧は、結局午後を過ぎるまで掛かった。トラブルの原因は、パソコンを管理している元の回線にバグが侵入したということのようなだった。どうやら学生部の方で手伝いをしていた学生が無断でそのパソコンに私用のソフトをインストールしたらしく、それがバグの原因ともなったらしい。聞けば、他の研究室でも似たようなトラブルが発生したという。

それが解決して帰れると思ったのも束の間、俺が研究室に来たのいいことに、院生たちが列をなして論文を見てくれと言ってきた。適当なところで帰ろうにも、院生が研究室に集合しているおかげで、その機会を窺うところではない。院生と一緒にやって研究室を出た頃には、時間は3時近くになっていた。

「先生、さよーならー」

「今度からはちゃんとバックアップ取っとけよ」

キャンパスで別れる際に、手を振ってくる木田に忠告し、院生に別れを告げた。

駐車場に止めた車のところまで来ると、鞆から携帯の鳴る音がした。彼女からかなと思いいながらそれを取り出すも、掛けてきたのは彼女

ではなく村瀬だった。昨日のことかと考え、溜め息をつきながら通話ボタンを押す。

『今日、7時過ぎにお前のとこの駅前な』

あいさつも抜きに開口一番でそう告げられ、またしても溜め息が出た。

「勝手に決めるなよ」

『勝手に決めなかったら、どうせお前来ないだろ。話したいことあるんだから、来い！ じゃなかったら、お前んちに押し掛けるぞ』

村瀬の本気の言葉に逆らえるわけもなく、了解の返事をして電話を切った。

マンションに着いて、さすがに彼女も帰ってきているだろうと思っていたが、彼女は部屋にはいなかった。リビングのソファの隣に小さなポストンバックがあることから、一度は家に来ていることが分かるも、当の本人がここにはいない。携帯で電話を掛けながら、冷蔵庫から水を取り出す。その時に、小さいケーキ箱が入っているのが見えた。これも彼女が買ってきたんだろうか。

『もしもし？』

数回のコール音のあと、彼女が電話に出た。水を一口飲んで喉を潤してから口を開く。

「もしもし？ 今どこにいるの？」

『あ、ごめん。駅前にいる。今から帰るね』

彼女の後ろはがやがやとしていて、館内放送のようなものも聞こえる。

「ああ、いいよ。俺が行くから。今日、村瀬から連絡があつて、どうせ駅前に行かなきゃならないんだ」

『そうなの？』

「うん。夕飯一緒になるけど、いい？」

『うん、いいよ』

彼女から快諾の返事を聞いて、電話を切る。戻ってきた格好のまま部屋を出て、今度は車ではなく地下鉄で彼女のいる駅前まで向かうことにした。どうせ村瀬の指定する店は居酒屋だ。車で来たと言え、またぎやあぎやあわめかれる。それを避けるためにも、車は置いていくことにした。

彼女と駅前で待ち合わせ、駅ビルでぶらぶらとして時間をつぶす。7時近くになって村瀬から連絡が入り、指定された店に向かった。思った通り、村瀬の指定した店は居酒屋で、その店は初めて三人で食事をしたところでもあった。分かっていたといっても、やっぱり呆れてしまう。それに笑う彼女の手を引っ張って、店の中に入った。

「春希ちゃん、久しぶりー」

「どうも」

にこにこ顔で彼女に手を振る村瀬に、彼女の方も笑顔で返す。村瀬の向かいに腰を下ろしたところで、店員が注文を取りにきた。村瀬の望み通り、俺はビールを彼女はソフトドリンクを頼んで、料理は村瀬が適当に注文していった。

早々と飲み物だけが運ばれてきて、とりあえず三人ともそれを口にする。

「で、話ってなんだ？」

ジョッキを置いて、ジョッキの半分以上を一気に飲んだ村瀬に尋ねてみる。店員がすだれを開けていくつかの料理を運んできたのを、彼女が受け取ってテーブルの中央に持ってくる。村瀬はにこにこ顔のまま店員がすだれを閉じるのを待って、店員がいなくなると更に笑みを深くした。

「新しく舞台が決まった」

「へえ、よかったな」

舞台をやることが村瀬の仕事なので、特に驚きもせずに言葉を返す。すでにテレビドラマでも主役を務めるほどになっている村瀬には、

それなりに仕事も入ってくるだろう。彼女の方は、俺とは反対に笑みを浮かべて「すごいですね」と返している。村瀬も笑顔で「ありがとう」と返し、俺の方を向くとそれを意地の悪い笑みに変えてきた。

「今度はシェイクスピア劇だぞ」

「あのシェイクスピアシリーズでか？」

「おう」

どうだ、と言わんばかりに、村瀬が胸を張った。これには俺も関心が寄せられて、驚いてしまう。彼女の方も、きょとんとして今の言葉に驚いているようだった。

村瀬が今度出演するというシェイクスピアシリーズの舞台は、有名な演出家が総合芸術監督となり、シェイクスピアの舞台をやっているものだった。名もない役者がいきなり抜擢されたり、テレビで有名な役者でも端役しかやらせてもらえなかったりと、いろいろと話題に事欠かないシリーズのものでもあった。基本的には、その演出家は演技力のある役者しか使わないと聞いている。それに、村瀬が出演するというのだ。

「し、か、も、主役ー！」

ピースサインをこちらに向けて、満面の笑顔で報告してくる村瀬。

「すごいじゃないですか」

「ありがとー」

「観にいきますね」

「まじ？　じゃあ、チケット送るよ」

彼女も村瀬の嬉しさにあてられたようで、にこにこしながら言葉を交わしている。

「よかったな」

「だろー？　もう、まじで嬉しくてさ」

村瀬は残っていたビールも一気に飲みほし、残りの料理を持つてきた店員に追加のビールを頼む。その顔は、さつきから笑みが浮かびっぱなしだ。

「よかったですね」

「うん。ほんと、よかったよ。あ、そういえば、春希ちゃん、なんでこいつの家のこと知ってたの？」

嬉々とした調子のまま、村瀬が無神経にもそう尋ねる。彼女も少し困った顔をしていて、止めようと口を開きかけたところで、彼女の方が早く口を開いた。

「別れたんです。彼氏と。それで、一応共通の友達、に永井さんのこと教えてもらって」

笑いながら、『共通の友達』の部分には疑問符をつけて、彼女が簡単に経緯を話した。話を聞いた村瀬がはっとなるも、すつきりとした表情の彼女に気付いたのか、すぐに先ほどのような笑顔に戻る。

「そうなんだ。じゃあ、今日はお祝いだねー」

「意味分かんないぞ、お前」

「いいだろ、別に。お前がしないなら、俺と春希ちゃんだけです」

女のように「ねー」と首を傾げながら彼女に同意を求める村瀬を見て、呆れの溜め息が漏れる。彼女の方はおかしく笑いながら、村瀬の言葉に同意していた。

それから店を出たのは11時過ぎで、家に来たいと我儘を言いだす村瀬をホテルに行かせ、俺と彼女の二人は地下鉄で家に戻った。地下鉄でも、外に出てからも、彼女は笑いながら俺と話をしていたが、その途中ずつと少しの距離を開けながら歩いていた。彼女がそうする理由も分かるので何も言わないが、それはそれで満足のいくものでもなかった。

家に帰ってくると、昨日と同じ順番で風呂に入り、昨日のようにリビングで髪を乾かす。彼女が俺の髪を乾かし終わって、それを片付けようと立ち上がる彼女の腕を引っ張り、ソファに座る自分の腕の中に閉じ込めた。

「どうしたの？」

彼女は驚いた声をあげたものの、そこから抜け出そうとはせず、ドライヤーを前にあるテーブルに置いて問い掛けてきた。

「んー？ 少し、抱きしめたくなくて」
「なにそれ」

俺の答えに彼女はおかしそうに笑って、こちらに身体を寄せてきた。乾かしたばかりの髪から、ふわっと良い香りがする。彼女を後ろから抱きしめ、首筋に顔を埋めた。

「君がそうするのも分かるけど、あんまり離れないでね」
「なにそれ」

おかしそうに笑ったまま、彼女は首をひねってこちらを向いた。顔を上げ、彼女に微笑みかけてからソファの背もたれに寄りかかり、彼女もこちらに抱き寄せた。

「さっきも、少しだけ距離とって歩いてたでしょ」
「それは、まあ、仕方くない？ こっちは、永井さんが住んでる場所なんだから」
「そうなんだけどね。まあ、前とは家の方向がまったく違うから、そこまで心配する必要もないけど」
「そう言われても」

彼女は笑っていた顔を引っ込めて、困ったような顔つきで首を傾ける。そんな彼女の首筋にまた顔を埋めた。

「うん。分かってるよ。単なる俺の我儘」

「永井さんのわがままなんて、初めて聞いた」

またしても笑う彼女に、「そうかな」と首をひねる。彼女が笑ったまま「そうだよ」と返してくる。
彼女の顔からは、こういう話に戸惑っている様子も見られない。笑ってこういう話ができるようになったのは、ある意味前進しているのだろうと思う。

「だめだ。眠い」

「もう寝よっか」

彼女の首筋に顔を埋めていたが、段々と瞼が下がってきた。喜ぶ村瀬のハイペースに付き合っていたからかもしれない。

抱いていた腕を解いて彼女を立ち上げらせ、自分もソファから立ち上がった。ドライヤーを片付けに脱衣所へ行った彼女を待ってリビングの電気を消し、昨日のようにベッドに二人で横になった。

「おやすみ」

そう言った彼女を引き寄せて、向かい合う形になって、俺も「お休み」と返す。彼女が嬉しそうにこちらに寄り添ってきたことに、俺も笑みを浮かべて目を閉じた。

「ごちそうさまでした。美味しかったよ。ありがとう」
「どういたしまして。よかったー。美味しくできてて」

両手をパンツと合わせて言った俺に、美香ちゃんがにっこりとした笑顔で返してくれる。美香ちゃんの方も最後に残ったご飯を口に入れ、それを飲みこむと、控えめに手を合わせた。すぐに食器を持って立ち上がった美香ちゃんに続くように、俺も腰を上げる。

「あ、いいよ。私が運ぶから」
「いいよ。ご飯作ってもらったんだから、これくらいいしないと」

自分の分の食器を持って美香ちゃんをキッチンの方に促せば、美香ちゃんは照れたように笑って俺に背を向けた。先を歩く美香ちゃんの後に続き、ワンルールの部屋を横切って、食器をキッチンへと運ぶ。シンクの前に立つ美香ちゃんに食器を渡し、これから洗いものをすると言う美香ちゃんにもう一度お礼を言って、ドアの向こうのワンルールの部屋に戻った。

今日は、美香ちゃんとの久しぶりのデートだった。三月になって春休みも終盤に差し掛かり、受験生の方も一段落ついて落ち着いてきたところだった。追い込みが掛かっていた二月はデートよりもバイトに時間を割く方が多く、休みだというのにそれほどデートもしていなかった。悪いとは思いつつ、実際にゆっくりしたデートは今日が

久しぶりで。その久しぶりのデートで、美香ちゃんからうちに来ないかと誘われていた。実は、メールでその誘いが来た時、少しだけ迷ったのも事実だ。行きたいか行きたくないかで言えば、答えは『行きたくない』に近かった。俺と美香ちゃんの気持ちには未だに差がある気がして、その気持ちのままこれ以上美香ちゃんと近付いていいのか、なんて考えたりして。だけど、行かな

いと答えれば美香ちゃんが傷付くということくらいは分かる。すごくいい加減だけど、それが今日美香ちゃんの家に来た理由だった。キッチンでは美香ちゃんが洗いものを続けている。リビングの一番奥、カラーボックスの前に座って、開けっぱなしのドアから見えるキッチンに立つ美香ちゃんを見ながら、ほんとに女の子だなあと呑気なことを考えた。ワンルームのリビングは淡いピンクと白いもので統一されていて、すごく美香ちゃんらしい。完全に黒いものといえば、俺の左手にあるテレビくらいのもんだ。俺の後ろにあるカラーボックスの上には可愛い小物なんか置いてあって、そういう小物は他のちょっとしたスペースにも飾られていた。そういうのを見てると、あいつのはどんなのだろうと、まだ入ったこともない宮瀬の部屋のことを考えてしまう。

そんな自分に気がついて、嫌だなと自己嫌悪に陥る。宮瀬と永井さんがうまくいっていることにも、美香ちゃんと一緒にいるのにそんなことを考える俺にも。何週間か前、宮瀬が彼氏と別れて、永井さんのことを教えて、それ以来二人はうまくいっているようだった。宮瀬からあの人に関する嫌なことなんか一つも聞きはしないし、それどころか、彼氏といた時よりもずっと楽しそうだ。これでよかったと思う。あいつが楽しそうにしているなら、それで。そうやって思うはずなのに、俺はこうやって美香ちゃんと一緒にいる時に、宮瀬のことを考えてしまう。嫌な人間だ。

「博己くん？」

「ん？」

声に顔を上げると、すぐそばに美香ちゃんが立っていた。いつの間にか洗いのものが終わったらしく、二つのマグカップをローテーブルに置き、俺とは直角になる右手側に腰を下ろそうとしている。

「どうかした？」

ベッドを背もたれ代わりに座った美香ちゃんが、自分の分のマグカップを両手で持って聞いてきた。

「いや、女の子っぽい部屋だなあと想着。コーヒー、ありがとう」
「そうかなあ」

俺もカップを持って半分本当のことを言えば、美香ちゃんは「ん」と悩むように小首を傾げながら自分の部屋を見回した。ぐるっと部屋を見ている美香ちゃんを横目に笑いながら、入れてくれたコーヒーを飲む。部屋をぐるりと一周見てから、美香ちゃんは「そう？」とやっぱり首を傾げる。

「うん。妹の部屋なんかもっと散らかってるし、ごちゃごちゃしてる」

「それは実家暮らしだからだよ。私だって、実家の部屋はこんなに片付いてないよ？」

「そうかなあ」

美香ちゃんの言葉に、今度は俺が首を傾げた。美香ちゃんはそんな俺を見て、コーヒーを飲みながらクスクスと小さく笑う。

「それでも女の子の部屋って、基本的に片付いてるよね。うちの妹が大雑把なだけだな」

「そんなひどいこと言わなくても」

「いや、ほんとひどいだって。物が散乱してるもん」

美香ちゃんは口では俺の妹を弁護しているものの、その口元はおかしそうに笑っている。雑多に物が置かれている妹の部屋の状況を説明すれば、美香ちゃんは堪え切れないというように笑いだした。

「もー、そんなこと言っで。でも、そういうこと言っでことは、他にも女の子の部屋入ったことあるってことなんだ？」

笑いながら、口元をマグカップで隠して、美香ちゃんが意地悪く尋ねてきた。その問いに一瞬きょとんとして、それから、どうしようかと考える。美香ちゃんの質問に正直に答えるなら、答えはイエスだ。高校の時に付き合っていた彼女とは、外で遊ぶ以外では彼女の家で会っていた。けど、それを言ってもいいものかどうかと少しの間迷って、美香ちゃんの方を見る。美香ちゃんは特にこのことで心配している様子もないので、単なる好奇心だろうと判断して、質問に素直に「うん」と頷いた。

「まあ、それなりに、ね」

それでもその言葉には冗談のような雰囲気も入れておいて、ただの笑い話で終わらせようとする。すると、美香ちゃんは『やつぱり』という顔になって、興味津々という顔つきを隠そうともせずにつと俺の方に顔を寄せてきた。

「ねえねえ、博己くんって今までで何人くらいの人と付き合ったことあるの？」

「なに、いきなり」

美香ちゃんの質問は本当にいきなりな質問で、顔を寄せてきた美香ちゃんに少し笑って返す。顔を寄せていた美香ちゃんはすぐに元の場所に戻って、少しだけ唇を突き出していた。

「だって、気になるんだもん。博己くんは気にならないの？」

「どうかなあ」

首をひねって答えると、美香ちゃんはさらにむくれた表情になる。本気で拗ねてるわけじゃないのは分かるけど、なんでそんなこと気になるんだろと思う。そう思っすぐ、そういえば美香ちゃんはバイト仲間の藤田さんと同じ女子高出身だったなと思い出した。藤田さんにも、今はもう別れているが、彼氏がいて、その人が初めて

の彼氏だと言っていた。たぶん、美香ちゃんも初めてとはいかないが、そういう付き合いがほとんどなかったんだろうと、藤田さんのことを思い出してそう考えた。だから、単なる好奇心だ。塾の中学生がそういうことできьяあきьяあとしているのと、同じ原理なのだろうと結論がいった。

「『くらい』って曖昧にするほど多くないよ」

「じゃあ、何人？」

俺が答えたことで美香ちゃんの顔からはむくれた様子がなくなつて、代わりに純粹にその先を求めるような顔になった。その顔をちらりと見てから、目線を上にやつて頭の中で人数を数える。

「二人、かな。高校の時に」

「高校で二人も？」

「『も』なの？ 二人って」

大げさなくらいに驚く美香ちゃんに苦笑が漏れる。高校三年間で付き合った人数が二人というのは、世間一般はどうか知らないが、普通だと思っていた。周りだってそんなもんだったし、付き合いがなかった奴もいた。みんなそれぞれだろうと思う。

「えー。博己くんって、そんなに付き合ってる人いたんだ」

「普通だと思うよ。友達で今までで一回も付き合ったことない奴もいるし、高校の時だけで俺の人数超えてる奴もいるし」

「えー」

またしても驚いて目を丸くする美香ちゃん。それに笑って、コーヒーを一口だけ飲んだ。

友達である松木のような馬鹿正直な奴は今まで一度も彼女がいたこととはないと言っていたし、反対に犬居の奴は飄々としていて、ちゃっかりいつの間にか付き合ってる人がいて、いつの間にか別れてるなんてことがある。松木のような奴はまだしも、犬居のことなんて言おうものなら、美香ちゃんは啞然として言葉を失ってしまうかもしれない。

「美香ちゃんは？」

「え？」

「付き合ってた人数」

逆に俺が美香ちゃんに質問すると、美香ちゃんは言いにくそうに目を逸らした。

「俺が言っただから、美香ちゃんも言ってよ」

自分だけずるいともいうように笑って言えば、美香ちゃんはまたしもむくれたような顔でこっちに目を戻した。

「……一人だけ、一回生の時に付き合ってた」

「別に恥ずかしがることじゃないじゃん」

ぼそつと、唇を突き出した顔で言う美香ちゃんに笑ってしまふ。それでも美香ちゃんはその顔を崩さない。

「だって、友達に言ったら少ないって言われたんだもん」

「それは友達が言ったことですよ。気にしなくても」
「気にするよー」

落ち込んだ様を見せる美香ちゃんにもう一度笑った。美香ちゃんは笑う俺を見て、今度はむっとした顔を見せる。

「いいよ。どうせ一人だもん」

「俺は別に気にしてないって」

拗ねた美香ちゃんがカップを手取る横で、俺はおかしそうに笑っていた。

それからしばらくして、もうそろそろ終電かなという時間に、俺は自分の腕時計に目をやった。案の定、時計の針は終電近くを指していて、そろそろここを出ないとやばい時間になっていた。美香ちゃんも時計を見ていた俺に気付いたようで、ちらっと俺の後ろにあるカラーボックスの上の時計を見やる。

「……帰る？」

「そうだな。終電だし」

言いながら立ち上がろうとすると、くいつと弱い力で服の袖を引っ張られた。何だと思って横の美香ちゃんを見ると、視線をテーブルに下げた美香ちゃんが袖を引っ張っている。

「どうしたの？」

立つのを止めて、もう一度隣に座りなおす。尋ねても美香ちゃんは視線を下げたままで、何も言わない。どうしようかと思っていると、ぽつりと美香ちゃんが呟いた。

「……帰って、ほしくないな」
「え？」

思わず聞き返した俺に、今度はちゃんと目を合わされた。じつとこちらを見て、頑張ってる感じの美香ちゃん。

「博己くん、私のこと、好き？」
「え？ うん」

さっきの質問とはまったく繋がっていない美香ちゃんの言葉に困惑しつつも頷く。それなのに、美香ちゃんの顔はどこか心配げだ。どうしたのかと思って、言葉には出さずに首を傾げて問う。

「博己くん、すごく良い人だけど、なんか、良い人すぎて、やだ」
「え？」

「だって、私は一人暮らしなのに、家に行きたいとか言わないし。その、男の人って普通そうなのかなって思ってた、友達もそれって変って言うから。博己くん、もしかして、私のことそんなに好きじゃないのかなって思ったりもして……」

目を合わせて、少しだけ泣きそうな顔で言われて、『ああ』と美香ちゃんの言葉に納得した。

確かに、俺は美香ちゃんの誘いがなかったら、美香ちゃんの家に来

るなんてこと、絶対になかっただろう。そして、自分から行きたい
と言ひ出すこともなかっただろうと思う。それは、美香ちゃんのこ
とが嫌いだからとかではなくて、そこまで気持ちがついていって
なかったからだ。『さみしい』と身体全体で表現する美香ちゃんを
見て、自分の中の中を見ているようだった。心のずつと、ずつと奥
に仕舞つてある、『さみしい』という感情。見せてはいけな
い、出してはいけな
いと、頑なに仕舞いこんであるその感情を、美香
ちゃんはいとも簡単に
出している。自分のものは無視できるけど、美
香ちゃんのそれを無視することはできなかった。

「泊まって、いい？」

泣きそうになっている美香ちゃんに問えば、美香ちゃんはその顔のまま「うん」と頷いた。

ベッドに二人で並んで座り、ゆっくりと唇を重ねる。

「うれしい」

二人が重なった時に、泣きながらそう言った美香ちゃんに、心の奥の奥が痛んだ。

*
*
*

「最近、うまくいつてるのか？ 永井さんと」

月曜日のバイト終わり、宮瀬と二人、自分の定位置に座って、尋ねてみた。自分の原付に座っていた宮瀬は、『いきなり何だ』という顔をしている。

「なに、いきなり」

表情通りの言葉を口にして、おかしそうに笑みを作る宮瀬。それでも宮瀬は右手に持っていた携帯をコートのポケットにするっと入れて、「まあねえ」と嬉しそうに笑った。

「最近は、前より会えてるから楽しいかな」

にこにことした顔を崩さない宮瀬を見て、どこか心の奥の奥が鈍く痛む気がした。この間、美香ちゃんが見せた感情が俺の中にもあって、閉ざしている扉をがんと叩いているような、そんな痛み。そんなもの、今まで感じることもなかったのに。

「よかったな」

持参したペットボトルのお茶を飲んで言えば、宮瀬はまたしても嬉しそうな顔で頷く。

「古賀さんがいたからだよ」

「別に俺は何もしてないけど」

「してくれてるよー。古賀さんがいてくれるから、いつだって変わらないって言うてくれるから、ちゃんと自分の考え通そうって思えるもん」

「なんだ、それ」

ペットボトルを持ったまま、宮瀬の言葉に笑ってしまう。宮瀬も笑っていた。

二人して笑っている間は、さっき感じたような痛みが襲ってくるようなことはなかった。その代わりに、痛みとは別の、それよりも大きいものが扉をぶち開けようとしている感覚がする。こんなもの、俺は知らない。

宮瀬の方も、そんなことに気付くわけがなく、呑気にぶらぶらと足を揺らして車体にこつこつと当てている。

「今月末楽しみだねー」

「俺は恐怖しか感じてない」

「何それ。せっかくみんなで行くんだから、楽しんだらいいじゃん」
「無理」

即答した俺に、宮瀬はまた声をあげて笑った。

宮瀬が楽しみと言っていることは、今月末に計画しているバイト仲間との旅行だ。仲の良い数人で車を借りて、隣県にある遊園地に行く予定だった。絶叫系が有名なそこを宮瀬や他の女の先生、中山なんかも楽しみにしていて、絶叫系が苦手な俺と谷原だけがそれを嫌がっていた。

「ちゃんと美香ちゃんに言った？」

足を揺らすのを止めた宮瀬が、意地の悪い笑みを浮かべてこっちを向く。それに気がついて、俺は何ともないようにして頷く。

「おう。『いいなあ』って言われた」

「おー。なんだ、そっちもうまくいったじゃん」

にやにやとした顔で言い切られて、「まあな」としか返せなかった。うまくいってるんだろう。美香ちゃんとは。あの日、二人同じベッドで目が覚めて、お互い経験がないわけじゃないのに妙に気恥かしくて、それに二人で笑って。一緒に朝ごはんを食べて、昼過ぎに別れて。あれからもデートはしているし、美香ちゃんの家には行った。どこから見ても、うまくいっている大学生カップルだ。

自分たちが普通にデートを重ねていることを考えて、宮瀬の方はどうなんだろうと思った。二人ともが同じ気持ちとはいえ、永井さんの立場はまだ既婚者だ。永井さんが新しい部屋で暮らしていて、二人が恋人のようにそこで過ごしても、その状況は変わってない。俺たちのように、普通にデートなんてできているんだろうか。

またしても足をぶらつかせる宮瀬に尋ねてみようかと思ったが、宮

瀬の顔は本当に以前と比べてすつきりしている。そこに、今の永井さんとの関係に不満や不安を持っているようには感じなかった。それなのに、俺から好奇心ともいえる質問をする気にはなれなかった。宮瀬の言葉以上に、二人はうまくいつているんだ。

そういう結論に至って、また、今度は、鈍い痛みとそれより大きいものが扉をがんと叩く、あの感覚に襲われた。一遍に二つもの感情に扉を叩かれて、勢いでそれが壊れてしまいそうになる。

「帰るか」

「ん」

何度も叩かれる扉を無理やり押さえつけて、ペットボトルを鞆に放り込み、立ち上がる。宮瀬もひょいと原付から降りて、座席の下の収納からヘルメットと手袋を取り出し始めた。

二人ともが準備を終えて、それぞれ自転車と原付に乗る。

「じゃあな」

「うん。また、水曜日に」

「おう」

お互い手を振り合って、俺から先に自転車を漕ぎ始めた。すぐに、宮瀬が原付で俺を追い越す。大通りに出ると、宮瀬はすでにその先の交差点まで行っていた。

『じゃあな』

『うん。また、水曜日に』

こんな、さっきのような会話を今まで何度も繰り返して、変わらない日常を送ってきた。俺に美香ちゃんがいても、宮瀬に永井さんがいても、それは変わらない。これからだって、こうやって続いているくんだろう。

宮瀬は、もうあの身勝手彼氏じゃなくて永井さんを見ていて、今はもう以前のような訳の分からない感情で苛々することもない。それは、良いことだ。

だけど、それがなくなってしまうえば、俺と宮瀬の関係が変わってしまっただろうか。答えは、ノーだ。以前のようなことがなくても、俺と宮瀬は変わらない。鈍い痛みは、変わりそうなそれに怯えてきた、さみしさの感情だ。

俺と宮瀬は変わらない。宮瀬は永井さんを見ている。きっと、扉を叩く別の何かは、これが原因だ。宮瀬は、きっと、これから俺を見ない。永井さんと俺は、別の位置に立っていて、永井さんを見る宮瀬に俺は見えない。それでも、俺と宮瀬は変わらない。

『じゃあな』

『うん。またね』

変わらない言葉を何度も交わして、俺と宮瀬は変わらないまま、三月が終わって、三回生になって、春になって、夏が来て、一年というサイクルが回っていった。

s i d e
K

「わーい。バーベキューだー」

「おい、肉ばっか取んな!」

「早い物勝ちっしょ」

へらへら笑いながら、宮瀬は紙皿と割り箸を持って、俺のところに歩いてくる。

「玉ねぎ嫌いだからあげる」

「小学生か、お前は」

バーベキューコンロの近くの石に適当に座っていた俺の目の前まで来て、宮瀬は自分の皿から焦げ目のついた玉ねぎを俺の皿に入れようとする。それを割り箸で制しようとするも、結局は宮瀬に押し切られる形で玉ねぎがポンつと放り込まれた。呆れて見返すと、宮瀬はさっきのようにへらへらと笑って俺の隣に座る。

「まだ暑いねー」
「だな」

割り箸で肉を食べながら空を見上げて言った宮瀬に同意するよう頷く。

もう9月に入ったというのに、日差しは容赦なく照りつけていて、まだまだ厳しい残暑が続いていた。水辺の近くに場所取りしたのはベストだな。

今日は、バイトの仲間と慰労会も兼ねてバーベキューに来ていた。7月後半から続いていた塾の夏期講習もやっと終わり、大学ももうすぐ新学期が始まるということで、夏休み最後くらいは遊ぼうとみんながみなはしゃいでいた。何人かは持参したビールやら酎ハイを飲んでいるし、ふざけて川に入って遊んでるやつもいる。宮瀬も宮瀬で、さっきまでは川で他の女の先生と遊んでいたが、食べ物焼けた途端それらに気を取られてこっちにやってきた。

宮瀬との距離が近付いた去年の夏から、一年が過ぎていた。俺や宮瀬なんかは三回生になって、宮瀬の元彼氏が留学から帰ってきて、俺と宮瀬は相も変わらずな距離を維持している。宮瀬と元彼氏が別れたことは、何となくな流れで宮瀬の学校の奴らも察知しているらしく、宮瀬が学校で元彼氏とすれ違って無視しても、最近は何にも言われないそうだ。まあ、宮瀬の学校の奴らは彼氏が浮気したっていうのだけ知ってるから、何にも言えないんだろうけど。

宮瀬と永井さんの二人は問題なく関係を続けていて、俺と美香ちゃんも問題なく続いていた。永井さんの方の問題は未だに解決していないようだけど、宮瀬がそれで悩んでる様子もない。聞けば、永井さんがもともと住んでいたマンションの方は既に解約しているようで、本当に書類上でしか永井さんと奥さんは婚姻関係にないという。それを宮瀬の口から普通に話せるということは、宮瀬がそれだけ永井さんとの関係に落ち着いているからだ。以前のように、どうすれ

ばいいか分からないという状態で混乱している様子はなかった。それは、いいことだ。

「あー。もうすぐで学校始まるー。やだー」

もぐもぐと肉を食べながら、宮瀬が唸るように言った。

「もうすぐっていつても、あと二週間はあるだろ」

「二週間とか、絶対すぐ過ぎるって。あー、就活したくない」

顔をしかめる宮瀬に笑いながら、横に置いてあったお茶を飲む。宮瀬や谷原のような三回生は、後期に入ると、本格的とはいえないにしろ、就職活動に入ってしまう。本当に忙しくなるのは、年が明けてかららしい。院に進むことが決定している俺には無縁の話だ。

「お前は、院に行かないのか？」

宮瀬の箸を持つ手が止まる。だけどそれも一瞬のことで、すぐに宮瀬はへらっとした笑みを浮かべた。

「行かないよ。お金ないもん」
「ふーん」

相槌を打って、またお茶を飲んだ。宮瀬の返事で、これ以上その話をする気はせず、適当な話をしながら二人とも箸を進める。

本当のことを言えば、宮瀬も院に進みたいんだろう。三回生から始まったゼミで、所属しているゼミの先生に院に行くことを勧められない。宮瀬の勉強している専攻科目のことも、何にも知らない。それでも、宮瀬が真面目だということは知っている。ゼミの先生がそう言うなら、宮瀬には本当にそれだけの能力があるんだろう。だけど、宮瀬は行かないと言う。お金が理由で留学に行けなかったくらいだ。それが理由で院を諦めようとする宮瀬の考えも頷ける。それにどうしようもできない気持ちを抱いている宮瀬のことも、容易に想像できた。

「美香ちゃんも就活じゃないの？」

気分を変えるようにして、宮瀬が明るい口調で聞いていた。それに「ああ」とだけ返して、宮瀬に持っていたお茶の紙コップを渡した。宮瀬はそれを見て、「ありがと」と受け取る。

「そうだな」

「なに。素っ気なくない？」

「べつに。そんなことないけど」

短く答える俺に宮瀬が呆れたように笑った。

「ケンカでもした？」
「してねーよ」

怪訝な顔をする宮瀬に肩をすくめて返す。今の言葉は嘘じゃない。実際、美香ちゃんとの仲はうまくいってる。暇が合えば遊んでるし、今は美香ちゃんの家に行くことを戸惑うこともない。宮瀬との距離が変わらない代わりに、美香ちゃんとの距離はだいぶ縮まっていた。

「ま、何かあったら言ってよ」
「おう」

返されたコップを受け取り、残っていた中身を飲みほした。

「こがー、運転代わってよー」
「無理。俺動けないし」
「もー、何でみんなして寝るかな」
「どんまい」

帰りの道中、運転席でハンドルを握る谷原がぼやいた。今日バーベキューをした川原へはレンタカーを二台借りて行っていて、一台は

谷原が、もう一台は中山が運転している。谷原の運転する車には俺の他に宮瀬と、もう一人男の友達が乗っていて、俺と宮瀬の二人が後部座席に座っていた。もう一人は助手席にいて、完璧に寝ている。そして、俺の隣に座っている宮瀬も、完全に寝ていた。俺の肩に頭を乗つけて。おかげで俺は動けない。動いてもいいんだが、心地良さそうに眠る宮瀬を見ると、それをする気にはなれなかった。

『明日だっけ？ 永井さん帰ってくるの』
『うん』

今日の帰り際に交わした宮瀬との会話を思い出す。永井さんは、夏休みの間短期研究員としてヨーロッパのどこかに行っているらしい。一カ月ほどこつちを離れていて、宮瀬が明日空港まで迎えに行くと言っていた。そのことを言っていた宮瀬は、嬉しそうに笑みを浮かべていた。一カ月、宮瀬は永井さんとほとんど連絡を取ってない。それは、永井さんなりの配慮だった。元彼氏が留学に行っていた時期のことを知っている永井さんは、あえて自分から宮瀬に連絡をするようなことはしていなかったようだ。その分、宮瀬は明日永井さんに会えることを楽しみにしている。

明日は、俺も美香ちゃんとのデートだ。明日はどうするのかと考えていると、宮瀬の身体がずるずると下がってきた。受け止める間もなく、宮瀬の頭が俺の脚の上に乗る。軽い衝撃を受けたはずなのに、宮瀬は気付くことなく眠っている。顔にかかっている髪をよけてやって、ちょうど宮瀬の顔の位置に当たる西日を遮るようにして手がかざしてやった。

「まったく。小学生か、お前は」

呆れつつも小さく笑みを漏らし、顔を前に向けた。

S i d e
M

「永井さん」

人の多い空港のロビーで、スーツケースを引つ張って歩いてくる永井さんに向かって、小さく手を振った。永井さんもこっちに気付いたようで、顔に笑みを浮かべて手を振り返しながら歩いてくる。

「お帰り」

「ただいま」

一か月前と変わらない笑みで、一カ月ぶりの永井さんが目の前に立った。

「疲れた？」

「ちよつとね」

少しだけ困ったように笑って、永井さんは私の頭にぽんつと手を置いた。そして、もう一度「ただいま」と口にした。見上げた先に永井さんの笑顔があつて、私も自然と顔に笑みが浮かんでいた。

「あー。怖いなあ」

「大丈夫だって。ちゃんと免許取ったから」

駐車場に着いて、永井さんが苦笑いを漏らす。運転席に座ったのは、永井さんじゃなくて私だった。

今年の4月から、私は教習所に通っていて、夏休みに帰った地元の免許センターで免許を取っていた。永井さんは、一カ月もの間車を空港の駐車場に入れるのを嫌がつて、行きは電車を使って空港に向かった。それで、今日は免許を取った私が永井さんを迎えにきたのだ。

「じゃあ、永井さんが運転する？」

「それはちよつと無理。飛行機であんまり寝れなかったから、少し疲れてるんだ」

「なら、大人しく乗ってください」

「はいはい」

おかしそくに笑って、永井さんは普段とは違う助手席に乗り込んだ。それでも、怖がってるのか何なのか、マンションまでの道中永井さんが眠ったりすることはなかった。

『短期研究員？』

『うん。一カ月くらいだけど』

『そっか。頑張ってきてね』

『いいの？』

『いいに決まってるじゃん。研究することが仕事でしょ？』

私は、運転しながら一か月前の永井さんとの会話を思い出していた。学校が夏休みに入ってから一カ月の間、永井さんにはヨーロッパの大学から短期研究員としての依頼がきていた。それは、もちろん、永井さんが認めてもらえたからこそ来た依頼なんだから、私は永井さんがそれを受けることに異論はなかった。なのに、何でか永井さんは少し困ったようにしていて、何度か確認をしてきたくらい。理由を聞けば、自分が海外に行くことを、私が嫌がるんじゃないかとも言っていた。

『永井さんは、元彼と違うでしょ』

そう言った私に、永井さんは『ありがとう』と笑った。

マンションに着いて、まず初めにエアコンをつける。むっとしていた空気が徐々に冷えていく中、永井さんがスーツケースを仕舞った。洗濯ものを出したりするのを手伝った。

「レモネードでも作っただけ」

「ん。ありがとう」

片付けが一息ついたところで、永井さんをソファに座らせて、私はキッチンに立った。迎えに行く前に買ってきておいた材料で、簡単に冷たいレモネードを作る。氷の入ったグラスに注いだそれを二つ持って、リビングに戻ると、座っていたはずの永井さんの身体の上半身は横になっていて、私が来たことにも気付いてないようだった。グラスをテーブルに置いて顔を覗き込むと、永井さんは目をつぶって、規則正しく息をしていた。

「寝ちゃった」

ソファの肘かけに腕を置いて、その上に頭を乗せた格好で、永井さんは眠っていた。寝室からブランケットを持ってきて、半分に折って冷えないように掛けてあげる。私はソファではなくて、床に敷いてあるラグに座った。そこまでしても、永井さんが目を開けることはない。よっぽど疲れてたんだろう。

「お帰り」

少しだけ短くなった永井さんの髪に触れて、ソファに腕を置いて永井さんの寝顔を見る。

この一カ月、永井さんから連絡が来ることはなかった。それは、永井さんなりの配慮だと分かっていたし、私も私で実家に帰ったりバイトだったり、ゆっくりと連絡を取り合う時間があつたわけでも

なかった。それでも、ふとした時に、永井さんに会いたいなと思っ
たことはある。そんなこと、元彼が留学に行っていた時はこれっぽ
っちも思っただことはないのに。

「お帰り、永井さん」

もう一度、さっきと同じ言葉を口にして、ソファから腕を離した。

それから永井さんが起きたのは一時間程後で、その頃には外の日が
夕焼けに変わっていた。久しぶりに二人でキッチンに立ち、その日
の夕飯を作る。その後は、いつものようにお風呂に入って、髪を乾
かして、今度は二人してソファに座ってゆっくりとした。

「そうだ。お土産買ってきたよ」

飲んでいた缶ビールをテーブルに置いて、永井さんがソファを立つ
た。寝室に行ったかと思えばすぐに戻ってきて、緑のビニール袋に
入れられたものを私に差し出す。私も持っていたコップをテーブル
に置いて、それを受け取った。どうやら、袋の中身は本のようなだ。
袋の表紙に、bookshopという単語が書かれている。

「わ。すごい。写真集？」

「うん。都市から地方の街や村まで撮ってあるんだって」

「へー。こういうの好き」
「よかった」

永井さんがソファに座って安心したように笑い、私も笑みを返した。永井さんがお土産にとくれた写真集は、永井さんが行っていた国の街や村なんかが撮られているものだった。時たま地元の美味しいお店や観光スポットの写真と一緒に文も載せてあって、読んでても楽しい。

「ありがとう」
「どういたしまして」

にこりと微笑んで、永井さんはテーブルの缶ビールを手取る。そして、それを一口飲むと、また私の方を向いた。

「そういえば、昨日、バーベキュー行ってたんでしょ？ 楽しかった？」
「うん。楽しかったよ。私たち以外にも大学生っぽい人、けっこういた」

夕飯時に話したバーベキューのことを聞かれ、一旦写真集をテーブルに置いて頷く。

「大学生は9月でもまだ夏休みだからね」

「うん。普通に遊びに行っても、やたら大学生っぽい人目につくも
ん」

頷きながら、テーブルに置いておいたコップを手に取り、お茶を一口飲む。

「ごめんね。夏休みはほとんど会えなくて」

いきなり永井さんに謝られて、びっくりして隣を向く。永井さんは缶ビールを手にしたまま申し訳なさそうな顔をしていた。それを見て、そんなことないと首を横に振る。

「謝らなくていいよ。仕事だったんだから」

「それでもさ、新学期始まってからはまとまった休みもそんなになかったし、どこか行ったりもしてないでしょ？」

「そうだけど。でも、ほとんど毎週会ってたし」

これは、本当のことだった。新学期が始まって、永井さんがうちの大学に来なくなってからも、毎週の金曜日から日曜日はほとんど会っていたし、そのことで不満を覚えたことなんてなかった。そりゃあ、まあ、夏休み中に会いたいなと思ったことはあるけど。それでも、わざわざ謝られるほどじゃないと思う。

「ま、そうだけど。こんな時期になっちゃったら、旅行っていう時

期でもないしね」

永井さんは残っていた缶の中身を一気に飲みほして、空になったそれをことんとテーブルに置く。それから、もう一度私に向かって「ごめんね」と言った。

「謝らなくていいって。それに、旅行とかよりも、二人でゆっくりしてた方がいいよ」

「そうなの？」

「うん。会えなくてさみしかったことは、さみしかったからね。だから、旅行とかよりも、のんびりしたい」

「そっか。寂しいとは思ってくれてたんだ」

「そりゃあ、まあ」

永井さんの言葉に頷きながら答えると、永井さんは少しだけ嬉しそうな顔をする。なに、と目で尋ねても、永井さんは笑って首を横に振るだけだ。

「変なの」

言っつて、私も残っていたお茶を飲んでしまっつて、そのコップと空き缶を手にソファを立ち上がった。それらをキッチンに持っていつて、リビングに戻ってきたところで、立ち上がっていた永井さんにぎゅっと抱きしめられた。いきなりで驚いてしまっつて、思わず声が出る。

「どうしたの？」

笑って尋ねながらも、私も自分の腕を永井さんの背中に回した。

「ん。俺も、会いたかったなと思って」

「よかった。そう思われてて」

私の答えに、永井さんも小さく笑う。それから髪を撫でられたかと思うと、その後に唇が触れる感じがして、回していた腕を緩めて上を向いた。こっちを見下ろしていた永井さんと目が合って、何か言う間もなく、今度は唇に永井さんのそれが触れる。触れた唇はすぐに離れたけど、またすぐ短く口付けられた。永井さんに触れることも、抱きしめられることも、キスされることも、全部が久しぶりで嬉しくなる。

「会いたかった」

ぎゅっと抱きついて言えば、永井さんも応えてくれるように抱きしめ返してくれる。抱きしめる腕が解かれると、そのまま手を取られて寝室まで引つ張られた。ベッドの近くで振り返った永井さんが、もう一度キスをしてくる。

「疲れてたんじゃないの？」

「だいぶ治ったよ。さっきまでゆっくりしてたからね」

笑みを浮かべて言われ、永井さんの手が背中に回る。そのまま抱き寄せられて、今度はゆっくりと唇を重ねて、触れ合ったままベッドに沈み込んだ。

s i d e N

少しだけ感じた日差しに、自然と瞼が開かれていき、目を開けたすぐそばにある寝顔に笑みが漏れた。この寝顔を見るのも、一カ月ぶりだ。寝顔だけじゃない。彼女を見ることも、触れることも、すべてが一カ月ぶりだった。

『短期研究員ですか？』

『ああ。向こうの知り合いに君のことを話したことがあってね、論文も読んだらしくて、来てほしいと言っていたよ。こっちが夏休みに入る、一カ月ほどだがね』

『一カ月、ですか』

『せっかくの話だから、どうかね？ もう、反対されることもないんだろう？』

『……考えておきます』

夏に入る前、三神教授から研究員の話が聞かされた時、まず最初に浮かんだのは彼女のことだった。出会った頃、彼女は自身の夢でもあった留学が駄目になって、その時期に元彼氏が留学に行つて、叶わなかった自分の夢を思い出しては自嘲の笑みをもってそれをこま

かしていた。今でも、元彼氏にあからさまな自慢めいた話を目の前でされて、腹を立てている時がある。そんな彼女を残して、自分が行けるのだろうかと思った。それを抜きにしても、彼女と離れる一カ月、彼女に会いたいと思わないでいられるだろうか考えた。それでも、出した答えは、話を引き受けるというもので。その答えには、少なからず彼女からの言葉も影響していたらう。引き受けた結果、こつちを発つ前は、少しだけバタバタとした。短期入国のためのビザ免除申請やら、アパートの手続き、研究の準備に加えて通常の授業も。それから、離婚の方もなかなか進まず、結局は未だ婚姻関係を結んでいる状態だ。

『会いたかった』

昨日彼女が言ったこの言葉が、この一カ月俺自身が思っていたことだ。去年までの彼女のことを考え、連絡は着いたその日と帰る便を知らせたくらいだった。それだけで平気なわけもなく、結局は会いたいと思っている自分がいた。幸いなのは、彼女も同じことを思っていたということだ。

隣で気持ち良さそうに眠る彼女を見て、そつと髪を撫でる。そろそろ朝食の準備でもしようかと思ったが、彼女の寝顔を見ているうちに、今日はこのままでもいいように考え直した。今日は、ゆつくりと過ごしたい気分だ。

エアコンのタイマーが切れていたので、少し暑さが感じられた。一旦ベッドから抜け出して、寝室のベランダの窓を少し開け、もう一度ベッドに戻る。ベッドが少し沈んだことに気がついたのか、彼女が少し声を漏らしてゆつくりと目を開けた。

「おはよう」

「ん……。お、はよ」

まだ少し眠たそうにしながら、目を数回瞬きさせて、彼女は力の抜けた笑みを見せた。

「んー」

うなりながら、彼女がこっちに身体を寄せる。

「まだ眠いの？」

「んーん。永井さんが横にいるなあ、と思って」

「何それ」

彼女の言葉に笑うと、彼女も同じように笑った。

「よかった。どこにも行つてなくて」

枕に顔をつけたまま、こちらを見上げて、嬉しそうに笑みを浮かべて言った。

「どこにも行かないよ」

髪に触れながら言えば、彼女はもっと嬉しそうな顔をする。

「朝、どうする？」

「んー。あ、そういえばね、近くに新しくパン屋ができてたよ。行ってみよ？」

「パン屋？ そっか。いいね。行ってみようか」

彼女の言うパン屋を俺は知らないが、たぶん俺がいない間にできたんだろう。

行くことを決めてからは、もう少しだけベッドでゆっくりとしてから、簡単に準備をして部屋を出ることにした。

パン屋は歩いて行ける距離にできていて、個人経営のようだった。ちょうど焼き立てのものがあがっていたので、その中からいくつかを選んで料金を払った。帰りに近場のレンタルショップでDVDを借りてから、家に帰ることにした。

「おいしそ」

テーブルに並べられたパンを見て、彼女は笑みを浮かべた。彼女の前にはパンの他に紅茶の入ったカップが、俺の前にはコーヒーのカップがある。そのカップは、以前一緒に買い物に行った際、彼女が欲しがった同じデザインで色違いのものだった。普段は揃いのものを欲しがらない彼女にしては、珍しいことだと思ったのを覚えてい

る。カップならすでに家にあつたのだが、彼女がそういうものを欲しがるのが珍しく、それに嬉しく思ったのも事実で、遠慮する彼女を無視して買うことにしたのだった。

「いただきます」

彼女が両手を合わせて食べ始めたのを見て、俺もコーヒーに口をつけた。パンを一口食べたところで、彼女が「おいしい」と顔を綻ばせる。

「そういえばさ、新学期なんだけど、」

「うん？」

彼女と同じようにパンをかじりながら口を開くと、彼女は飲んでいた紅茶のカップをテーブルに置いて、こちらに顔を向けた。俺もパンを皿に置いて、コーヒーを一口啜る。

「また君の大学に行くよ」

「え？ そうなの？」

「うん。一応履修要項に載ってたんだけど、やっぱり気付いてなかったね」

今初めて聞いたというような顔をする彼女を見て、少しおかしくな
って笑ってしまう。

夏前の学期では彼女の大学で授業はなかったが、去年の様子から今年も後期の授業を申し込まれていた。特に断る理由もないのでそれを承諾し、ちゃんとその旨が彼女の大学の履修要項に載っているはずだった。彼女の大学は前期と後期で履修が別々になっており、そのことに気付かないかなとは思っていたが、どうやら本当に気がついてなかったらしい。

そのことを言えば、彼女は少しだけむくれて、後期の分は見えないのだから仕方ないと口にした。

「でもさ、気付いてたとしても、どうせ取れないよ。もう永井さんの授業で単位取っちゃてるんだから」

「うん。そうだけどね」

「ものすごく惜しい点数でしたけど」

紅茶を啜りながら、彼女がじととした目でこちらを見てきた。彼女の言ってる意味は分かったが、反論はせずに肩をすくめて俺もコーヒーを啜る。それでも、彼女は冷たい目を止めない。

「初めの授業で寝てたのと最後の授業に遅刻してきたので、0.5点ずつ引いて、9.9点。妥当だよ」

「何なの、その9.9って。あと1点くらいくれたってよかったじゃん」

「だめ」

「けち」

彼女がこちらを見ることを止めないので、仕方なく以前にしたのと

同じ説明をすれば、彼女はさらにむくれる。

授業態度やレポート内容だけでいえば、彼女の評価に文句のつけどころはなかった。ただ単に、そのまま100点にしてしまうのは何となく癢で、99という点数にした。それを知った彼女は職権乱用だと拗ねたが、寝ていたのと遅刻は本当のことなので、それほど乱用でもないだろうと勝手に納得している。

「ほらほら、拗ねない拗ねない。パンあげるから」
「なにそれ」

自分のパンを半分にちぎって彼女の皿に置いてやると、彼女はこちらを睨みながらも笑みを浮かべた。

遅めの朝食を終えた後は、借りてきたDVDを見ることにして、昨日彼女が言っていたようにのんびりと過ごすことにした。残暑が厳しいとはいえさすがに9月になっているので、午前中はまだ窓を開けるだけで過ごしやすくなる。

「もうすぐ学校なんだねー。やだなー」

ソファで並んでDVDを見ている時に彼女がそんなことを漏らして、頭を俺の肩に乗つけてきた。

「早起きできるの？」
「がんばる」

できる、と宣言はしない彼女に思わず笑ってしまう。彼女もおかしそうに笑って、肩から頭を離れた。

「そつか。早いな。もう一年経つんだ」
「だね」

彼女と会った頃のことを思い出して言えば、彼女も何のこと言っているのか分かったようで、俺の言葉に頷いている。

「もうすぐで終わるから」
「ん……」

この言葉も、何を指しているのか分かったようで、彼女はもう一度小さく頷いた。

もともと住んでいたマンションも解約したし、家にあった荷物も万里子の実家に送った。あとは、書類を提出するだけだ。それがなかなか進まないのだけど、それでも後少しだ。これ以上こんな関係を続けても意味がないということくらい、万里子も分かっているだろう。

何も言わなくなった彼女が、また頭をこちらに寄せた。彼女を見下ろせば、にこりと微笑まれる。それに笑みを返して、一度だけ唇を合わせた。顔を離すと、彼女は嬉しそうに笑って、顔をテレビの方へと向ける。

俺は彼女の頭にもう一度口付けて、一カ月ぶりに会えた彼女との時間を楽しむことにした。

大学三回生の後期がスタートして、一カ月ほど経った。10月最後の週である土曜日の今日、うちの大学は、学園祭で盛り上がった。

「わー。人が多いね」

「うん。うちの大学、こっちじゃ一番でかいからね」

美香ちゃんの言葉に頷きながら、二人並んで出店が並ぶキャンパスを歩く。

去年や一昨年なんか、俺は友達に言われて顔を出す程度だったのに、今年は美香ちゃんに「行ってみたい」と言われたのもあって、ちゃんと参加している。美香ちゃんは俺のバイト仲間でもあり、美香ちゃんの親友でもある藤田さん経由で、今日の学園祭のことを知ったらしい。

「本キャンパスは、もっと多いよ」

「えー。そうなの？」

「うん」

俺が通う学部のキャンパスは分家のような存在で、メインのキャンパスは隣の県、つまり美香ちゃんの通う大学と同じ県にある。メイ

ンと分家キャンパスの学園祭日は当然ずらしてあって、メインの方は来週辺りにやるようだった。

「あ、ここじゃない？ えっと、松木くんが言ってたステージって」「あ、そうだ。けっこう人集まってんな」

美香ちゃんが、キャンパスの一角の広場に作られたステージを指差す。ステージにはまだ誰も上がっておらず、周りに大勢の人がわらわらと集まっていた。

美香ちゃんを連れて学校に来た時、それを待ち伏せしていたらしい松木とそれに無理やり引つ張られた犬居に会って、昼過ぎにやるステージに来说われていた。そのステージは、どうやら松木の所属するサークルが行うものらしい。

「お、古賀じゃん。ちゃんと来たんだ」

ステージ前方の左側に立つて美香ちゃんと話していると、その横から犬居がひょっこりと顔を出した。

「ああ。だって、来なかったら、あいつ後でうるさいだろ」

「確かに。あ、美香ちゃん。もう少ししたらさ、藤田さん、だっけ？ 来るよ」

「あ、ほんとに？」

犬居がおかしそうに笑って言った後、美香ちゃんの方を向いて、藤田さんのことを告げた。藤田さんのことを聞いた美香ちゃんは、嬉しそうな顔をして、後ろの方を確認する。美香ちゃんが後ろを向いてすぐ、「あ」と声を上げ、「彩香ちゃん」と続けて手を振りだした。その様子に、俺と犬居も後ろを向く。美香ちゃんと同じように手を振りながらこっちに来る藤田さんの姿が見えた。

「あれ？」

藤田さんの後ろに、もう一つ見知った人間が見えて、思わず声をあげる。

「宮瀬？ お前、何してんの？」

藤田さんが美香ちゃんのところまで来て、二人が再会を喜んでいる後ろから、宮瀬ともう一人の女の子が来た。宮瀬は俺と違って驚いてる様子もなく、いつものようにへらつと笑っている。

「ほら、前に松木さんが来てねって言ってたじゃん。暇だったし、来てみた」

「いや、ヒマなら一人で来てよ」

「そんなこと言っなよー」

宮瀬の言葉に、後ろにいた女の子が突っ込みを入れて、宮瀬は笑い

ながらその子の腕を叩いていた。どうやら、友達らしい。たぶん、宮瀬の口からよく出てた友達だろう。

そういえば、先週くらいに松木とかと偶然会ったことがあって、その時に言っていたなと思いだした。けど、今日は土曜日で、いつもなら宮瀬は永井さんのところにいるはずだ。それを知っているから、今日なぜ宮瀬がここにいるのか分からない。そんな疑問が顔に出ていたのか、宮瀬が俺の方を見て、合図のように少しだけ首を傾げた。その顔は、何の問題もないと言っているようで、永井さんのことから「行ってきたら」とでも言ったのかもしれない。

「博己くん？」

藤田さんとの再会を喜んでいた美香ちゃんが、俺の服を引っ張った。それに隣を向けば、美香ちゃんが『誰？』という顔をする。

「ああ、ごめん。同じバイトの人」

「あ、そうなんだ。初めまして。横山美香です」

「あ、初めまして。宮瀬です」

横で可愛らしくぺこっとおじきをする美香ちゃんに対して、宮瀬の方はこんな時でも人見知りを発揮して、いつものように初対面用の愛想の良い笑顔を浮かべ、首を前に突き出すようにして頭を下げた。すかさず、隣の友達から「ちょっと」と突っ込みが入る。宮瀬は宮瀬で、それに「しょうがないじゃん」と言い返していた。

「ごめん。人見知りなんだ、こいつ」

「うっん。大丈夫だよ」

「ほら、大丈夫だって」

「うるさいよ、お前は」

美香ちゃんが笑って首を振ったのをいいことに、宮瀬がそら見るといふ顔をする。その言葉に、俺と宮瀬の友達が、ほとんど同時に突っ込んだ。二人の人間から非難され、宮瀬は拗ねたようにむっとなる。美香ちゃんと藤田さんが、そんな宮瀬を見ておかしそうに笑った。

「お、始まるみたいだぞ」

美香ちゃんの隣に立っていた犬居がステージの方を向いて言い、そこにいた全員がステージの方を振り返った。ステージ横のスピーカーからばかでかい音楽が流れ出して、司会をやるらしい松木と一人の女の子が姿を現す。

松木が所属しているサークルはダンスのサークルで、他校とも合同で行うことが多いサークルだ。今回のステージは、特にどこのサークルのものという決まりはないらしく、複数のサークルがランダムでダンスやらを発表していくものらしい。

そのことを告げた松木と女の子がステージ横に消えると、一組目のグループが入れ換わるようにしてステージに上がった。流行りの音楽が流れて、それに合わせてグループの人たちが身体を動かす。そのグループはもとの音楽と踊りを完璧にコピーしていて、ステージに集まっていた人たちも、その完成度に声を上げた。

「すごいね」

「うん。うまいね」

最中に隣の美香ちゃんと言葉を交わし、踊りが終わると周りと一緒に
なって拍手を送った。

松木が出てきたのは、それから二組のグループが終わった後だった。
松木を含めた五人の人間がステージ中央でポーズを取ると、スピー
カーから音楽が流れ出す。そのイントロが流れ出した瞬間、後ろか
ら「うわ」と宮瀬の嬉しそうな声が聞こえた。その声に後ろを振り
向くと、宮瀬が嬉しそうにして隣の友達の腕を叩いている。友達は
うつとうしそうに「はいはい」と宮瀬をあやしていた。

初めはなんで宮瀬がそこまで嬉しそうにしてるのか分からなかった
が、歌詞が流れ出して、その意味を理解した。その曲は、前に宮瀬
がハマっていると聞かせてくれた、韓国のアイドルグループのもの
だった。今流れている曲は日本語によるもので、そういえば日本デ
ビューが間近だと前に言っていた気がする。周りを見れば、何人か
の女の子も宮瀬と同じように嬉しそうにしていた。

「博己くん、この曲知ってるの？」

意外にもセンターで踊る松木を見ながら納得していると、横から美
香ちゃんが聞いてきた。一旦ステージから目を離して、隣を向いて
「うん」と頷く。

「前に宮瀬から聞いたことあるんだ。ほら、喜んでるでしょ、あい

っ」

後ろではしゃぐ宮瀬を指して言えば、美香ちゃんもそちらに視線を移した。

「ほんとだ」

「日本デビューする前から知ってたらしくてさ。変なやつでしょ？」

音楽に合わせて身体を動かしている宮瀬を見ながら言って、美香ちゃんにも笑いかけた。美香ちゃんも宮瀬を見て、小さく笑う。

松木たちのステージが終わると、宮瀬がさっきとは比べ物にならないほど、大きな音で拍手をしていた。

「意外にうまいんだな。松木って」

松木たちの次のグループが踊っているのを横目に、美香ちゃんの隣に立つ犬居に声をかけた。犬居もステージから目を離して、おかしそくに笑っている。

「そうなんだよ。ダンス見た女の子から声かけられるらしいんだけど、素のあいつ見て引いちゃうんだって」

犬居の言葉に、俺も笑ってしまう。

確かに、あんな風にかっこよく踊っていた松木からは、普段の子供じみた松木は想像できないかもしれない。

それから何組かのグループが踊って、またしても初めに出てきた女の子がステージに上がった。今度は、そこに松木はいない。

「では、次のグループで第一部は終了になります。第一部のラストは、みなさんも盛り上がっていただくさいねー！」

そう言ってステージ横を指す。それと同時に、今大流行りの女の子グループの音楽が鳴りだして、「きゃあー」という野太い声と共に、その女の子グループの衣装であるミニスカートの制服を身にまとった大人数の男たちが姿を現した。途端に、ステージ周辺の人間からも大歓声や笑い声上がる。俺も、その中に混じって大笑いしてしまった一人だ。横の美香ちゃんもぼかんとした顔から、すぐにおかしそうな笑みを漏らしていて、その横の犬居も腹を抱えて笑っている。後ろにいる宮瀬たちも笑っていた。

制服を身につけた男たちはやたら完璧に、女の子グループの曲を踊っている。そのセンターにいるのは、あの松木だった。

「ありがとうございますー！」

最後に男たちが一列に並んでお辞儀をする。周りからは、大きな笑い声と拍手が送られていた。

ステージ発表を終えた後、松木が普段着に戻って、俺たちのいるところに走ってくる。

「よお。かわいかったぞ。松木ちゃん」
「うっせー」

制服を脱いだ松木にそう言えば、松木はいじけた様子で返してきた。それでも、俺の隣にいる美香ちゃんを見ると、嬉しそうに手を振ってくる。その後ろにいた宮瀬にも気がついて、松木は嬉しそうに「宮瀬ちゃん」と声をかけた。

「どうも。うまかったです。最初のやつも、最後のやつも。特に最後のやつは、もう」
「やめてー!」

宮瀬にすらいじられる松木を見て、俺や犬居はさらに笑う。

「松木さん。これ、控え室運んどきますね」
「おー。よろしく」

松木の後ろから松木の後輩らしい男が声をかけ、机やら椅子やらを積んだ台車をがらりと転がしてきた。松木が「よろしく」と声をかけたと同時にその後輩の背中をばしんと叩き、男の方が受け止めきれずによりけてしまう。よろけて手元が狂ったのか、不安定に荷物を積んでいた台車もバランスを崩して、ぐらつと横に倒れていく。

「うわ」

ちょうど荷台側にいた宮瀬が驚いたように声を上げ、後ろに下がろうとする。が、いきなりなことでうまく足がついていかず、宮瀬自身も後ろに倒れそうになった。咄嗟に足が宮瀬の方に動いて、倒れそうになる宮瀬を受け止める。台車は、ものの見事に、椅子や机をぶちまけながら倒れてしまった。

「おい」

宮瀬を受け止めた格好のまま、後輩を叩いた松木の方を見る。

「うわ！ ごめん、宮瀬ちゃん！ 大丈夫だった？」

ぶちまけられた荷台を飛び越えてきて、松木が宮瀬に謝る。後輩も慌てたように、倒れた台車を起こし、椅子や机を積み直し始めた。それを、近くにいた犬居が手伝っている。

「大丈夫ですよ。ぶつかってないし」

「わー！ もう、まじごめん！」

「謝るより、それ、片付けろよ」

焦る松木に、後ろにぶちまけられているに荷台を指して言えば、松木は「ほんとごめん！」と再度言い、後ろの後輩たちを手伝い始める。

「大丈夫か？」

宮瀬がちゃんと立てることを確認してから、その腰を抱えていた手を離す。宮瀬は小さく息をはいて頷いた。

「ん。大丈夫。びっくりしたけど」

いつもと同じようにへらつと笑う宮瀬が、やたらと片足に重心を乗つけている。確かめるように宮瀬を見ても、宮瀬は何ともないと肩をすくめただけだった。

「ならいいけど」

詰め寄ったって本当のことは言わないだろうと考え、これ以上は何も言わないでおく。後ろを振り返ると、美香ちゃんも犬居と同じように荷台を積み直す手伝いをしていた。

「ありがとう」

荷台を全部積み直したところで、松木が美香ちゃんに向かって笑みを向ける。美香ちゃんは「いいえ」と首を横に振りながら笑っていた。

松木の後輩が頭を下げながら台車を押していき、松木も次の準備があるからと、宮瀬にもう一度謝ってステージ袖に戻っていった。宮瀬の友達も、自分のサークルの仕事があるから帰らないと宮瀬に伝えている。そういえば、今日は宮瀬の大学も学園祭だ。

「あー。じゃあ、私、もう少しこっちにいるよ」

「あ、そう？　じゃあ、行くね」

「うん。ありがとうね」

ばいばいと手を振って歩いていく友達を、宮瀬も同じようにして手を振り返す。宮瀬の友達がいなくなって、俺と美香ちゃん、藤田さんはそこに残る犬居と宮瀬手を振って、そこから離れた。

「あれ、俺、いない方がよくない？」

キャンパスを少し歩いたところで、自分のおかしな立ち位置に気がついて、横を歩く二人にそう声をかける。
今思えば、美香ちゃんは久しぶりに藤田さんに会っている。俺がここにいるのは邪魔じゃないだろうか。

「え、そんなことないよ」

美香ちゃんがそう言って首を横に振るも、どうも俺は居心地が悪い。それに、さっきの宮瀬が少し気がかりでもあった。

「んー。俺、少し一人で回ってくるからさ、美香ちゃんと藤田さんで回ってきなよ。久しぶりでしょ？ 二人会うの」

「え、でも」

「気にしないでいいからさ」

申し訳なさそうに渋る美香ちゃんに笑いかけて、二人に手を振ってその場を離れた。

たぶん、宮瀬はさっきの場所から動いてないだろうなと考えて、先ほどのステージへと足を向ける。その途中で、宮瀬の好きなジュースを一本買っておく。

案の定、宮瀬はさっきのステージからほとんど動いておらず、近くの棟の外にあるベンチに座っていた。宮瀬、と声をかけようとして、宮瀬のベンチの前に犬居がいるのが見えて、一瞬声をかけるのが戸惑われた。

その通りに出店は出ておらず、学園祭だというのに人がほとんどいない。今はベンチに宮瀬がいて、その目の前に犬居がいる。あと

はちらほらという程度だ。

「宮瀬」

一瞬、犬居がいつもとは違う、真剣な顔をしたのが見えて、咄嗟に声をかけた。宮瀬は犬居の表情に気がついていなかったようで、普通な顔してこっちを向いた。

「あれ、古賀さん。どうしたの？」

きょんとした宮瀬の前で、犬居はすでにいつもと同じ様子に戻っていた。

「何となく居心地悪くなったから、抜けてきた」

「ああ。確かに女2で男一人って、変な感じするよね」

ひひひつと、宮瀬が意地の悪い笑い方をする。その前で、犬居もおかしそうに笑っていた。

「俺も、ぶらぶらしてこーっと」

笑いを収めた犬居が、ぐーっと腕を上には伸ばして、俺の方に向かっ

て歩いてくる。

「あ、そういや、メール見たか？」

「メール？ 見てないけど」

俺の隣まで来て、犬居が思い出したように言った。

「松木のやつが、今日の夜、みんなで飲みたいってさ」

「みんなって、誰だよ」

「俺とお前と松木と、美香ちゃんに藤田さん。それと、宮瀬ちゃんも」

ね、と犬居が宮瀬に向かって笑いかけた。宮瀬が、困ったように笑みを浮かべる。その様子から、宮瀬はすでに犬居からそのことを聞かされていたらしいと分かる。

「なんだよ、その微妙なメンバー」

「しょうがないだろ。松木がしたいって言うてんだから。終わったら、松木の家な」

そう言つて、犬居は「じゃあな」と歩いていった。

「お前、いいの？」

少しの間だけ犬居の後ろ姿を見て、今度は前にいる宮瀬に問い掛けた。

「いって何が？」

「人見知りのくせして、ほとんど知らない人たちと飲めるんですか」

宮瀬が「ああ」と苦笑いする。その笑みに呆れつつ、宮瀬の隣に座った。

「しょうがないじゃん？ おいでよ、とか言われたら断れないし」

「ねえ？」と同意を求めようとする宮瀬。

「じゃあ、俺に頼んなよ」

「え、それはちよつと」

前もって忠告してやると、宮瀬がやめてよと顔をしかめる。それに笑って、持っていた缶ジュースを差し出した。一瞬何のことだと思っただけ宮瀬だが、「あげる」と言つと、嬉しそうにそれを受け取った。

「さつき、足どうかしたのか？」

蓋を開けて飲む宮瀬に尋ねれば、宮瀬は目線だけをこっちにやって肩をすくめる。缶を口から離して、「んー」と首をひねった。

「少しだけ捻ったかな」

「大丈夫か？」

「うん。思いつきりじゃなかったから、休んでたら大丈夫だと思う」
「ならいいけど」

宮瀬の言葉に頷き、ぶらんと足を前に伸ばした。横から「飲む？」と缶が差し出される。「サンキュ」とそれを受け取って、一口飲んだ後に宮瀬に返した。

「今日は永井さんとこ行かなくていいのか？」

「うん。昨日会った時に、行っておいでって言われた」

「ああ。今期も、永井さん、お前の学校来てるんだっけ」

「うん。私は取ってないけどね」

ごくごくつとジュースを飲んだ宮瀬が、いきなりこっちを向いて、にやっと笑った。何だと目を向けると、その笑みはさらに深くなる。

「美香ちゃん、かわいいね」

「なんだ、いきなり」

「いや、あんな可愛いなんて思ってたかった」

にやにやと締まりのない顔をこちらに向けてくる宮瀬。それに何と返したらいいのかも分からず、適当に相槌を打っておく。

「藤田さんの友達って感じだよな」

「ああ、それはあるな」

美香ちゃんは今日も今日でワンピースを着てきていて、それは藤田さんも同じだった。似たような格好をしていた二人を思い出して、宮瀬に同意する。

宮瀬が、いきなり「うー」と言いながら腕を上には伸ばし出した。十分に伸びをしたところでぱっと腕の力を抜き、ゆっくりと膝の上に手を落とす。腕とは反対に、顔は空を見上げたままで、缶を持っている方の手を力なく動かしている。

「微妙にまだあったかいね」

「だな。来月あたりから寒くなりそうだけど」

宮瀬の言う通り、10月末の今日はまだ太陽が出ていて、気温も十分に暖かった。それでも、来月に入れば寒波が入り込んできて、少しは冬に近付くだろう。

「冬かー。また冬季講習だ。やだな」

「がんばれ」

「いや、古賀さんが頑張つてよ。私、就活だし」

「そんな理由通用しませーん」

「通用させる！」

いつものようにくだらない話を続けて、笑いあつて、俺と宮瀬は残りの時間を過ごしていた。

その日の学園祭が終わって、いきなり提案された飲み会が松木の家で行われて、それはそれで楽しいものだった。美香ちゃんや藤田さんも、途中で会った犬居に聞かされたらしく仲良くしていたし、俺と松木、宮瀬も何だかんだと楽しくやっていた。

日付も変わろうとする頃、部屋の主でもある松木がつぶれて、そろそろ帰ろうかということになった。今日は藤田さんの家に泊まるらしい美香ちゃんは藤田さんと一緒に立ち上がって、犬居もその後ろで帰る準備をしている。宮瀬が最後のゴミ袋をキッチンに置いてきたところで、俺も帰ろうと立ち上がった。

「こがぁ、きもちわるいよぉ」

「は？ トイレ行けよ」

「むり。つれてって……」

俺の横で転がっていた松木が俺のズボンの裾を掴んで、うーうーとうめいている。一人だけやたらと飲んでいたせいだ。離そうにも、松木は俺のズボンから手を離そうとはしない。

「あー、もう。めんどくさいな」

諦めて、松木の服の後ろ襟を引っ張って、ぐいっと立たせる。

「悪い。先行ってて」
「了解」

ワンルールの部屋の出口に一番近い犬居にそう声をかけて、みんなが出ていってから、松木を引っ張ってトイレに連れていく。

「大丈夫？」
「うん。大丈夫だよ。じゃあね、美香ちゃん」
「ん。ばいばい」

心配そうに聞いてきた美香ちゃんに手を振って、トイレのドアを開けた。松木が胃の中のを吐き出し始めたところで、玄関のドアが閉まって、俺と松木以外が出ていった。その閉まる音を聞きながら、苦しそうに吐く松木の背中をさすってやる。それから五分ほどうめいていた松木だが、胃の中のものが出てしまつと、だいぶすつきりとした顔つきになっていた。

「じゃあ、俺も帰るから、もう寝ろよ」
「うん。みやせちゃんに、あやまつといてなあ」
「はいはい」

未だに呂律が怪しい松木に手を振って、俺もようやく松木の部屋を出る。

エレベーターで下に降りて、エントランスに出ると、エントランスのすぐ外で犬居と宮瀬がいるのが見えた。美香ちゃんや藤田さんの姿は見えない。二人は向かい合って立っている。何やってんだ、と思いつつ歩を進めるも、向こうはまったく俺のことに気付いていないようだった。ドアのすぐ近くまで来て、犬居の声が聞こえてきた。

「宮瀬ちゃんはさ、勝手だよ。他の人のことも、もつと考えてよ」

犬居のそんな声が聞こえてきて、思わず足が止まる。それと同時に、何を言ってるんだという考えが頭をよぎった。

なんで、犬居がそんなことを宮瀬に言ってるんだ。なんで、宮瀬がそんな風に言われなきゃならない。

いくつかの疑問が出てくる中、今日、犬居が見せた一瞬の真剣な顔は、こういうことを言いたかったからかと思いついた。だけど、宮瀬と犬居にそんな関係はない。だからこそ、どうしてという疑問が出てくる。

犬居も宮瀬も俺のことに気付いてはおらず、犬居はさらに話を続けていく。

「自分が今何してるのか、分かって……」

「おい」

犬居の言葉が最後まで言われる前に、自動ドアをくぐってその先を

止めた。宮瀬も犬居も、勢いよくこっちを向く。一瞬見えた宮瀬の顔には、自嘲の表情が見えた。

「何してんだよ」

自然と、口調がきつくなり、睨みつけるようにして犬居の方を向いた。犬居も、聞かれたことに戸惑った様子を見せることなく、俺のことをきつい視線で見ている。

「別に」

犬居はそれだけ言うと、くるっと背を向け、自分の自転車に鍵を差し込んだ。

「は？ 別についてこないだろ」

「お前も、自分が何してんか分かってんのかよ」

自転車の鍵を開けた犬居が、こっちを振り返って、きつい口調で尋ねてきた。意味が分からず、俺も自然と眉を寄せる。

「分かんないならいいよ」

「何なんだよ。おい」

答えない俺に、犬居は素っ気なくそう告げ、俺が止めるのを無視して自転車に乗って帰っていった。しばらくその後ろ姿を見ていたが、すぐに後ろにいる宮瀬のことが気になって、そちらの方を向く。宮瀬は、さっきと同じ自嘲の笑みを浮かべて、肩をすくめていた。

自転車を押しながらゆっくりと歩き、横の宮瀬の様子を窺った。宮瀬は原付には乗ってきておらず、今日は友達と一緒にバスで来ていたらしい。夜も遅いし、さっきのことにも気になっていたので、今日は送っていくことにした。

「犬居、何て言ってたんだ？」

歩きながら尋ねると、宮瀬は首をひねって少しの間考える素振りを見せる。

「永井さんのこと、とか？」

わざと疑問形で答える宮瀬に、俺は溜め息をついた。

「悪い。あいつらに、言うんじゃなかった」

「んーん。別にいいよ。古賀さんが、何か他の意図あつて言っただけじゃないって分かってるし。それに、当然っていえば当然だからね。ああいうこと言われて」

そう言つて、宮瀬はまた自嘲の笑みを漏らす。それを見て、どうしようもない気持ちになつた。

松木と犬居には、以前に永井さんのことを言つたことがあつた。何でか、松木が『最近変だぞ』と異様に聞いてきた時があつて、聞かれることに面倒になつて話したんだ。だけど、そのことを話したのはだいぶ前で、その時にはまだ宮瀬と永井さんは付き合つてなかつたはずだ。どうして犬居が、宮瀬と永井さんが付き合つてるということを知つてゐるんだ。

何より、犬居は宮瀬のことを嫌つてなんかいなかったはずだ。宮瀬と元彼氏のことは犬居も知つていたし、そのことでは宮瀬の肩を持つていた。あいつが他人に向かつてあんなことを言う人間でないというくらい、この三年間でよく分かつてゐる。それが自分の氣に入つてゐる人間であれば、なおさら。

「ほんと、悪かつた」

「いいつて。古賀さんが悪いんじゃないよ。つていうか、別に犬居さんが悪いつてわけでもね」

「普通、ああいうこと言う方は悪者になるんだよ」

「それは古賀さんが私の知り合いだからでしょ」

宮瀬が、空元気のような笑い声を漏らす。

それ以上この話をする氣が両方ともになく、宮瀬の家に着くまで妙に黙つたまま、二人ともその道のりを歩いた。

マンションの前まで来ると、宮瀬が「ありがと」と礼を言つてきた。それにいつものように「おう」とだけ答える。宮瀬が「じゃあ」と背を向けようとしたところで、俺が宮瀬を呼び止めた。自転車を一

旦止めて、振り返った宮瀬に近付く。

「気にすんなって言うても無理かもしれないけど、犬居が言ったこと、深く考えんなよ」

「ん……」

元氣のない笑みを浮かべて、宮瀬が頷いた。

こんな顔を、今まで何度見てきただろう。留学が駄目になった時も、元彼氏のことと腹を立てていた時も、永井さんのことで悩んでいた時も、いつもこんな風に笑って誤魔化していた。笑って、自分の混乱を隠していた。もうそんな風になることはないだろうと思っていたのに、今それをさせてしまった原因は、俺にある。こんな風にならないでほしいと思っていたのに。

自嘲的に笑う宮瀬を前にして、俺はどうすることもできなかった。どうにかして動いた手が、宮瀬の頭の上に乗る、そのまま手は下がついて、宮瀬の頬に触れた。

「俺は、お前の味方だから。何があっても。だから、心配すんな。犬居が言ったことも、気にする必要ない」

「……うん」

宮瀬が、さっきよりも少しだけ元氣のある顔で笑った。それに安心して、俺も笑みが漏れる。手を離し、「じゃあな」とその手を上げた。

「ん。ありがとう」

「おう」

「気をつけてね」

「ああ」

手を振ってくる宮瀬に俺も振り返して、自転車に乗った。

家に帰ってから何度か犬居に電話を掛けたが、一向に繋がらず、何度も留守電に繋がった。何度も聞いた留守番サービスの機械音に、苛立たしげに携帯を切り、それをベッドの上に放る。

一体、何なんだ。あんなことを言った理由があるなら、さっさとそれを言えばいい。それすらも拒否する犬居に、腹が立ってくる。このまま何の理由も聞かされなければ、宮瀬はまた混乱してしまうだろう。それだけは、避けたかった。宮瀬が普通に楽しそうにしている今は、そういうことになってほしくなかった。

溜め息をついて、もう一度犬居の番号に電話を掛ける。

「……出るよ」

繋がった留守番サービスに溜め息をついて、届かない独り言を呟いた。

『宮瀬ちゃんさ、永井さんって人と、付き合ってるんだって?』

『え? …… ああ、まあ』

『ふーん。永井さんさ、離婚したの?』

『…… まだ、ですけど』

『なのに、付き合ってるんだ。変じゃない? それって』

『そう、ですね』

『宮瀬ちゃんさ、勝手だよ。他の人のことも、もっと考えてよ』

何で、あんなこと言ってしまったんだ。あんなこと言うなんて、まったくもって、俺らしくない。きっと、古賀だってそう思ってるだろう。その古賀からは、あの後何度も携帯に電話が掛かってきていた。それを全部無視して、ぽいつとベッドの上に放ったのをちゃんと覚えている。次の日の日曜日、またステージを見にこいという松木のメールも無視して、俺はずっと部屋のベッドでごろごろとしていた。そんな時でも、土曜日のことが思い出されて、それと同時に宮瀬ちゃんの自分を責めるような笑みも思い出して、少しだけの罪悪感と古賀からの追求を考えていた。いきなりあんなこと言ったことに対しての罪悪感があったけど、後悔なんてものはまったく言っていないほどなかった。宮瀬ちゃんや、あの日の古賀を見ると、『先輩』のことが思い出されて、どうしようもなくなっていたんだ。

『月曜の2時間目、テニスコートな』

指定された学校のテニスコートのベンチに座り、昨日送られてきたメールを読み返して溜め息をついた。

昨日の夜、電話の代わりに古賀からメールが送られてきた。それは、もしかしくなくても、土曜日のことを聞きたがっているからだ。

月曜日、俺は松木と一緒に1時間目の授業を受けている。古賀は、3時間目からだ。その間にある時間を、古賀は指定してきた。俺は1時間目の授業には出ず、時間より早めにテニスコートに来ていた。どうせ、松木と一緒に授業を受けていたら、2時間目にあいつを一人残すことは無理だったろうし。

カチカチとヒマつぶしに携帯をいじっていると、すぐ横からテニスコートの金網の開く音がした。携帯を手にしたまま、そっちに顔を向ける。

「よ。早いな」

来たのは、もちろん、古賀だ。俺の明るい口調とは反対に、古賀は厳しい顔つきでこっちを見ている。携帯には松木からのメールが来ていたが、それは無視して携帯を仕舞った。

「何考えてんだよ」

俺が質問するより早く、古賀が顔と同じ厳しい口調で聞いてきた。

「なにつて、なに？」

分かっているのにわざと俺が聞き返したことで、古賀はさらに厳しい顔をした。

「何で、宮瀬にあんなこと言った」

「何で古賀がそんなこと気にすんの？ ただのバイトの友達っしょ？ 気にする必要ないじゃん」

「ふざけんな」

質問に質問で返し、どんどん畳みかけるように言葉を続けると、古賀がそれを途中で止めた。腹を立てていることがありありと分かる顔つきで、古賀は俺のことをじっと睨んでいる。そういう古賀に、今は苛立ってしまう。何だつて、ただのバイト仲間にそこまでするんだ。たとえ古賀が宮瀬ちゃんをバイト仲間以上に思ってたとしても、今のお前はそういうことする立場じゃないだろう。

「お前が宮瀬と永井さんのことで、何か言う理由なんてないだろ。不必要に、宮瀬を混乱させるな」

古賀は、いつだって宮瀬ちゃんの味方だ。こんな時でさえも。相手

が、俺でさえも。宮瀬ちゃんが、どんなことをしていても。それが、頭にくる。

「だから、何でお前がそんなこと言うんだよ。俺が宮瀬ちゃんのことどう思おうと勝手だし、そもそも、お前と宮瀬ちゃんは何の関係もないだろ」

珍しく俺が声を荒げたというのに、古賀は身体をぴくりともびくつかせない。代わりに、身体全体で怒りを表しているようだ。きつい視線が俺に飛んでくる。

「ああ。俺と宮瀬は何の関係もないよ。でも、俺が宮瀬と関係ないんだったら、お前は俺以上に宮瀬と関係なんてない」

こんなに冷たい声を、今まで古賀の口から聞いたことなんてない。それくらい、古賀が怒っていた。

前に思ったことがある。古賀は、頭が良い分、キレたら手が出る代わりに口で対抗するんだろうなって。自分の考えと正論叩きつけて、相手をへこませるんだろうって。本当に、その通りだ。

俺と宮瀬ちゃんの関係なんて、当たり前前に、古賀以下で。古賀以上に宮瀬ちゃんと関わりのなら俺に、宮瀬ちゃんのことをどうこう言う理由なんてない。それは、俺が古賀に言ったことだ。ただ、それを分かっていても、今の俺はそれで納得なんてできなかった。

「そうだな。関係なんてないよ。けど、何か言われて仕方ないこと

してるのは、宮瀬ちゃんだろ」

「お前は、何も知らないだろ。宮瀬のことも、永井さんのことも」

「知らねーよ。意味分かんねー。何で、そこまで宮瀬ちゃんばっか庇うんだよ。お前は、美香ちゃんの彼氏じゃないのかよ！」

古賀が、今の言葉に少しだけ反応した。

息を吸い込んで、さらに先を続ける。

「美香ちゃんがいるのに、よそ見なんかすんなよ。宮瀬ちゃんばっかに構うなよ。宮瀬ちゃんも、お前も、何も分かってない。お前らが変なことしてるせいで、悲しんでる人だっているのに、その人たちのこと、何も考えてない」

一気に続けて、息を軽く整える。古賀は、意味が分からないという顔をしていた。

何で分からないんだ。宮瀬ちゃんや永井さんが勝手なことしてる陰で、永井さんの奥さんは絶対に悲しい思いをしてる。古賀が宮瀬ちゃんばっかを見てるせいで、美香ちゃんが悲しい思いをしてる。

学園祭の日、古賀が倒れそうになる宮瀬ちゃんを抱きとめて、美香ちゃんの顔がかけた。宮瀬ちゃんを抱きしめたまま松木を咎める古賀を見て、美香ちゃんはそれから顔を逸らした。古賀は、そんなことに何一つ気が付いていない。挙句の果てに、美香ちゃんを置いて、宮瀬ちゃんのところまで来たりして。

「美香ちゃんのこと放ってまで、宮瀬ちゃんのところ来る必要あったのかよ」

ベンチに座ったまま、斜め前に立つ古賀を睨みつけて言う。古賀の目が、一瞬だけ細まった。

「あの時、宮瀬が変に足庇ってたから、様子見にいったただけだ。聞いたら、あいつ、少し捻ったって」

さつきよりは怒りの調子を落として、古賀がその時のことを説明する。

何だよ、それ。俺は、古賀が来る直前まで宮瀬ちゃんといたのに、そんなことまるで気が付かなかったっていうのに。俺だけじゃない。あの時あそこにあった全員が、そんなことに気付いていなかっただろう。それでも、古賀は気が付いた。あいつの目は、いつだって宮瀬ちゃんを追ってる。

そんなことまで知ってしまったって、渴いた笑いをこぼしていたら、古賀がさらに先を続け出した。

「やっぱり、お前は、何にも知らない。宮瀬のことも、永井さんのことも。先に欲しがったのは、永井さんだ。離婚する理由だって、宮瀬のことが原因じゃない。もっと前から、それは考えられてた」

「誰が、そんなこと信じるっていうんだよ」

「信じないだろうな。お前は」

さつきのような、冷たい声が古賀から発せられる。二人ともが互いを睨みつけて、その場から一步も動かない。しばらくの沈黙の後、

古賀がそれを破った。

「宮瀬のこと、どう考えようが、お前の勝手だよ。好きに考えればいい。けど、それを宮瀬に伝える必要なんかない。関係ないなんて分かってるなら、余計にだ。宮瀬を、混乱させるな」

それだけ言うと、古賀は俺の言葉なんか聞こうともせず、くるりと背中を向けてしまった。視線の先で、金網の扉がガシャンと音をたてて閉まる。

「だから、何でそこまでするんだよ」

誰もいないテニスコートで、苛立たしげに言葉を吐き出した。

横に置いた鞆の中から携帯の震える音がする。たぶん、松木からだ。鳴り続ける携帯を無視して、それが止まるのを待つ。今は、松木とも話したくない。

俺以外誰もいなくなったテニスコートで一人ぼーっとしていると、またしても横の金網が開く音がした。

「あれ、ぼちじゃん。何やってんの？」

「……先輩」

いつもの鞆と一緒にラケットの入った鞆を持って中に入ってきたのは、同じサークルの一つ上の先輩だった。先輩は「珍しいね」なんて言いながら、俺の鞆の隣に自分の鞆を置く。

「ぼちも自主練？」

「や、違います。さっきまで友達と喋ってました」

「そうなんだ」

先輩は、俺のことを『ぼち』と呼ぶ。『犬居』という名前から、『犬ならぼちでしょ』と訳の分からないことを新入生歓迎会の時に言われて、それ以来先輩にだけそれが定着した。

俺と先輩は、夏前まではそれほど仲が良かったわけではない。普通

の、どこにでもいる、サークルの先輩と後輩だった。それが少し変わったのは、夏休みに入る少し前だ。

あの日も、先輩と偶然会ったのはこのテニスコートだった。

コートで一人ひたすらサーブを打ち続けていると、今日みたく先輩がやってきたんだ。軽く挨拶して、休憩にと今も座るベンチに座った。先輩は、いつもみたく『暇だねえ』なんて笑いながら、俺の隣に腰を下ろしていた。

『ほつといってください』

わざと拗ねたようにして返し、先輩の方を向いた時に、先輩の顔がいつもとは違うことに気がついた。笑う先輩の目元は、化粧で隠してあるにしろ、少しクマが目立っていて、目は何だか赤いようだった。

『何か、あったんですか？』

よせばいいのに、そんな質問をして、先輩の笑いが固まった。その様子に、『言いたくないんだったらいいです』と付け加える。だけ

ど、先輩は、少ししてから顔を下に向けて、『あー』と自棄になったような声を出した。

『私さあ、別れたんだよね』

『え、雄大さんと、ですか？』

『他に誰がいんの』

そう言つて笑う先輩は、泣き笑いを隠しているようだった。

先輩と雄大さんは、同じ年で、雄大さんも俺たちと同じサークルだった。誰にでも優しく、それでいて決める時は決める、絵に描いたような好青年。先輩とも長くて、かれこれ三年は付き合っていた。卒業しても、この二人なら何とかやってくんだらうなつて、サークルのみんなが思っていた。

それでも、先輩と雄大さんは、終わったんだ。先輩の様子からして、先輩からそれを終わらせたわけではないようだった。

『何かね、GW過ぎた辺りから、だんだん連絡少なくなってきたさあ』

聞いたわけではないのに、先輩は事のあらましを話し出す。その目は、その時のことを思い出したのか、少しだけ赤いのが増していた。

『この間、別れた。っていうか、振られた。他に、好きな人ができたんだって』

『え？』

思いがけない言葉が出てきて、ぎよっとなった。まさか、あの雄大さんに限って、そういう理由なんて。
俺の顔を見た先輩が、渴いた声で笑った。

『っていうかさ、もう、付き合ってるんだって。その人と』

『は？ え？ は？』

『びつくりじゃない？ 少しだけだけど、浮気されてたんだよ』

そんな、自嘲しながら言われても。

いきなりな展開すぎて何も言えなかった。先輩が別れたってことにも驚いたし、雄大さんに他の人がいるってことにもだし、何より雄大さんがもう付き合ってるってことに驚いた。

でも、この時は雄大さんが浮気してたっていう事実にも、まだ冷静でいられて。『それは、最悪でしたね』なんて、上辺だけの言葉を先輩に向けることができていた。だって、身も蓋もない言い方したら、宮瀬ちゃんだってやってることは同じだと思ったから。それでも、この時はまだ宮瀬ちゃん寄りの考えを持っていた。実際のところ、宮瀬ちゃんと永井さんが付き合ってるかどうかなんていうのは定かじゃないんだけど、前に二人がキスしてるのを見たことがあったから、どうせ付き合ってるんだろう。二人がどうなろうと、知ったこっちゃない。俺と宮瀬ちゃんは、何の関係もないんだから。俺と先輩だって同じだ。俺と先輩を繋ぐものはサークルしかなくて、そんな薄っぺらな関係で、先輩の失恋を本気で心配することもなかった。

『最悪、なのかなあ』

俺の言葉を聞いた先輩が、ぼんやりと呟いた。最悪以外の何があるんだろうと思つて、隣の先輩の方を向く。先輩は、両手をベンチに置いて、コートを眺めていた。

『最悪、じゃないんですか？』

思つたことをそのまま言えば、先輩はこっちを向いて、また自嘲した。

『ああ。浮気されてたつていうのは、確かに腹立ったけど』

『けど？』

『なんか、振られる時に、バカ正直にそういうことしてたつて言われて、私と連絡もしたくないくらい、その人と一緒にいたかったのになつて考えると、それは最悪だね』

『ああ……』

『遊びの浮気なら、許そうと思つたんだよ。でも、うん、……心持つてかれるのは、つらいかな』

『それは怒つてもみじめじゃん？』と、先輩が、涙を耐えるかのように笑つた。そんな先輩を見て、『ああ、違うんだ』と思つた。本気の浮気は、当人や無関係の人間には、まだきれいな恋愛に見えるんだろ。だけど、してる側のそばにいる人間には、それは何よりもつらいものらしい。正直者が一番なんて、誰が言つたんだか。正

直にすべてを告げられたせいで、先輩はこんなに我慢している。

『……泣いたらいいじゃないですか』

『え？』

自分を蔑むように笑っていた先輩が、笑みを止めた。意味が分からないという感じで、こっちを見てきている。

『大丈夫です。先輩が泣いたって、負け犬だなんて思いませんから。一人で泣くより、誰かの前で泣いた方がけっこうすっきりしますよ。ほら、』

言いながら、少しだけあった距離を詰めて、先輩に近付いた。

『今なら、タダで貸し出します』

ポンポンと、先輩側にある自分の肩を叩いた。それでも先輩はこっちに来ようとしない。痺れを切らした俺が、くいつと先輩の腕を引っ張って、先輩が顔を伏せるような形にして肩に頭を置かせた。それから、反対の手でまたポンポンと先輩の頭を叩いてやる。それを数回繰り返し返していたところで、先輩が声を殺して肩を震わせた。先輩の手が、俺の胸元の服を掴む。

『すき、だった、のに。なんで、あんなこと、されなきゃいけないの。わたしばかりが、ばかみたい。なんで、さきにわかれようって、いわないのよ』
『そうですね』

先輩の涙を服越しに感じながら、涙が止まるまで、そうしていた。

それから、先輩との距離は一気に縮んで。会えば話すし、時間があればご飯も一緒に食べた。その中でも、まだ時々先輩の話の中に、雄大さんはいた。雄大さんは、本当に正直にすべてを話したらしい。相手の人は年上の院生で、いつからその人を気になっていたかまで、すべてを。

サークルというものは、時に面倒なものでもある。夏休みには、メンバー全員参加の合宿があった。もちろん、先輩も雄大さんも参加。先輩と雄大さんの別れを知った他のみんなに気を使わせまいと、先輩はいつも通りに、本当にいつも通りに過ごしていた。何の躊躇もなく雄大さんとやり取りをして、何の躊躇もなく合宿を取り仕切つて。誰もかれもが、先輩は大丈夫だと思っていた。

『頑張りましたね』

合宿から帰ってきた時、俺が伝えた言葉。先輩は、それを聞いた瞬間、今までの頑張りが嘘のように、泣き出した。

きれいな恋愛だと信じて疑わない奴や、許されなくても止められないなどとはざく奴らの影で、先輩はあんなにも涙を流した。

いつからか、宮瀬ちゃんや古賀に対して『どうでもいい』という気持ちと『腹が立つ』という気持ちがごっちゃになって、それが、あの日に吐き出されていた。

「ぼち、練習しないの？」

先輩の声に、はっとなる。まだベンチに座ったままでいる俺とは違い、先輩はラケット片手に俺の前に立っていた。服は、来た時の私服のまんまだ。

「しんどいから、いいです」

「何言ってるの。若いくせに」

俺の答えに先輩が笑って、俺も同じように笑みを返す。先輩が軽くラケットを振って、コートの方に歩き出す。先輩の後ろ姿を見送る横で、また金網の扉が開いた。俺も先輩も、扉の方を向く。

「あ、」

入ってきた人が俺、というより先輩を見て、声をあげる。

「雄大も、練習？」

コートに入ってきた雄大さんから先輩に目を戻すより早く、先輩が雄大さんに向かって声をかけていた。その声は、どこまでも自然だった。先輩はまだ雄大さんのことを忘れられていなかったり、なんて雰囲気は、その言葉のどこにも感じられない。雄大さんもその言葉はその通りに受け取って、いつものように笑顔を返していた。

「うん。最近身体なまってきたからな」

「またそんなこと言って」

自然に、何のわだかまりもないように話す二人。雄大さんは持っていた鞆を先輩の鞆の隣に置いて、その向こうに座っている俺に目を向けた。

「犬居も練習か？」

「や、違います」

雄大さんの質問に首を横に振って答え、ふいつと先輩の方を向いた。そして、『やつぱり』と思う。先輩は、あの、悲しさを隠すような顔で雄大さんを見ていた。雄大さんが見ていない時の先輩は、いつも、こんなに泣きそうな顔をする。

どうして、どうして、分かってやれないんだ。雄大さんは。先輩が、今でもまだ、雄大さんの行為に傷付いてるってことを。

「先輩、行こう」

いきなり立ち上がった俺に、先輩は「え？」と聞き返す。意味の分かってない先輩を無視して、自分の鞆と先輩の鞆を手にとった。雄大さんも、何だという顔をしている。二人分の鞆を手にした俺に、雄大さんが何かを言いそうになった。それを、睨んで止めさせる。一瞬言い淀んだ雄大さんを放置して、鞆を持ったまま、先輩のところまで歩いていく。

「え、なに。どうしたの」

目の前まで来て先輩の手を取った俺に、先輩も混乱していた。その混乱すらも無視して、今度は扉の方に戻る。

「ちよ、どうしたの。ぼち」

「犬居、何やってるんだ」

二人同時に言葉を発してきて、耐えられなくなった俺は、扉の手前で止まり、くるっと二人を振り返った。

「何やってるんだはこっちのセリフでしょう！ 何やってんですか、雄大さんは。自分のしたこと、先輩が傷付いてないと思ってるんですか？ もう平気だと思ってるんですか？ 先輩も、何で平気な振りするんですか。浮気されて、それが本気だって言われて、平気

なわけないんでしょう？　だったら、そう言ってやったらいいじゃないですか。態度で示したらいいじゃないですか。顔も見たくないんだったら、見なきゃいいんですよ。泣きたかったら、気の済むまで泣けばいいじゃないですか」

いきなり怒鳴り散らした俺に、雄大さんは固まったまま動かなくなつた。手を掴んだ先の先輩の顔から、どんととさっきまでの平気な顔がなくなっていく。

「行こう、先輩」

もう一度促して手を引けば、先輩はゆっくりと頷き、俺の後に付いてきた。コートを出た後ろで、ガシャンと扉が閉まる。

そのままキャンパスを少し歩いて、メイン広場の噴水前まで来た。

「ありがとう」

後ろから先輩の声が聞こえて、歩いていた足を止める。振り向いた先にいる先輩は、泣きそうな顔を隠すことなく、それでも笑みを浮かべていた。この笑みは、作られたものじゃない。感謝の意味が入った笑顔だ。

「ぼちのおかげで、何かやる気出た。当分許してやんない。あんなやつ」

本当にいつも通りの先輩に戻って、俺にも笑みが浮かんでくる。

「ご入り用の時はいつでもどうぞ」

俺の言葉に先輩が笑って、俺も同じように笑った。

先輩が俺の手をほどき、「ん」と手を差し出してくる。その手が鞆を指しているのだと気づき、持っていた鞆を先輩に手渡した。

「いぬいー!」

鞆が先輩の手に渡ったところで、右手側から松木の声がした。そのあまりの大きさに、噴水の周りにいた何人かが松木の方を向く。それから、呼ばれたのが俺だということに気がついて、今度は俺の方を向いてきた。あの、バカ。

「何だよ。学校来てるなら連絡しろよ。つか、メールしただろ」
「うっさい」

目の前に来た早々、ぐちぐちと文句を垂れる松木。面倒くさくなつて一言返した頃には、視線が隣の先輩にいていたものだから、もつと腹が立つ。

「あ、若菜せんぱい。こんにちはーっす」
「こんちは。元気だねー。いつも」

さっきまでの泣きそうな顔はどこにいったのか、今の先輩の顔には楽しそうな笑みが浮かんでいる。
松木も、先輩に何度か会っていた。というか、学校でのほとんどを俺と古賀と松木の三人でいるから、必然的に俺と先輩がすれ違う時に他の二人も会うことになる。

「そっぴやさ、古賀って学校来てんの？」

先輩と一通りの挨拶を終えた松木が聞いてくる。『古賀』という名前にさっきのやり取りを思い出して、怒りやら何やらといった気持ちの悪い感情がぐるぐると胸の中を回るのを感じる。

「さあ？　なんで？」

自分の中ではいずり回る感情を無視して、さらっと嘘をついた。俺の答えを聞いて、松木が「おかしいな」と首をひねる。

「さっき古賀っぱい奴見たんだけど、違ったのかな。声掛けても無反応だったし」

「ふーん。無反応なら、違うんじゃない？」

そうかなあ、と未だ首をひねる松木。

たぶん、松木が見たのは本当に古賀だ。けど、古賀がそれを無視した。松木が自分といれば、俺が気まずくなるとでも思ったんだろう。そういう、変なことに考えが回る奴だ。

「3時間目になれば来るだろ。それまで何か飲もうぜ。先輩も行く」

「いいの？」

「ぜんぜんいいです。行きましょー」

俺の代わりに松木が先輩の質問に答えて、腕を上にあげながら、反対の手で先輩の腕を引っ張ってカフェテリアに向かっていく。松木のテンションに先輩も楽しそうに笑っていて、俺も自然と笑っていた。

古賀は、きつと3時間目になれば、普通にしている。松木に心配を掛けまいと、そうする。そういうところが古賀らしいとは思いつつ、それが原因で美香ちゃんを悲しませてもいるんだ。

古賀と顔を合わせる3時間目を憂鬱に思いながら、楽しそうに先を歩く先輩と松木を追いかけた。

携帯が鳴ったのは、永井さんが学校に出掛けて一時間程経った頃だった。

『ごめん。机の上に資料があるんだけど、持ってきてくれない？』

「持ってくつて、永井さんの学校に？」

『うん。今は院生もいないから、大丈夫だよ』

「分かった。今から行くね」

『ありがとう』

携帯を切つて、出掛ける支度をした。

今日は土曜日。いつも通り、金曜日から永井さんのところに来て、そのまま泊まった次の日だった。朝に起きて朝ごはんを食べてから、永井さんの携帯に電話が掛かってきて、永井さんは私に謝りながら学校に向かっていった。それから一時間程経つてからの、電話だった。

本当のことを言うと、少しだけ、金曜日が来ることが憂鬱だった。

『宮瀬ちゃんはさ、勝手だよ』

学園祭のあった先週の土曜日、古賀さんの友達である犬居さんに言われた言葉。それはまだ、しっかりと頭に残っていた。分かっている。

たはずなのに。自分のしていることが、世間一般から見ればおかしいことくらい。それでも、古賀さんや永井さんといった、これ以上ないくらい優しい人たちがいてくれたおかげで、そのことを忘れていたことは確かだ。そして、それは金曜日に永井さんに会った時にも、一瞬忘れたことだった。自分がおかしいことをしていることは分かっている。だけど、永井さんと会って、いつものように過ごすだけで、私はそのことを都合良く忘れてしまっていた。今日まで何度か犬居さんの言葉を思い出したけど、その度に何でもない風にして、考えないようにしてきた。どうせ考えたっ

て、自分の行動が変わるわけでもない。変えることができるなら、金曜日の段階で、永井さんと会ってなんかいい。

もう勝手でもなんでもいいや、なんて自棄な考えを持って、電車で永井さんの学校の最寄り駅まで行った。最寄り駅から歩いて大学まで行き、キャンパスに入ると、永井さんに教えられた通りに研究室があるという棟まで歩いていく。土曜日だからか、キャンパス内にはほとんど人がいなかった。時折、サークルか部活かのスウェットを着た人やぶらぶらと歩いている人がいたくらい。

研究室のある棟まで来て、入ってすぐの階段を上る。三階まで上ったところで、踊り場を抜けて廊下に出る。その踊り場を出ると、私が歩こうとする方向の先に、一人の人がいるのが見えた。歩く度に、その人が着ている白衣がばさばさと動いている。教授かな、と適当なことを考えて、私もその人の後を追うように歩き出した。

一つ目の角を曲がると、前を歩く人が私を振り返った。ばちつと目が合って、反射的に足を止めてしまう。白衣を着たその人は男の人で、私のことを一瞥して、すぐに前に向き直って歩いていく。何なんだと思いつながら、私もその後に続いた。そこから少し歩いて、永井さんの研究室が近付いてきた時だった。

「いい加減にしろ！」

たぶん、永井さんの研究室と思われる場所から、永井さんの怒鳴り声が聞こえた。思わず、歩いていた足を止める。前を歩いていた人も、私と同じように足を止めていた。研究室からは、さっきよりは声が小さくなったといえど、未だ永井さんの怒ったような声が微かに聞こえている。

こんな風に、永井さんが怒るのを今までに一度も見ることがないし、その声を聞いたこともない。どうしたんだろう、と疑問に思っで、中から『万里』という言葉が聞こえた。その言葉だけが、異様にはつきりと聞こえて、『ああ』と変に納得してしまう。

中にいるのは、永井さんの奥さんなんだ。

その後ですぐ、二人の言い争いは終わったらしく、言葉が途切れてすぐ研究室の扉が勢いよく開いた。中から、女の人が怒ったような足取りで出てくる。その女の人が、永井さんの奥さんなんだろう。女の人は泣きながら怒っていて、その顔を隠すこともなく、つかつかとこつちの方に歩いてくる。近くまで歩いてきたその人に顔を背けそうになって、ぐっとそれを堪えた。代わりに、自然に見えるように視線だけを下に向ける。女の方は自分の今の状況を気にすることもなく、前を歩いていった男の人と私を通り過ぎて階段の方へと向かっていった。女の人の後ろ姿を追って、その人が階段を下りていったのを見ると、無意識に小さく息を吐いていた。

「永井に用事？」

「え？」

女の人が行ってからもどうしようかとその場所で止まっていると、いつの間にか前を歩いていった男の人がすぐ目の前まで来ていて、声

をかけられた。聞き返した私に、男の人はふいつと視線を永井さんの研究室にやって、もう一度私を見下ろす。

「永井に用があつたんじゃねーの？」

「え、ああ。まあ」

『永井』と呼ぶこの人は、どうやら永井さんの知り合いらしい。白衣のポケットに両手を入れて、「ふーん」と頷いている。

「永井、せんせいに渡すものあつたんですけど……」

普段のように『永井さん』と言いそうになって、慌てて言葉を濁すように言い直す。中途半端に言葉を終わらせた私を見て、男の人は「ああ」と訳知り顔で、もう一度永井さんの研究室に視線を送った。

「確かに、今は行きにくいわな」

男の人も永井さんの状況を知っているのか、どこか面白そうにして言う。私は、男の人の言葉に「そうですね」と返すしかできない。

「渡しとこうか？ その、『渡すもの』ってやつ」

「は？」

「どうせ俺も永井のところ行く予定だったし」

私の返事も聞かずに、男の人が片手をポケットから出して、こっちに向かって差し出す。逡巡していると、「ほら」と急かされた。行きにくいという気持ちは本当だったし、どうせただの資料だからこの人に渡したって何も変に思われなйдらうと考えて、鞆の中に入っていた資料のクリアファイルを取り出す。

「じゃあ、お願いします」

ファイルを渡して軽く頭を下げる。男の人はさして気にしてる様子もなく、「了解」という言葉と共にファイルを受け取った。男の人が私に背を向けて、前に歩き出す。それを確認してから、私は来た道に戻るようにして歩き出した。

犬居さんが言ってたことは、こういうことだったんだろうか。そんなことを、大学からの帰り道で考えた。

『他の人のことも、もっと考えてよ』

他の人のことなんて、何にも考えてない。考えてるくらいなら、最初から永井さんと付き合ってたない。考えてたら、永井さんの奥さんがあんな風に泣いてるのかもしれないと、予想くらいはしてる。私のでしてることは、ああいうことなんだ。未だはつきりとしている女の人の泣き顔と怒った顔を思い出して、思う。どうして、こう、都合の悪いことが連続して怒るんだろう。

永井さんのマンションの近くまで来て、永井さんからメールが送られてきた。

『昼には帰れるから、家で待ってて』

それを見て、苦笑してしまう。

「帰ると思ったかな」

渡された資料から、私が研究室のすぐ外にいたことは分かったんだろう。そんなに帰りそうだと思われたかなと笑いながら、マンションのエントランスを通り、永井さんの部屋へと進む。初めて来た時にもらった合鍵を使って、中へと入った。

お昼の30分程前になってから、お昼ごはんの準備を始めた。パス
タを茹でるためにお湯を沸かしている途中、棚にあるペアのカップ
がふと目に入る。前に買い物に出掛けた時、私が見ていたものを永
井さんが買おうと言ってレジに持っていったものだ。家にもマグカ
ップはあるんだから買わなくても言ったのに、永井さんは特に気
にすることなく、その二つを買ってしまった。前まで使っていたオ
フホワイトのものは、今は棚の奥にある。ペアのカップは、前から
少し欲しいなと思っていたもので。その店の前を通るたびによく見
ていた。ペアのものを欲しいなんて思ったことは、元彼と付き合っ
ていた時は一度もなかったのもあって、なかなか手が伸びずにいた。
それが今はすぐ目の前にある。嬉しいはずなのに

、今はそれから視線を外してしまう。
カップから目を逸らして、ぼんやりと火にかけられている鍋を見て
いると、玄関の方で鍵が開く音がした。それから足音が続いて、が
ちゃっとドアが開かれる。

「おかえり」

入ってきた永井さんを見て声を掛けると、永井さんはあからさまに
ほっとしたように息をついた。それを見て、少し笑ってしまう。

「帰ると思った？」

対面キッチンのテーブルに鞆を置いていた永井さんに笑いながら尋ねると、永井さんは困ったように小さく笑う。

「少しね」

正直な永井さんに、また笑った。

永井さんは鞆を置くとキッチンの方にやってきて、私の腕を取ると、くいつと自分の方に引き寄せる。私も抵抗することなく、されるままだった。

「よかった。いてくれて」

ゆるく回された腕の中で、私も自分の腕を永井さんの背中に回す。

「帰らないよ。永井さんといたいもん」

「ありがとう。後で、ちゃんと話すから」

「……うん」

何を話すなんかなんて、言わなくても分かる。きっと、さっきのこ

とだ。

その言葉通り、お昼ごはんの Pasta を食べ終わると、永井さんは研究室でのことを話し始めた。二人並んでリビングのソファに座って、目の前のテーブルにはペアのカップに入れられたコーヒーと紅茶が置いてある。

「驚かせたよね。さっきは」

両足をテーブルの下に伸ばし、手を足の上に置いて、永井さんが言った。その顔が、さっきみたく、困ったように笑みを作る。

「少し、ね。ていうか、あんな声聞いたことなかったから、ちょっと怖かったかも」

少しふざけるようにして笑いながら言っても、永井さんの顔から申し訳なさそうな表情は消えない。永井さんは小さく息をついて、テーブルに置いてあったコーヒーを手に取った。それを一口飲んでから、またカップをテーブルに戻す。

「本当にごめん。万里子が来て、話してるうちに収まりが利かなくなつて。こんなこと言っても、怒鳴っていい理由になんかならないんだけどね。万里子だけじゃなくて、君にもあんなの聞かせて、拳の果てに顔を合わせるなんて。調子に乗って、君を呼んだりするんじゃないかったな」

そこまで言って、永井さんはもう一度「ごめん」と繰り返す。顔を伏せて溜め息をつく永井さんを見てみると、私以上に、永井さんがこのことでダメージを受けてるような気がした。それなのに、永井さんは私の心配をして、庇うような言い方をして、自分に非があるようにする。混乱したのは確かだけど、永井さんがこんな風になるのを見てまで、自分だけを心配するわけない。

「さっきのことで混乱はしたけど、別に永井さんが悪いわけじゃないよ」

言いながら、永井さんの手に触れた。それに気がついた永井さんがこつちを向いて、ぎゅっと手を握り返してくれる。

「その、ああいうことがあったのは、想定外だし」

繋いだ手を引かれて、身体が永井さんの方へと動く。永井さんの肩に頭を乗せる形になって、永井さんが肩を抱いてくれた。

「どっちが悪いとか関係ないって分かってるけど、言っとかないと嫌な気分になるんだ。君を心配させたのは事実だから。今回は、特に」

付け足された言葉に顔を上げると、永井さんもこつちを見下ろして

いた。目が合うと、永井さんが優しく笑みを浮かべる。

「先週のこと、聞いたんだ。古賀くんから」

「古賀、さん？」

「うん」

『先週のこと』とは、間違いなく、あの犬居さんとのことだろう。それは分かつて、何で永井さんと古賀さんが連絡を取り合っているのが分からなくて、自然と首を傾げてしまう。私の顔に気付いた永井さんが、小さく笑った。

「前に会った時に、連絡先交換したんだ」

「そう、なんだ」

そういえば、前に古賀さんも永井さんと会ったことがあると言っていた。交換したというのは、その時なんだろう。納得した私の髪を、永井さんが優しく撫でてくれる。

「日曜だったかな。彼から連絡が来て、教えてもらった。彼の友達と、何があったのか。それで、今日だ。心配しないわけないよ」

「そっか。知ってたんだ」

髪を撫で続けてくれる永井さんに身体を寄せて、さっきよりも永井さんに近付く。

「本当は、今日来てくれないんじゃないかと思ってた」

その言葉に、また永井さんを見上げた。永井さんの顔には笑みが浮かんでいるものの、その笑みはどこしら私の反応を試しているようなもので。むっとなって、眉間にしわを寄せる。それを見た瞬間、永井さんがおかしそうに笑いだした。

「やっぱりそう思ってたんだ」
「そりゃあね」

むっとなったまま返せば、永井さんは髪を撫でていた手を止めて、まだおかしそうに笑う。ここまで笑われてしまうと、真剣に考えてたのにとか悩んだのとかいう思いが出てきて、さらに顔をしかめてしまう。それに気付いた永井さんが、笑いながらも、また髪を撫でてくれた。

「ありがとう。それでも来てくれて」
「……うん」

髪を撫でられながら、いつものように笑みを浮かべて言われたら、もう何にも反論できない。それを知ってるのか知らないのか、永井さんはずっと私の髪を撫でている。

「行こうか迷ったっていうよりも、あんまり金曜日になってほしくないなって思ってた」

頭を永井さんの肩に預けたまま、本音を漏らす。永井さんは撫でている手を止めることなく、「そうなんだ」と言って話を聞いている。

「金曜になつて、永井さんに会っちゃったら、やなこと都合良く全部忘れちゃいそうだなって思つて。で、会ったら、やっぱり全部忘れちゃつて、一緒にいたくなつてた」

「それは、嬉しいね」

永井さんの声に顔を上げると、言葉通りの笑みを浮かべた永井さんがいて、私の方も笑みが漏れる。また顔を戻して、髪を梳く永井さんの手を感じながら、ぼんやりとテーブルを見る。その上に並んでいるお揃いのカップを見て、口を開いた。

「ペアのものなんて、元彼と付き合つてる時は持つてなかったし、欲しいと思つたこともないんだ」

「そうなの？」

「うん。向こうは欲しがつてたけど、私は、なんか嫌で。ストラップとかキーホルダーとかでさえも、お揃いは持つたことない」

ペアのカップを見ながら、お揃いのものを欲しがる元彼のことを思い出した。本当はお揃いの指輪が欲しかったらしいけど、私がそれ

を断固拒否して、それじゃあと提案されたのがお揃いの腕時計だった。だけど、私はそれさえも嫌がって、そういう主義なのだと通した覚えがある。別に、その時は元彼が嫌いだったわけじゃない。まだ、仲が良かった時だ。それでも、何でか、ペアのものを持つことだけは、何となく嫌だった。

「でもね、このカップは、何か欲しいと思ったの。これで一緒に何か飲めたらいいなあって思ったの、何となく覚えてる。そういう、らしくないこと思うくらい、永井さんのこと好きみたいだよ」

ぴたりと、髪に触れていた永井さんの手が止まった。どうしたのかと思って顔を上げると、困ったような顔つきで私のことを見下ろす永井さんと目が合う。なに、と首を傾げると、永井さんは苦笑いをして、ぎゅっと私の肩を抱いた。

「いきなりそんなこと言われたら、さすがに驚くと思うんだけど。しかも、『みたいだよ』って」

「だって、ほんとにそんな感じなんだもん。好きだけど、そういうの欲しいと思っちゃうくらい好きなんだあって、再確認」

「それはどーも」

笑いながらも、どこか棒読みのような言い方をされて、今度は私がおかしくなって笑ってしまふ。こんな風に言う時は、たぶん、永井さんが照れてる時だ。初めて会った時も、こんな風な言い方をされたことがあるような気がする。その時のことを思い出して、また少し笑った。もう何も言うまいというように息をついた永井さんから少し離れ、ソファの上で座り直して、永井さんのことを見る。どうしたの、というようにこっちを見る永井さんに笑いかけて、ぎゅっと永井さんの手を握った。

「こっに見えても、けっこっ好きだよ。永井さんのこと」

永井さんが、目を点にさせる。それから、してやられたというように苦笑いを浮かべた。

「何だかなあ。心配させたと思ったのに」

「してたよ。実際。でも、ちゃんと話してもらえたし、今は大丈夫」
「だったら、また何かあったら、ちゃんと言ってね。黙ってても、
良いことないよ」
「努力します」

私の返事に永井さんが笑って、もう一度、私の手を引っ張った。それに逆らうことなくついていき、さっきと同じような体勢に戻る。

「もう少しだから。もう少ししたら、何か言われることもなくなるから」
「うん」

髪を梳かれる感触に目を閉じて、優しく言われる永井さんの言葉に頷いた。

それから次の日の日曜日。金曜日から永井さんのところに泊まるようになったてからは、夕ご飯を食べ終わった日曜日の夜にも、いつものカフェに来るようになっていた。今日も今日で例外ではなく、夕ご飯を食べ終わった午後の8時過ぎ、いつものカフェにやってきていた。この時間は、金曜日の昼間よりもお客が多い。

「あ、いらつしゃい」

中に入ってすぐあるショーケースの向こう側に、ケーキを補充していたパティシエの人がいた。前に一度ケーキを買う時に話して以来、その人とは会えばよく話す。

「こんにちは」

ケーキを補充し終えたその人が手を振ってきたので、私も挨拶を返しながら手を振る。

「今日、新しいの出てるよ。食べる？」

「わ、ほんとですか？　じゃあ、食べようかなあ」

ショーケースの上に腕を置いて、にこにこ笑いながらその人が教えてくれた。

「さっき夕飯食べたのに」

「いいの」

横で苦笑する永井さんの言葉を受け流し、パティシエの人に手を振って、永井さんと一緒に奥に進む。

席に着くと、いつものように、店長らしい若い男の人がオーダーを

取りにきて、いつも通り紅茶を頼む。それにプラスして、今日は新作だと言われたケーキも一つ。店長がカウンターに戻ってから少しして、パティシエの人がケーキだけを持って、私たちの席に来た。

「はい。どーぞ」

「あ。ありがとうございます」

ケーキの乗ったお皿を、パティシエの人がテーブルに置いてくれる。顔を上げてお礼を言えば、その人はさつきと変わらずにここに立っていた。どうしたのかと思って首を傾げると、その人はもつとここにことしだす。

「いや。もう一年くらい経ってるんだなあと思って」

「何がです？」

いきなりそんなこと言われても、何のことか分からない。それをそのまま言葉に乗せると、パティシエの人は私と永井さんの両方に視線を送って、にっこりと笑みを浮かべた。

「二人がここに来始めてから、一年くらい経ってるからさ」

「ああ」

やっと何のことかが分かって、納得したように声が出た。確かに、永井さんと知り合ったのは、去年の今くらいかもしれない。

正確な時は覚えてないけど、しっかりとコートなんかを着こんでいたのは覚えている。それは、今も同じだ。

ということは、もう結構な頻度でここに来ていることになる。永井さんも同じことを考えていたようで、目が合うと、肩をすくめて笑みを返された。

「お待たせしました」

パティシエの人がにこにことしている横から、店長の男の人が二つの紅茶を乗せたトレイを手に顔を見せた。パティシエの人は身体を横にずらして、店長の邪魔にならないようにする。その時に店長の人と目が合ったのか、パティシエの人が顔を引きつらせた。

「じゃあ、後で時間あったら、新作の感想聞かせてよ」

店長の後ろから手を振りながら言って、パティシエの人はカウンターの方へ戻っていく。

「すみません。いきなりあんなこと話し出して」

紅茶をテーブルに置いた店長が、申し訳なさそうに頭を下げる。

「大丈夫ですよ。気にしてないですから」

「それなら良いんですが」

手を横に振って否定するも、店長はまだ困ったような顔をしている。もう一度「ほんとに気にしてないですよ」と声を掛けると、ようやく顔に小さな笑みを浮かべて「ありがとうございます」とカウンターの方向に戻っていった。

「そつか。もう一年も経つんだね」

店長たちがいなくなってから、紅茶を啜りながら永井さんがそう言った。私も紅茶を一口飲んで、ケーキのフォークを手にしながら頷く。ケーキにフォークを入れたところで、そういえばと思い出す。一旦フォークをお皿に置いて、永井さんのことを見た。永井さんが「なに？」と首を傾げる。

「そつえばさ。永井さん、何で私のこと覚えてたの？」

私の質問に、永井さんがきょとんとする。それから、少しおかしくうに笑って、「そんなこと」と言った。

「だって、気になるじゃん。あれだけ人数多いのに」

笑う永井さんにむくれて返す。置いていたフォークをまた手に取っ

て、切ったケーキを口に運んだ。程良い甘さが口に広がって、思わず顔が緩む。フォークを置いて、紅茶を啜りながら永井さんを見た。私と目が合った永井さんは、笑いながら肩をすくめる。

「君のリュックが目立ってたから」

「それ以外にもあるって言ってたじゃん」

「よく覚えてるね。そんなこと」

少し苦笑いをして、永井さんが言った。それには返さずに、じっと永井さんを見ていると、ようやく諦めたらしい永井さんが小さく溜め息をついた。紅茶を一口飲んで、永井さんがこっちを見る。

「初めの方でミニレポート出したでしょ？」

「オイディプスのやつ？」

「うん。そのレポート、君が一番に書き上げて俺に出したから、その場で読んでたんだ。で、読んだら、ちゃんと筋通ってるし、理解してるし、二回の授業でよくこれだけ書けるなって少し感心してた」
「それだけで覚えてたの？」

たった一枚のミニレポートで顔を覚えたと言われても、なかなか信用できない。少し呆れたような私に、永井さんはまた苦笑する。

「初めに出した人って、基本的に印象に残りやすいし。君の場合、レポート内容言って五分くらいで出てきたから、余計にだよ。それで、一番出来が良かったんだから、覚えてないわけないよ」

「ふーん」

聞いたのは自分だけど、何となく永井さんの言葉が飲み込めなくて曖昧な返事になってしまふ。赤いリュックを覚えていたというのは何となくそうかと思えるけど、レポート内容が良く出来ていたと言われても、それだけで覚えるものかなと思ってしまふ。褒められて悪い気はしないんだけど。

「まだリュックの方が納得できたでしょ？」

向かい側からも言われて、言葉が返せない。「んー」と首を捻る私を見て、永井さんが笑った。

「覚えてるとかそういうの抜きにしても、君のレポートは全体的によく出来てたと思うよ。興味があるんだったら、もっと先に進んでもいいと思うし」

その言葉に、うなるのを止めて、永井さんの方を向いた。たぶん、今は目が点になってると思う。それを見た永井さんは、小さく笑う。

「ゼミの先生にも、言われたんでしょ？」

「え。なんで知ってるの？」

ぎよつとなつた私に、永井さんはさらにおかしそうに笑った。永井さんが言う『もつと先』とは、大学院のことだと思う。ゼミの先生という言葉からも、それは間違いない。確かに、3回生から始まったゼミの先生にも、院に行かないかと言われていた。

「学校でたまたま会った時に、君のこと覚えてるか聞かれたんだ。ゼミで俺のこと言ってたって言われて、覚えてるって言ったら、『院に行ってほしいんだけどね』って言ってたよ」

「別に、永井さんのこと言ったわけじゃないけど」

「まあ、俺のことっていうよりも、授業のことだけだ。でも、『行ってほしい』って言ってたのは本当だよ」

外国人のゼミ教授を思い出し、内心余計なことをと思いながら、曖昧に笑って紅茶を飲む。永井さんの顔からはおかしそうな笑みはなくなっていて、それとは違う、落ち着いた笑みに変わっていた。それを見ると、何だか永井さんが全部を知ってるような気持ちになって、少しだけ落ち着かなくなる。

「断ったんだって？」

「断ったっていうか、『行けたらいいですね』って言った」

「それはほとんど断りと同義語じゃないの」

しっかりと見透かされている状況に、何も返せなくなって、少しずつケーキを崩して食べていく。ちらつと視線を上げると、永井さんがテーブルに肘をついてこっちを見ていた。それから視線を逸らし、フォークにケーキを取って、永井さんの口元に運ぶ。永井さんが息を吐きながら笑って、目の前にあるケーキをぱくりと食べた。ケーキのなくなったフォークをお皿に戻し、その上でころころとフォークを回す。永井さんがケーキの後に紅茶を飲んで、それをテーブルに戻したところで、口を開いた。

「だって、院に行くにも、お金掛かるし」

結局、ネツクになるのは、お金だった。留学に行くのも、院に行くのも、それに阻まれている。力はあると言ってくれた。テストでもそれを証明された。だけど、絶対的に必要なものが足りなくて、諦

めた。

別に、家にお金がないわけじゃない。ある程度の普通の家だ。だけど、留学や院といったプラスアルファのための支出が出来るほどじゃない。それは、十分に分かっていた。だから、留学を辞退して、院への誘いも断った。

お皿の上で転がしていたフォークを止めて、小さく溜め息をつく。たぶん、永井さんは私が断った理由だって分かってる。それでも、黙って聞いてくれていた。もう一度永井さんに目を向けると、安心させるような笑いを見せてくれた。

「返済不要の奨学金だってあるし、無利子のだってあるよ」

「知ってるけど、通るか分かんないじゃん」

「それはやってみないと。受けるか受けないかより、先に両親に話してみなよ。そこからだよ」

ね、と続けられて、思わず頷いてしまった。それを見た永井さんは満足そうにして、私が持っていたフォークを向かいから取った。それでケーキを崩し、小さくフォークの上に乗せる。

「はい」

さっき私がしたように、今度は永井さんがケーキを乗せたフォークを私の前に差し出した。さっきとは反対に、私が笑って、差し出されたケーキを食べる。笑ってケーキを頬張る私を見て、永井さんも微笑んだ。

それから一時間ほどして、もうそろそろ出ようかと、二人して席を立った。会計を済ませ、パティシエの人に手を振ってドアに振り向こうとして、先にそのドアが外から開かれた。驚いて、足が後退する。背中に、永井さんの身体が触れた。中に入ってくる人を見て、開かれたドアから入ってくる冷たい空気よりも、ひやりとしたものが身体に走る。入ってきた人も、私に気がついて、笑っていた顔がなくなっている。

「偶然だね。宮瀬ちゃん」

「……どうも」

無視してくれればいいものを、中に入ってきた人——犬居さんは、わざわざ声を掛けてきた。犬居さんの後ろにいた女の人が「ぼち？」と、不思議そうにして犬居さんの後ろから顔を出す。そして、私に気付いて、「あっ」と言いながら軽く頭を下げられた。私もとりあえず頭を下げて、犬居さんの方を見る。自然と先週のこと思い出されて、後ろにいる永井さんの方に身を寄せてしまう。犬居さんはもう私のことを見てはおらず、その視線は私の後ろの永井さんに行っていた。犬居さんが何か言う気なのかどうかは知らないけど、あんなことを永井さんに言っただけじゃないし、私も思い出したくもなくて、先に「犬居さん」と声を掛けた。

「私、今から帰るんで」

「あ、そうなんだ」

「はい。じゃあ、また」

ぱつと、視線が私に戻った犬居さんに軽く頭を下げて、その横を通って外に出た。すぐに、永井さんも外に出てきてくれる。外に出てきた永井さんは、何も言わずに私の手を取って、車の方へと歩き出した。

車が私のマンションの前に着くと、私が降りるより先に永井さんが運転席を降りて、助手席側のドアを開けてくれた。車を降りるとすぐ、永井さんに抱きしめられた。カフェからの帰り道、何にも言わない私を心配してくれたんだろう。きっと、永井さんにも、さっきの犬居さんが『古賀さんの友達』ということは分かっている。

「ごめん」

「なん、で、永井さんが謝るの」

「俺の勝手で、君がこんな目にあってる。何か言われるのは君だって分かってたのに、ちゃんと理解してなかった」

抱きしめられた腕の中で、首を横に振る。

「永井さんが悪いわけじゃない。どっちが悪いとかないって、永井さんも言ったでしょ」

「そうだけど、」

「そんなの、言わないでよ。そうやって言われたら、永井さんがどっか行っちゃいそうで、やだ」

ぎゅっと抱きつくように、永井さんの背中に腕を回した。抱きしめられていた腕が緩んだかと思うと、すぐに永井さんの手が私の髪に

触れる。

「何か言われたらへこむけど、それでも、永井さんのところに行くと思う。そういうの、どうでもいいやって思うくらい、永井さんになりたい」

髪を撫でていた手が止まって、次には苦しいくらい強く抱きしめられた。応えるように、私も永井さんのコートを掴む。

「そんなこと、言わないで」

耳元で、永井さんが呟いた。何でと問い掛けるように顔を上げれば、永井さんの手が私の頬を包む。

「離したくなる」

言葉と同時に唇が重なった。ゆっくりと離れて、また触れられる。

「もうすぐだから。もう少ししたら、もう、何も言わせないから」

ほんの少しできた距離で言われたその言葉に頷く。永井さんの悲しげに歪んだ顔なんて初めてで、私まで泣きそうになる。永井さんは、

こんなになるほど、私を求めてくれている。素直に、それが嬉しい。降りてきたキスに目を閉じて、触れてるのに離れていきそうだなんてばかなことを、初めて思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7507w/>

これは恋なんだけど

2011年10月8日18時13分発行